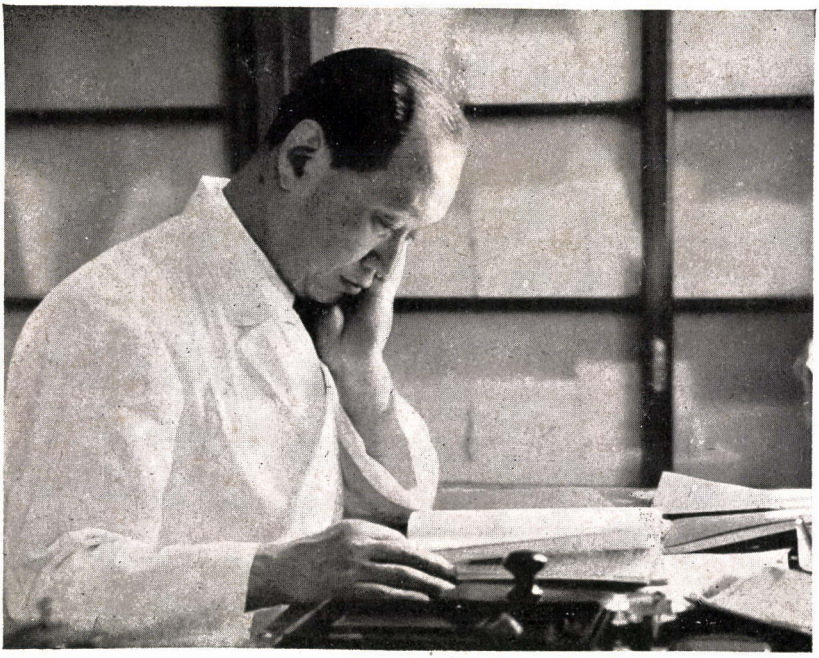
藤浪剛一追悼録



昭和十三年五月

藤浪剛一追悼錄

目次

哀悼辭……徳川義親……一
哀悼歌……岡麓……二
藤浪博士の略歴……加藤一夫……五
藤浪剛一教授解剖結果……川村麟也・掛谷諒……六一

れんとげん學者として

順天堂時代……鈴木元晴……九五
藤浪剛一先輩の思出……樋口助弘……一〇八
恩師藤浪先生……原邦郎……一一五
藤浪先生を偲びて……平松博……一三七
恩師……板津三良……一三五

醫史學者として

藤浪博士を憶ふ……山崎佐…一三三
藤浪剛一先生と仙臺……山形敬一…一六一
藤浪先生と醫史料……緒方富雄…一八五
藤浪先生と日本醫史學會……赤松金芳…一八九
藤浪先生の思ひ出……大鳥蘭三郎…一九九
師弟……北里文太郎…二三一

溫泉學者として

先生と日本溫泉科學々會……伊東祐一…二四五
祖國愛に燃ゆる畏友藤浪剛一博士の
　溫泉指導を憶ふ……西川義方…二五一
藤浪剛一教授を偲びて……三澤敬義…二七三

藤浪先生を偲ぶ……石田松太郎…二七八
風景協會と藤浪博士……黒田鵬心…二八八
藤浪博士と大乘院の庭園……田村剛…二九七

友人よりみたる人として

藤浪剛一博士を憶ふ……宮嶋幹之助…三〇三
藤浪剛一博士を追悼す……竹内松次郎…三〇九
藤浪博士に關する思ひ出……懶青楓…三一八
藤浪剛一先生を懐ふ……古畑種基…三一七
世話好きな人……梅澤彦太郎…三二三
在りし日の藤浪先生……逆井花…三二九
先生……村岡壽…三三三
思ひ出……鈴木正夫…三二九
追憶……宇野哲人…三三六

藤浪剛一博士の片影……吉川芳秋…三六八
餘技と餘裕……杉村楚人冠…三七四
藤浪博士の人柄……岡麓…三七七
私の見た藤浪博士……荒井陸男…三八二
玩具　緣談　逗子……道明義太郎…三八五
思ひ出のまま……吉田久繼…三九一
藤浪博士を懷ふ……飯島茂…三九六
藤浪先生と私……村上秀…三九九
藤浪先生を憶ふ……中村孝也…四一七
藤浪博士と掃苔……矢吹活禪…四三一
強く正しく生きた人……大倉燁子…四三四
主人病歿の前後……藤浪和子…四四三
裝幀　結城素明

哀悼辭

徳川義親

雲煙萬里を隔てた異郷にあるものが親しい人の死を知つた時程その悲しみの深く一方ならぬ寂しさを感ずることはないであらう。藤浪さんは私がその葉書を受取つた時は既に逝かれてゐたのである。再び相見ることのないことが悲しく寂しい。藤浪さんは本當に志の篤い人であつた。維新の後、やがて八十年私は藩主でなく藤浪さんは藩士ではない。けれども父祖の縁によつていつまでも又いつも昔の情誼を忘れられたことはなかつた。その志の篤いことかゝる人が今の世にもあつたことは身にしみてうれしいことであつた。今其人を失つて私は悲しく寂しい。此氣持はこれを筆にも盡されず、又いひ表すことも出來ない。而もかゝる時かゝる地に於て。

昭和十八年三月

昭南島に於て

哀悼歌

岡麓

醫のわざにまた醫の史(ふみ)にささげてし一生(ひとよ)のいのち誰(たれ)忘れめや

きみつねにものしづかにて科學者の態度はかくと示されにけり

たふとさはその人にあり朝もはやく病院にいでてはたらかれたり

いにしへのよしある人のおくつきをとひとぶらひてつねおはしきに

患者を診學生を教へひまなきに名墓顯彰會をつづけたまひし

いたづきのいえなば起稿せむ書をおもひつづけておはせりしはや

醫博士はよにいくたりもありはすれどきみの仕事を受けつぐは誰そ

門人の博士いくたりかの中には師の遺志をつぎ立つ人をるべし

ふみの中にかがみうづくまり紙魚拂ししましし去年の夏をかたりあふ

先生の藏書の帙の題簽を手にとり見つつなげきあらたなり

元祿の昔杏林の名家後藤艮山は此の新湯に浴して之を第一位に推しその門人香川太冲は更に一本堂藥選を著して最第一湯とし爾來泉名頓に江湖に傳はるに至つた尙また倉谷安齋は文政二年但馬城崎湯治指南車を出して入湯法を說き新宮涼庭も弘化年間來り浴して但馬紀行を作つた夙に城崎溫泉の注目せられし事は想ふに餘りあるものである城崎溫泉共同浴場の淸楚たるは未だ嘗て他に見ざる所昭和の今日海內第一湯と稱するも敢て過言ならずとする庶くは町民諸君が益々銳意して一層施設の全備完整に努められんことを切望して止まざる次第である

昭和十七年

醫學博士　藤浪剛一撰

藤浪博士の略歴

藤浪博士の略歴

加藤一夫

はしがき

内ケ崎作三郎さんが英國ケンブリツヂ大學から歸つて、東京芝のユニテリアン教會に牧師となつた頃、私は少時、そのお仕事を扶けさせてもらつたことがある。

ユニテリアンはキリスト教の一派ではあるが、キリスト教側ではこれをキリスト教と認めたがらない程だから、内ケ崎さんがこの教會の牧師となつたとは云へ、少しも牧師臭くはなく、日曜の說教などにも、極めて自由に、政治を論じ、經濟を語り、社會情勢を批判すると云つた有樣だつた。ところが、それが却つて、普通の教會に慊らないもの、特に若い青年や學生の要求にかなつたと云ふ形で會堂

はいつもそれ等の人で一ぱいになる位であつた。

此の教會の幹部と云つたものには一高教授の三並良慶應教授の向軍治評論家の山路愛山をはじめ、も少し若いところでは、今岡信一良、相原一郎介、内藤濯、吉田絃次郎、鈴木文治等があつて、謂はゞ多士濟々であつた。そしてそのうちには、教會にはついぞ顔を見せたことはなかつたが今こゝに此の思ひ出の綴られてゐるわが藤浪博士もあつた。

内ケ崎さんは或日、私に云つた。

「君、藤浪君を訪ねて見てくれ給へ。藤浪君も我が教會員の一人なんだ」

このとき初めて私は、藤浪さんが今、順天堂醫員の一人で、獨逸留學から歸つたばかりのレントゲンの先驅者であるのを知つた。

藤浪さんはその頃、神田の或旅館に止宿してゐたが、まだ獨身であつた。内ケ崎さんに云はれたので私はやがて藤浪さんを訪ねたが、私たちは勿論、宗教を語り合ふやうなことはなかつた。私はたゞ、藤浪さんは非常に物やさしい、親切な、そして謙遜な方だと云ふ印象をうけたことを覺えてゐる。そして此の印象は、

藤浪さんの全生涯を通じて變らないものであつた。

この時以來ずつと、私達の交際はつゞけられた。私の結婚のときには、その頃すでに、物集博士の令嬢たる奥さんを迎へられてゐた藤浪さん夫婦に仲人になつて頂いた位である。私はたゞ、その後社會運動なんかしたために御迷惑をかけては濟まないと思つて、わざと餘り親しくしない様に心がけてゐた。が、それにも拘らず、私たちは常に藤浪さん夫婦の御好意をうけて居た。ことに私が、社會運動から足を洗つて生活をきりかへるために非常な窮乏に陷つたときなどは、私の子供の教育費を出して下さつたりなどした。

これは實に、深く私の膽に銘じたことである。

それで、今度、藤浪さんが亡くなられると直ぐ私の頭に浮んで來たことは、せめてもの御恩報じに、藤浪さんの傳記を書いて、その美はしい人格を廣く世に傳へ、死んでも生きた藤浪さんをながく世に止めたいと云ふことであつた。ところが、何と云つても今、日本は戰時體制下に在つて本にする紙さへも容易に手に這入らない狀態であるのに惱んでゐたが、幸ひこゝに藤浪さんの友人や知己によ

り思ひ出が編まれることになつたので、その想ひ出のはじめに傳記を書くことを、奥さんから依頼された。

私の喜びは大きい。

勿論、これは傳記と云つても、ほんのその一端を綴るにすぎない略傳のやうなものである。ことに多忙のうちに急いで筆をとらねばならぬのであるから、滿足なものが出來る筈はない。私の恐れることは、私がこれを書くことによつて反つて、藤浪さんの美はしい人格を穢してしまふのではないかと云ふことである。このことは先づ、藤浪さんの靈に對し、奥さまに對し、友人に對し、門下の諸君に對して、深くおわびをしなければならぬ。私としては、たゞ、私の最初の願ひの一端がこれによつて實現されたことを喜び、全力をそゝいで、これを仕上げようと思ふのみである。

修學時代

明治十三年六月七日、名古屋市東區久屋町に德川御三家の一である尾張侯の

侍醫であつた由緒正しい藤浪家の四男として生れた少年藤浪さんは明治二十年、卽ち七歳のとき、愛知縣立師範學校の附屬小學校に入學した。

この頃はもう、日本歷史を變革せしめた明治維新の大業も次第に整備し、教育の設備も全く面目を新たにしてゐたので、幼心の藤浪さんにも此のことがはつきりと意識されて居た。朗らかな明るい心をもつて、少年藤浪さんは此の新しい學校に入學し、常に快活な喜びのうちにすく〳〵と成長して行つた。

小學校を終へると中學校である。明治二十六年の四月にはもう、彼は縣立第一中學校の生徒であつた。

庭園にある花樹は、都會に生れた少年の心を、その昔人類の家であつた自然に結びつけるのには充分であつた。この家の庭に在る果樹もまた少年の原始的な胃の腑に喜びを與ふるとともに、純眞な心を喜ばせるものであつた。

明治二十九年、縣立第一中學校の四年を終了して東都に上るまでの四年間、中學生としての少年藤浪さんは、かうした最初の印象から逃れることがなく、學業の合間々々には、家に居る書生と共に果樹の世話をしたり、日曜などには郊外に

出て、植物の採集をすることを樂しみとした。

後年、藤浪さんが、科學者にして而も單なる科學者ではなく、情操豊かなる自然の愛好者たりしことは恐らく、天性の然らしめたところではあらうが、同時にまた、少時の斯うした環境によることも大であつたのは想像に難くはない。

この間、藤浪さんは、たゞ、本にばかり嚙りついたり、植物を採取して自然を樂しんだりするばかりでなく、身體の鍛錬に意を用ひ、中にも今までの日本には行はれなかつた野球を特に喜んだ。蓋し、これは彼が啻に身體をばかり強くすればよいと云つたやうな無趣味な性格ではなく、常に新しいものに憧れ、新しい世界を開拓して行かうとする進取的な氣性が如何に強かつたかを證するものである。

少年時代に於ける彼の特色はしかし、これに盡きるのではない。或はこれは兩親の思ひやりによつたのかも知れないが、中學生にしてすでに、藤浪さんは書や畫を學んでゐた。思ふに、中學の課程に勵み、運動に熱中し、自然に親んで植物の採集までやつてゐた中學生としては、こんな事にまで力をのばすのは容易の

ことではない。而も、今も大體さうであるが、この頃の學生は一般に西洋かぶれをしてゐたために、英語や科學には熱中はしても、日本古來の書道や畫道などは十把一からげに無視した時である。かう云ふ時代、かう云ふ年頃に於て、特に書道や畫道に親しんだと云ふことは特筆大書すべき事實と云はねばならぬ。

藤浪さんは中學時代に於てこれを修めた。彼が後年、單なる科學者ではなく、眞に立派な人格者としての學者となり教育者となつたのは實に、中學時代に於ける此の修養に負ふところ大であつたのは云ふまでもない。因みに藤浪さんの教をうけた書家は鈴木眞庵氏であり、畫は鈴木不知氏に就いて學んだのである。

縣立第一中學を出ると藤浪さんは東京に上り、獨逸協會學校に入學し、當時この學校に教鞭をとつて居た三並良氏の家庭に厄介になる事となつた。

獨逸協會は獨逸自由派基督教の學校で、中學部と專門部とがあつた。普通の中學校ではすべて英語を正科として教へたが、この學校のみは獨逸語を教へたところに此學校の特色があつた。專門部もまた獨逸流の哲學や神學を主とす

るものであつただけに、一部の人には注目され且つ重んぜられてゐた。

藤浪さんがこゝで獨逸語を學んだことは勿論であるが、同時に、三並さんの訓陶の下に在つて自由基督教の感化をうけた。後に彼がウキーンに學んだのも、遠因はこゝに在つたかも知れないし、ユニテリアン教會の會員となつたのも、三並さんとの關係によるものであつた。また、藤浪さんがカチカチのクリスチヤンとならず、自由なる學徒として眞理を探求する樣になつたのも、この學校及び三並さんの影響によるものと云ふべきであらう。

藤浪さんの天性、青少年時代の自然の感化、そして此の學校及び三並さんの家庭の環境。これ等の條件の下に、もし自然の發達に任かしておいたならば、藤浪さんは恐らく、もつと別な方向に進んでゐたことであらう。しかしそれよりももつと大きな運命の決定力は、藤浪さんの家が代々醫家であつたと云ふことであつた。彼が明治三十四年、此の獨逸協會學校を出ると直ぐ、その翌年岡山の醫學專門學校に入學したのもその爲である。これによつて兎も角、藤浪さんの一生涯の進路が、はつきりと定まつたと云つてよい。

岡山の醫學專門學校は勿論、他の醫學專門學校同樣に、實際的な刀圭家を養成するのが目的で、學者をつくることを主眼とはしてゐなかつた。藤浪さんはしかし別に期するところがあるかのやうに、コツ〳〵と勉強して、成績もまた拔群であつた。かくて明治三十九年、岡山醫學專門學校を卒業してもなほ同校の病理學教室に止まつて、病理學を研究した。しかし此教室はなほ、藤浪さんの大志を遂ぐるには充分でなかつた。そこで、一年の後再び東京にのぼり、東京帝國大學醫科大學皮膚科の介補となり、皮膚科の權威土肥博士の下にあつて、その指導をうけた。

土肥博士も既に他界された今、藤浪さんがその頃、學問的に何う云ふ功績を擧げてゐたかを知るよしもないが、博士夫人の眼に映じた藤浪さんは、その若さにも拘らず、世にも稀な溫厚篤實な紳士であつた。中にも、年下な少年少女のよき友として保護者として、よく勞はりよく世話する靑年紳士であつた。

だが、これも亦、藤浪さんの最後の落着きどころではなかつた。そこで明治四十二年、卽ち藤浪さんの三十歲のとき、醫學研究のために歐羅巴に渡つた。

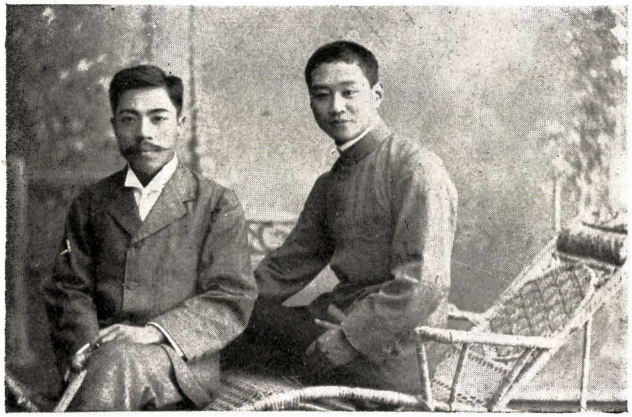
歐羅巴に渡つた藤浪さんは、オーストリア國、ウキーン大學附屬病院のレントゲン學教室に於ては、主任ホルツクネヒト氏について、光線療學室に於ては、主任ラング氏について、ポリクリニツク・レントゲン教室に於ては、主任キーンベツク氏について、レントゲン治療、光線療法等を研究した。

もつともこれは必ずしも、藤浪さんを洋行させた父の希望ではなかつた。父としては、充分の研究と實地の經驗を得て歸つて來た藤浪さんを、年老いた自分の後嗣として、名古屋で開業せしめたかつたのである。

藤浪さんとしては、直接治療に當り、病魔に冒されてゐる不幸な人を救ふと云ふことには、人並みすぐれた使命を感じては居たが、それよりも更に強い願望は、醫學の未開拓地を開拓することであつた。そしてそれには實に、まだやつと生ひ立つたばかりのレントゲンを研究して、それを完全に醫學療法に應用せんことであつた。

レントゲンの研究はまことに、一面藤浪さんの好學的要求を充すものであり、他面藤浪さんの博愛的欲求を實現せしむるものであつた。藤浪さんはこのこ





岡山醫專時代

とを、父にも兄にも書き送つて、その同意を求めた。京都帝大の教授である兄の鑑氏には勿論不同意であるべき筈はなかつた。父としても亦、藤浪さんがレントゲン専門と云つたやうな看板をかけて名古屋で開業するにはまだ時期早尚であり、從つて折角の家門を繼がせるわけには行かないとは考へたが、愛息の此の健氣な志望を挫く氣にはなれなかつた。のみならず、考へ樣によつては、これは、人の不幸を救はうとする神聖なる家業を廢することではなく、寧ろ、その發展と解すべきものである——何となればこれは、新しい時代の知識と技能とをもつて新しい時代の治療に從事することだから——とも云へるであらう。

かくて藤浪さんは、安心してこの新しい學問と技術との研究をつゞけることが出來たのである。

ウキーン滯在中、藤浪さんは、專に研究に於て愉快であつたばかりでなく、生活に於てもまた甚だ愉快であつた。藤浪さんはこゝで、歐羅巴留學の多くの日本人は勿論、多くの漫遊者たちにも接した。そして、土地不馴れな人々を案内したり、知名の士に紹介したりした。そしてそれは實に、人に親切をつくしたいと云

ふ彼の天性に適ふ樂しい仕事の一つであつた。

藤浪さんは決して、たゞ研究すればよいと云ふやうな、謂ゆる學究ではなかつた。滯在中彼は、多くの知名の士を訪問し、また、歷史的に有名なる地や、名勝の地を探ることを樂しみとした。而もそれはたゞ、物好きにさうするのでもなく、歸朝後の語草にしようとする淺墓な考へからでもなかつた。彼の生活はそのまゝ研究であつた。——たゞ醫學上の研究のみならず、歷史上のことに於ても、世情人心についても、社會情勢についても、すべては皆、藤浪さんの研究の對象であつた。

ウキーンに於けるレントゲン研究を終つて歸朝したのは、明治四十五年一月であつた。

レントゲンについては理論的には既に知られて居たとは云へ、これを治療の實際にあてはめることはまだ日本には行はれてゐなかつた。ところが藤浪さんは今、これを理論的にも實際的にも研究して歸つた日本最初のレントゲンの

權威であつた。

歸ると早々順天堂病院から招聘せられ、同年四月、順天堂病院のレントゲン科長に任ぜられた。斯界に於ける藤浪さんの權威が次第に知れ渡るにつれ、治療を受けようとする病者は日々に多くなつた。

設備のために忙しかつた藤浪さんはやがて治療のためにも忙しくなつた。しかし藤浪さんは頑健そのものであるかの如く、疲れを知らなかつた。彼は眞劍であつた。彼は誠實であつた。診斷や治療に從事して居る間、彼は實に戰場の勇士の如くであつた。綿密であり、几帳面であり、如何なることも忽にしない彼の前にあつては、如何に親しい者と雖も、如何に優れた助手と雖も、その些細な過失や不注意を許されなかつた。かくして人々は皆、藤浪さんの前にピリ〳〵として居た。しかし仕事を終へるや否や、藤浪さんは全く別人の如く、やさしい、親切な男であつた。助手に對して、學生に對して、患者に對して、これは實に藤浪さんの一生涯を通じての態度であつた。そしてそれ故にこそ藤浪さんは、人々から無上の尊敬と信賴を拂はれたのであつた。

大正四年の二月に藤浪さんは醫學博士の學位を授けられた。それはこの忙しい間に提出した論文によるものであつたが、提出された主論文は「空虚なる胃中に於て分泌を診定する簡易なるレントゲン檢査法」と云ふのであり、參考論文としては

1、胃の幽門痙攣、分泌過剩及運動障碍について
2、胃の運動力に關する參照試驗について
3、抗酸性にして視られ得べき丸子のレヨンチエン檢査に於ける價値、並にグルトイド嚢及ケロドラート嚢の用途について
4、フインゼン燈を喉頭狼瘡の治療に應用する一新法について
5、佝僂病に於ける腕骨の化骨について
6、腕骨の化骨について

等で、何れも皆、獨文で書かれたものであつた。

この頃慶應義塾は完全なる綜合大學たらんがために醫學部を增設しようと

してゐた。そして醫學部を新鮮なものとせんがために當時まだ何處の大學にも完全な教室をもつて居なかつたレントゲン科をおくこととし、その創設を藤浪さんに托した。

藤浪さんはこれを快くうけた。と云ふよりは、さながら自らの仕事であるかの如き熱情をもつて、此の大學に理學的診療科を設置するために努力した。藤浪さんが此科の主任教授となつたのは云ふまでもないが醫學部教授として慶應の醫學部增設のために奔走したのは忘れることが出來ない。

學校に於ては藤浪さんは嚴格なる父の如くであり、慈愛あふるゝ母のやうでもあつた。病院に於ては責任を重んじ親切な刀圭家として、患者の信賴を博した。藤浪さんの部屋は常にキチンと整頓せられ、居心地のよい天國であつた。

この時以來死に至るまで、こゝが藤浪さんの職場であつたが、藤浪さんは決して、大學の門を一步も離れない窮屈な學者ではなかつた。大學に於てはよき教授であり、病院に於てよき先生であると共に、家庭に於てはよき夫であり、社會に於てはよき指導者であつた。そして至るところに、その鮮な足跡を殘した。こ

れ等のことについては別に章を改めて、述べることとするが、略歴としてこゝに是非記錄しておかなければならぬことは、この間に藤浪さんが、多くの書を著し、多くの學會を創設し、または多くの學會や協會に關係し、世道人心を裨益する事が實に多かつたのである。

今その重なるものを擧ぐれば

大正十二年には日本レントゲン學會を同志と共に創設し、その幹事に選ばれた。

昭和二年には富士川博士を中心として日本醫史學會が創立されたが、その理事に推された。

昭和五年には日本溫泉協會が設立され、その理事となつた。

日本レントゲン學會は昭和八年の六月に分裂し、その分派は日本放射線醫學會と稱したが、藤浪さんはその放射線醫學會の幹事に選ばれた。

昭和十年には日本溫泉氣候學會と云ふのが創立されたが、同會の理事となつた。

昭和十二年の四月にはオーストリアのレントゲン學會からその名譽會員に推された。

昭和十五年には、さきに分れた日本レントゲン學會と日本放射線醫學會が合併して日本醫學放射線學會となつたが、同會の幹事に推された。

昭和十六年には、さきに創立した日本醫史學會がその創立者たる富士川博士を失つたので、その後任として理事長に推された。

また、同年、日本溫泉科學々會が創立されたが、同會の副會長に推された。

これによつて見ても、藤浪さんが如何に日本のレントゲン學の發達のために盡し、如何に多くの貢獻を遺されたかを知ることが出來るが、こゝに注意すべきは、右の足跡に見ても、啻にレントゲンのためのみでなく、溫泉學のために、また、醫史學のために、盡されたと云ふことがわかる。而もこれは、單なる餘業や餘技としてゞはなく、その精根をさゝげた程の事業であつたのである。

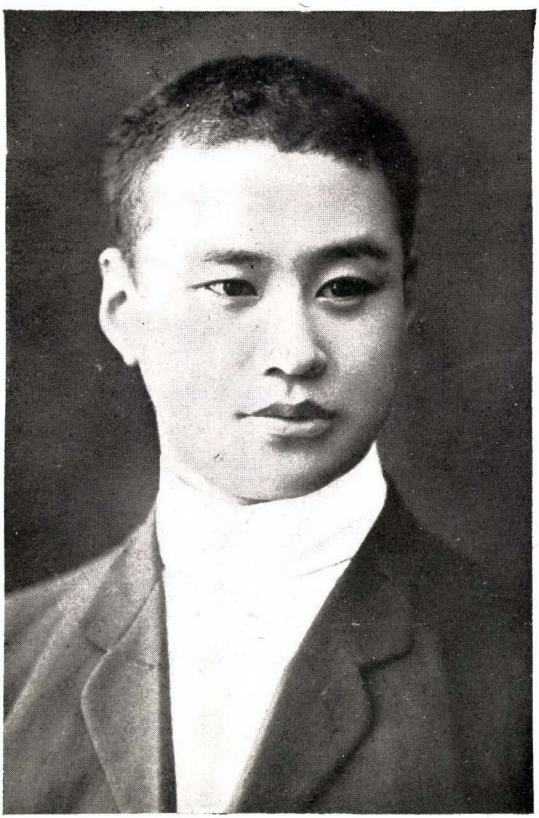
しかし藤浪さんの仕事はこれでつきるのではない。彼は更に、名墓顯彰會の幹事として、故人の業蹟や德をたゝへる事に努力し、夫人と共に、ひまあるごとに

諸方を巡つて埋もれた墓をおこし「掃苔」と云ふ雑誌まで出し、杉山檢校遺徳顯彰會には、吳秀三博士の後をつがれてその會長となられたが、これも亦、偉大なる足跡をのこした故人の徳を顯彰すると共に、日本的なものを保護しようと云ふ志からであることは勿論である。

人の品格はその事業によつて判斷することが出來る。隨分大きな足跡を遺して行つた人はある。我々はしかし必ずしもそれ等の人を尊敬しない。何故なら、たとひその足跡は偉大であつても、それは必ずしも品格を備へたものとは云はれないからである。ところがわが藤浪さんのごときは、世間に目だつ偉大なる仕事には興味がなかつた。藤浪さんの熱情を沸かしたものは、たとひそれが偉大なる事ではなくても、それが、人の爲になる事であればよいのであつた。そしてこゝに、藤浪さんの優れた品格がある。

人としての藤浪さん

藤浪さんの傳を書くに當り、先づ第一に頭に浮んで來るのは、その人としての



明治四十年頃

性格である。何となれば我々は、斯くも圓滿なる人格を、滅多に他に見出し得ないからである。

圓滿と云つても、普通に考へられて居るやうに只だ活達自在と云つたやうなものでない。かう云ふことにかけては缺陷があるが、かう云ふことには非常に發達して居ると云つたやうなそんな偏狹さが少しもなく、人間として斯くあるべきだと云ふ性格が圓滿に滿遍なく發達して居ると云つた意味に於てのことである。

中にも最も顯著な藤浪さんの性格は「まこと」と云ふことである。實際、藤浪さんの一生は徹頭徹尾まこと、をもつて貫いて居たと云つてもよい。その一つの例として私は、彼が岡山の醫學校に居た頃のことを擧げることが出來る。

岡山醫學專門學校に共に學んだ山口政一氏は藤浪さんについてこんな思ひ出を書いてゐる。

「昔日を忍んで遡る四十餘年、雛鳳の搖籃岡山の醫學舍、紅顏の新入生、後日の大博士、東都獨逸協會の出身、吾人また中學に獨逸語を兼修せる三年の上級生とし

て共に當時獨語の權威高橋金一郎教授指導獨語特別班列席の知己たり。又所屬の教會をも同じくして、若き日の親交愈〻厚きを加へたれば、予の所持するところの學用骨格貸與の關係ありしが、進級に從ひ不要に歸せしに、その骨格返附に際し、中指と示指の末節二個紛失の辯疏に加へて必ず補塡の策を講ぜんことを誓約せられたれば、平素の心安さに今は予も不要のもの故、その配慮の要なきを答へしに、若き同窓、肅然容を改むるところありて曰く「骨の所有者にはかくても濟むべけんも、此骨の主たりし人に對するとき、只二節の骨片紛失と雖も禮を失すること甚だし。これを放置すること愈〻申譯なき事なれば誓つて捜索原狀に復さん」とする旨堅く言明せられ、これを聽くもの頓かに襟を正して感激久しかりし一場は、奔放自由の年少氣鋭の學生時代にありては世に稀有なる光景にして、後年の眞摯なる埋骨の處、掃苔觀念の淵源するところ、誠に深厚なるものあるに思ひ到らざるを得ざるなり」

「持主にとつてはもうなくてもよいだらう。だがこの骨の主であつた人には濟まない。これを放つておくと云ふやうなことはその人に對して禮を失する

も甚しいかう云つたデリケートな心持は誰にもあるだらうか。特に、山口氏も云つてゐるやうに、これを云つた人は、まだ年齒も行かぬ一青年にすぎない。そのやうな青年の誰が一體、かうも眞摯に考へらるゝであらうか。物の問題ではない。金錢の問題ではない。大きな精神的な問題である。藤浪さんは實に、その青年の頃すでに、かう云ふことに氣がついた程、まことの人であつたのである。そして此の心がけは決して、一生失はれはしなかつた。否その生涯を通じて、この本性は一層磨きをかけられ、凡ゆることに顯はれてゐる。後年、レントゲンの研究に於て骨の發育とレントゲンの關係や手足の骨の發生なぞ、骨に關する多くの業績を遺したごときも、學生時代に於ける此の事件が因をなして居たとも云へるであらう。また、既に死んで居る人にもなほ斯くのごとく敬虔であつたと云ふことはやがて、醫家先哲の德を慕つて、多大の費用と時間とをも惜まず、その肖像を集めて本としたり、埋もれ廢れた墓を興すと共に、それによつて故人の德を顯はさうとしたりして、いろ〳〵の事業をされたものとも云はれるであらうと思はれる。

藤浪さんの名墓顯彰は決して、趣味や好事からではなかつた。無論この種の人によつて多く行はれる骨董趣味からやつたのではなかつた。それはたゞ、埋もれた人の德や功績を掘り起さうとするまことの產物であつた。

藤浪さんに接した誰もが感ずることは、彼が何時もニコ〳〵して居り、なごやかであり、親切であることであつた。「掃苔」の「藤浪剛一博士追悼錄」で誰であつたか、聖德太子は和を以て尊しと云はれたが、藤浪先生はそれを御自分の生活に於いて示されたと云つたやうなことを云つて居たと思ふが、まことにその通りで、藤浪さんはまさに大和の人であつた。

藤浪さんはどんな人にも親切であり、どんな人をも尊重し、どんな人からもその長所美所を掘り出さうとした。それは、斯くの如くしなければならぬと云つたやうな義務からするのではなく、もとより、こゝろにもない附燒刃的なものでもなかつた。すべてはみな、さうしないでは居られない彼のまことから出て來るものであつた。

と云つて、これは決して、無智な母親がその子に對してするやうな馬鹿可愛が

りやうでもなかつた。善いことは善いとし悪いことは悪いとして、決して物を忽にしない。學生や助手が藤浪さんを恐い先生として尊敬したのは、さう云つたことのためである。

物を忽にしないと云ふことはやがて几帳面と云ふことにもなる。あの忙しさのうちに在つてもなほ家も研究室もあの様に整頓してゐたのは藤浪さんの几帳面さのためである。

その忙はしさのうちにもなほ、几帳面に手紙をかき、几帳面に人を訪問する。而もその手紙は簡單ではあるが卒直で飾氣がなく、ぞんざいな字などは決して書かない。月々損をして出して居る「掃苔」に原稿を頼めば、必ずその稿料を送つて勞に酬ゐることを忘れない。雜誌發行の期日を正確にするためには、印刷屋が恐れをなすほどにも催促をする。

これ等はすべて、そのまこと、から出ることであつて、毫頭、私利私慾から出るのではない。隨分いろ〳〵の會に關係し、いろ〳〵の會合に出て世話を焼いたが、その會を利用して、自分の名をあげようとか、自分の利益をあげようとするやう

なことは絶對になかつた。大東亞戰爭が始まつてから此の方、滅私奉公と云つたやうな標語が盛んに用ひられ、事實、日本精神はこの滅私奉公であるが、藤浪さんの一生は全くこれであつた。

尾佐竹猛氏は、その思ひ出のうちに

「藤浪さんの人格についてはそれ〴〵の方からお話があらうと存じますが私の感じました一面は、種々の學會に關係なされ、あらゆる出費を爲されたにも拘らず、決して表面に名を出さうとなされなかつた奥床しさであります。世には兎角、名前を出したがつたり、中にはわざ〳〵自分の苗字を研究所や學會等の名に冠したがるかの如きは、私の唾棄するところです。それからまた僅かの金を出して、自分が表面に立ち、その淺薄なる趣味や知識を押し賣りしたがる人間も多いのであります。此種の人間は私は蛇蝎視してゐるのであります。然るに藤浪さんは全くこれと正反對の人格を有して居られたのには、私の傾倒を禁ずる能はなかつたのであります……」

と語つて居られるが、これは尾佐竹氏それ自身の人格の奥床しさを示すもの

であると共に、よく藤浪さんを洞觀されたものと云つてよい。

會があつて、その會の中心となつて居ながら、藤浪さんは決して傲然と構へるやうなことはなかつた。さながらその會の小使かなんかのやうに、まめ〳〵しく立ち働いて世話をしたのみならず、集つて來た人の特徴や長所を見ぬいて、それを發揮せしむる機會を與へることに努力した。これは、曾に自分を表はさうとしなかつたばかりでなく、他人を持ち上げようとする人の大きさを示すものである。

斯くの如く、藤浪さんは、如何なる場合、如何なる處に於ても、全く己と云ふものがなかつた。藤浪さんの生涯にとつては、滅私と云ふ言葉ほど適切な表現は見出されないと私は思ふ。

藤浪さんと雖も時々人を批評したり社會を批評することがあつた。そしてそれは、大概の場合、正鵠を失して居なかつた。しかし、こゝに注意すべきは、それは決して、人や物を傷つけんがためではなかつた。多くの場合それは、罪のない評言であるか、さうでなくてもその批評さるゝものを育てんがためであつた。

私は藤浪さんの斯うした一面を見るとき直ちに、黒住宗忠のことを思ひ出す。黒住宗忠と云ふ人は黒住教の開祖であるのは誰も知つてゐるが、彼の眞の偉大さはまだ充分に認識されてゐるとは云はれない。しかし私の見るところでは、彼は啻に、日本の宗教的偉人であるばかりでなく、世界の宗教家のうちで、否、基督や釋迦でさへ、彼に及ぶものは一人もないと思ふ位である。

この宗忠は決して怒らなかつた。或るとき酒に醉つて狂亂した武士が岡山城下で二十人もの人を斬り殺して居るところに出くわして、「場所からで御座るぞ」と大喝一聲し、そのためにその狂武士の亂暴は止んだと云ふことであるが、これは怒つたと云ふのではなく、寧ろ、その士を罪より救つてやらうと云ふ天の聲であつた。宗忠は常に、怒つてはならない。怒ると云ふことには私情がある。その私情はまた相手の私情をいやが上に募らせるばかりであつて何の益にもならぬのみか、大きな禍となる。それよりも人の長所を見出すことである。人の悪いことを見出しても、その人のうちにある善いところ、即ちその人の神を引き出してやる態度に出なければならぬ、と云つたやうなことをもつて人をさと

してゐた。そしてこれは實に、藤浪さんの日常の態度であつた。

家庭人としての藤浪さん

「私は一ぺんでもいゝから藤浪博士の怒つた顔を見たいと念願したが、とうとう御生存中見ることは出來なかつた。甚だ殘念に思つて居ます。掃苔會の總會のあつたとき、陳列中の獨逸の掃苔に關する雜誌が一冊だけ紛失して、その犯人は判つてゐますが、現場を見てゐないので困つてしまつたとき、少々語氣に强きところが現はれたので、この時は怒つてくれるかなど樂しみにしてゐましたが、到頭ものになりませんでした。藤浪博士は怒つたことのない人か奥さんにお聞きして見たいと思つて居ましたがその機會を得ませんでした。こんどお目にかゝつたときお聞かせ下さい」

宮尾しげを氏はその追憶記の冒頭でかう云つて居る。ところが私はかつて、藤浪さんの怒つてゐるのを見たことがある。が、嚴密に云つてそれは怒つたのではない。隨分語氣を烈しくして、助手を叱つて居たのであるが、叱ると云ふこ

とは必ずしも怒るのではない。もつとも多くの人のうちには叱るのではなく怒るのだと云ふのが適當なやり方をするのが多いのであるが、藤浪さんの場合は、前節に云つた黒住宗忠のやうに、そのうちに私情を挟んで怒るのではなく相手のうちから善いものを引き出すために叱るのである。もつと詳しく云ふと、藤浪さんはたゞ凡てのことに責任を重んじ、助手や看護婦がそれをなほざりにすることを責めたのである。而もそれは助手や看護婦にもその同じ責任感をもたせるためであつたのである。して見ると、私もやはり、藤浪さんの怒つた顔を見たことがないのである。

ことに私は、家庭に於て藤浪さんの怒つてゐるのを見たことがない。家庭の内部のことがわかるほど私は、藤浪さんの家庭に出入したことがないのだから、これは寧ろ當然なことであるかも知れない。私はしかし確信をもつて云ふことが出來る。「藤浪さんはその生涯を通じて、家庭に於て怒つたことはない」と。

蓋しこれを云ふのは、藤浪さんの家庭が理想的に大和の世界であつたからである。

藤浪さんは、謂ゆるフェミニストではなかつたが、夫人を尊重した。夫人はまた、妻と云ふものは夫の奴隷たるべきものだなどとは毫頭も考へて居ないが、夫を尊重した。かくてこの家庭には、互に信頼し合ふ獨立の夫があり妻があつたのである。

學校や社會に在つて多忙な夫は、家庭に歸つて文字どほり憩ひのオアシスを見出した。何故なれば、こゝに來ると、夫の仕事を理解し、心からそれを扶けようとする夫人があつたからである。客が來るとそれを心から歡待する夫人があつたからである。本を讀んだり、研究に沒頭すると、それを心から勞はる夫人があつたからである。

夫人が凡てのことに氣をつけて藤浪さんの仕事を扶けたのは云ふまでもないが、中にも、藤浪さんが名墓顯彰會の幹事として又會長として、故人の德を顯彰し、「掃苔」と云ふ雜誌をまで發行するや、夫人は藤浪さんと一緒に埋もれた墓を探しに出かけたり「掃苔」の編輯を手傳つたりしたことは有名で、會の人々から非常な感謝をさゝげられてゐるのは周知のことである。

もとよりこれは夫人の賢明によるものではあるが、同時に、夫人をして斯くの如き内助を敢えてせしむるには、夫たる藤浪さんの徳があつたからであるのを忘れてはならない。藤浪さんは家庭人としてもまた理想的であつたのである。

教育者としての藤浪さん

藤浪教授が亡くなられてから間もなく、慶應義塾大學醫學部で、慶應義塾大學としての追悼會が行はれた。

追悼會には、未亡人をはじめ、大學教授、學生その他で、會場がぎつしり一ぱいにつまり、簡素な式場には故人の笑みを含んだ寫眞が飾られて居た。追悼會がいとも嚴肅にこゝで行はれたのである。

私もこの追悼會に臨んだ一人であるが、何よりも私を喜ばせたことは、この會が何等儀禮的なものでなく、眞に故人を悼む表情に溢れて居たことである。

藤浪教授は勿論慶應に醫學部が增設された時からの教授で、謂はゞその生みの親のやうなものである。だが、この追悼會はたゞ、さうした關係から、儀禮的に

行はれたものでないことは、當日こゝで、藤浪教授について語つた人々の眞劍な態度からも、その話の内容からもはつきりと酌み取ることが出來る。

學校關係の人々からは、慶應に醫學部設置の當初から藤浪教授が此の醫學部のために如何に骨を折られたかを感謝された。教授たちからは彼の學的業績が報告せられ、病氣の經過及び解剖によつて得られた諸々の症狀が詳しく發表された。しかし中でも最も私を感動せしめたものは、故教授の門下生や學生たちの切々たる追悼の辭だつた。

何となれば、これによつて私は、門下生や學生たちが、教授の死を如何に大なる損失として居るか、如何に深き悲しみのうちに浸つて居るかを眼のあたり見ることが出來たと共に、教育者としての藤浪教授の一面を遺憾なく看取することが出來たからである。

これ等の人々の話をきいて居る間に私の感じたことは、藤浪教授は決して知識の傳達をもつて、その天職の凡てとすることなく、同時に、と云ふよりはそれ以上に人格の養成に力を注いだのだと云ふことである。

門下生や學生たちの言明するところから察すると、藤浪教授は一面、實に嚴格であると共に、他面、實に愛情に充ちた親切な教育者であつた。

この二つの面は、一見相反する性格であるかのやうであつて、實は全く一致する性格の反映であることは云ふまでもない。

私は嘗つて藤浪さんが、診斷中一助手に嚴格であるのを見たことは前にも云つた。これはしかし、助手に對してだけではなく、學生に對しても同樣であつた。たとへば、學生がやつて來なければならぬことをやつて來ないときには非常にやかましかつた。レントゲン寫眞が一回で通過すると云ふやうなことも滅多になかつた。二度、ことによると三度もやりかへて、やつと通過すると云ふやうなことも珍しくはなかつた。勿論これは、患者に對する責任感や親切心の表はれであるのは云ふまでもないが、學生や助手にもその同じ考をもたせ、同じ習慣をつけさせるためであつた。

かう云ふことは、助手や學生以外、巷間藤浪さんに接する人には決してなかつた。だから人は多く、藤浪さんのかうした一面を見のがしてゐる。掃苔の「藤浪

剛一博士追悼錄」中にも、玉林晴朗氏は「いつも私の御目にかゝつた博士はニコニコとせられてゐた。そして穩和な態度で懷しく色々と話をされたので、つい良い氣になつてしまひ……慶應の醫科を出た義弟に「學校に於ける藤浪博士は隨分と嚴格であつて、學生の間では大變にコハイ先生として定評がある」と云ふ話をきいて、はじめてその一面を識つた」と云ふやうなことを書かれてゐるが、さもあるべしと思はれる。

しかしながら、それは勿論一面である。藤浪教授はまた、此の上もなく親切な善い先生であつた。教授の訓陶をうけた北里文太郎氏の追悼文を讀んで見ても、容易にそれがわかる。文中には現に博士の教授をうけて居る令弟からの手紙も採錄されて居るが、これによつて見ても、この二人が藤浪さんに如何に愛されて來たか、早く父を失つた二人が、藤浪教授を父の如く慕つてゐる眞情がまざ〳〵と描き出されてゐる。

この追悼文を讀んで感ずることは、教授の教育は啻にその教室に於て行はれるばかりでなく、教室の外に於ても行はれたと云ふことである。北里氏はよく

家庭に教授を訪問したらしいが、家庭に於ける教授夫妻は實に親切であつた。こまゝ〳〵とした注意を與へたのは勿論であるが、このほかにも教授は、家庭に來る學生に貴重な本を貸し與へたり、文献をしらべる時の注意やその方法を教へたりした。

かう云ふことは、教室で知識の切賣りをしてゐる人には到底あり得ない親切であると思はれる。

子供を愛し、よく育てる。これが彼の樂しみでもあり、教育者的本性でもあつた。追悼錄や追悼の辭にはこのことにはあまり觸れてないやうだが、藤浪さんが富裕でない友人の子供のために盡したことは少くない。或者には學資を與へ或者には書籍を與へ、或者には家庭で歡待した。

このことが餘り語られなかつたのは、教授がかうしたことを他人に知られることを好まなかつたからである。人の上に立つたり、己を表はすことを好まなかつた藤浪教授の斯うした隱れた善行は特筆大書すべきである。



明治四十四年維納にて

レントゲン研究の先驅者

藤浪さんの仕事のうち、何と云つても最も大きなのは、多くの醫家に先驅してレントゲンを研究し、これを病氣の診斷治療に役立たせたことである。

藤浪さんがウキーンに留學した頃、レントゲンの學理的研究は無論あつたが、これを治療に應用すると云ふことは、未だ多くの人の注意を惹いて居なかつた。しかし、藤浪さんは醫學上レントゲンの齎す功果の偉大なるべきことを直感した。そこで、歐洲にもまだ餘り行はれてゐなかつたレントゲンの醫學的研究をはじめた。

何ごとによらず、人に先驅して新しい途を切りひらいて行くと云ふことは、中々容易なことではなく、危險ですらもあることは、誰しも知つてゐる。殊に藤浪さんにとつては、日本に歸れば父祖の開拓して呉れた大きな地盤がある。が藤浪さんは此の平坦な道を歩まうとはせず、海のものとも山のものともわからぬ此の新路の開拓を選んだ。こゝに我等は生活の安易を求むる單なる醫師とし

てではなく、科學者としての藤浪剛一を見る。

實際、日本の醫界に理學的療法を創始し、普及せしめた者は我が藤浪さんである。それ故に、このことは何と云つても、藤浪さんの仕事のうちでも最も大きなものであると云はねばならぬ。

順天堂に於て實際の治療に從事し、慶應の醫學部に於て此の講座を受持たれたほかに、藤浪さんは更に、著書に於てその普及をはかられた。

今その重なる著書を拾つて見ると次のやうなものがある。

齒科レントゲン學
れんとげん治療學
內臟れんとげん診斷學
レントゲン寫眞圖譜
れんとげん學
ラヂウム治療法
光と生物

醫史學の研究者として

科學者としての藤浪さんはレントゲン研究に盡きるのではない。藤浪さんの興味は更に祖國日本に結びついてゐる。中にも醫史學に於ける功績はその最たるものであらう。

醫史學は元來富士川游博士の創意に基くものであるが、藤浪さんはその最初からの協力者であり、醫史學會の創立せらるゝや、その理事に推された。

醫史學などと云ふと、徒らなる古醫書の蒐集を目的とする道樂のやうに思はれ勝ちであるが、實は我國將來の醫學の上に重要な意義を持つものである。世に溫故知新といふ言葉があるが、醫史學も即ち其の學問であつて、現代のわが醫學の發達に寄與した先賢の苦心努力の跡をたづねる事によつて現在の醫學を檢討し反省し、これによつて將來への正しき方向を定めんとするものに外ならぬ。

この頃、わが國の醫政上に於て醫道昂揚が殊に叫ばれつゝあるがこれは西洋醫學を輸入するに急であつたわが明治以來の風潮が餘りに物質的な形を取りて發達した現代の醫學上の病弊を、それ以前のわが先賢の行藏によつて反省し、西洋醫學の持つ弱點を除去し東西の美點を一括した日本醫學を建設せんとする其の理想の一つの現はれであるが、醫史學はその目的を卽ちこゝに有するのである。

藤浪さんの古書蒐集は實に、此の研究の爲めであるが從つてそれには常に熱情的なものがあつた。このためには如何なる勞苦をも、如何なる出費をも厭はなかつたが、多忙な藤浪さんはわざわざ自分で出かけて行つて、多くの時間や金錢を費さなくとも自然と集まつて來るやうにしてゐた。有名な古書店に連絡をとつてゐるのは勿論であるが、持つて來た本が案外無價値なものであつても、また、既に買取つてあるものであつても、決してこれを斷ることがなく、而も先方の云ひなりに高價をも辭せずこれを買取つた。藤浪さんのところに澤山の本が集まつて來たのはこのためであると云つても敢えて過言でないであらう。

序でだから云つておくが、こんなに熱情をこめて輯めた本であるにも拘らず、これを見たいと云ふ人には心おきなく、これを貸與したと云ふことである。池上幸二郎氏の思ひ出にこんなことがある。

「初めて先生に御目にかゝつた折私は深く、先生の人格に打たれたことがあり、今に忘れ得ぬ一事がある。それは私が初めて修理すべき書物を受取りに御自宅に伺つて預り證を差出さうとしたところ、そんな物は君いらないよ。君を信用してゐるからね」と云つておられたことである。藏書家が自らの藏書が大切であればある程、その藏書を人に預ける時に、證文を渡さずして品物を渡して呉れる人は十人に一人もない。況や初對面の人をやである。私はこの一事は未だに忘れない。その時私は、先生所藏の貴重本の數々を拜見した。書物を購入する上の種々の珍談をもおきゝした。同じ本の前半を或る本屋が持つて來て、數日たつてその後半を全く關係のない本屋が持つて來て、こゝに完本になつた或る貴重本の話などは實に面白かつた」

これは本の修理をする人の話であるが、かう云ふことは讀みたいと云ふ誰に

でも度々やつたことである。

醫史學研究の産物として、藤浪さんには「日本衛生史」や「東西沐浴史話」の著があるが、なほ、日本の科學史に關する一大著述を計畫し、そのためには一切を擲つ決心を示された位であつた。然るに未だそれに着手しないうちに亡くなられたことは惜しい。

醫家先哲肖像集

醫家先哲肖像集は醫史學研究の一副産物であると云ふことは、藤浪さんが此本の序文に斯う書いてゐることによつてもわかる。

「醫家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、畫像を展べて自ら像前に酒瓶を供へ、少年の自分にも共に禮拜せしめられたことを覺えてゐる。そして、その時は何時も、祖父の師に當る人の像や、又、我が家が華岡流の外科を汲んで居た關係から、華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあつたのである。この家例の裡に育つた爲か、自分は何となく畫像に對してこよなき尊重愛惜の情念を持つこ

とゝなり、次第に先哲の肖像を蒐集する機縁を醸成したのである。大正の大火災に遭つた自分は、蒐集品を悉く失つたが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに壹百六十餘種の畫像を藏するに至つた。之を纏めて刊行したものが、この醫家先哲肖像集の一編である。

大正の火災に遭つた自分の辛い經驗から、失はれ易い先哲の肖像は早く纏めて置かねばならぬと思ひ立ちながら、茫苒歲月が徒らに經過するのみで、遂に今日に及んだのであつた。……しかし、それ等は到底容易に蒐め得るものではない。偶々その人に擬すべき肖像を發見することもあるが、それが果して信ずべきものかの眞否の鑑識は洵に覺束ないのである。又、名門の遠裔にして、今所在の不明なるため訪索の便を獲ないものも多い。本朝醫道から觀て大切な先哲の肖像若干を收め得ざることは恰も齒の拔けたやうなものであるが、さはれ、よくこれを補うて完きを得る日は期し難いのである。仍りて姑くこの醫家先哲肖像集一編を刊し、若し他日機あれば拾遺の編を出すを可なりとし、一先づ玆にこれを上版することにしたのである。」

卽ち、藤浪さんのこの仕事は、藤浪さんの家に於ける幼年時代からの感化によるものであり、關東大震災前既にかなり多くの肖像が集められてゐたことがわかるのである。

藤浪さんの此の仕事は醫史學的立場からなされたものであることは、同じ序文に、

「我が國には古くから畫像を家に傳へる慣はせがあり、醫家に於ても同じく壽像を作つたものが相當に多いのであつた。醫家は一つには社會的位置が比較的良かつた爲め、又他には生活も豊かであつたことから、自然肖像を描かしめるにも都合がよかつた譯である。乃ち醫家にありては、隨分世代に亘つて描かしめた肖像が傳つてゐるのである。尤も師弟間の情誼から、弟子は師の像を携へて家に歸り、その家に傳へると云ふやうなこともあるから、醫を業とするものゝ多いだけ、他に比すれば醫伯の像は世間に流布したものも稍々多いのであつた。然し石碑不及口碑存底の高踏主義から、畫像などに無頓着であつた名家もある。例へば蘭醫の大家桂川甫筑の一家、又は奈須玄盎、坪井誠軒などが畫像を遺さな

かつたことは周く知られてゐる所である。さりながら、後世から云へば醫史考證の上から、又尊崇の情を滿たす上から、先哲の風姿に接することは望ましい事であり又大切なことである。隨つて到底それに接し得ざるものがあれば、學界にとつての憾事の極みである」

とあるによつてもわかる。

まことに藤浪さんも云つてゐるやうに、日本の醫學は、奈良朝の僧醫時代から出發して、藤原平安時代の呪術治療、鎌倉時代の民間療法を經て、天正慶長時代の漢方醫學、江戸時代の蘭方、明治時代の洋方と、次第に進歩發達して、今日では決して泰西諸國の下に置かるゝものでないまでになつてゐるが、醫學をして斯くも進歩せしめたものは實にその間に輩出した醫聖先哲の力である。今日我が醫學が泰西諸國と比肩して毫も學術的進歩に劣らざるものは畢竟先哲の學問が捨石となり、その苦心が遺傳したからである。藤浪さんが、醫家先哲肖像集を編み、加ふるに一々その小傳を附した意味はこゝに在るのである。

玆にそれ等を思ひ廻らせば、先哲の鴻大なる學恩に對して、限りなき敬慕の情

に堪へ難いのである」と云ひ、なほ

「先哲の傳記を繙き、或は名家の遺墨を觀るときはその人の風格、その人の雅趣、その人の氣品を懷ひ、愛慕尊崇の念そゞろに禁じ難きを覺えるのである。しかしこれだけでは、まだその人物の全貌を親知するに足りないのを遺憾とする。しかも若しそこにその人物の影像があつて、親しく之れに對ふことゝなればまた格別の感情が新たに湧き來つて、眞にその人に接するが如き思ひあらしめるのである。而して嘗てその人の行狀記から想像した面影は、寫眞によれば案外の風姿であつたことに驚くこともあり、或は輕妙洒脫の筆蹟から考へた先哲は意はぬ氣骨稜々たる容貌の持主たりしに面喰ふこともある。おもふに、行狀記筆蹟などから、その人の風丰を偲ぶは、恰も煙雨の懸つた山容を見るが如く、單簡一たび晴れて、山景の眞を現はせば、峯嶺更に別樣の觀あつて、面目こゝに全きが如くである。要するに、肖像なき傳記は、未だ眞にその人の人格風姿の全貌を傳へざる低調の非難を免れがたいのである。」

と云つてゐるが、これが藤浪さんの肖像畫に對する所懷である。藤浪さんは

卽ち故人を偲び、故人の德を讃ふるためには何うしても、その人の肖像によつて、さながらその人に接するが如きものがなければならぬと云ふ考を持つてゐるのである。

こゝに於いても亦、我等は、藤浪さんのまことを看取することが出來る。藤浪さんのこれをなした理由は、單に醫史學的に先人の業蹟を見るばかりでなく、一つには自分自身、先人の德を偲ぶためでもあり、それよりも大きな動機は、かくする事によつて先哲の正しき姿を傳へんがためであつたのである。

而もなほ我々の忘れる事の出來ないのは、この肖像を集むるために藤浪さんは凡ゆる努力を惜まなかつたと云ふことであり、本にするときには一々これを自分の信賴する人をわづらはして寫眞にとらしめた程の熱情をもつて居たことである。

杉山檢校顯彰會

藤浪さんが名墓顯彰會や杉山檢校顯彰會のために盡したのは、醫家先哲肖像

集を編まれた氣持ちと一聯の思想的關係を持つ。否、と云ふよりは、全く同じ考への別の現はれでもある。

先づ杉山檢校遺德顯彰會について云ふならば、やゝもすれば按摩や針の先達と輕く見らるゝ杉山檢校の功績や德を顯彰して再認せしめんがためであつたと共に、今日やゝもすれば甚だ輕視されてゐる按摩や針はその實日本獨特の、日本醫學の重要なる一部門を占むるものであることを世人に知らしめんためであつた。

前にも云つたやうに、藤浪さんは西洋醫學をおさめ、特に西洋醫學の最先端を行くレントゲンの醫學的研究に從事したにも拘らず、決してまた日本在來の醫學を輕んずるものではなかつた。隨つて漢方醫學や日本醫學の復興に努めてゐる多くの人々の崇敬措く能はざるものでもあつた。

勿論藤浪さんは、たとひ如何に日本醫學や漢方醫學の長所を認めてゐたとは、云へ、そのため西洋醫學を無視するやうな偏狹には陷らなかつた。

吾所主張亦活物窮理。尙軒岐而未必盡信其書。惡蠻貊而未必盡排共術。博

採諸五大洲中。日試月驗一次歸干活人。卽是神州之醫道耳。

と云つた本間玄調のこゝろは卽ち藤浪さんの心であつた。玄調について藤浪さんは云つてゐる。

「玄調は實驗科學者であり、自說の主張者でもあつたが又、愛國者でもあつた。一世の大家たりし彼の學識思想は尙、今日青年學者の眷々服膺すべきものを含蓄することを感ず。一にも二にも泰西の亞流を以て甘んずる拜歐學者には胸に三尺の秋水を擬せらるゝの趣があるであらう。」

これによつて見ても、藤浪さんの學者的態度がわかると思ふ。歐羅巴盲拜時代而も、自ら歐洲に留學までして來た藤浪さんに、この心意氣があつたのは、卽ち醫史學研鑽の賜に外ならないのである。

東京名墓顯彰會

私も一度、名墓顯彰會の機關誌である「掃苔」に何か書けと云ふ手紙を藤浪さんから受取つたことがある。

ところが、當時私は名墓顯彰會のことも知らず、「掃苔」の目的とするところも知らなかつたので、何でもこれは考古學的な雜誌のことであらうと思ひ、墓と云ふものが何うして立てられるやうになつたか、靈魂の信仰の起源は何であるかと云ふやうなことを、考古學的な立場から書いて送つたが、それは遂に沒になつたことを覺えてゐる。

今から思ふとそれは當然なことで、甚だすまないことをしたと思ふ。實際人が死ぬと必ず何等かの墓標が建てられるのであるが、その家の沒落した時のときは勿論のこと、さうでなくても、年代を經ると顧みるものがなくなつたり、先祖代々の墓として合祀されたりして湮滅してしまふことの方が多い、さういふ場合、何等の功績を遺さなかつた人なら致方もないが、立派な仕事をしたり、立派な德を立てたりした人の多くは、墓の堙滅と共に忘られてしまふことの多いのは悲しいことである。

まことの人、藤浪さん及び藤浪夫人が、この事業に心からの共鳴を感ぜられ、そのために多くの忙しい時と貴重なる金とをさゝげられたのは醫家先哲肖像集

を編まれた心と同じである。

名墓顯彰會の機關誌であるからでもあらうが「掃苔」の「藤浪剛一博士追悼錄」號には實に、數多くの藤浪さんの掃苔事蹟が記されて居る。そのうちの一二を拾つて見ても、藤浪さんは、富士川博士や津崎博士の如き名士と共に長谷の一向寺に田代三喜の墓を訪ねてゐる。小幡景憲や佐藤信淵、鈴木春山の墓も訪ねてゐる。曲直瀬玄朔の墓を訪ねてゐる。かうした掃苔行をされたことは恐らく前後三四十回を越ゆるであらう。而もその間に、これ等の先哲についての講演も屢々行つてゐる。

勿論これは藤浪さん一人のためでなく、雜誌「掃苔」や講演會の諸名士の講演によるのであるが、兎に角、かうしたことのため、今まで人の知らなかつた先哲偉人が再び人の意識に上り注意を引いたのは數かぎりなくあるであらう。このことだけでも私は「藤浪さんは偉大な善い仕事をしたと思ふ。

温泉と藤浪博士

藤浪さんと溫泉との關係は深い。

昭和五年創立の日本溫泉協會の理事たり。

昭和十年創立の日本溫泉氣候學會の理事たり。

昭和十六年創立の日本溫泉科學々會の副會長たり。

著書としても

「溫泉知識」

「溫泉療法」

「東西沐浴史話」

等がある。

日本が古くから有名な溫泉國でありながら、科學的研究が行はれたのは蘭醫學が輸入されてからであるが、しかし蘭醫學時代のそれは、概ね幼稚であると云つてよい。

明治時代になつて漸次その發達を見たが、中にも明治十三年に出た桑田知明氏の「日本溫泉考」やベルツ氏の「日本鑛泉論」等が、溫泉知識を高めたのは事實であ

る。その後、溫泉の學的研究は明治の中葉に至つて挫折した觀があるが、明治四十五年に內務省が出した日本鑛泉分析表に至つてはじめて、日本溫泉の成分が明らかにされた。そしてそれは更に進んで大正年間鑛泉に含まるゝエマネチオンの測定が行はれるに至つて、溫泉が一般の注目を惹くに至つた。

物理療法を專門とする藤浪さんが、溫泉の研究に着目したのは寧ろ當然なことであつたかも知れない。私たちはしかし、藤浪さんの溫泉學は、從來の溫泉學に一つの新しい方向を示したことを忘れてはならない。

試みに藤浪さんの著溫泉知識一卷をとつて見ても、その內容の如何に豐富なるかに驚くであらう。中にも此書は、啻に泉質の分析や治療のことにのみ終始せず、世界一の溫泉國である日本が溫泉療法を重視する外人浴客を吸取することも不可能でないと云ふ見地から溫泉場の設備や風紀のことにまで及んで、溫泉の改善をはかつたごときは、溫泉學に一新軌軸を開いたものと云ふべきである。

而もこれはたゞ書物の上の研究には止まらず、何事にも精根をさゝげ盡さず

んば止まない藤浪さんのことゝて、このためには常に溫泉地を巡つて視察し、研究し、その改善のために如何にすべきかを考察するを怠らなかつた。斯くの如き努力を經て成つたのが「溫泉知識」であるが、此書の序文に於て藤浪さんは云つてゐる。

「江戸中期の醫家原芸庵は嘗つて城崎溫泉に浴して

曩癖不廖將十春　溫泉來浴有奇勳
平素自負刀圭術　今日何圖被醫君

と吟じた。ゲーテは浴泉の魅力に憧れて各地を巡遊し、傍ら興を泉水の分析に寄せて、力をその事に盡した。ゲーテが不可解と稱せし泉水は、今日猶ほその不可解なるものを摑むことが出來ない。自然の現象は偉大であり、又精微である。それを社會政策上からするも、溫泉の利用には多大なる考慮を拂ふべきであり、これを醫學上の立場よりするも、十分の效果を全うせしむべきことは、溫泉を持つ國の當然研究せざるべからざる吃緊の問題である。既に西洋の溫泉國に於ては、定まつた國是が行はれて、國民の福祉のために盛んに利用厚生の途が講ぜ

られつゝある。我が國が溫泉を持つ國としては世界一でありながら、その國策に就いては何等見るべきものもなく、普く國民に溫泉の惠澤が與へられてゐない。今日、國民の保健が强く叫ばれて居るとき、溫泉を持つ我が日本は宜しく茲に顧みねばならぬ。卽ち溫泉知識を新らたにし、一切の舊弊を一洗し、溫泉開發の陣容を改めて、西洋の溫泉國と轡を駢べて馳騁すべきである。卽ち確乎たる溫泉國策を樹立し、泉效の汎用を大にすべき機會に臨んでゐるのである。此際、余が抱ける平生の素志を大方の諸君に告げ、泉效のよつて現るゝ所以を說くも、亦た必ずしも贅冗の言たらざるを信ずる……」

これが卽ち、藤浪さんの此書を著した抱負である。もつて藤浪さんは決して書齋のみの學者ではなく、その研究はまた、これを社會國家に役立てようとする實際的な希望のもとになされたことを知るべきであらう。

これは實に、藤浪さんの携はつた凡ゆる方面の研究に及んでゐる態度であつて、さきに述べた醫史學にしても、名墓顯彰のことにしても、凡てはみなこの念願より出發したのである。

慶應大學の病院の仕事として、溫泉治療室を設けたのも此の目的によるものである。

結　語

藤浪さんについて書くことはこれで終らうと思ふ。その事業について、人となりについて、書くべきことはまだ澤山ある。けれど、つらつら惟んみるに、この思ひ出に私のみがあまりながく書くことは、ほかの人にすまないことであるし、第一、私が長く書けば書くほど、藤浪さんの遺德を顯彰するどころかかへつて、その人格をけがす恐れがあるからである。

筆を擱くに當り私の感ずることは、私はこれを書くことによつて、生前の藤浪さんにより、より多くの善き感化を受けたことである。この事だけによつても、私は心からの感謝をさゝぐべきである。

願はくは藤浪さんの靈よ。私のこの不完全なふつゝかな獻げもの、ゝ餘りにもお粗末なのを赦され度い。

故藤浪剛一教授解剖結果

川村鱗也
沓掛諒

畏友藤浪博士は昭和十七年十一月二十九日心臟病の爲め卒然長逝せられた。同君は我が國に於けるX光線學の權威であつて、大正九年より慶應義塾大學醫學部教授として理學的診療科教室を主宰せられ研究に指導に熱誠を以て斡掌せられ、我醫學界に於ける効績は特筆大書すべきものがあつた。更らに日本醫學史に於て造詣深く此の方面に於ける先導者でもあつた。尙溫泉學會に於ても其の會長となり盡瘁する處が多かつた。年齒未だ多しと言ふにはあらねど遠逝せられたるは學界の爲め洵に痛惜に堪へない。

御逝去後間もなく遺骸を解剖し其の死因を闡にすることを御遺族より御依頼があつた。依つて翌日川村に代り沓掛が執刀し、馬淵助手其の他教室員諸氏

の補助により剖檢を終了した。川村は特に故博士令夫人より其の結果を執筆し、追悼錄に登載すべきを依頼せられたるを以て、快諾し、以下兩人の名に於て玆に報告せんと思ふ。

病歷　博士は日頃壯健であつたが、三年前より心臟喘息を患ひ胸部絞窄感、胸痛並に呼吸困難を主訴としておつた。昭和十六年二月及八月に於て發作を得たが、少時にして輕快せられた。次いで十一月及昭和十七年一月に同樣の發作があつた。依て一月十九日より四月七日迄慶大病院內科に入院加療せられた。入院中三月二日と同月十五日頃に輕き發作があつた。退院後夏季は順調であつた。が十月二十日夜小發作があり、十一月九日同十八日に發作が起つた爲め、十八日來自宅にて休養せられた。其の時は輕度の呼吸困難、速脈等があつた。二十九日朝十時頃マツサーヂをやり、談話中突然咳嗽發作がありて何等の苦悶なく他界せられた。

血液所見は昭和十七年一月二十日檢査せるが、血色素七五%、赤血球六四〇萬、血色素係數〇·五、白血球は六二〇〇、中性嗜好白血數七五%、淋巴球二〇·五%、鹽基

性白血球は一%、酸性嗜好白血球は三・〇%、モノチーテンは一・五%であつた。

家族歴　兩親共に高齢に達せられ、尊父は(七四歳)萎縮腎及腸癌にて、母堂(七八歳)は萎縮腎にて死亡せられた。令兄(藤浪鑑博士)(六五歳)は動脈硬化症及續發性萎縮腎にて、令妹(三八歳)は萎縮腎にて他界せられた。

解剖は昭和十七年十一月三十日午後二時より慶應義塾大學醫學部病理學教室に於て行はれた。

病理解剖學的診斷

(一)　心冠狀動脈の高度の動脈硬變殊に前下行枝根部の硬變による著しき窄狹

(二)　左心室筋層の廣汎なる胼胝形成

(三)　大動脈の高度のアテローム性硬化

(四)　兩心室の擴張及心室の肥大

(五)　右總腸骨動脈の著しき硬化及血栓形成に依る閉鎖

(六)　動脈硬化性萎縮腎瘢痕並に嚢腫形成

(七)　腦底動脈の硬化
(八)　鬱血臟器(肝、脾及胃腸粘膜)
(九)　肺氣腫
(十)　胃粘膜及心外膜下點狀出血
(十一)　胸水
(十二)　膽囊內膽石形成
(十三)　纖維性癒着性蟲樣突起炎
(十四)　左肺に於ける石灰化結核初期變化群
(十五)　左肺尖部に於ける肋膜の索狀癒着
(十六)　右肺尖端部瘢痕
(十七)　腸粘膜濾胞の增生
(十八)　攝護腺の肥大
(十九)　左第二趾及右第四趾に於ける乾燥せる潰瘍形成
(二〇)　硬腦膜の小骨腫

解剖學的及組織學的所見

遺骸は體格中等、榮養普通、身長一六八糎を計つた。死剛は全身に著明に發現し、死斑は背部、腰部等に中等度に現はれ、瀰蔓性に暗紫色を呈した。皮膚は乾燥し、全身殊に上下肢に帽子頭大乃至麻實大の淡褐色の斑點散在し、左第二趾及右第四趾の內面に各一箇、大豆大、暗褐色、稍々乾燥せる淺き潰瘍を認めた。皮下脂肪組織の發育は中等度、骨骼筋の發育も普通であつた。角膜は緊張し、僅に混濁した。結膜及口唇粘膜は蒼白表在性淋巴腺の腫脹を認めない。腹壁は稍々澎滿、浮腫は何處にも認められなかつた。

腹腔開檢　胸腹壁の皮下脂肪組織は可なり良く發達して黃褐色を呈し、筋肉の發育も普通であつた。體壁腹膜は滑澤、大網は下方に展張して腹腔臟器を被ひ、脂肪組織は中等度に發育した。腹腔內には極めて少量の透明なる淡黃褐色漿液性液體を容れ、肝及脾は正常の位置にありて周圍の組織と異常の癒着を呈しない。肝緣は正中線では劍狀突起下三指橫徑、右乳線に於ては第九肋骨の高

さであつた。胃は中等度に膨滿し、漿膜は滑澤にして周圍組織と異常の癒着を呈しない。腸管も中等度に膨滿し、漿膜は滑澤、腸管相互の間及周圍の組織とは回盲部を除く外には異常の癒着がなかつた。蟲樣突起は盲腸の下部に於て外下方より內後上方に弓狀に彎曲し、其の尖端は蟲樣突起根部內側の盲腸下端部に達し、其の全體は盲腸壁に纖維性に癒着し、其の前面を回腸の下部が覆ひて癒着し、更に大網の右下端部が之等の腸管を前方より被ひて纖維狀に癒着し、大網は更に右腸腰筋部に於て後腹壁と纖維性に癒着した。腸間膜は一般に滑澤なるも盲腸部及横行結腸の右半部に相當する下部に於ては放線狀灰白色の瘢痕狀肥厚を呈した。脂肪組織は中等度に發育し、淋巴腺は小さく、小豆大にして硬度軟く、割面は暗赤色であつた。骨盤腹膜は滑澤、膀胱は縮小してゐた。横隔膜の高さは乳線に於て右側第五、左側第四肋骨の位置にあつた。

胸腔開檢　胸骨、肋骨には異常なく、肋軟骨は可なり高度に化骨してゐた。右胸腔內には約四七〇㏄の帶赤褐色略透明の液體を容れ、異常の癒着を認めない。左胸腔には黃褐色、殆んど、透明の液約二〇〇㏄を入れ、肺尖部に於て肺と胸壁と

の間に纖維性索狀の癒着ある外異常の癒着を認めない。胸腺は全く脂肪組織の觀を呈した。心嚢は著しく擴大し、肺とは異常の癒着を呈しない。內に約五〇竝の淡黃褐色透明の液を容れ內面は滑澤、稍々充血す。

胸腔臟器の所見　心臟　可なり大きく、手拳の約二倍大にして四八五瓦を計つた。心尖は右心室より形成せられ、心外膜は滑澤、外膜下脂肪組織の發育中等度冠狀動脈は蛇行し且つ壁は著しく肥厚して針金を觸るゝ樣であつた。特に左冠狀動脈前下行枝の根部に於て著しく、內腔は殆んど閉鎖せるが如く認められた。右心房は中等量の流動性血液、血餅及豚脂樣凝血を入れ、稍々著しく擴張し、內膜は滑澤暗赤色に着染し、卵圓孔は間隙狀に開通した。右心室は中等量の流動性血液及豚脂樣凝血を入れ、稍々擴張し且つ壁は中等度に肥厚し、筋層の厚さ約〇·五糎を算し、筋肉は暗赤色にして稍々軟であつた。內膜は滑澤、乳嘴筋、肉柱何れも稍々肥大し、腱索には異常がない。三尖瓣及肺動脈瓣には異常がない。左心房は少量の凝血を入れ、可なり擴張し、內膜は滑澤であつた。左心室は中等量の凝血及流動性血液を入れ、可なり著しく擴張し、壁は比較的薄く、筋層の厚さ

○九糎にして、筋肉は稍々軟く、暗赤色を呈するも諸所、殊に前壁に於て放線約狀瘢痕樣の灰白色斑存在し、該部は硬く、內膜は一般に灰白色を呈し、稍々肥厚する。乳嘴筋及肉柱は稍々肥大し、腱索には異常がない。僧帽瓣及大動脈瓣には異常がない。大動脈起始部の內膜には大小不同の灰白色或は帶黃灰白色の多數の斑狀肥厚があつた。冠狀動脈の內膜は諸所に於て著しく肥厚し、又所々に於て石灰化し又粉瘤樣物質を附着せる潰瘍を形成し、前下行枝左心室壁の灰白色斑及周圍の筋組織を顯微鏡的に檢するに廣汎に亘り筋組織の消失、纖維性組織の增殖を認める。此部は細胞成分に乏しく大部分强靱なる纖維狀組織より成り、胼胝性を呈し、又索狀を爲して周圍組織に擴がり筋組織內肉質と聯繫し、且つ筋肉組織も著明に增殖し、細胞に乏しき纖維狀組織となつて居る。胼胝組織內には比較的多數の擴張せる毛細管及靜脈を認め、血液にて充盈せられてをる。心筋は一般に可なり著明に肥大し、殊に胼胝部內に殘存せるもの或は其周圍に存する筋組織は著しく肥大してをる。心內膜も纖維性組織の增殖を認め、稍々肥厚してをる。左冠狀動脈下行枝の根部の內膜は甚だ高度に肥厚して管腔は著し

く狹く、內膜には纖維性組織の增殖著明なる脂肪顆廢物質の堆積を認め、其內には尙小針狀又は板狀の脂肪溶解脫出像を認め、又中膜の內層には脂肪變性を認めた。

左肺　容積稍々大、氣腫狀にして表面は滑澤、帶赤灰白色を呈し、硬度は軟く、肺尖部の索狀癒着部には限局性に肋膜の纖維性索狀物を附着するも肋膜下肺組織には變化がない。割面は帶赤灰白色を呈し、壓縮するに捻髮音を聽取し、泡沫を含む漿液性の液體を壓出し得た。下葉の肺門部に近接して葉間面に近く肋膜より約〇五糎內方の部に米粒大石樣の結節を認めた。

右肺　容量に富み、表面は滑澤、上及中葉間には纖維性癒着あり、一般に氣腫狀にして帶赤灰白色を呈し、硬度軟かし。割面は帶赤灰白色を呈し、上葉よりは壓縮の際泡沫を含む漿液性液體を排出し、捻髮音を聽取した。下葉は稍々暗赤色を呈してゐた。

氣管及兩側の主氣管支內には少量の泡沫を含む漿液性の液體を入れ、粘膜は滑澤、稍々充血してゐた。

氣管支淋巴腺は兩側共大豆大にして、硬度軟く、割面は黑色を呈し、左側の肺氣管支淋巴腺及分岐部淋巴腺には帽針頭大の石樣硬度の結節存在し、其の他は黑色を呈してゐた。

顯微鏡的には肺組織は一般に氣腫狀にして、鬱血可なり著るしく毛細管は著明に充盈し又間質組織は肥厚してゐた。動脈は內膜が纖維性又は硝子樣肥厚を呈し、血管周圍には纖維性組織の增殖及炭末の沈着を認めた。肺胞內には赤血球の溢血、大單核圓形細胞の滲出を認め、氣管支壁の被覆上皮は大部分剝脫して氣管支內に脫落してゐた。其壁及周圍組織は纖維性組織の增殖肥大を來し、炭末の沈着が著明であつた。左肺に於ける結核原發竈は全く纖維性被膜にて包まれたる石灰化竈で、其の周圍部には廣汎に亘り骨形成を認めた。纖維性被囊は可なり厚く、炭末の沈着も稍々多い。右上葉肺尖部に於ける麻實大の結節は纖維性に肥厚せる肋膜に聯接して殆んど核を認めざる纖維性の瘢痕樣組織より成り、其周邊部には纖維芽細胞及彈力纖維の密網を認め、其內部には少許、周邊部には多量の炭末沈着あり、銳利なる境界なくして周圍の肺組織に移行して

をる。

氣管、氣管枝腺は髓索に纖維性組織の增殖著明、炭末の沈着も亦可なり著るしく細網細胞の增殖を認めた。實は剝離せる內被細胞にて充たさる。左氣管支腺及肺氣管枝腺には纖維性又は硝子囊にて圍まれたる石灰化竈數箇を認め、被囊の大さは種々にして又被囊の厚さも種々差違あり、又同一淋巴腺內に殆んど瘢痕樣組織となりて中心に種々乾酪變性竈を有するものがあつた。

腹部臟器　脾臟　容積は稍大にして一一×6.5×4.5糎、一七〇瓦を算し、被膜は稍々灰白色に肥厚し、皺襞に乏しい。硬度は稍々硬、割面は暗赤色を呈し、脾材は著明、濾胞は認められない。脾髓は擦過し難かつた。之を顯微鏡的に檢するに、被膜は纖維性に稍々肥厚し、微細脂肪顆粒の出現を認め、脾材も亦肥厚しておつた。濾胞は大小不同なるも稍々小さく、淋巴細胞に乏しく、中心部に硝子樣物質の沈着あり、網狀織の細胞の脂肪變性を認め、又中心動脈の壁は著しく肥厚し、內被下に硝子樣物質の沈着及脂肪變性を認めた。內腔は著しく狹小となり、殆んど閉塞せるが如く、脾髓は鬱血著明、且つ纖維性組織の增殖可なり著るしく、脾髓細胞

に乏しい。

十二指腸　約三〇糎の濃厚褐色粘液様物質を容る。粘膜は著しく充血し、輸膽管の開口部に異常なく、通過性は普通であつた。

肝臟　容積は稍々大、右葉は大さ18×16.8×3.8糎、左葉は8×17×7糎、全重量は一三六〇瓦を算した。表面は滑澤、暗赤褐色を呈し、邊緣は稍鈍圓、硬度は稍硬く、割面は赤褐色を呈し、小葉像は明瞭、肉豆蔻像を呈した。膽管壁は稍肥厚し、血管には異常を認めなかつた。顯微鏡的には鬱血が甚だ著明で、小葉內毛細管及中心靜脈は甚だ充盈し、肝細胞索は壓迫萎縮に陷つておつた。

膽囊　漿膜は滑澤內に約一五糎の稀薄黃褐色の膽汁を入れ、尙大豆大の摩擦面を有する多角形の褐色の硬き略同大の結石約八箇を入る。粘膜は微細天鵞狀を呈し、黃褐色に着染、壁の肥厚は認められなかつた。

胃　約一二〇糎の汚穢帶赤灰白色の液體を入れ、內に白色の凝固せる蛋白樣物質を浮游してをる。粘膜は著しく暗赤色を呈し、殊に胃穹窿部に著明、而して無數の點狀粘膜下溢血を認めた。腫瘍、潰瘍、瘢痕等を認めず、幽門輪は一指を通

じ得た。

膵臓　大さ、分葉像は普通淡褐色を呈し、硬度稍々軟く、割面は淡赤褐色にして稍々溷濁す。

小腸　少量の黄褐色の粥状物質を入れ、粘膜は稍々充血し、殊に空腸に於て著明淋巴装置は稍々增生肥大しておる。

大腸　中等量の暗褐色の軟便を入れ、粘膜は稍々充血し、殊に下行結腸に於て著明であつた。

左腎　脂肪膜の脂肪組織は可なり多く、纖維性被膜は剝離し易い。容積は稍々大きく12×6×3.3糎一四〇瓦を算し、表面は微細顆粒狀を呈し、暗赤色にして數個大豆大に至る大さの嚢腫及淺き瘢痕を認めた。硬度は稍々硬、割面は暗赤色を呈し、皮質、髄質の境界は稍々明瞭ならざるも、皮質は可なり狹く、小動脈壁は肥厚し、割面より稍凸隆す。腎盂は擴張を認めず、粘膜は滑澤、稍々充血す。

右腎　脂肪膜の脂肪組織は中等度に發育し、纖維性被膜は剝離し易い。容積は稍々大きく11×6×2.5糎一一五瓦を算し、表面は微細顆粒狀にして暗赤色を呈

し、處々に大豆大に至る淺き瘢痕及囊腫を認め、殊に腎門に近き前面に一錢銅貨大地圖狀の淺き瘢痕あり、稍々硬し。割面は暗赤色にして皮質及髓質の境界は餘り明瞭ならず、皮質は稍々狹く、小動脈壁は稍々肥厚す。皮質、髓質の境界部に一個の蠶豆大の囊腫あり、腎盂は擴張を認めず、粘膜は滑澤、充血を認めない。

顯微鏡的には左右共略同一所見にして、間質組織の著明に增殖して實質組織の萎縮せる部と實質の肥大せる部とが交互に存在し、それと一致して表面に凹凸を示す。萎縮せる部は纖維性組織の增殖著明にして一部は細胞に乏しく纖維性若しくは硝子樣を呈し、一部は圓形細胞の浸潤を伴ふ。此部に於ける絲毬體は萎縮し且つ或るものは纖維性又は硝子樣に變化せるものがあつた。細尿管は著しく狹小、上皮も菲薄にして、之れに反し肥大を示す部は細尿管擴張し、上皮も丈高く內に顆粒狀又は硝子樣の無構造物質を入る。間質は輕度に纖維性又は硝子樣を呈して增殖す。絲毬體は大きく、ボーマン氏囊も擴張し、內に顆粒狀又は硝子樣の無構造物質を入る。動脈は一般に壁著しく肥厚し、內膜は纖維性又は硝子樣に肥厚、內腔の狹小を來す。特に中等大動脈に著明であるが、細小

動脈の壁も內皮被下に硝子樣の肥厚を呈するもの少からず。腎動脈を腎內部にて檢するに內膜は甚だ著明に肥厚し、大部分は脂肪變性を呈し、脂肪性頽廢物より成る針狀結晶の溶解脫出像を認めた。內腔に面したる部には纖維性組織の增殖、脂肪性頽廢物を圍む部は可なり圓形細胞の浸潤を呈する纖維性組織より成る。內腔は甚だ狹小である。

大動脈　內腔は可なり廣く、周徑胸部は六·五糎、腹部は四·一糎を算す。彈力性に乏しく內膜には著しく多數の大小種々の灰白色又は帶黃灰白色の扁豆大乃至一錢銅貨大の斑狀肥厚を呈す。其の內の多數のものに潰瘍の形成を認め、潰瘍面にはアテローム樣物質を附著し、潰瘍底に石灰板を形成せるものがあり、又潰瘍面に血栓の形成を認めた。右側總腸骨動脈は殆んど全長に亘り動脈壁著しく肥厚し、アテローム樣物質と其の表面に生ぜる血栓とに依つて全く閉鎖せられてゐる。顯微鏡的には大動脈の內膜は甚だ高度に肥厚し、或る部は纖維性組織の增殖著明又彈力纖維の增殖せるもの多く、或る部は脂肪變性著明、其著しき部分は脂肪頽廢物より成り、普通染色にてはコレステリン結晶の溶解脫出せ

る空隙を認めた。中膜の内層にも脂肪變性を認め、外膜及中膜の榮養血管は稍擴張し、充盈す。右總腸管動脈の内膜は甚だ著明に肥厚し内腔は甚しく狹小となり、一部には著明なる纖維性組織の增殖を認むるも大部分は脂肪變性著明にして普通染色にては淡明に染まり且つ針狀結晶の溶解せる部に於ても深層には脂肪變性が著明であつた。脂肪變性の強き部には中膜との境界部に圓形細胞の浸潤及び血管の新生、彈力纖維の增殖を伴ふ纖維性組織の增殖せる所あり、中膜の内層にも脂肪變性を認めた。内腔は殆んど全く血栓にて充滿せられ、脂肪頴廢物より成る所謂アテローム樣潰瘍の表層に於ては其内に赤血球の混入を認むるところがあつた。

骨盤臟器　直腸　少量の暗褐色の軟便を入れ、粘膜は中等度に充血す。顯微鏡的には粘膜下組織に鬱血甚だ著明である。

膀胱　殆んど内容を認めない。粘膜は稍々充血し、肉柱像稍々著明である。

攝護腺　稍々肥大し、殊に中葉に於て著明である。硬度は稍々硬い。顯微鏡的には筋結締織性間質の增殖は可なり著明、腺は稍々增殖し、管腔は囊胞狀に擴

張し、上皮の良く保たれたるものがあるも亦上皮の剝離著明なるものもあり、澱粉樣體は幼若形のものが少數認められた。

睾丸　容積は普通にして萎縮を認めない。硬度は中等度、割面には肉眼的に特別の變化なく、細精管は牽引し得られる。顯微鏡的には間質組織も可なり增殖して纖維性を呈し、間細胞は可なり增殖し、脂肪滴の含有甚だ多く、色素は比較的少ない。細精管の固有膜は著しく纖維性に肥厚し、尙硝子樣を呈するものあり、爲めに管腔は狹小となり、所々に殆んど內腔を認めざるが如きものの集團がある。多くは一列又は二列の圓柱狀細胞にて被はれ、該細胞は脂肪變性が著明である。精子形成は認められず、小動脈壁も可なり著明に肥厚し、內膜には硝子樣物質の沈著を認めた。

副睾丸　肉眼的に變化なく、頭部に小なるヒダチーデを有す。副睾丸頭部は可なり間質著明、動脈內膜も稍々肥厚す。睾丸輸出管上皮は圓柱狀氈毛上皮、骰子形細胞を呈し、著明に脂肪滴の出現を認め、殊に其內腔に面する部に多し。固有膜も纖維性に肥厚す。體部にも間質の增殖を認め副睾丸管は可なり擴張し、

多列性の骰子形甁毛上皮にて被はれ、同じく上皮は脂肪變性が著明である。固有膜も可なり纖維性に肥厚し、內腔には大小滴狀の無構造物質を入る。

精系　上皮は剝離するも異常がない。

精囊　腺小胞はよく發育し、周圍の筋層內に進入す。內腔は顆粒性硝子樣物質を以て滿たされ上皮は斑狀をなし、脂肪顆粒を以て充滿せられ、其の脂肪の性質は重屈折性でない。

頭蓋腔開檢　頭蓋の形狀には異狀がない。頭蓋頂部は菲薄ならず、板障は稍々少ない。頭蓋頂部の內面は滑澤、硬腦膜の表面も滑澤にして骨と異常の癒著を呈してゐない。右側頭葉に一致したる部に扁豆大の灰白色の軟き結節一個あり、半球狀に隆起す。硬腦膜の內面は滑澤にして軟腦膜と異常の癒著をなさない。大腦半球は左右相似性にして軟腦膜の表面は滑澤、靜脈は稍々鬱血を呈す。腦廻轉及腦溝には異常がない。橋、延髓及小腦等にも異常がない。水平斷を行ひ檢せるに、腦實質に軟化出血等の異常を認めない。腦底動脈壁は諸處に於て可なり肥厚硬變し、灰白色乃至黃灰色を呈し、內腔の狹窄を來した。顯微鏡

的に檢するに腦底動脈の內膜は著明に肥厚し、脂肪變性甚だ著明、脂肪顆廢物質より成る處諸所に散在し、針狀結晶の脫出像を認めた。又纖維性肥厚の著明なる部もある。

軟腦膜に於ては大、中動脈は輕度に肥厚を營みたるも腦內に進入せる小枝には肥厚を認めない。大腦に於ては動脈枝は輕度の肥厚を示す。

腦下垂體　大さ、形狀等普通である。顯微鏡的には前葉にては親酸性細胞は豐富にして親鹽基性細胞之れに次ぎ、無染色細胞は少ない。間質は中心部に於て結締織の肥厚部あり、之れに向ふて被膜より結締織纖維が束狀をなして進行しておる。後葉は通常、後前葉の境界部には前葉より親鹽基性細胞が侵入しておる。中葉には囊胞形成あり、細胞性物質を以て充盈しておる。輪狀脂肪が實質細胞の凡てに存在する。

骨髓　肋骨骨髓を取り出し檢せるに造血液組織に於ては異常が認められない。

皮膚　右大腿前面の皮膚を顯微鏡的に檢するに角質層は稍々厚く層狀をな

し、その表皮層は比較的薄く深層殊に基底細胞層には可なり褐色色素の多きところがあり、又之れと平行し眞皮上部に於て褐色色素の增加がある。上皮の結締織の肥厚せる處は肉眼的に於て見たる褐色斑に相當する。表皮細胞には空細胞形成多く、核が爲めに侵蝕せられたる處がある。眞皮層は乳嘴の發育弱く、强靱なる纖維性組織より成り、稍々菲薄である。乳嘴層に於ては血管に乏しく且つ細胞も少ない。汗腺及皮脂腺は萎縮性である。毛嚢も萎縮性である。

左第二趾に於ける淺き潰瘍を檢するに角質層は殆んど脫落せるも透明層以下の表皮層は全般を被ひ菲薄である。而して此菲薄となれる表皮層に連續して眞皮層より皮下組織に亘る限局性の腫瘍の發育を見る。本腫瘍は深部及側方は全く纖維性組織にて包圍せられ、浸潤性增殖を認められず、擴大性に增殖せる像を呈す。該腫瘍組織は僅少なる間質組織に依り多數の胞巢に分割せられ、該胞巢は充實性にして實質細胞に依り充滿され、周邊部とは骰子形圓柱形乃至紡錘形の細胞を配列し、中心部に至るに從ひ表皮層に一致したる多形の細胞となり、中心部のものは著しく透明となる。核は多くは圓形又楕圓形にしてクロ

マチン多からず、核分裂像は少數散見せらるゝのみ。腫瘍の表層に於ては表面を被へる表皮層と索狀又乳嘴狀に連絡し、此乳嘴狀突起の間には可なり多くの纖維性組織よりなる間質あり、圓形細胞の浸潤、充血、出血等を認めた。腫瘍內部の間質は比較的少なく、纖維狀なるも所々に圓形又は多形をなしたる硝子樣構造物を認めた。

右第四趾の淺き潰瘍を見るに角質層著しく菲薄となるに反し、顆粒層以下の層は肥厚し、深層殊に基底細胞層には褐色色素の沈着が甚だ著明である。眞皮層も菲薄となり、强靱なる纖維性組織より成る。此の部にも色素細胞多く汗腺は萎縮しておる。

總括及考按

前述の解剖學的及顯微鏡的所見を通覽するに、存在せる諸種病變中最も顯著であるのは動脈硬化及之れに隨伴せる諸臟器の變化である。而して之れが博士の死因と密接の關係あることを思はしむ。されど博士は多年X光線學者と

して活躍せられたるを以て其の放射線に曝露せられ、傷害を享けたることの可能性は十分存在する。依て以下之等の諸點を顧慮して死因及其の事項に就き論述して見ようと思ふ。

先づ動脈硬化に就ては大動脈には高度の硬變所見があり又其の直接分岐たる右總腸骨動脈には著しき硬變と共に之れに基因せる血栓形成があつて其の內腔は全く閉塞せられて居る。尙中等大の動脈殊に心冠狀動脈特に其の前下行枝及腎動脈等には著しき硬變があつて、其の內膜は著しく肥厚し內腔は甚しく狹窄せられ、これが爲めに之等主要臟器の血液循行の障碍を來し、しかも之等の障碍は動脈硬化が長年月に亘り徐々に發生增强せるに因ること疑ひなく之れにより心臟にては心筋の榮養障害、引いては其の修理機轉として肉芽組織及胼胝形成を來した。又腎臟にては腎細胞の退行變性と結締織の增加とを招き、遂に腎臟硬化又は萎縮腎を惹起するに至つてゐる。更に動脈硬化の進展と共に血壓亢進を引き起す爲めに心臟は增大する。然れども斯て冠狀動脈殊に茲には左冠狀動脈前上行枝根部の硬化の發展と共に心筋に對する血行需給の不

圓滑を來し、心筋の榮養障碍を惹起し、更に進んで變性部の機質化に依る結締織の增殖、胼胝形成となり、左心室內容の亢進に基因して其の擴張を來すに至つておるのは解剖學的及組織學的所見に徵するも明かである。動脈硬化に基く心筋變性、胼胝形成は心臟殊に左室の機能不全を招來し臨牀的には或ひは心臟性喘息の症狀を發し、或ひは狹心症發作を起すに至り、遂に聊かの心臟機能亢進の要求に際し、冠狀動脈內腔の殆んど閉塞に近き狹窄は其の需要に應ずること能はず、果然心臟機能突然の歇止となりて逝去せらるゝに至りしものと推定せらる。

由來、心臟性喘息或は狹心症にありては深酷なる呼吸困難の發作を惹起し、發病後數分時間にして死亡することのあるは屢々見らるゝ處であつて、其の死因は突然に起りし心左室の機能衰弱にあるか又は其急激なる左心室の衰弱は心冠狀動脈の突然の閉鎖か或ひは冠狀動脈の硬變性變化に依つて招來せるものと看做さる。本例は恰も動脈硬化が廣汎なる範圍に於て冠狀動脈の末梢部に至る迄存在し、從つて血液循行に大なる障害ありしは明かにして心筋の榮養需

給に缺陷あり、之れに依り特に左心室の高度なる障碍を起し、之れが臨牀的には狹心症の發作或は心臟喘息の症狀を惹起したことは推測に難くない。

次に右側腸骨動脈內に於ける血栓形成は矢張り動脈硬化の上に起りたるは前述の通りであるが、其の組織的變化より見れば可なり陳舊性のものと考へられる。然るに此の太き動脈が血栓性閉塞を呈するに拘らず、既往症より注意すべき症狀を見出し得なかつた。それは何の爲めであるか、若し此の閉鎖が急激に起つたものとすればそれより先端部には激しき症狀例へば急性貧血症等を現はさなければならぬ事から鑑みれば本血栓形成は徐々にしてしかも長時間に形成せられて、其の間に於て側性血流循環が可なり盛に出來上つたものでなければならぬ。余等は此の側性循環枝の狀態を剖檢時に於て追究せざりしは遺憾とする處であるが理學的診療科を繼紹せられた春名氏に訊せしに其の病變を有する右側下肢に於ては二十年前頃より多少の跛行と神經痛を訴へ、時々マツサヂーを爲さしめたとの事である。それ故に恐らくはこの症狀は前述の血行障害と因果的關係を有するものと考へらる。

其の他の病變としては第一に左肺に於ける初期變化群と言はるゝ肺結核の初期感染像である。この病變は二つで、一は肺にあり、他は部位的淋巴腺にあり、何れも小結節を爲して居る。肺の病竈は左肺の下葉の肺門部に近くあり、淋巴腺にては左氣管支、肺氣管枝及分岐部淋巴腺内にありて、何れも完全に治癒し、已に石灰化乃至骨化してをる。卽ち全く治療結核で、恐らくは數十年以前の青年時代に於て感染せるものであらう。

次に蟲樣突起は彎曲して盲腸壁の結締織と癒着して居つた。これは曾て蟲樣突起炎がありたる證左である。

膽囊内には膽石があり、其の數も八つを數へてをるが、膽囊炎に就ては何等の症狀もなく、且つ病理解剖上にも膽囊粘膜に於て何等の炎性變化なきを以て恐らくは無症狀膽石症と推測せらる。

更に藤浪教授は永年レントゲン學科を擔當せられたる關係上其の放線線の障碍作用に對し充分なる防衞策を取られたることは推測に餘りあるが、長時日の間故、不識の間、しかも徐々にX光線の侵害影響を蒙りしやは測り難い。それ

故にX線に依る慢性障害に就き精査しなければならぬ。

凡そX線の慢性障害に就ては表在性と深達性作用を考へなければならぬ。表在作用に關しては皮膚に於ける變化と深部作用に就ては造血臟器及生殖腺の變化が注意せられてをる。

皮膚の變化としては本例に於ては角質層の肥厚、顆粒層の減少表皮細胞の空胞形成褐色色素の增加、眞皮層の纖維性硬化汗腺の萎縮を認めた。尙右第四趾には之れに準ずる變化と共に角質層の脫落、表皮層及眞皮に於ける色素沈着等を認め、左第二趾に於ては表皮層の菲薄及之れに連絡し皮下組織に亘る上皮腺の發生が認められた。

血液の變化としては、X線放射時に於ては白血球減少症殊に淋巴球減少症を來すと言はれてをる。而して末梢血液の此の變化は造血臟器の變化に基くものである。之れを本例に見るに血液中の白血球は數及種類に於ては平生と大差がない。又骨髓の造血臟器に於ても特殊の變化が認められない。然るに脾淋巴腺に於ては淋巴濾胞の萎縮淋巴細胞の減少、網狀織內被細胞の增殖乃至纖

維化等が認められた。

睾丸に於ては間質組織の增殖、細精管固有膜の纖維性又は硝子樣肥厚乃至それに因る閉塞、精細胞の消失精子形成廢絶、セルトーリ氏細胞の殘存、同細胞の可なり著明なる增殖が認められた。

以上述べたる皮膚、淋巴腺組織及び生殖腺の變化は一部は勿論年齡的變化に基き老年者に於て認め得べきも、されど斯る高度の變化はそれを放射線の享受に依り徐々に行はれたるX光線の慢性變性が主なるものならんと推定することを得る。本例に於て造血臟器の變化を缺くは藤浪教授により行はれたる放射線防禦法の宜しきを得たるか、及受理せるX線の分量少なく深部に達し骨髓を侵襲せざるに依るかも知れず。而してかくの如き長年月X線を取扱ひたるレントゲン學者としては稀有に屬するものであらう。次に右第四趾及左第二趾の潰瘍及後者に於ける上皮腫は放射線に依れる潰瘍形成を基礎として發生せるものなる事も想像し得る。

最後に本例に於ける顯著なる動脈硬化の原因に就て述べる。本病變の本態

は未だ明かでないが高年度に於ては多少に拘らず出現するもので從て生理的と見做すべきものであるが、本例に於ける變化の如くに其の程度の激甚なるは之れを單に生理的と爲し難く、他に之れを增惡する因子の作用を考へなければならぬ。卽ち第一に博士がレントゲン學者として放射線を長年月處置せられたる爲めの該線中毒作用、第二には遺傳的素質を考へなければならぬ。第一の光線の血管壁に及ぼす侵襲作用は皮膚の毛細血管に於て內被細胞の侵害に就て述べられてをるが其の他は未だ不明である。又本例に於て動脈硬化部のアテローム樣變性に於て類脂肪の豐富であるのは副腎の肥大し、多量の類脂肪を含有することと血壓亢進の外、X線との合働作用ありやは未だ想像だに及ばない處である。

次に第二の遺傳的因子に就て考ふるに、藤浪家にては家族內に動脈硬化及萎縮腎を頻發してゐる。(この際、藤浪鑑先生剖檢記錄及令妹の剖檢記錄を森茂樹の好意により入手し得たることを感謝す。)家族中御兩親を始め長兄及令妹は動脈硬化及萎縮腎にて死亡せられて居る。長兄及令妹は解剖せられてをるを

以て其の臨牀所見は確認せられたのである。併も令妹は三十八歳の壯年期に於て死亡せられてをるのは注意すべきことである。又剛一博士も高度の動脈硬變を持つて居つた。

凡そ動脈硬化症は全身動脈管の疾病であるが其の侵さるゝ頻度及程度に於ては各臟器に依り相違してをる。卽ち長兄は大動脈の外腎臟動脈を侵し、繼發性萎縮腎を起してをる。其の他腦髓及內分泌腺(副腎、甲狀腺、腦下垂體)の動脈を侵し、腦髓に於ては右側レンズ部に於ける動脈硬化によりて起りたる軟化竈があつた。又同小動脈の變化も甚だしく、石灰沈着が著明であつた。然るに心筋內小動脈に於ては動脈硬化性變化がありたるも爲めに生じたる瘢痕部は小部位に留まつてをつた。次に令妹の解剖は唯肉眼的所見に了つてをるが、萎縮腎、左心肥大、動脈硬化が主なるもので、心冠狀動脈では內膜に數ケ處粟粒大、米粒大の稍々隆起せる灰白黃色の斑點が認められて居る。今腎臟及心臟につき三例を比較して見れば左の通りである。

腎臟については博士の場合は硬化性變化が著明であると肉眼的には著變が

ない。又其の重さは左一七〇瓦、右一一五瓦である。長兄博士に於ては萎縮腎著明で、表面は顆粒狀、顯微鏡下にては弓狀動脈、葉間、小葉間動脈は肥厚し、皮髓兩質とも複雜なる荒廢狀態であつた。而して其の重量は左八二瓦右六一瓦を示し、前兩者と比較すれば大差がある。次に令妹の腎臟は表面顆粒狀、割面にては、皮質は少しく薄き感があり、又多數の赤色斑が認められた。其の重量は左一〇五瓦、右一一五瓦であつた。

心臟に於ては長兄博士にては其の重量四九七瓦、令妹にては四七〇瓦なるに、剛一博士に於ては四八五瓦を算し、何れも著明なる肥大を示して居る。而して心冠狀動脈の變化に就ては前述の如く本例に於て顯著であり、從て心筋の變化は他の二例とは到底比較し難き程甚だしく、遂に之れが死因を爲して居る。

結論

藤浪教授の遺骸剖檢に於ては高度の動脈硬變があり、大動脈の外、中小動脈も侵されておつた。殊に心臟冠狀動脈に於て著明であつた。これが爲めに心筋

榮養不給を來し、瘢痕形成を爲し、心臟の活動範圍が極度に制限せられたる爲め、特殊の誘因なくして心臟麻痺に陷りたるものである。更にレントゲン線の中毒作用として皮膚、生殖腺脾及淋巴腺系統に於て實質の變性と間質の增加を招來して居つた。之れ博士が永年從事せられたるX光線の侵害的作用の結果である。されど骨髓內造血臟器竝に血液に何等變化を呈せざりし事は注目に値すべきことである。

稿を了るに臨み、學界の爲め多大の貢獻を爲されたる藤浪教授の英靈に對し、深甚の敬意を表し、死因を闡明するが爲めに遺骸の解剖を許されたる御遺族の高志に對し感謝の意を表します。

辭曰君子終日乾乾夕惕若請顏以乾乾可乎今
夫天浩然蕩然渾渾然相摩乎晝夜相推乎寒暑
無頃刻之或停也君子法之以進德修業

——乾乾齋記より——

れんこげん學者として

順天堂時代

鈴木元晴

拾一月卅日朝出勤しやうとしてゐる所へ電話のベルが鳴つた。私の様に病室或は急病人に無關係な者に早朝の電話は大抵交換手の間違ひである。たまゝ間違ひでない場合は、病院關係以外のものである。所が教室の加藤君からである。東京の藤浪先生が御逝くなりになられたといふ電報が參つて居りますといふ。すぐ行く、と返事をして半信半疑で靴を履いてゐると、又教室の大原君からも同様の電話である。御危篤ではない。御逝去の御知らせである。兎も角もそれをこの眼で視なくては、讀まなくては、と心急かれて家を飛び出した。

拾有餘年通ひ慣れた路が、今日は又非常に遠く感じられる。來る電車はどれも超滿員。待つ人は一列勵行でおつと長い。漸く四臺目に乘る。

この四月學會で上京した折、慶應の御病室へ妻と共に御見舞申し上げた時に

は御病中とはいへあの御元氣であられた。秋の始めに御見舞狀を差し上げたけれども御惡い御樣子も承はらなかつた。突然の御逝去にちがひない。一體何んで御逝くなりなされたのであらう。もう年の暮れも遠くはない。一、二日經てば十二月である。近日御見舞旁々年末の御伺ひをと心懸けて居た折柄一入御無沙汰が悔まれてならぬ。それからそれへと思ひを東京へ走らせる。

いつの間にか鐘路通りを過ぎ、病院行きに乘り換へていつもの所で降りる。

病院の坂道で冬の朝日を身體一杯に受ける氣持は格別である。けれども今朝はそんな餘裕もなく同じことのみを繰り返し思ひ浮べながら、自分の部屋に入る。

電報は間違ひではなかつた。愚圖〳〵してはゐられない。出發である。

御通夜に參列出來なければお式に。

早速院長に事情を述べて休暇の届けをする。院長は關釜連絡船は二三日以來荒天のため缺航してゐると知らして下さつた。そのため釜山を始め途中に足留めをされてゐる乘船客は相當數の樣子である。驛や旅行案內所に問ひ合

すと本日の午後の急行迄の切符は賣らぬといふ。それでは夜の列車はと聞けば夜分になつて見なくては何ともいへぬといふ。

兎も角釜山迄行つて、待つて居て、乘れる船の最初を待つことに決める。人の話では一、二日待たされるかも知れぬといふ。

學生のボリクリの休止、身分證明書の請求、留守中の對外事項の處置指示、四、五本の發信、關係方面への出發の挨拶等でもう午後の二時となる。

午後の急行が出て其れに乘れるなら二日の朝には東京に着き、お式に間に合ふが、けれどもこれは絶體見込みがない。東京のお宅へ「フネノタメスグタテヌフネツゴウツキシダイタツ」旨の御通知をする。

家へ歸つたのが五時過ぎ。出發の時刻が確定しないので落ちつかぬ心地である。

出した使が今夜の十一時は確かに出ます、切符も賣つて呉れましたといつて八時頃歸つたのでやつと安心する。積み殘しや乘り遲れせぬ樣少し早目に家を出る。列車は案の定超滿員である。幸ひ座席だけはとれた。

兎角延着し勝ちな朝鮮の冬の汽車も今朝は豫定通り午前七時參拾分、釜山本驛着。ホームから直ちに棧橋へ向ふ。拾時出帆が拾一時出帆となる。

×

お式は何時であらう。昨日の電報にはお式の日取や時間の御通知がなかつた。どうかして參列出來ればよいがと思ふ。

東京へ出る度に先生と奥樣には必ず御目にかゝつた。それが思ひがけなくこんなに早く御永別のお式に參列しなければならなくなつた。誠に悲しみの極みである。隨分永い間御世話樣になりながら深い御恩に酬ゆる機會もなく御別れ申し上げてしまつた。申譯もない心で一杯である。私は學校を出ると直ぐさま先生の門に入つた。そして今日迄其儘その「レントゲン」で突き進んで來た。思へば永いレントゲン生活である。それだけ師弟關係の淺からぬものがある。

私は先生の門下としては第二人目であるが、現存者としては第一人目であつて、門下の最古參である。顧みて不敏、誠に忸怩たるものがある。

抑々私が先生の門下となつたのは、先生が順天堂醫院のレントゲン科長であられた大正四年の春である。數へて廿八年の昔となる。

當時の順天堂醫院は今日の夫れとは色々の意味に於て異なり、東京に於ける民間病院の雄であつた。東大附屬病院か順天堂醫院かと謳はれた時代である。

當時は外國でレントゲン學を修めて御歸りになられた先生が、日本に於ける純粹の專門家として名乘りを擧げられて間のない頃であつた。私の先輩として最初の門下に山田亮さんが居た。この方が家庭の事情で辭職して鄕里に歸へられるに就て、私が其後任として病理の林直助先生の御推薦によつて入門したのが、私と先生との繋りの抑々の始めであつた。

山田亮先輩に案內されて先生に始めて御目にかゝつたのは、順天堂醫院の、當時御茶の水高女に面した道路沿ひの、精々六疊敷位の誠に狹い先生のお部屋であつた。四月十五、六日頃と覺えてゐる。下宿の決まらぬ儘、早速先生の御世話で猿樂町水道橋際の安田旅館へおちつく事となつた。土堤に面した奥の部屋である。先生が小石川にお移りになられる迄下宿なさつて居られた御部屋で

あつた。

山田先輩は尚暫く勉強されて居られたが、間もなく辭職歸鄉されて靜養旁々田舍で開業をされたが、三年位で胸の病氣のために早逝された。そんなわけで私は入局間もなく只一人で助手を勤めることになつた。

先生の御出勤はお早く、しかも正確であつた。幸ひ私は其の點では一度もお叱りを蒙つたことはなかつた。今思ひ出してもそれだけは自慢の種となつてゐる。それといふのも當時地方の病院から、或は學校から選ばれて新進のレントゲン學を修得にみえた連中には出勤の精確でない人が多かつた。田舍で呑氣に勤めて居た關係が多分にある。從つて大抵一度や二度は御叱りを蒙つて閉口してゐるのを見たからでもある。私の後輩で小川といふのは私より三月程遲れて入局したものであるが出勤が遲くて退くのが早いため一ケ月目位の或日、先生は同人の帽子と外套を持つて來られ同人と一緒にドーアの外に押し出され、君はもう出なくてもよろしいとお斷りになつた。其他にも類似の人が二三あつた。以て先生の嚴格さが分る。これは先生が單なる潔癖からの嚴格

さではなかつた。先生の御心持ちは學者として斯學の將來に遠大な希望を抱いて居られたからである。

入局して丁度一週目の日である。先生は私に拾數頁の論文原稿を御渡しになり、君、これは別に急がないが、キレイに清書して呉れとのことであつた。私は上京匆々であり、特に忙しい程の仕事もなかつたので、下宿へ歸ると早速一晩で仕上げてしまつた。翌日出勤して先生に御目にかゝつた最初の御言葉は、君、昨日の原稿は出來たかねとの御尋ねである。そんなことゝは夢にも思はなかつた。出來て居りますと申上げる。それでは貰ひませうと、御覽になつてニコニコされた。私としては急がぬとの御話しであつたのにこれは又何とした事かと少し呆氣に取られた形で、夫れでもまあ良かつたと思つた。入局匆々のこの事は非常に大きな教訓となつて、昨日の如き新しい記憶として殘つておる。先生に命ぜられた論文原稿の如き大切なものは、たとへ急がぬ、何時でもよろしいと申されても、明日と云はず直ちに手を付け、いつでも先生の御期待に副ひ得るといふ心構へがなければならぬといふ事をこれによつて會得した譯である。

さき程の勤務の嚴格さといひ、斯様な些事といひ、先生の御期待された所は新進の學問レントゲンを志すものの心構への鍛練に如何に重きを置かれたかの片鱗を窺ふに足るものである。當時、先生のこの御方針は總べての面に亘つて實施されたため地方から出て來た連中には相當大きな負擔の樣であつた。從つて御高名と共にこの嚴格さも勢ひ國內に轟いた感があつた。

先生が或る日、受付け前の廊下で本を立讀みしてゐる地方から見學に來てゐた二三人を御覽になつて、夫れは止める樣にとの御話があつた。あとで先生が私に申されるのに、本は家でも下宿でも讀める。又一時迄でも何時迄でも讀める。此處へ出てゐる時はどんなつまらぬ樣に思へることでも先づ見ておかなければならぬ。先覺者のなす所を見ず、現場で本を讀むことは勉强ではない。東京には所謂馬鹿踊りといふものがある。あれでさへ一流と云はれる人々は、自分は勿論弟子の稽古に一時二時迄も修業する。況して學問で身を立てんとするものがそんなおろかな心がけではいけない、といふ御說明である。

こういふ大切な心構へといふものは、人の上に立ち、人を指導するものには大切

なことである。けれどもそれ等の人々には解し兼ねた點であつた。先覺者として學界を指導される人にして始めてこの言葉のある所以がある。爾來今日迄忘れることの出來ない教訓としてゐる。私としては碌々其御期待に副はぬこと多きは申譯もない次第である。

そんな譯で當時先生の御教育方針といふものはそれは〳〵嚴格であつた。それだけ學問の六ケ敷さはいふ迄もなく、所謂科學する心構への鍛練が一層大切であつた。從つてこれが又相當な精神的負擔でもあつた。私はいふ迄もなく他の見學者連中もこの精神的負擔が又失敗の原因となつて、毎日の仕事の上に現はれることも一再ではなかつた。近年の様に大勢の教室員が居る時とは異なり、たつた一人の助手として受付けもやる、既往症も書き入れる、料金傳票も渡す、撮影もやる、現像も一人の技術員と共にやる、といふ期間も相當長かつた。所謂、レントゲン科の草蒙時代である。お小言を頂戴するのが當り前で、ないのが不思議な位であつた。でもお小言の多かつた日、強かつた日の翌日は有樂座の入場券となり、風月のお伴となつて、嬉しかつた。若き日の遠い思出は、その時

先生のお伴をして、順天堂からお茶の水橋を渡つた有様が今更の如く懐しく眼に浮ぶ。

金澤の小池君が第一回目に來られたのは、先生の順天堂時代である。地方でのんびり育つた小池君には、入門當時は相當骨が折れた樣であつた。私はもうその時分は相當先輩顏をしてゐた。それから小池君は再び上京されて、先生の歐洲御旅行中、お留守居を承はつて居た。其の小池君は昭和五年に外國留學から歸り、母校金澤醫大で教職にあつたが、たしか昭和八年、惜しくもチブスで亡くなられた。又矢張り金澤出身で、順天堂で先生に御世話になつて大連病院へ赴任した宮田太喜男君も、先年レントゲン癌で逝くなつた。現在神田今川町にレントゲンで開業してゐる瀨木君は私の後に助手を勤めた、是れ又順天堂時代の門下である。

當時順天堂醫院には研究室はあつたがレントゲン科としては研究機關といふ程の部屋もなかつたし、又經費も何もなかつた。けれども先生は其の間にあつて研究の歩を進められた。助川、福光、山田等極めて小人數を以て又會員も雜

誌を經營するに足る會費を賄ひ得ない時期に、敢然として「醫理學療法雜誌」といふ研究機關雜誌を主宰された。吾が國に於けるこの方面の最初の專門的雜誌であつた。官設の研究所に於ける同樣の仕事とは比較にならない勞苦の多いものであつたことはいふ迄もない。其後日本にレントゲン學會といふものが出來て、この機關雜誌が日本レントゲン學會雜誌に引繼がれた大正拾參年迄、レントゲン學の研究雜誌の先達として斯界に貢獻した所は蓋し極めて大なるものがある。其後直ちに先生は「實踐醫理學」或は「慶應醫理學叢書」等を主宰されて、先生の意圖を遺憾なく發揮された。其間先生が御發表になつた論文は數へきれぬ位である。當時の文獻集を見れば先生の御努力が如何に大なるものであつたかゞ分る。

慶應の理學的診療學教室の綱領となつてゐる「我が學徒は斯界の第一線に立つ者なれば琢磨勉勵して相援け以而斯界に貢獻を齎らし且つ補導の責に在ることを忘るべからず」といふ理念は、既に順天堂時代から脈々として先生の胸中に波打つてゐたのである。

山田、福光、宮田、小池の諸兄は何れもとくに亡くなつた。玆に又先生の御逝去である。淋しい限りである。然し先生の門下は今や内地は勿論遠く滿鮮支各地に居る。御意圖は繼ぎ擴められてゐる。その御功績は玆にいふ迄もない。

謂はゞ先生のおられた順天堂はレントゲン科發祥の地であり、搖籃であつた。

×

私が新橋に着いたのは午後十一時半であつた。遲くともせめてお玄關までも伺ひたい。御宅の横に出ると三人程話しながらお庭の塀に沿ふて歸つて行く人がある。御手傳ひに伺つて居た教室の人々らしい。兎も角、先づお玄關迄へもと思ひベルを押す。電氣がつく、下駄の音がする、ドーアが開く、お取次ぎを願つて、お二階へ案内される。奥様に御目にかゝれば何と申上げる言葉もない。胸が一杯である。東京へ出る度に御目にかゝつたのはこのお部屋である。今日は奥様にお悔みを申上げなければならぬ。そして御悔みの滿足な言葉も申上げられない。私が京城を發つ時妻が東京迄の切符を手にポロリと涙を出し眼を拭ふた。奥様の御氣持が何と申し上げ様もなく悲しくてといつた言葉

が思ひ出され、今こゝに奥様に御眼にかゝり、胸の中は泣き切れぬ涙で一杯となる。

思ひ直した心地で御座敷に御遺影を拝す。在りし日の溫顔其儘である。次第に霞んで御遺影がボンヤリする。遠く果し得たこの嬉しさと悲しさ。三十年の恩愛に繋り得た者に感得される境地である。合掌。

藤浪剛一先輩の思出

樋口助弘

放射線物療界の最長老藤浪先輩が忽然として物故された。丁度亡くなられる二週間程前に厚生省の醫療機器調査委員會で一所になり、次で日本醫學放射線學會の幹事會開催に就き出缺をとつたら、結婚式が先約だから失禮するが、何分萬事宜敷くと謂ふ樣な返事で元氣な所をみせておられた。其後氣分が勝れず慶大の方も一週間位缺勤されてゐると謂ふ話を原、櫻井兩君から承はつたのだ。十一月二十九日丁度日曜日でしかも快晴なので午後から出かけようと思つておつた矢先に、十三時頃櫻井君から電話、藤浪さんが亡くなられたと誠に晴天の霹靂、心臟がどきつとした。直に御邸を訪ふて最後の御別れをしたのであるが未だ生ける其のまゝの御顏であつた。然し事實、物療レントゲン界の最長老であり、實行力に於ては他の追從を許さない大先輩を瞬時に失つたのだ。斯

界の一大痛事であり損失である。我日本醫學放射線學會では先に第一回會長眞鍋さんが他界され今又第二回會長藤浪さんを亡くした。誠に寂寞を感ずる次第である。茲に藤浪先輩の殘された偉大なる足跡の一端を追憶して記述しよう。藤浪さんは學校を出られて土肥さんの門に入り、次で當時の獨壇に留學し殊にウイーンで Prof. Holzknecht の下でレントゲン學を專攻された。歸朝後は順天堂で本邦最初の物療科を開いて診療に從事したのを手始めに生涯物療レントゲン學一本鎗で進まれた生粹の斯學の先輩である。氏が其の頃の思出話は特に興味があり、現在の Kein Medizin ohne Röntgen 時代の人には到底想像もつかぬ茨の道を歩かれた事を回想して、其の御苦勞を多とする次第である。其後手腕力量が認められ、慶大醫學部の創設さるゝや同學教授となつて敏腕を振はれ、患者の診療、學生や後輩醫人の指導に專心された事は周知の事實である。扨て藤浪さんは歸朝後レントゲン學の新知識を以て、大正三年田代義德氏に呼び懸け、二十名の會員と相計つてレントゲン研究會なるものを東京に作り會場を廻り持ちにしてレントゲン・フイルムの讀破の研究を始めた。これがそもそ

も物療レントゲン學進歩の第一聲であり、往年の日本レントゲン學會東京地方會の始めである。斯くして時は移り大正十一年十一月田代義徳、肥田七郎、眞鍋嘉一郎、藤浪剛一氏等が發起となり、殊に藤浪さんの熱心なる盡力により日本レントゲン學會が創設され、翌年四月四日東大生理學教室の今は取り毀された舊講堂で創立兼第一回總會が開かれ、田代義徳氏を推して會長とし、西川正治氏の「X線スペクトルム」眞鍋嘉一郎氏の「水治療裝置設備の注意」等の講演が行はれた。此日は雨天で春とは謂へ冷氣身にしむ程であつたが、會衆五〇〇餘名、新生學會として誠に目出度き門出をした。其當時藤浪さんは學會の編輯委員をしておられ、非常の努力を拂つた。七月二十日に「日本レントゲン學會雜誌」第一卷第一號を出版された。程なく關東大震災に會はれたが、公的事業、殊に學會に忠實なる氏は、私有物には眼もくれず、學會雜誌第二號の原稿と會員錄とを持つて避難されたと謂ふ。御蔭で肥田さんの邸にあつた會計原簿は燒失したが、會員の住所姓名を容易に知る事が出來たのである。大正十三年四月、第二回總會が東大で開催さるるや、大震災に依て蒙つた損害狀況や其後の經過を率直に話して會

費未納者から直ぐ拂ひ込んで貰ひ、六〇〇餘圓の剩餘金が出來、玆に日本レントゲン學會の基礎が愈々强固になつたのである。

斯くして時移り人變つて、長らく九大にあつて第一內科教室に厄介になつておつた余も、慈大で物療學を擔當する事になり、所謂新參の專門家として新天地に活躍する事になつた。依て先づ斯學の先輩を訪ふて其の聲咳に接しようと考へ、差當り東京から始むべく慶大病院理療科教授室に氏を訪ふたのである。快談數時間先輩はなかなか親切である。教授室を辭するに際して外套迄着せて頂いたのみか、病院の玄關迄見送られた。斯る事は一寸普通型の教授には出來兼ねる藝當である。其際Prf. Holzknechtの教室には邦人では自分が最初の研究者で君が最後であるからProf. Holzknechや教室の近況に就て書いて貰ひたいと謂ふのであつた。余は早速快諾したが、十數年後の今日も尙ほ約束を履行し得ないのは誠に恥ぢ入る次第である。其後間も無く中泉さんが歸朝した。或日曜日の朝早く、余が未だ床にある時分屋外から呼ぶ人がある。何だいと謂つて戸を開いてみると藤浪さんだ。いやどうも早いですねーと家內に招じた。

氏は中泉君が過日歸朝したから歡迎會を開きたい、就ては發起人になつてはくれまいか、との相談にわざわざ來訪されたのだ、此れが間も無く陶々亭の會となつて實を結んだ。實に後輩を思ふの情は豊かである。藤浪さんには非常に弟子が多い、しかも何れも相當の人物であるが、皆先生先生と敬慕してゐる、師弟の情愛が極めて濃やかである事は、氏を中心とする葆光會の盛況からも點頭かれる所である。事實、若輩に外套を掛けてやり、病院の玄關迄見送られる其の眞情や、後輩の歡迎會を主催する爲め、早朝寢込みを襲ふと謂ふ非常手段迄とらるゝ等、全く普通型の者に出來る所ではない。此の熱情と親心とがあつてこそ澤山の弟子も出來ようし、又敬慕される事と深く感激した次第である。昭和八年主義主張の上から藤浪さんは同志と日本放射線醫學會をつくり余とは別個の立場になつた。從て其後久しく聲咳に接する機會もなかつたが、昭和十四年余が日本レントゲン學會第十七回會長として日本レ學會と日本放射線醫學會との合同を策し、學士會館や帝國ホテルで會談した當時も、氏は自分で生み育てた兩學會を思ふの情には毛頭の變りがなかつた。次で十五年四月に兩學會が合流

して日本醫學放射線會が誕生した。玆に余が事務の管理を委託さるゝや事務取扱上色々と教示さるゝ所があつた。しかも其の一言一句が實地實踐家の至言であり、單なる理論上から出たのではない點等を考へ、誠に感謝惜く能はざるものがあつた。氏は昭和十七年、第二回日本醫學放射線學會々長となられた。其頃から動脈硬化症乃至は心臟喘息樣發作を頻發したので專心加療するの止むなきに至つた。從て學會の事務は事大小となく余等に一任された。人に御頼みした時は一切を委さないと頼まれた人がやりにくいと謂ふ事を、多年の實地經驗から充分御存じであるから、余等の行動には一切口を喊して批評されなかつた。從て事務の運行は敏速に好都合に行つた譯である。余は先に眞鍋會長の番頭を、次で藤浪會長の番頭を勤めた。兩長老の性格態度から研究業績迄對比考察する時興味津々たるものがあり、しかも兩先輩に教へらるゝ所も極めて大であつた。兎に角情の人であると共に實際家であり、事務家である藤浪先輩は遂に亡くなられた、再び其溫顏に接する事が出來ないのである。然し彼の靈は彼が終生を捧げた日本醫學放射線學會や、物療レントゲン學の上にあると

信ずる。我々は益々張り切つて學會の爲め、斯學の爲め引いては國家の爲め職域奉公の誠を致さねばならない。これが先輩の靈を慰むる唯一の途である事を確信し、其の實行を誓つて玆に筆を擱く次第である。

昭和十八年四月記之

恩師藤浪先生

原　邦郎

藤浪先生の門下生として先生の教室に入室を許されましたのは、大正拾四年四月であります。以後今日に至る迄拾有八年の長きに亘り、一貫して先生に師事することを得ましたことは、私に採り望外の幸福と申すの他はありません。

生れ乍らにして親を知らぬ子もある。相別れて死に至る迄遂に再び相會ひ得ざる兄弟もある。最も緣の深かるべき親子兄弟と雖もその遭逢は泡沫の如くはかなきが人の世の常であります。それにも拘らず、何等連りのなきものが、一度師と仰ぎ弟子となる、既に因緣淺からざるものと謂はねばなりません。まして私の場合の如く、拾有八年の長きに亘り、聊かの障りもなく、坦々亦淡々として、師の導きを得ましたと云ふ事は、洵に望むべくして得られるべきことではありません。想ふて茲に至る時、私は常に無量の感激を覺へるのであります。

大正拾四年は例年に比し冬深く、千葉醫科大學皮膚科教授佐藤邦雄先生の御紹介狀を懷にし、麴町區内幸町の御宅の玄關に立つた時には、尚肌寒い風が通りを吹き渡つて居りました。その時先生は恰も玄關にお出でになり、外人と何か立話をしておいでになりました。間もなく外人は辭去し代つて私が應接室に招ぜられ、先生と對座しあの溫顏に接しました瞬間、今迄の緊張が一時に安まるのを覺へました。

先生の御名聲は勿論、當時の醫學生として充分存じては居りましたが、御目にかかるのはこれが最初であつたのであります。種々御話の末、醫局の方へは何時から來る積りかとのお問ひでありましたので、私は明日からでもと申上ますと、先生は「僕の處は醫局へ入ると中々忙がしいから、醫局へ入る前に充分遊んで來給へ。」と申されたのであります。この時はその御言葉に特別の意味も感じませんでしたが後になつてあの時先生のお言葉通りに充分に遊んでをかなかつた事を、泌々と後悔したのであります。その時先生は恐らくお心の中で、「今の中に娑婆の空氣を存分に吸つて置け、一度醫局へ入つたら遊ぶどころではない

ぞ、うんと鍛へてやるぞ。」と申して居られたのだらうと存ずるのであります。

先生の御性格には非常に劇しい半面がありまして、教室に於ては特にその劇しい御性格を發揮して居られた様であります。從つて先生は愚圖々々して居ること、手を拱いて泰然として居ることなどが非常にお嫌の様でありまして、常に心を配り、暇を作らない事を弟子に要求しておいでになつた様でありました。

旺盛な知識慾と、絶大な精力熱意とを以て、寸時と雖も休まれることのなかつた先生としましては、當然の事だつたかと存じます。「君は慾がないね、もつと慾を持ち給へ。」とはよく教室員に申して居られたお叱言の様に記憶して居ります。そんな次第で當時は醫員にしろ、技術者にしろ、廊下を歩くにも總て早足の狀態でありまして、要領のよい助手は、遠くに先生のお姿をお見かけしますと、急に用もないのに室を出入したり、廊下を足早に歩き廻はつたりして、さも忙しそうな格好をしたものであります。先生は勿論、そんな擬態は充分看破して居られたのでありますが、しかし先生としましては、圖々しく泰然と澄して居る人間よりは、寧ろこの様な人間の方により好感をお持ちになつたのではないかと存

じます。

當時聊か不審に思つた事があります。先生は朝の御出勤が非常にお早いので、一般の外來患者の來る迄には相當の時間があるのであります。ある時、或助手がこの時間を診察室で讀書をして居りましたら、背後に來られた先生が默つて靜かにその本をお取り上げになりました。驚いて振り返る助手に「ここは本を讀む處ではありません。」と只一言お仰せになつたのであります。

寸時と雖も無駄にしないことを常に弟子に要求しておいでになつたのではありますが、それには又常に時と場所を考へよと云ふお氣持であつたのであります。謂はば診察室は戰場です。勤務時間中は戰鬪中です。例へ敵彈は來らずとも敵兵は見へずとも、不時に備へ、常に緊張して居らなければならない。それを悠々讀書などして居て何とするか。そう云ふ隙のある心の持ち方はいけない。その時この職務に何故に全靈を傾倒することが出來ないのか、と教へて居られたのであります。

しかし、先生の御性格の劇しさも最近段々に柔ぎまして、一般的の觀方よりし

ますれば、所謂圓熟されたとでも申すのでありましようか、昔を知るものにとつては、寧ろお衰へになつたのではないか、と云ふ不安の方が強く感じられて居たのであります。

先生が弟子に對してお採りになりました御教育の方法は、洵に刮目すべきものだつたと存じます。玆に於きましては、先生の弟子に對する無限の御慈愛と、熱烈なる御誠意とが遺憾なく發揮せられて居りました。先生は常に弟子を一人前の能力者、人格者として扱ふ事を主眼としておられた様であります。從つて、弟子に知識を教へ授けると云ふなされ方ではなく、弟子をして努力、發明、工夫せしめて、知識を自得せしむると云ふなされ方の様でありました。從つて小學校の生徒を教へる様に、細々と事理所以を說きかせると云ふ様な事はなく、簡單な一言、又は二言を仰せになるのみであります。そうしてその裡に無限の意味を罩めてをいでになる。言外に意を覺れ、一を聞いたら十を工夫せよと云ふお積りである。恰も禪坊主が喝を喰らはせると同じ様に、適當な時期に弟子をして努力、發明工夫すべき示唆を與へる、鞭韃を與へる、そうして自得すべき機緣

をお作りになるのであります。

如何に諄々と說きかせても、それは決して弟子にとり眞の知識とはならない。自ら苦心努力して自得し得たる知識にして始めて、弟子の血となり肉となるものである、と云ふ事を先生は御自身の御體驗に徵して充分に御存じであつたのであります。

それに就き入局間もない頃のある日、先生に何かお伺ひ致した事があります。どんな樣な事であつたか記憶はありませんが、恐らく文獻でも調べれば容易に判る程度の事だつたらうと存じます。その時先生は稍々色をなされまして、「君、文獻や教科書を調べれば判る樣なことを決して先生にきくものではない。汎ゆる手段を盡してもどうしても解らぬ場合、始めて師の教へを受くべきである。」と、それから今度は多少諧謔的に「君、大學の教授と云ふものはそれ程偉いんだよ。」と仰せられまして私は非常に赤面した事があります。

卽ち先生は安易道を極力排斥しておいでになつた。又簡單に人を利用しようと云ふずるい氣持を嫌つておいでになつたのであります。しかし、最後のお

言葉の反面には、今時それ程偉い大學教授が果して幾人あるか、と云ふ先生の強い御自信と、負けぬ氣を感じまして非常に意を強ふしたのであります。

先生はよく「名工柿右衞門はどうしましたか、柿右衞門を見なさい。」と云つて居られました。あの有田燒の有名な朱の繪具は決して一朝一夕になつたものではない。あの朱の色を燒き付ける迄に、柿右衞門が精神的にも物質的にも辿つた慘憺たる道、血と涙の努力こそはとりも直さず吾々學徒の學問に對して採らなければならない態度である。と先生は考へておいでになつたのであります。先生にとつては、洵に學問は藝術であつたのであります。

さればこそ、先生は弟子に對するにも常にそのお氣持を以て臨まれました。從つて先生にとりましては、弟子に學問を授けると云ふが如きは、そもそも末の末であつたのであります。先づ精神を鍛へる、不撓不屈の筋金を叩込んでやれば、あとは融通無碍である、と信じておいでになつたのであります。日本古來の教育の眞髓たる所謂徒弟教育の精華を把握して、弟子の教育に臨まれておられたのだらうと考へるのであります。

先生には叱られる程脈があるとは弟子達のよく申して居た事であります。事實、先生は御自身でも亦「私は愛想をつかしたら何も云ひません。」と申して居られた程であります。しかし先生は決して容易な事では弟子に愛想をつかす様なお方ではありませんでした。少々氣まづい思ひをして先生の許を去つた人でも、先生は決して愛想をつかされる様な事はなく、常に絶へずその人に關心を持つて居られた様であります。機會があれば再び教室へ呼び戻し、研究をさせ、一人前にして世の中へ送り出されると云ふ風でありまして、現に私はその事實を存じて居ります。

弟子の多彩であつた事も先生の偉大を物語るものと存じます。多少風評が悪く、他處の教室では敬遠する様な人間をも、先生は心よく入室を許されました。寧ろその様な人々にこそより同情をお持ちになつた様であります。みんなが見棄てたらどうすると云ふお氣持ちだつたらうと考へます。人皆が顧みざる如き人間をも、先生は溫い心で立派に一人前に教育されて行かれました。剛情で飽く迄自らを屈せらるることのなかつた先生も、弟子を容るるには實に寛容

で、文字通り清濁併せ呑んで居られました。

先生は酒も煙草もお嗜みにはならなかつた様でありますが、弟子には決してそれを強要されませんでした。宴會にしろ、旅行にしろ、弟子の趣味にはいつも干渉されず、寧ろ先生の御趣味に遠慮して、先生のお手前丈を取り繕ふと云ふ様な事はお悦びにならなかつた様であります。

偶〻先生のお伴をして旅行をしました或時或驛で先生はホームへお降りになりましたが、何かの御所用と存じ、別に氣にも致さずに居りますと、間もなく先生は竹皮包み一箇と二合瓶一本とを持つて戻つておいでになりました。そして座席にお着きになり乍ら「君此處の力餅は有名なんだよ、僕は甘黨だからこの餅を喰べるが君は辛黨だからこの酒を飲み給へ。」と二合瓶を渡されました時の感激は、一生忘れる事が出來ません。又入室しまして最初の論文を先生が雜誌に發表して下さいました時、先生は「君、活字になつたよ。」と何氣なく論文の別刷をお渡し下さいましたが、後になつてその校正に貴重なお時間をお潰しになつたのみならず、その掲載に必要なる費用迄御自辨下されたと聞きました時、顏

前の茫乎となるのを覺へました。

先生はこの様な想ひ遣りの深い泌々とした半面を、平素弟子にお見せになることをなんとなくてれ臭いとでもお考へになるのか、或は亦わざとらしいとお感じになるのか、弟子にお對しになる時は、殊更に强情をお粧ひになるかの様にお見受け致しました。自らの德を露はにせられることをお嫌ひになつた先生の御性格としましては當然の御事だつたらうかと存じます。

先生のお宅の玄關に掲げてあります扁額の葆光と云ふ文字は、「莊子」に「自己の智をおほひかくすこと此を葆光と謂ふ」とありますが、洵に先生の御性格にふさはしき文字と存じます。先生は啻に智のみならず自己の德迄もおほひかくしておいでになつたのであります。名墓顯彰會のお企てや又吾國醫學界の恩人ベルツ博士とは、先生は特別の御關係がなかつたにも拘らず、只故人の我國醫學界への功績を感謝せられると云ふ丈けのお氣持から、ベルツ博士の歿後、屢〻その宅をお訪れになつて、人の顧みざるを人知れず未亡人を慰めて居られた事などを想ふ時倍々この感を深くするのであります。

大いなる山嶽が、その周圍に獨特の山嶽氣象を形成すると同じ樣に、先生も周圍に一種の雰圍氣を持つて居られました。威壓に非ざる壓力、聲なき命令とでも申しますか、先生の前へ出ますとどうしても先生のお考へ通りに動かなければならなくなるのは、眞に不思議な氣持ちでありました。

先生は既に時代に先んじて、放射線醫學の現在を見通して居られました點は、確に先覺者と申すべきと存じます。

先生は卽ち時代の先覺者であると共に、又時代の寵兒であらせられたのであります。先覺者の道は、多くの場合悲慘に終始するものでありますが、先生の場合に於きましては、それは同時に亦寵兒の道でもあつたのであります。そうして、その寵兒の道を登りつめられたその頂上に於て忽然として御逝去になつたのであります。先生の御生涯を回顧します時、その何れの時代に於ても先生は思ひの儘に自己を發揮せられ、聊かなりと雖も凋落の影のさしたる如き時代はなかつたのであります。先生の如き、劇しき活動的なお方にとりましては、生きると云ふ事は卽ち仕事であります。仕事もなし得ず、徒らに生命のみを繼ぐと

云ふ事は先生の決して欲せられざりし處だつたらうと存じます。その點に於きましては、先生は自らの御最後を充分御滿足なされた御事かと拜察申上る次第であります。

先生に關する追憶は更に次々と盡きる處がありません。そうして之等の追憶が今となりましては、先生の面影をしのびまつる唯一のよすがとなつた事は、吾々にとり、洵に痛恨に堪へざる處であります。想へば業未だならずして、師の御逝去に遭ふ、將に愍然の極みと云ふべきであります。

陽落ちて雪の杣路越へ惱む

今玆に追憶の三四を記し、以て拾有八年間に亘る先生の御鴻恩に對し、改めて感謝申上る次第であります。

藤浪先生を偲びて

平松博

藤浪先生の追悼文を書くやうにと、御依頼を受けたのは、先生御逝去後約一ケ月後の昭和十七年の年の瀬も迫つた頃でありましたが、其の頃は先生を失つたばかりで、心の動揺も治まらず、さて何から書いてよいのか、全く考へが纏らず、そのまゝ時日を過してしまひました。

藤浪先生は、勿論私自身の恩師でありますが、更に我教室の恩師であつて、小池先生、清水先生以來、連綿として藤浪先生の御薫陶は教室に深く廣く行き渡つており、我教室員は、先生から、孫弟子の如くに待遇せられて來たことは周知の如くであります。

話は甚だ古くなりますが、私の父は以前から電氣機械が好きで、未だ我國に於てレントゲン裝置が試作の時代を出ない頃から手製の器械を作つて、どうにか

手の骨ぐらゐは寫してゐましたが、其後本格的の製品を購入使用するやうになつてからは、主として藤浪先生の「れんとげん學」を參考書とし、父の書棚の中に一際目立つ先生の著書の金文字は、當時醫大の學生になかつたばかりの私の好奇心を唆つたのでありましたが、三年生のとき、はじめて小池先生の御許しを得て、理診科の見學をするやうになつてからは、父の書棚から借用した先生の著書を、一生懸命に勉強したものであります。

然し、當時、其の書物の著者、藤浪先生から斯くの如き大なる御恩顧を蒙ることは、夢想さへしなかつたところでありまして、たゞ書物を通じて、我々のとても近寄れない偉い先生だといふ畏敬の念を抱いてゐたのであります。

先生に最初に御目にかゝつたのは、昭和八年十月小池先生の御逝去の際でした。當時、私は學校を卒業して醫局へ入つたばかりであり、教室には清水、大西兩氏と私と三人だけで、何れも入局後日尚淺い者ばかり、全く暗澹たる狀態でありました。小池先生が十餘年間苦心經營せられた歴史ある教室も、消滅するかと危ぶまれ、種々の憶說さへも生じたのでありましたが、此の時先生の御來澤が如

何に我々を力づけたか想像に絶するものがあります。

「しつかり勉強したまへ、あとのことは引受けたよ」といふ力強い御言葉に一同は眞に暗夜に燈火を見出した次第でありました。

先生の御教育は峻烈そのもので、何の容赦もないとかねて聞いてゐましたので、其の時一同は非常に緊張して先生を御迎へしたのでありました。嘗て慶應の教室に學んだことのある五十嵐先輩は、先生の御氣に障はる事があつては大變だと、細々と陣頭に立つて指圖しておられましたが、案に相違して、先生は終始慈父の如く和やかに我々に接して下さつたので、非常に嬉しくもあり、又緊張してゐた手前、拍子抜けのした感じもしたことを今でも記憶してゐます。

其の時の先生の御宿は源圓と云ひ、今は某醫院になつてゐますが、當時は市内の一流旅館で、其の二階の一室で先生を中心として行はれた會談は、我教室にとつて極めて歴史的のものであつたと思ひます。

先生は、主任を失つて迷つてゐた我々に對して、教室員としての覺悟と心構へ、研究方針、内外の情勢等を語られ、小池先生の剖檢に御立會ひになり、弔詞の原稿

を託して夜行で歸京されたのでありました。

其後丁度一年目の昭和九年十月十五日、小池先生の御命日に、私が大學から內地留學の辭令を貰ひ、藤浪先生の御門下の末席に加はるべく上京することになつたのは、何かの奇縁と言はねばなりません。

私も今度は、嚴格にして假借ない訓育を受ける事は充分覺悟しておりましたが、嚴格であつても私が聞いて居た程峻烈でもなく、非常に御懇切に細い點迄も氣を配つて下さつて、常に激勵して下さつたことは忘れられません。

私に與へられた研究室は、えまなちおん測定室と呼ばれてゐた一室で、同室の研究生は先生の足音や御聲が廊下に聞へると、今まで煙草をのんでゐた者も雜談してゐた者も、一齊に机に向つて固くなつて書物を開いたり、ノートに何か書き始めたりする樣子は恰も龜の子の如くでした。やがて先生が研究室に入つて來られ、次々と研究の結果に對する質問が發せられますが、それが一日中で研究室の最も緊張した一ときであつて、先生の御姿が室外に消えるとやれやれ今日は無事に過ぎたと安堵するのでありました。研究室の清潔と整頓は特にや

かましく、塵一つも見逃されることはありませんでした。論文の御校閲も一字一句愼重嚴正に行はれ、而も繰返して何回も訂正され、全く原文の跡を止めぬ位になる事も稀ではありませんでした。先生の門下生に對する御指導振りに就ては、多數の先輩も居られる事ですから、私としては先生の金澤醫大理學的診療科教室に對する御教導に就て述べたいと思ひます。

先生は、我教室員の中で一度でも先生の御宅に伺つた者は、名前性格、特長等をよく覺えておられて、時々あの者はどうしてゐるかと色々お尋ねになり、又教室の研究狀況に關する御質問、御激勵は御會ひする毎に承つたものであります。

私が昭和十一年に金澤醫大の理診科を擔任して以來、十二人の者が先生の御指導と御審査によつて學位を戴いてゐますが、此の者達が現在の我教室及同門の中心となつて、今日の教室を築き上げたので、之もひとへに先生の御蔭といふことが出來ると思ひます。

昭和十五年の秋、私にも帝國軍人としての召集令狀が來て教室を去ることになりましたが、私には先生の御援助がある以上、何の憂ひもなく勇躍入營するこ

とが出來ました。其の時、先生から戴いた御守りは、とても嬉しく又勿體なくて內地勤務の關係もありずつと大切にしまつて置き、昨年滿洲へ出張する折に、はじめて身に付けて行きました。

藤浪先生の御指導によつて苦難の途を乘越へ、健やかに生長し發展して來た我教室を、是非先生に一度見て戴きたいと云ふことは、かねがね念願してゐたところでありましたが、昭和十六年四月、放射線醫學會が京都に於て行はれたので、其の御歸途北陸方面へ御立寄りを御願申上げたところ、御多忙の時日を割いて御來遊下さるとのことに、教室員一同大喜びで御歡待の計畫を立てました。

京都よりの途中、福井では教室同門の一部の者が御待ち申上げ、種々の催しがあつたさうで、其の中特に幕末時代勤王志士の密談の場所であつた丹巖洞と云ふ古風の建築物が、非常に先生の御興味を惹いたやうに承つてゐます。それから山代で九谷燒の製作を御覽になり、山中溫泉の河鹿莊へ御泊りになりました。私は當時見習士官で營內居住を命ぜられてゐたので、全く自由が利かず、八方手を盡して漸く二日間の休暇を戴いて河鹿莊へ御伺ひし、遲參の御詫びをすると、

先生は御部屋で按摩をとつておられましたが「よく來られたね」と云はれ非常に御機嫌よく、御土産物を賜り、軍隊生活のことなど色々御聞きになり私も全く打寛いで暫し時の移るのを忘れて御話申上げました。其の翌早朝出發金澤へ向ひました。金澤着後直ちに向西寺の小池先生の御墓に御參りになりましたが、しめやかなる讀經の聲と香煙のゆらぐ中に靜かに墓に向つて默禱せられる先生の御姿には、弟子を愛する眞情の溢るゝが如く、墓石も感激に動くかと思はれ、並居る私等の胸中に熱きものがこみ上げて來ました。

次で兼六公園内の三好庵で御晝食、午後は前田道貞博士邸で茶の湯の御招待があり、夜は鍔甚樓にて教室主催の歡迎會を開きましたが、教室諸先輩はじめ現教室員及同門會員等四十餘名參集し、仲々の盛會で、先生は教室の成長と孫弟子達の元氣な模樣を見て心から御滿足のやうでした。

當夜は藤屋旅館に御宿泊になり、翌朝御出發になりましたが、あとから「あんなに愉快なことはめつたにない」との御手紙を戴き、私も先生の御滿足を得られたことを今でも時々回顧する毎に嬉しく思つてゐます。

其後一年半の昭和十七年十一月、私が約一ケ月公務を帶びて滿洲に出張し、歸澤の翌々日、日直司令の勤務中、電話で先生の御急逝の報に接しましたが電撃を受けたる如き衝動を受け、暫し身體が空虛になつたやうに呆然としました。

私及び私の教室は、先生から筆舌には盡せない御恩を蒙つてゐながら、何等御恩の萬分の一も御報ひ出來なかつたことを返すがへすも殘念に思つてゐますが、如何に歎いても先生の魂を呼び戻すことは叶ひません。

先生の御恩に報ゆるには、ひたすらに先生の魂のこもつた我教室を立派に育成してゆくこと以外にはありません。

私等は常に先生の御靈魂の加護を確信し、門下生の名を汚さぬやう研究に精進する事を固く心に誓つてゐる次第です。

恩師

板津三良

恩師藤浪教授は、大樹の倒るゝが如く忽然として急逝された。當日、先生御危篤との急報に接し、早速御自宅へ馳せつけたが、既に萬事終つた後で如何ともなし難かつた。先生は御執筆中であられた原稿の校正を、其の朝夢に見られたと奥様や池田マツサージ士や、看護婦に語つておられた瞬間、輕い二つ三つの御咳を最後として、幽明境を異にされたとのことである。先生の御日常を熟知する私達にとつては、如何にも先生らしい、そして學者らしい死なれ方であると思つた。然し、先生ならでは完成し得ない幾多の仕事があるだけに、惜みても尚ほ餘りあるものがある。

先生の遺された偉大な御業績については、誰しも熟知する所があると思ふから、玆では懐しき先生の追憶を順序もなく書き綴つてみやうと思ふ。

私が藤浪先生を初めて御見受けしたのは大正十三年の秋も深く本科二年二學期の後半で、内科學の講義が理學的診療科教室の眞向ひの階段講堂で開始された頃のことである。廊下に溢れた患者と學生の混雜する間を同教室所屬の治療室や診療室の數多い扉を片端から、順々に元氣よく開けて中を見られるかと思ふと、直ぐどしんと强く閉められ、室内に入られることがあつても、寸秒の間に外へ出られ、實にめまぐるしい程の巡視をされる先生が見られた。時には兩手を背後に組んで實にゆつたりと、目的が有るようで無い様な、忙かしい様で暇の様な、何と形容して良いか解らない姿で、漫歩されてゐた。其の獨特な歩き方には一歩一歩にはち切れさうな元氣と自信とがうかゞはれた。また先生の頭髪の卷毛も殊に目立つて印象が深かつた。

然し此人がまさか有名な「レントゲン」の藤浪教授であるとは思へなかつた。その頃、教授は大抵、多數の助手や看護婦を引具して大名行列で歩き、或は多數の助手が靜肅に御入來を待つ間を悠然と教室に入つて來て講義をされるのであつたが、藤浪先生は少しもさういふことのない平民的な先生であられたからで

ある。

私は本科の三年、四年の學生時代から海外醫事研究會の關係で先生に親しく御指導を仰ぐ様になり、數人の同級生と共に、屢々陶々亭や帝國ホテルや歌舞伎などに御招待にあづかり、同級生の羨望の的となつたものだつた。又それについて色々冷汗の出る様な思出もある。殊に帝國ホテルの御招待の時は、先生からの御申出も突然であり、その日は雨上りの午後で衣更への時間もなく、破れ帽子に破れ服、泥付の古護謨長靴と云ふいでたちで、正面玄關から繰込んで金ボタン氏にそつぽを向かれ、受付氏には休憩室を顎とペン軸で教へられまごまごしてゐる所を通りがゝりの白服ボーイ氏に助けられ、およそ場所とは不釣合な一團となつて豪奢な椅子に腰をかけ、外人などと打ち混つて、先生を待つた。先生は暫くして來られたが、私等の片苦しさを別に氣にもかけられない様に、ニコニコして氣輕に何かと話題を出して笑ひ興ぜられた。その日、きらびやかなシャンデリヤの下で貴顯紳士や夫人令嬢などと食卓を隔てゝ奏樂裡に晩餐をとることは私には初めての經驗であつただけに、さぞかしキヨロキヨロと四周を見

たことであらう。殊に現在某病院の眼科部長におさまつてゐる某博士の如きは、物珍らしさうに四周を見廻す都度ボーイにサイダーを注がれ、サイダー攻めにあつてへこたれて居た。そこで先生は話題を彼氏に向けられて、巧みに彼氏の外見を封じ、サイダー御難から救はれた様な珍談もあつた。

そろそろ卒業期も迫り、入局委員も定まり、私は内科入局の手續も濟んで居たが、急に先生の教室に轉向することゝなつたので、友人や先輩から、「先生は嚴しいぞ、君には勤まるまい」と忠告されたが、あの御柔和な先生にそんなことはない、と頑張つて入局してしまつた。ところが入局するとその日から、先生の御顔に御やさしい表情がすつかり消へて、笑談を云はれた先生が、無口になられ、全く怖い先生に變じてしまつた。

最近學生の間で、先生を許婚の夫と評して居たとか聞く。それは、結婚前には甚る様に可愛がるが、結婚すると急におさまり返つて威張ると謂ふ意だらうが、私の僞らざるその時の氣持ちを謂へば全くそれであつた。然しこれは私の非常な認識不足であつたことが後になつて解つた。教育家としての先生の御信

念眞の先生の御心持が何處にあるかが、最初の中は理解されなかつたからである。

先生の教室に於ける御指導は誠に懇切で、寧ろ嚴格無比と評してよい程であつた。仕事の上では些細なことにも寸毫の假借もなく、よく叱り、何回でも實驗をやり直させ、又書き直しをさせられた。實に無慈悲とまで思はれる怖い先生であつた。然し先生は所謂鬼面もて、御本心の御慈愛を隱し、小愛を排し、大愛を以て子弟を遇されたのである。從つて、私の教室生活は苦勞ではあつたが學問の身につくことが多かつた。今憶ひ出しても有難さに頭の下る思ひがする。

入局後、五日位を經過した或る日のこと、私がレントゲン診察室で胃の檢査をぼんやりと見學して居ると、不意に先生が入つて來られて「君、胃は何秒で撮影するか」と質問された。私は入局早々のことで、撮影に要する時間など知らう筈もなかつたが、突嗟に二十五分の一秒と答へてしまつた。先生は直ぐ技術員に「板津君の條件で一枚撮つてくれ」と命ぜられ、次で、先生の條件で今一枚を撮影され、そして此の二枚の乾板を私に手渡しながら、自分で現像するやうにと命ぜられ

た。

勿論、私の條件ではどんなに長く現像しても、像の現れる筈はなく、徒らに黒くかぶるばかりで、實に憂い思ひをした。以來私は教室に於いては凡ゆることに注意を怠らず、常に緊張した氣持でゐる習慣になつたのである。先生は仕事や論文のことでは非常にせつかちであられた。又そうゆう風を裝はれた。テーマを出されると二三日でもう出來たか〳〵と請求された。それでは先生でも出來ないだろうと、よく蔭口をきいたものだつたが、先生は「俺が請求するから君等の仕事が出來るのだ。俺が默つておつては何時になつて出來るかわからん」と云はれ、そして、五月蠅いと思ふ位に請求されるのであつた。

私は入局すると二三日で、先生からレントゲン立體寫眞の研究と云ふテーマを戴いた。之れは初めてのテーマでもあり、實に苦心し、努力し、又惱まされもした論文の一つであつた。先生は此の問題を出されただけで、如何に研究するかに就いては、何の指示も與へては下さらなかつた。恐る〳〵再三再四教へを請ふたが、いつも無言である。口を開かれると「本を讀んだか、本の讀み方が足らん」

と叱られた。

私も意地になつて、隨分一生懸命にやつた。醫局の本は勿論、東大、日赤、陸軍病院等の名だたる圖書室を歷訪し、之に關する圖書文獻を限なく通讀し、祕かに種々實驗もして先生の例の御請求には文獻調査中の一點張りで擊退し、約一ケ年半の苦しい年月を過した。一緒に入局した同僚は既に一、二の論文が出來てゐるのに私は何も纏つて居なかつた。私も多少あせり氣味となつてきたが、先生はそれ以上にたまり兼ねられたか「兎に角、君の抄錄ノートを見せ給へ」と命ぜられる迄になつた。そして私の廿冊前後のノートの一、二の內容を檢査されると、先生は直ぐ書けと命ぜられた。私は一生懸命書いて約二百頁位の論文にまとめた。それを先生に提出すると、先生は右の掌でその原稿を受け取られ、目方でも計るような具合に、二、三回上下され、そのまゝ默つて私の手に突き返して室を出て行かれた。私は狐につまゝれたような氣持ちでそれを受取つたものの、何うしてよいか途方にくれてしまつた。先生の御所作から、論文の價値は目方ではないよ、もつと簡略にせよとの意を示されたと思はれたので約三分の一位に

書き改めて再度提出した。

先生は默つて受取られた。占めたぞと喜んで引き退らうとすると、先生は左手で原稿の端を摑み、右手でページをぱらぱらと繰られた。一言半句内容を讀むでもなく、挿圖を見るでもなく、「君」と一言いはれただけでそのまゝ又突き返された。私はかつとして教授室を飛び出すと思はず涙がこぼれた。

醫局を飛び出さうかとも考へた。然し、人生は一生修業だ、何事も我慢が第一だ、と思ひ返して一晩で千頁位のものを書き上げてまた提出した。先生は今度はそれを通讀されたらしく、翌日「君怒つたな、然しあれは論文の抄錄じやないか、この要領でもつと精しく書き給へ」と始めて教へられた。そこで百頁位のものに書き改めて提出すると初めて心よく受理された。暫くして論文が先生の御手許から歸つてきた。原稿は赤インキで直され、棒を引かれ、注意書きをつけられ、紙面が眞赤になつて居た。先生が一字一句も粗にせず、よく通讀され、加筆され、如何に愼重に注意を拂はれたか、又その御勞苦がどれ程であつたかがよく紙面に滲み出て居て曩に先生を恨んだり、怒つたりした私の不明が身にしみて痛

かつた。そして先生の有難さと親切さに心を打たれた。

先生は論文が氣に入るまで、何度でも書直しを命ぜられた。某博士の初めての一小論文の如きは、千枚の原稿用紙が消費されたと噂された。同君の先生思ひは、同君が元來尊敬すべき人情家でもあることにも依らうが、先生の此の眞の愛情と親切さに心服した爲めであると私は考へる。

昭和三、四年頃の先生は、教室員の論文に對し、當人を前に置いて筆を入れられることが多かつた。教室員は之れを先生と戰ふと謂つたものだつた。先生はこの戰爭中時々癇癪を起されることがある。その飛沫が思ひがけない所に飛ぶことがあるので、教室員は一樣に警戒し、時には圖書室や三階の喫茶店へ避難したこともあつた。

こんなこともあつた。私が外來で勉强してゐると、先生が現某婦人科病院長某博士と一緒に入つてこられた。そして戰爭をおつ始められた。私は逃げ出すこともならず、止むなく其處で勉强を續けてゐると、戰爭が漸次高潮して先生の癇癪が今にも起りさうになり、一嵐なくてはおさまりそうにもない空氣にな

つて來た。そこで、居合せた一二の教室員がはらはらして居ると、先生は何を思はれたか、急に其處に在つた一枚の白紙を取られて、某氏に向ひ「君之をよく觀察しておきたまへ」と謂はれたまま、ぷんとして室を去られた。我々はほつと一息したものの、先生が何時引き返して來られるかも解らないので、無駄口もきけず、さりとて逃出しもならず、そのまゝ罐詰にされて居た。先生は暫くしてかへつて來られて、某氏に「君よく觀察したかね」と聽かれた。「はい」「どうだつたね」「白紙です」「裏をみたかね」「裏も白紙です」「紙紋はあつたかね」「それは見ませんでした」。先生はそこで「君それでは觀察が足りないね。先づ表を視、裏を視、白紙と判つたら、透かして紙紋を檢べ、その紙の厚さ、インキの滲み具合、紙質の強さなどを調べ尚ほ念のため紙を指で彈いて芥でも附いて居やしないかと確めてみる位の觀察力が欲しいね。一枚の紙を觀るだけでもそうだ、君の論文は紙の表裏を一寸見た位の觀察しか書いてないじやないか。これでは論文になつておらない」と懇々と注意された。いかにもと、私は他人事とはいひながら思はず聞きとつたことがあつた。

これとは反對に某博士の場合には「論文は藝術だよ。寫眞ぢやないよ。よくよく觀察し、快刀亂麻、取るべきは取り、捨てるべきは捨て、その要點を十分に摑み、一讀してよくその要領を讀者に得させるように書いて、而も人の心に迫るような迫力が無くてはならないよ。それには苦心と努力が要る」と注意されながら叱つておられるのを聞いたことがある。忘れられない先生の御言葉の一つである。先生の教室には常に必ず一人か二人叱られ役が居る。全體のものに注意するかはりにその叱られ役が犧牲になるのである。今の兩氏への訓戒も或はそれであつたかもしれない。

論文に關しての憶出は中々つきないが、特に次のことも懷しいものゝ一つである。先生は同一論文を二度も三度も手を入れて下さるので遂にはすつかり先生の文章となつてしまふ箇處が出來てくる。斯樣な箇處でも先生は例の通り一字一句も粗にせず加筆され、知つてか知らずか、御自身の文章の寫しを、屢々「これは何だ、まるで文體をなしておらん、中學生にも劣るな、こんな下手くその文章を書くようではしかたがないぞ、こんなことで博士になれると思ふか」など、惡

口雑言を御自身の文章に加へられる事がよくあつた。戦争の眞最中これでほつとした事がよくあつた。が、實は先生の文章が極めて優れて居て、よく中庸を得てゐるので、前後の下手な文章と合致し難いものが出來上つて問題の原因となることが多かつたことゝ思はれる。勇敢なことで有名な某博士は先生の悪口を默つて聞いた後で「其處は先生の文章です」と申し上げて、先生が如何な顔をされるかと、日頃の胸の溜飲を下げたつもりで内心喜んでおると、先生は蛙に水をかけた程の動搖もなく「俺は君に書く要領を教へたのだ。それをそつくりその儘寫してくる様な杜撰な頭で論文が書けると思ふか。寫す前に今一段の考慮と觀察、苦心と努力とが必要だ。」と云ふような意味の言葉でしつぺ返しに叱られ、さすがの某氏もすつかり赤面したと語つたことがある。

先生の開講十年には、記念事業として醫局で何か仕事をしようと云ふ議が持ち上つた。醫局では記念論文集と相談が一決し、先生に御許可を願つた處、以ての外の御叱りで「日本の理學的診療に關する一切の文獻を系統的に分類して索引を作成せよ」と命ぜられた。ところが醫局では他人の提燈持か緣の下の力持

の様な仕事だからとて非常な不満で、乘氣がしなかつたが、愈々本が出來上つて見ると實に便利重寶なもので、日本にはこの種の本がなかつただけに、各學界の反響も大きく、先生の御達眼にすつかり敬服したことがあつた。

先生はよく「學問の下積になれ、快んで捨石になつて、人の出來ぬことをせよ、之れ又人生の快事ではないか」と謂はれた。けだし前記の本の如きも先生の御心の表はれの一つであらうと思ふ。

先生の朝の御出勤は實に早かつた。七時には定まつて教室に居られた。時には六時のこともあつた。助手が却つて先生より遲く出勤すると云ふ具合であつた。出勤が遲いのでよく先生に叱られた某醫專教授から聞いた話であるが、同氏が例によつてステツキを肘に悠然と醫局に入ると、先生が椅子に腰をかけて待つて居られたそうだ。そして「○○君、僕の云ふことを一寸黑板に大きく書いてくれ給へ」と命ぜられた。某君はかしこまつて自筆で

○○君出席遲し

（消すべからず）藤浪

と大書する光榮に浴した。これにはさすがの氏も閉口したと酔へば必ず語る一つ話である。兎に角先生の御出勤の早さは醫局員泣かせで私はとても競爭できなかつた。先生は又醫員や技術者の仕事を見付け出されることが非常にお上手だつた。廊下で出合ふ助手や技術者に片ぱしから何かと用事を命ぜられるので、よくまああれだけの仕事を考へ出されるものだと感心した。殊に先生が早く御歸宅される日とか、御休みになる前日とか又は土曜日などには甚しかつた。決つて其の日と翌日は全く遊ぶ時間のない位、丁度手一ぱいの仕事を命ぜられた。古參の醫局員はかういふときに先生が來られると急に用事を憶ひ出した様に其處を逃げだすとか、又忙がしそうに、用もない病床日記などを持つて歩き廻つた。先生はそんなことでだまされる方ではなかつたが、時には奏效することもあつて、〇〇君の如きは其の道の達人であつた。先生は御自宅では病院と全く別人になられた。何時でもにこにこと笑顔を見せられた。弟子達はよく令夫人の魅力の致す所だと蔭口をきいたものだが、弟子の妻子などには常に情愛の深い御言葉をかけて下さつた。だから、怖い先生だと如何に話し

ても、私の妻の如きは、偶然に病院の廊下で醫局員が叱られておるのを見る迄はどうしても信じようとはしなかつた。先生の病院での態度は教育者としてのそれであつて、御自宅の態度は慈父としてのそれであつた、と私は考へる。先生は實に情の方であられた。逆境にある者に屢々救助の手をさしのばされたり、先哲醫家の妻女や子孫や、無實の罪に泣く者等で先生に救はれたものは私の知る限りでも三四を下らない。外にも同様なことが澤山あると思ふが、醫學部の變り者や困り者、又は名物男で先生に救はれたものも澤山ある。常人にはとても出來ないことでその親切と勇氣とには頭の下がるものがある。しかし、時には飼犬に手を噛まれるような御難を受けられたこともあつた。

先生は芝居や自動車の日歸り旅行には御夫妻同行で、醫局の誰彼を夫婦同伴でよくお誘ひ下さつた。私もその都度同伴で御供をしたが、先生は斯様な時には至極平民的に談笑され、同等に取り扱つて下さつた。先生と謂はれるのが御不快の様にも見えた。それだけに却つてこちらでは恐縮し窮屈に感じ、氣骨も折れた。もう少し、威張つて下さつたらと考へる程だつた。しかし、その御蔭で

身分不相應な場處へ出入し、美味な物を喰べ、面白い處や、珍らしい物などを見物出來たことは感謝の外はない。亡き先輩に對する夫妻共通の懷しさでもある。

先生は年毎に叱られなくなつた。殊に昨年の御大病以來は、めつきりと御疲れがうかがはれ、御目もじする都度喜んで下さるものの、その瞬間の御眼頭には光るものがあつて、すぐ横を向かれるのは實にたまらない氣がしてならなかつた。今一度大聲で叱つて戴きたいと考へた位だつた。

今となつては懷しさが一しほ深まるばかりである。

醫史學者として

藤浪博士を憶ふ

山崎佐

藤浪博士を、私が始めて知つたのは、博士が外國から歸られて、順天堂に勤務されるため神田の安田館に止宿されて居られ、私が大學を出た恰度大正二年の秋頃かと思ふ。その頃私の家兄も順天堂に勤務してゐたので、その關係からしてお知合を願ふやうになつた。それより昨冬逝去されるまで二十九年となるので、實に長いおつき合である。私が妻を迎へたとき、令夫人が美麗な文箱を祝としてお持ち下され、貧弱な茅屋に光彩を添へて下さつた。その箱は今猶大切に保存してあつて、色はあせ、却つて古色蒼然として雅味を增し有難い思ひ出となつてゐる。

斯やうにおつき合の期間は相當に長いが、親しく博士のお宅を訪問したのは、關東大震災前に一回位、震災にかゝられてから一二回位、唯今の內幸町の御宅へ

は、昨年になつて公けの用事で二三回位で、二階へ通り、書齋を拜見したのは、實は逝去の報に接し匆々として弔問に走せ參じたときが始めてであつて、日頃私交上には餘り親しく往復したことがなかつたといふ有樣であつて、評判の藏書も遂ひに一度も拜見したこともないといふ次第で、先づその交り淡きこと水の如しといふべきである。

が、しかし公けに於ては相當に繁々溫容に接する機會が與へられた。といふのは富士川先師が主裁されてゐた日本醫師協會の前身である奬進醫會の會合、殊に毎年三月四日の醫家先哲追薦會では、きまつて謦咳に接し、大正十一年から私が日本醫師協會に深く關係するやうになつてからは、博士が同會の理事であらせられた關係からして一層お目にかゝる機會に惠まれた。

大震災前にお訪ねしたときの記憶によると、その頃博士は、鄕土玩具を頻りに蒐集されて、應接間に澤山飾つてあつたことを覺えてゐる。それが震火に滅盡されてから、醫史科就中古醫書の蒐集に力を注がれたやうであつて、醫史學に非常な興味と熱心とを以て携はられ醫史學の關係からして富士川先師との交涉

が益々深くなるにつれ、私も常に富士川先師に私淑してゐたところから して、醫史學を媒として一層繁々お目にかゝることとなつた。富士川先師は、人も知る通りその藏書の殆ど大部分を京都帝大へ寄贈されてから後、醫史學の講義をなされる際、聽講者に展示される古醫書は概ね博士の藏本を用ひられたやうであつて、博士の藏本は相當に先師の助けをしたわけである。先師の晩年は專ら佛教に力を注いでゐられたので、醫史學會の實際の處理は殆ど博士に一任されて、こゝ十年餘の醫史學會の風格、推進力は擧げて博士に依つてゐたと云つて差支ないほどであつた。されば、先師が昭和十五年十一月逝去されると直に同學會理事會では、博士を推してその主裁を御願ひしたのは當に然るべきことであつて、夙に醫史學に關する相當多くの研究論文を發表されたのみならず、醫史學全般の發達普及に盡された功績は實に甚大であつて、人の皆々克く知るところである。

醫學に於ける他の專科は、概ね官公立學校や研究所等官の力に依つて、補育達成されて發達して來たものであるにも拘はらず、皇國醫學及び醫道の根底たる

醫史學の研鑽については、之等官設のものは或は白眼視し或は無用の閑事なりとして捨てゝ顧みず、謙かに民間有志の手に依つて研究され、發達して來たのであるから、その根本史料の蒐集、古醫書の保存整理を始めとして、之が研究發表等は實に容易ならざることであつて、全く手錢手辨當で孜々營々として、固より毫末も報ひられることもなく、同志互に切瑳琢磨して我邦傳統の「くすしぶり」をこゝまで鮮明し、その功績を官に及ぼしてゐるといふ有様であつて、我邦醫史學の大綱を樹立された富士川先師の辛苦艱難は、言語に絶するものであつた。また之に協力され、先師に繼いで醫史學會を主裁された博士の勞苦も亦一通りでなかつたのであつて、その功績は永くたゝえなければならぬのである。

醫史學研究者の間に於て、博士につき最も著名にして且つ羨望されたことはその藏書の豐富なことである。私は今以て一覽したことがないが、曾つて博士の發表された乾々齋藏書目錄に依つて、その數の巨多なるは勿論、容易に入手し難き稀書珍籍が、醫學の各部門に亘つて普く網羅蒐集されてゐるのを知り、富師の藏書數萬冊が既に京都帝大及びその逝去後慶應大學に一括して納められて

から後は、この乾々齋文庫の右に出づるものはなく、我邦に於ける第一のものであると考へる。たゞ玆に興味深いことは同じ古醫書を蒐集されたとしても、富師の古醫書に對する取扱と、博士のそれとは甚しい相違のあることであつて、富師の取扱は亂暴といふか裝訂の修理などは固より頓着されず、手許に重複してゐる古書を他に引用する際には、その部分を切り取つて用ふるといふ有樣であるが、之に反して博士は一々裏打をし、裝訂を仕替へ、立派な帙を作り、一冊づゝ之に納めて大切に保存されてゐたといふことであつて、こゝに富師と博士との人柄の相違も顯はれて、吾々はいつもながら、之を對照して微笑し合つたものである。

とまれ乾々齋文庫は、博士が巨費を投ぜられたものであらうことは暫らく措くとしても、十數年の長きに亘り粒々辛苦して蒐集された心魂の結晶であり、復たと得難き當代唯一無二の寶庫であるので、是非一括して何處か學問上最も有意義な場所に保藏され、永世博士の斯學に對する功績を偲ぶよすがとしたいものである。若し斷簡片篇でも散秩したならば、恐らく最早再び斯やうに蒐集さ

れることは絶對に出來ぬことであらう。蓋し古典史料の蒐集は、唯金圓を多く積んだからとて爲し得るものではなく、好學精神の旺んな人で、斯學に關し十分の知識があり、且つ長い年月に亘つて倦まず弛まず努力し續けなければ到底爲し遂げ得ざる大事業であるからである。

博士とは、長いおつきあひのこと故その長逝に對し、私人として痛惜の情切なるものあることは云ふまでもないが、之は暫く惜き、學界人として、博士の長逝に對し痛恨哀惜に堪えないのは、博士がかくまで苦辛慘憺して蒐集されたこの貴重な文庫を、十分に驅使活用されずして逝かれたことである。之は恐らく博士自身も隨分思ひ殘りのことであつたらうと憶察し、懷ひ一度びこゝに至る毎に吾が身に引き較べて、云ひやうもない哀惜の情に迫られるのである。

博士の醫史學に關する研究論文は、相當の數に上つてゐる。その中重要なものは、醫史學會に於て將に編纂せんとする文獻紀要中に漸時載錄して永久に傳へ、その業績を顯彰せんと計畫してゐる。しかるに博士の醫史學に關する單行本としては醫家先哲肖像集、日本衞生史、及び溫泉史に關するものが代表的のも

のである。之等も固より貴重な著述であるので、餘人ならば、之のみを以て十分に滿足し得らるゝのであるが、私が博士に期待してゐたものは、乾々齋文庫を傾け盡して、その保藏される醫史料を十二分に活用し、醫史學に關する畫期的な大著述の完成であつた。之につき私は數年前から機會ある毎に博士に「小さな著述や、手近な仕事は必ずしも君を要さない、誰れかやつて呉れる、君は折角あれほどに巨多な古文獻を手許に保藏されてゐるのであるから、之を十二分に驅使活用し、新しい企畫の下に日本醫史學の大著述を完成され度い、かくて君の醫史學に於ける足跡を後世に遺され度い」と再三慫慂したのである。博士は、この私の切言に對し、いつも「その中に」と微笑されておられたので、心中大に期するところがあつたと考へ、その中には必ず醫史學に關する畫期的な大著述が發表されることと密かに期待してゐたのである。しかるに遂ひにその計畫さへも聞くことを得ずして空しく逝かれたのは、實に痛恨に堪えないのであつて、博士も恐らく今暫らくして身邊に餘裕を作つてから着手されるつもりであつたのであらう。啻に博士のために惜むのみならず、學界のためにも替へ難き痛恨事である。

今これを錄することが、圖らずも博士の追憶となるのは、私としても堪え得ざるところであるが、之を憶ふ毎に返す返すも遺憾の極みである。嗚呼

（昭和一八、二、一四稿）

藤浪剛一先生と仙臺

山形敞一

一、はしがき

昭和十七年十一月二十九日午前十時五十分藤浪剛一先生は溘焉として急逝せられた。誠に哀悼の極に堪えない。

余は東北帝大醫學部醫史學同好會の一員として藤浪先生より三度び醫史學講義を拜聽した丈でなく、仙臺に來られゝば常に講堂に、旅館に親炙しつゝ御教示に預つた。加之學會等にて上京の際はいつも慶應大學や、御宅に參上して御指導を仰いで居た丈に、眞に斯界の師表を失つた茫洋たる寂寞感に堪えないのである。

余は玆に仙臺に於ける藤浪先生を偲び、東北帝大醫學部醫史學同好會の發達

に對する先生の御厚情を述べ、以て先生の御高德の一端を記したいと思ふ。

二、東北帝大醫學部醫史學同好會と藤浪剛一先生

東北帝大醫學部の學則には醫史學が特殊講義として規定せられてゐるが、それが最初に實現したのは昭和六年十月であり、第一回の講師は富士川游博士であつた。この講義を期として昭和六年十月二十一日富士川博士を圍む醫史學同好者の懇談會が開かれ、次いで昭和七年五月十四日生理學教室の佐武安太郎教授を會長に推戴して東北帝大醫學部醫學史同好會の發會式が擧行せられるに至つた。

余は當時醫學部に入學した許りであつたが直ちに入會して會員となつた。昭和七年には六月に例會が開かれ、昭和八年一月の例會に於ては主として研究方法を協議したが、昭和八年三月二十六日には本學卒業式記念講演に來仙せられた藤浪鑑先生の歡迎座談會を開き「醫史學の輪郭」に就いて講話を伺つた。

昭和八年四月例會に於て特殊講義を申請する件を決定し五月例會では本學解剖學教室の長谷部言人教授(現東大理學部人類學教授)より「醫學史研究ニツキテ」といふ講話があり、六月例會では元仙臺醫專産婦人科學教授栗原永之助氏より「醫專時代ノ話」といふ座談があり、九月例會にて第二回特殊講義に富士川游博士が來仙せられるに就き展覽會を開催する事に決定した。

斯くして昭和八年十月第二回醫史學講義があり、富士川博士は「日本醫學の變遷」に就て講述された。之を機會として醫學史資料展覽會が十月七日、八日の二日間開催せられ、富士川博士は先づ十月五日には是等の資料に基き「我國醫學史の展望」八日午後には「東北醫人傳」なる講演をなされたが、この時慶應醫史學研究會の大鳥蘭三郎氏と共にわざ〳〵御來仙になつた藤浪剛一先生には「德川時代科學者ノ受難苦心」なる講演をなされた。之實に藤浪先生が本會の爲に御盡力下されるに至つた濫觴である。

此の擧に刺戟せられて會員研究發表が續々行はれるに至つた。卽ち十二月例會に靑木大輔氏は「仙臺藩ノ醫育ニ就テ」といふ研究を發表せられたが、之が醫

史學同好會パンフレット第一輯である。

昭和九年一月例會では櫻田三六氏より「宮城病院時代ノ話」なる講演があり、四月例會では佐武長谷部兩教授より「醫史學餘談」なる講話があつたが、次いで昭和九年五月例會の時初めて醫史學同好會として記錄され、爾來本會の名稱は東北帝大醫學部醫史學同好會と稱するやうになつたのである。

斯くの如くして東北帝大醫學部醫史學同好會は斯界の耆宿富士川游博士、藤浪剛一博士の絶えざる御指導に依り發達を見るに至つたが、本會會員の研究業績は次の如くである(括弧内は發表年月)。

一、仙臺藩ノ醫育ニツイテ　青木大輔(昭和八年十二月)

二、高野長英と和算家特に内田五觀との關係　福井文俊(昭和九年八月)

三、仙臺醫學校初代學頭渡部道可弘光に就て　高橋信次、玉手英典(昭和九年九月)

四、幕末仙臺蘭方醫原雲晴先生　青木大輔(昭和九年十一月)

五、佐々城朴安と救民單方　長谷部言人(昭和十年二月)

六、仙臺藩に於ける醫師の家督相續に就て

青木大輔、古和田周助(昭和十年六月)

七、佐々城朴安の家系と被召出前後と公歴　長谷部言人(昭和十年七月)

八、佐々木中澤先生關係書翰集　青木大輔(昭和十年八月)

九、仙臺藩醫學校二代學頭奥村玄安庸之　吉池太郎(昭和十年九月)

十、東北帝國大學醫學部前史

青木大輔、吉田秀一、大森守、玉手英典、小野寺榮一(昭和十年十一月)

十一、佐々木中澤先生　青木大輔(昭和十一年一月)

十二、宮城縣下黄牛における肝臟ヂストマ病の記錄

高屋養仙青木大輔(昭和十一年九月)

十三、仙臺に於ける人體解剖に就いて　青木大輔(昭和十一年十一月)

十四、養賢堂醫書講釋に就いて、附高屋松庵信有　長谷部言人(昭和十二年一月)

十五、仙臺醫學校所御藥園に就いて　長谷部言人(昭和十二年三月)

十六、一關藩醫建部清庵由正に就いて　小野寺榮一(昭和十二年三月)

十七、鹿の角と玄澤　山川章太郎(昭和十二年九月)

十八、小關三英とその書翰　山川章太郎(昭和十三年二月)
十九、昭和十年六月仙臺醫史資料展覽會目錄並解說　青木大輔(昭和十三年三月)
二十、書翰を通じて觀たる小關三英　大久保謙一、山形敞一(昭和十三年七月)
二十一、林子平と醫學　山形敞一、大久保謙一(昭和十四年二月)
二十二、安政六年仙臺領内に於けるコレラ流行について、附高屋養仙の御用留
青木大輔(昭和十六年四月)
二十三、仙臺に於ける種痘の沿革について―藩政時代―
青木大輔(昭和十六年九月)
二十四、仙臺藩と獨逸醫學　山形敞一(昭和十六年十月)
二十五、千葉良藏明溪　玉手英典(昭和十七年一月)
二十六、文久二年仙臺に於ける麻疹の流行について　青木大輔(昭和十七年六月)
二十七、蘭方醫湊長安の事績　山形敞一(昭和十七年八月)

從つて各醫史學同好會の例會も活潑に開催せられたが、昭和九年十月醫學部良陵會主催の東京見學旅行に際しては藤浪先生の御招待に依つて十月三十一

日會員一同芝赤十字博物館の救療史料展覽會を見學さして戴き、且つ又十一月二日には信濃町の慶應病院にて大鳥蘭三郎氏等慶應醫史學研究會の諸氏と懇談會を開いて下された。當時日本に於ける唯二つの醫史學研究會の懇談であつたのである。

第三回目の醫史學講義は昭和十年三度び富士川博士より拜聽したが、昭和十二年十一月の第四回目の醫史學講義は藤浪剛一先生を御依囑して「西洋醫學の發達」に就て伺つたのである。藤浪先生が本學醫學部の醫史學講義を擔任せられたのは之が最初であつて、次いで昭和十四年十月の第五回目の醫史學講義には「醫師の地位の變遷」とか「德川時代の洋學」とか「繪卷物に現はれたる疾病」とか毎回獨立した項目を別けて興味ある醫史學的事實を語られ、殊に十一月五日には醫事に關係ある繪卷物を主とした展覽會を開かれ貴重な文獻を多數展觀させて頂いた。

本學の醫史學講義は隔年毎に設けられて居つたので、余は特に藤浪先生に御願ひして昭和十五年十一月二日御來仙を願ひ、「江戸時代の解剖」なる特別講演を

聞かせて頂いた。此れは醫學部長陵會學藝部主催の形式をとつたのであるが、此の時は謝禮を悉く我が醫史學同好會に寄贈された事は衷心より感激に堪へない處である。

藤浪先生は全く日本醫史學の發達を念とせられて百里を遠しとせずしてわざ〳〵仙臺迄來て下さつたのであつた。

昭和十六年九月より始つた第六回目の醫史學講義は藤浪先生の仙臺に於ける最後の講義となつて了つたのであるが、先づ醫史學の必要を強調された後、日本醫學の發達に就て各時代毎に一々文獻を示して說明され、誠に感銘が深かつた。

第七回目の醫史學講義は學年短縮の餘波を被つて昭和十七年十一月となつたが、淺學菲才の余が擔任を命ぜられた。その第二講の翌々日藤浪先生急逝の悲報を新聞紙上で知つたのである。その刹那の驚愕は未だ腦裏を離れない。東北帝大醫學部醫史學同好會は富士川博士に次いで藤浪博士をも永久に失つて了つた。もはやその御指導を受ける事は出來なくなつて了つた。此の悲痛

は極まりないのである。

日本に於て最も古い歴史を持つ東北帝大醫學部醫史學同好會は以上述べた如く富士川藤浪兩博士の心からなる御指導と御後援の下に發達を續けて來た。その間事變その他の關係で優秀なる會員が仙臺を去られて屢々起伏があつたが、今日迄隆盛を誇り得たのは一に藤浪先生の御支持があつた爲であると余は確信してゐる。而して先生今や亡し矣、嗚呼。

三、仙臺に於ける藤浪剛一先生

藤浪剛一先生が仙臺に來られたのは既に述べた如く、昭和八年十月八日に東北帝大醫學部醫史學同好會主催の講演會に於て「德川時代科學者ノ受難苦心」なる講演をなされたのに初まり、昭和十二年十一月に富士川博士の後をうけて醫史學講義を擔當せられ「西洋醫學ノ發達」に就いて講義をなされたのである。

余が親しく藤浪先生と御交際御指導を仰ぐに到つたのは昭和十四年九月より十一月に亘つた醫史學講義に際してであつた。

是れより先、余は昭和十一年三月東北帝大醫學部を卒業するや、直ちに故山川章太郎教授の門に學んで內科學を專攻したのであるが、昭和十二年秋山川教授が小關三英書翰四十七通を入手せられ、その整理研究を余並に僚友大久保諶一君(現本溪湖煤鐵公司醫院內科醫長)に命ぜられた。その業績は東北帝大文科會の「文化」に昭和十三年二月より六月迄連載せられた「小關三英とその書翰」であつて、余等は昭和十三年四月京都に開催せられた第十回日本醫學會第一分科日本醫史學會總會に於て「書翰を通じて觀たる小關三英」として報告した。此の時藤浪先生は座長として終始座間を斡旋して居られた。

此の學會より歸るや、直ちに山川教授の命に依り林子平が長崎より傳來した醫書の檢討を行ひ「林子平と醫學」と題して「文化」の第六卷第二號(昭和十四年二月)に發表した。

この論文の發表された昭和十四年には藤浪先生に依囑して醫史學講義を行ふ事に內定して居たので、別刷を謹呈すると共に九月の講義をお知らせした余の書信に對して御返翰を頂いたのが最初の文通であつたと思ふ。

「拜啓　一昨日は貴翰に接し先以て益々御勇壯之趣慶賀申上候。林子平の論文面白く拜讀致し子平に關し醫學方面を知り啓發致し候。仙臺は大藩だけに幾多の資料多きことに候。御研究には羨しく存じ候。

近時は學生間に醫史學研究の氣運が拓け千葉阪大にも研究會が出來、千葉には五月に講演と展覽會を開き候。九月には阪大よりの希望もあり、その準備を致すことに候。慶大にはその人を得ず自然立ち消えにて殘念に候。その內には學生に呼びかけて見たく存じ候。その節は御後援願ひ度候。

溫泉のこと吳々も御願上候。先日仙鐵から相談有之候。東北は仙臺大學にて執行するが適當にて、是非山川先生へ泣きつけとケシかけし次第に候。今後溫泉治療相談所を大學に設置し眞の溫泉治療の指導を御願ひ致したきと存じ候。

九月には再び講義の機會之有候御知らせ難有存じ候。山川教授によろしく御傳へ願ひ上候。草々

六月三十日　　藤浪剛一

山形學兄』

この文中の「溫泉のこと」と言ふのは余が東北溫泉協會の依囑に依り、山川教授の命をうけて岩手縣花卷溫泉に昭和十四年八月溫泉療養相談所を開設する事になつたに就いて、此の計畫が藤浪先生の御提唱に基いて立案せられた丈に、激勵して下さつたのである。

この研究業績は「岩手縣花卷溫泉に於ける療養相談所調査成績特にその飲泉療法に就て」と題して加藤茂學士と共著で藤浪先生の主宰する「實踐醫理學第十年第三號(昭和十五年五月)」に發表させて頂いたが、その掲載は昭和十四年九月御來仙の際決定したのである。

此の年の醫史學講義は山川先生の御希望に依り毎回獨立した項目を別け、「醫師の地位の變遷」とか「德川時代の洋學」とか「繪卷物に現はれたる疾病」とかに就いて興味深い講義を拜聽したのである。殊に昭和十四年十一月五日には繪卷物及び自筆本と寛永以前の古醫書の展覽會を開いて下された。

その御交涉に對する速達の御返信は次の如くであつた。

「御手紙を拝見致しました。十一月五日(日)の展覽會のこと承知致しました。小生の出すべきものは別紙の如き次第に候。繪巻物は凡そ四尺ばかりの幅面より、五尺まで、但し疾草紙は三間ばかりを要し候。今回は趣味本位として、自筆本と古書寛永まで)を限度と致し候。圖譜は外科解剖のもの及び本草のものと致し候。

右佐武山川兩教授と御相談くだされ度、よろしければ、別紙の目次直接御返却くだれ度、註」を加へて印刷の出來るやう原稿として御送附すべく候。遺墨は兩教授御手元にて澤山と存じます、尚錦地よりの御出品あれば十分と存じます。

藤浪生

山形大兄

十月二十五日」

とあるやうに仙臺の醫史學同好者の爲に貴重なる文獻を多數展觀させて頂いたのである。

此の展覽會には余も鄉土醫家の醫籍若干を出品したが、その中に伏見醫員大

橋主水政房が天保四年より八年にかけて筆寫した高野長英の「居家備用」十卷を出品した。之は前年四月京都の學會の際古書肆より購入したもので、蟲損じ多く十冊で一圓であつたが、仙臺に於て一枚一枚裏打ちをして製本し直したら九圓もとられた曰く付きのものであつた。

余は何氣なくその話を藤浪先生に申し上げたのであるが、その翌週の講義終了日に藤浪先生は余に「異疾草紙」一帖を贈られた、その辭に曰く「山形學兄に贈る此模寫決して善きものに非らざるも市島春城氏の愛藏せしもの殊に舊藏者雨宮氏の藏印に於ては讀書子の服膺すべき警句である。昭和十四年秋十一月講義終了の日　藤浪剛一」と記された。因に雨宮氏藏書記には「蓋觀書者澄神端慮淨几焚香勿捲腦勿折角勿以爪侵字勿以唾揭幅勿以作枕勿以夾紙隨損隨修隨開隨掩則無傷殘」とあつて眞に余等の拳々服膺すべき警句である。此の事に關聯して藤浪先生は書籍は愛書家より愛書家に傳はるべきものであるとの見解を披歷された事であつた。

東北帝大醫學部の醫史學講義は隔年毎に行はれる事になつて居たので、余等

は講義のない年度に於ても講演會の形式で藤浪先生に仙臺に來て頂く事の内諾を得たのである。それが昭和十五年十一月二日に實現された。

『拜啓　益々御多祥奉賀　暑中は又々溫泉地に御足勞を煩し難有存じ候。扨て醫史學講演會のこと承知致し候。小生は十一月二日の土曜日なれば差支無之候。別に貴會からの費用御心配御無用に候。山崎佐君は交涉致し同伴致すやう二三日の内に何んとか返事致すべく候。

山川教授へもよろしく御傳言くだされ度候　草々

十月十一日　　藤浪剛一

山形學兄』

二白　別刷の手違は申譯無之候。印刷所へは廻しくたされしと存候』

此の時は山崎佐博士も御一緒に御招ぎする計畫であつたが御都合つかず止むを得ず藤浪先生御一人御來仙と決定した。

『前略　本日御手紙拜見仕候。扨て十一月二日の朝仙臺着直ちに仙臺ホテル(驛前)に荷物を預け申しそれより適宜の時間に參上致すべく候。その節持參の

解剖圖譜陳列すべく候。圖譜は十通ばかりに候。

各解剖したる時代に寫生したる原本模寫に候。卷物に候。それを展觀致したく机を構へていただけば幸甚に候。約一時間ばかりの豫定に候。演題は「江戸時代の解剖」といふことに致して置き候。

時によると慶應の學生北里文太郎北里柴三郎先生の息醫史學を專攻したき希望目下醫科三年生が參りたきと申し居候間參上致すかも不知候。その節よろしく御願上候。

右要用まで　草々

十月二十五日朝　　藤浪生

山形學兄』

此の時は慶應から北里文太郎、黒河内谷一の二君が隨伴して來られ、佐武、伊藤、黒屋、古賀の諸教授御臨席の下に東一番丁紅谷で歡迎晩餐會を開いたのであつた。藤浪先生は國民服で颯爽として居られた。當時仙臺では珍らしかつたのである。

富士川博士病篤しといふお話を藤浪先生から承つて暗膽たる氣持になつたのは此の頃であつたと思ふ。

昭和十五年十一月六日富士川博士歿後日本醫史學會理事長に就任せられた藤浪先生は機關誌「中外醫事新報」を日本醫史學雜誌と改題し、紙幅を縮少されて大いに更生の實を擧げられんとしたのである。「日本醫史學雜誌」は藤浪先生の年來の素志であつたらしく、『どうしても富士川さんが承知なさらないのでネ』と屢々洩れ承つてゐた事である。

昭和十六年一月十三日付の藤浪先生の御書簡にはこの決意が伺はれ余も微力乍ら僚友を說いて會員擴充に努めた次第であつた。

『拜啓　皇紀二千六百一年を迎へ一層國民奮起すべき歲と相成候。益々御壯康喜び申上候。扨て舊臘書籍落掌、當時御返事も致さず失禮仕候。

仙臺醫史學會も潑溂之事爲斯界慶賀に候。日本醫史學會も富士川博士を失ひて玆に建直し一層努力致さねばならぬ次第と相成本年より會誌の大さ、改題、と共に揭載の體裁も更め候。

目下三百九十名の會員に候へば本年內に五百名と致したく努力致すことにて小生が萬端引き受け候間此後の御後援願ひ度候。

玉稿是非御寄せくだされ度鶴首致し居候。仙臺にも溫泉相談所が出來候事は確かに溫泉淨化の第一步にして療法本義に向ふことに候、大に期待致し候、御懸命御努力願上候。

宮城縣廳に縣立溫泉研究所を作り大學に移管するやう舊秋より運動致し、本年には知事に具體的進言致すことと相成、何れ再度貴地に參ることと存じ居り候。御地も寒さ一入と被存候少々これには閉口に候。

時節柄御自愛くだされ度候。尙山川教授へもよろしく。草々

一月十三日　藤浪剛一

山形學兄』

この文中の原稿といふのは昭和十五年八月秋田縣大湯溫泉の療養相談所を開設した時の調査成績を指すものである。當時余が恩師山川教授は五年前摘出された直腸癌より肝臟癌を併發され危篤の病床にあり、昭和十六年二月四日

遂に鬼去遊ばされたので、追悼記念論文集が編纂せられる事となり、「秋田縣大湯溫泉に於ける療養相談所調査成績殊に二三溫泉學的研究」として東北醫學雜誌第三十二卷第一號(昭和十八年一月)に發表したものがそれである。

昭和十六年九月より十一月に亘り毎週月曜午後に行はれた醫史學講義が藤浪先生に御面接する最後の機會となつたのである。

先生の講義は例年一週一回月曜午後四時からであつたので、日曜一日や月曜の午前中は仙臺の古書肆を巡歷せられたやうである。余等がいつも行く書肆の名など聞かれて出掛けられた。或る日など丹波柳汴の「藥雅」の古寫本を購求せられて『之は寫本しか傳つてないものですよ』と云つて余に下さつた事もあつた。

余は講義終了後はいつも靑木大輔博士やその他の醫史學同好會の會員などと先生の宿舍である驛前の仙臺ホテルに出掛けて夜が更ける迄醫史學上の質疑をしたり、いろ〳〵御指導に預つた。余の「湊長安と醫學」(日本醫史學會雜誌揭載豫定)はこの頃執筆し初めたもので吉田長叔の「蘭藥鏡原」を拜借したり、長安の

一子湊長生の碑文(寫)を下されたり種々激勵して頂いたのである。

當時　藤浪先生は帝國學士院より二千六百年記念事業としての「日本醫學史」の執筆を依囑されてゐられたので腹案などを承つたりした事もある。「日本衞生史」(日新書院刊)はこの頃既に執筆し初めてゐられたやうであつた。又出來れば東洋醫學史も完成せしめたいと云つて漢醫學研究の重要性を示唆された事もある。

昭和十七年三月東京で開かれた第十一回日本醫學會の醫史學會總會に余は「湊長安の事蹟」を出題し、藤浪先生に御目にかゝる事を喜んで上京したのであるが、先生を座長席に見出し得ず、北里文太郎氏より Asthma cardiale にて慶應病院に御入院中であると聞き、豫後を憂慮して居つた次第であつた。

然るにその後も「日本醫史學雜誌」の例會消息で藤浪先生が再び活躍の様子を拜承して斯界の爲に大いに慶祝して居たのである。

昭和十七年九月京都帝大圖書館より富士川本目錄が五部届いた。之は富士川游博士が京都帝大に寄贈せられた醫書の目錄であつて藤浪先生より兼々整

理中であると承つてゐたものである。然るに之が藤浪先生の御好意とわかつて大いに感激した次第で、いつも乍ら東北帝大醫學部醫史學同好會へ寄せられる御厚情には唯頭が下る思であつた。

『拜啓　益々御多祥奉賀候。扨て京大富士川本目錄は京大より直接十部寄贈致したる筈に付、圖書館に御問ひ合せくだされ度候。先般小生より十部を寄贈のこと依賴しで置き候。御一報くだされ度候　草々

九月二十七日

山形助教授殿』

藤浪先生よりは醫史學上の論文別刷は常に頂戴してゐたし、乾々齋文庫架藏醫書目錄も頂戴してゐた。昭和十四年春上京した際にはわざ〳〵書庫を拜見させて頂いた。今またこの御厚志に接しては何とも御禮の言葉も出ない程であつた。

東北帝大醫學部の醫史學講義は隔年毎に行はれる豫定であつたが、學年短縮で繰り上げ昭和十七年の秋學期に特殊講義として余が擔任を命ぜられた。余

は直ちに藤浪先生に學内の事情を御相談申し上げると共に、種々御指導に預つた「湊長安と醫學」の原稿を御送りしたのに對し、御懇篤なる御返翰を賜つた。而して之が余の所藏する藤浪先生の最後の遺筆となつたのである。

『拜啓　先日は御手紙をありがたく存じ上げ候。玉稿は正に落掌、本年では締切になりました故に、來春匆々に、二回に分載致すべく候。三十部の別刷も承諾致し候。

今度醫史學講義の御擔任は誠にふさはしき御事と存じ候。是非斯學の爲めに、御盡力くだされ度候。新進の氣風は大に貴大學の醫史學を發揚することと存じ慶賀に堪へず候。

慶應では第四年級で講義致すこと故に毎年一月より開始致し居り、一週一時間の割にて朝八―九時として、よく學生が出席致し居り候。御參考までに申し上げ候。

時節柄御自愛くだされ度候　草々

藤浪生

山形學兄』

この書翰には日付はないが、封筒には東京中央、十七年十月三十日午後八―十二時のスタンプがあるが、余の住所を書きちがへた爲に返送せられ、十七年十一月五日午後零―四時のスタンプで大學宛に再び御送り下されたものである。

斯くの如く御元氣なお便りを下されて、余を激勵して下された藤浪先生はそれから一ケ月足らずの間に御急逝になつたのである。

余は新聞紙上に藤浪先生の赴報を見て暫らく我眼を疑つた程であるがその後御遺族よりの死亡通知に接しては悲しむべき現實として認めざるを得なかつた次第である。

四、あとがき

藤浪剛一先生は遂に逝かれた。先生は日本醫史學の發達を念とせられ度々仙臺迄來られて余等を鞭韃し、指導せられた。

余等が藤浪先生の恩義に酬ゆるには東北の醫史學會を發展せしめ、以て日本

醫史學會の興隆に資せんとする以外にはないと信ず。

東北帝大醫學部醫史學同好會は今回更に機構を整備し、數十名の優秀なる會員を擁して研究に精進してゐる。余等の目標は東北に於ける醫學の發達を闡明し、以て今後に於ける日本醫學の建設に資せんとするにあるのである。

冀くは藤浪先生の御靈永へにみそなはしまさん事を。

藤浪先生と醫史料

緒方富雄

一

藤浪先生と私との交渉がはじまつたのは、私が醫史學會の仲間にいれていただいた時からである。かれこれ十五年になる。先生と私とをむすびつけてゐたのは、いふまでもなく醫史學であるが、何といつても結局は先生のあのゆたかな醫史料蒐集であつた。先生の蒐集は、故富士川先生のあの開拓的先驅的な蒐集よりは、よほどあとからはじめられたものであるが、しかも今日ではその量からいつても質からいつても實に大したものである。藤浪本には、富士川本とはまた別の特徴があり、貴重さがある。ことにその手入のよさは比類がない。それほど大切にしてゐられるのを、先生は決して死藏せられなかつた。

「よかつたらお持ちなさいませ」

ただお宅で拝見するつもりでうかがつても、先生はかういつて、私にこころよく借してくださる。私にはいつも、心をあけつぱなしに開いて、あたたかい好意を示してくださつた。

醫史料らしいものをほとんど持ちあはせぬ私が、あの史料この史料と、一通り寶物を見たやうな氣がしてゐるのも、醫史學的な話ができ、論文がどうやら書けるのも先生の蒐集に負ふところが大きい。

二

それだのに、先生との交渉は水のやうにさらりとしてゐたやうな氣がする。しかし決して疎遠なのではない。

それは世俗的な一切のものを超えて、百年三百年前の先哲の醫史料に接してゐる時の、あのしみじみとした氣分と似通つたところがあるやうでもある。何といひあらはしてよいかわからないが、味はつて盡きないものである。

三

この二年ばかりは、帝國學士院編纂の「明治前日本科學史」の醫學部門の執筆のことで、私たち分擔執筆者一同は、先生を親柱とたのんでおすがりしてゐた。

例の心臟の御病氣以來、私たちの仲間も大いに氣づかつてゐたのであつたが、あの朝、大鳥蘭三郎君から先生の御急逝の電話を受けて、私は「あつ」と聲をたててしまつた。たうたう親柱を失つたといふ意識が、私をたまらなくさびしくした。

先生に多くの御執筆をお願ひした上、先生の醫史料蒐集は遠慮なく拜見できるやうになつてゐて、どんなに一同が力を得てゐたことか。

四

さきに富士川先生を失ひ、ここにまた藤浪先生を送つたわが醫史學の分野は、二つの大きな支柱を缺いて、かぎりなくさびしい。しかし兩先生とも立派な醫史料の蒐集をのこされた。富士川先生のは京都帝國大學におさめられてゐる。

藤浪先生のもきつと何かのかたちで、そつくりそのまゝ我々後進の勉強をたすけていただけるであらうと信じてゐる。

考へてみると、醫史學の分野では研究そのものとおなじくらゐに、醫史料蒐集が大切な意義を持つてゐる。そのふたつながらをゆたかに後世へ傳へられる藤浪先生のわが國の學界への寄與は、まことに大きい。

藤浪先生と日本醫史學會

赤松金芳

蕭條たる秋の十一月は、日本醫史學會にとりて殊に感慨深きものがある。それは前々理事長入澤達吉先生が昭和十二年の十一月八日を以て物故せられ、次で前理事長富士川游先生は、昭和十五年の十一月六日に亡くなられ、いままた、理事長藤浪剛一先生が、同じ月の二十九日を以てみまかり給ふた。三代續いて理事長が、月を同じくして逝かれたることは、まことに奇しくもまた悲しむべき極みである。

而して、日本醫史學會は昭和二年の十一月十四日創立協議會を開いたのであるが、その時、藤浪先生は發起人の一人として參加せられ、會の創立と共に理事に就任せられた。

藤浪先生が醫史學上に貢獻せられたる功績の多大なることは今更玆に呶々

を要せざるところであるが、今日本醫史學會にて講演せられ或は、その機關雜誌に發表せられたるところの一班を擧ぐれば次の如くである。

卽ち、先生の專門とせらるゝ溫泉學に關しては、昭和三年十二月名古屋に於ける醫史展覽會を開いたとき「浴の歷史」について講演せられたのを始めとして五年十二月の例會には「近世沐浴史話」を講ぜられ、六年二月號の雜誌には「風呂屋と湯屋」に就て、又七年五―六月號には「日本溫泉學の發達」を、八年十月號には「假造泉」に就て、それぞれ該博なる史的考察を發表せられた。

又、先生は解剖學に關する著述も少くない。卽ち、十四年五月號の「江戶時代の解剖」、同九月號の「江戶時代の解剖の仕方に就て」、十六年七月號の「福井藩の解剖」、十七年十月號の「解剖學の發達」等がそれである。なほ、日本解剖學會よりの依囑により「日本解剖史」を執筆せられたとのことである。

一般醫史學に關しては「江戶蘭學時代に飜譯或は引用せられし外醫の姓名」(十五年六月號)、「江戶時代の科學者の受難苦心」(八年十月仙臺に於ける醫史學講演)「歐米諸大學に於ける醫史學の狀況」(十四年二月千葉に於ける醫史學講演)等がある。

富士川先生が、嘗ての昔醫學史の研究に志されたるとき、先づ手始めに各地の醫家の展墓をせられ、その墓碑を調査せられたといふことを承つたが、藤浪先生も掃苔會を興して醫家を始め其他の名墓を顯彰せらるるの擧を敢てせられ、或る時には日本醫史學會と掃苔會と相提携して會合を催したことも屢々あつた。從つて醫家の墓碑に關する御研究も相當に多い。卽ち、昭和七年二月の例會には「多紀家の墓地調査」を報告せられ、次で之を八年六月號に「江戸幕府醫官多紀家の墓碑」として發表せられ、且つ十一年五月に瀧野川城官寺に於て多紀家墓前祭を擧行した際には先生が率先して盡力せられた。

更に、八年七月の例會には「奈須玄盟の墓」につき演述せられ、且つ同年十月には谷中了倪寺で奈須柳村先生追薦會を擧行した。又、十年七月には箱根早雲寺で曲直瀬道三先生展墓祭を行ひ、越えて九月には四谷日宗寺で栗本丹洲先生墓前祭を行つたとき「丹洲先生の家系と經歷」につき講述せられ、これをその十一月號に「栗本瑞仙院の事蹟と墓所」と題して發表せられた。或は又、十四年十一月號には「東京芝上行寺内に於ける桂川家一門の墓碑」、十五年十一月號には「醫家墓田錄」

等の御著述がある。尙、上述の外醫史學會と掃苔會との共同主催にて、十二年十月には杉並區慶安寺にて前野蘭化先生墓前祭を、十三年四月には古河一向寺にて田代三喜墓前祭を、十七年六月には澁谷祥雲寺にて今大路道三其他諸家の墓前祭を行つたが、何れも先生の御盡力に俟つところ多大であつた。

其他「越後長岡の蘭醫小村英庵」(四年九月例會講演)「高野長英の肖像」(九年一月例會講演)「山脇東洋の遺墨」(九年十二月例會講演)「京都大德寺塔中眞珠庵所藏の半井家畫像」十二年三月號)「橘南谿先生」(十三年二月例會講演同十月號揭載)等の醫家に關する御著述も多い。

先生の御所藏の醫書は殊に夥しく、曾て昭和十二年五月より十三年四月に至る滿一ケ年間の機關雜誌に「乾々齋文庫架藏醫書目錄」として毎號連載されたが其後、實に蒐集されたるもの亦多く、新に目錄を印刷せられて居るとのことであつたが、その刊行を見ずして逝去された。然し遺族の方の手によつて目下印刷中との事であるが右の御藏書中には、國寶又は重要美術品として指定されたものや其他醫史學上貴重なる典籍が多い。殊に今大路家のものを始め、服部甫庵、

宇田川榕庵等諸家の自筆に係るものを藏して居られる。從つて、これらに關する御研究も少くない。卽ち昭和六年四月例會には「服部甫庵傳」を講じ、十五年十二月號には、それを執筆揭載された。又、十月十二日開催の宇田川榕庵先生記念講演會にては「榕庵先生の生ひたち」につき述べ、十一年四月號に「宇田川榕庵」十五年九月號には「宇田川榕庵傳補遺」を發表せられた。而して、今大路家の記錄を基として「江戸幕府の醫官」に關する御研究が多い。卽ち「德川幕府醫師御目見の儀式」(十六年三月號)「德川幕府醫官の家督と任官」(同年七月號)「德川幕府醫官の知行高」(同年九月號)「德川幕府醫官の誓詞」(同年十二月號)「江戸幕府醫官制度」(十七年二月號)「江戸幕府醫官の序列」(同年四月號)等がそれである。

又、繪卷物類をも多數に御所藏になり、七年六月例會には「娩產に關する繪卷物」を示說せられ十五年一月及び二月號には「繪卷物所載の病に關する醫史學的考察」を公けにせられた。

而してこれら多數の御藏書卷は、醫史學會で展覽會を開くとき、或は每年の醫家先哲追薦會のときなどには、富士川先生の御藏書と共に展觀に供されること

が常であつた。

先生の御藏書は、殆んど全部帙入となつて居て樟腦又はナフタリンを入れて蟲蠹の害に備へるといふ用心深さであつて、其取扱ひは極めて丁寧であつた。しかし、さうかといつて、これを死藏せられることなく、常に活用せられ、醫史學研究を志す者が、供覽帶出を乞へば、書庫の一隅に吊された手帳にその書名を書きつけるだけで、常に快よく、それを許された。

古書に對する先生の興味は、昭和九年六月例會の「楊守敬と我が古醫書」及び十一年六月例會の「中華民國に於ける醫祖祭祀と日本刊行醫書に就て」の御講演によつて其一班を窺ふことが出來るが、醫史學上、これらの古書を取扱ふ上に於て、古文書の研究が必要であるといふ見地から、先生の主催で、醫史學補習講述の意味で、十一年十二月には繪卷物に就て、十三年四月には古文書について、夫々研究會を開催された。又、昭和十四年六月乃至十月號の「管中窺豹」及び昭和十六年七月より先生の亡くなられるまで久屋五郎の匿名を以て連載された「杏林覺え帳」は、先生の讀書餘錄ともいふべきものである。

以上は醫史學會に對して表面に現はれた先生の御業績であるが、この外裏面に於ける先生の御盡力によるもの、又少しとしない。

既に富士川先生の理事長時代に於ても、毎月の例會講演者の撰定に當つては、先生の御意見を徴することが常であつた。このために私は先生のお宅へ屢々お邪魔をしたのであるが、昭和十五年十一月富士川先生御逝去の後を承けて理事長に就任せられると共に、俄然として先生の御活動が始まつたのである。

その第一は機關雜誌「中外醫事新報」を「日本醫史學雜誌」と改題することであつた。これは先生が豫てからの希望であつてこれは度々議題に上りながら決定しなかつたのであるが先生の理事長就任と共に理事會の決定を見たのである。

第二には會の會計の確立である。從來小田平義理事が富士川先生に對し奉仕的に會計を擔任せられ、毎年の缺損をも敢て之を補塡せられて居たのであつたが、先生は會の基礎を確乎ならしめんが爲に、會費五圓を六圓に改め、且つ用紙節約の意をも含めて從來の寄贈交換等を極力廢止することに努められたる結果、漸くにして赤字は解消し、却つて剩餘金を生ずるに至つた。

第三には會員の勸誘である。從來醫史學が單なる骨董的存在の如くに誤認せられてゐる觀念を是正し、之が普及發達を圖らんが爲に會員を勸誘し、延いては會の收入をも增加せんが爲めに會員の募集に盡力せられ毎年百名增加を目標としてこれつとめられたる結果、初年度及び第二年度共に百餘名の新會員を獲得することが出來た。

第四には、機關雜誌の編輯についてである。毎月の編輯に當つては、常に清新の氣を加ふることに心を用ひられ、或は「史苑」欄の新設に或は「雜誌文籍」欄の擴張に、さては「會員消息」欄を設けて會員相互の連絡を試みられる等、誌面の刷新に努力せられた。

これらの會務を遂行するために、私は殆んど毎週火金の兩日には先生のお宅へ、會の方針やら、例會の講師の撰定やらについて、御相談のために伺つた。先生は御多忙中の寸暇を割いて快く面接せられ、晩年には薄茶を愛好せられて、いつもその御相伴に與かつた。が、その時、會員が一人でも增えたことを報告すれば、殊の外喜ばれた。雜誌の編輯についても、一々其原稿に目を通して、體裁を整へ

ることに注意せられ、時には印刷所の係りの者を呼び迎へて相談せられるといふ熱心さであつた。從つて、殊にその發行日の嚴守といふことについても、最も意を用ひられたるところであつて、原稿は既に發行日より數ケ月も前に印刷所に送ることとせられ、且つ印刷所に對し、校正や發行の督促は、時には一日に二、三度にも及ぶことも希ではなかつた。そのために發行日以前に出來上るといふこともあつたが、先生の歿後、卒然として、その發行日が遲延するに至つた。それは恰も休電日や人手の不足等、印刷所に於ける故障が增大したことにも起因するが、若し、先生が御存命であつたならば、此際、どういふ方法によりて之に對處せられるであらうかと思ふと、又た一種の感慨なきにしもあらずである。

以上の外、先生は曩に「醫家先哲肖像集」の刊行あり最近には「日本衞生史」の御著述があり、尙引續いて醫史學上の御研究につき執筆、單行本として刊行せられるといふ御抱負があり其一端を私に洩されたこともあつたが、今はその望みも絶えた譯である。

御逝去後、先生の匡底には、尙幾多の醫史學に關する原稿が殘されて居るが、そ

の中の「日本小兒科史」は、帝國學士院が「明治前日本科學史」を編纂するに當り、先生が委員として擔當せられたる部門の一部であつて既に脫稿せられたるものである。

是を思ひ彼を懷ふとき、先生が醫史學上に遺されたる功績の尠少ならざることに感嘆、これ久しうするばかりである。



昭和十五年頃

藤浪先生の思ひ出

大鳥蘭三郎

今日この頃私の心は如何にも空である。先生がなくなられてから早くも四ケ月、私の上に課せられた任務は餘りに重大で、先生の遺命を守り通すには今迄の何倍もの努力を必要とすることは自分にもはつきりと分つてゐながら、何か今やつてゐる仕事が手につかない様な氣持である。今にもどこからか先生の御聲がして「大鳥さん！　何をしてゐる」といはれてゐる様な氣がしてならない。先生に仕へてより丁度十年、やつと自分も自分の進むべき道が分つて來た様な氣がして來た矢先き、それを見守つて下さる先生を失つた私は思へば不運な男である。丁度私の父の場合もこれと同じである。愈々來春は卒業といふ前年の十一月に私は父を失つたのである。偶然といへばそれ切りであるが、私にはそれでは何か割り切れないものがある。

私が先生に親しく御會ひしたのは昭和七年の確か一月のことであつた。醫科に籍を置きながら世間一般の所謂お醫者になれさうもない私は藤浪先生の許で醫史學を勉強しようと決めて先生にその旨をお話しすると「ハイ、いらつしやい」と穏やかなお顔つきで、いとも氣輕に御返事下さつた。その時私はあの先生が病院でやかまし屋として有名な先生なのかと不思議に思はれた。かうして先生の教室に入れて頂くことゝなつた私は、先生の御出勤が早いことだとか、その他色々の注意を受けてその年の三月の卒業試驗が終ると早々理學的診療科教室へ入れて頂いた。教室の中へ入つて見ると成程評判の通り先生は中々やかましい方である。朝早いことには割合慣れてゐる私も毎朝七時前のお出でには驚いてしまつた。それでも感の鈍い私には先生より度々お叱りを受けたに違ひないのに、はつきりと一々そのお叱言を思ひ出すことは出來ない。却つて先生のいはれた丁寧過ぎるお言葉に何度も恐縮したことを思ひ起す。たゞ一つ入局したての私に困つたことがあつた。私は以前から耳がよくなかつたが、先生のいはれることが非常に早口なので、一層先生の御言葉がわからない。

「〇〇僕の所へ來給へ」といはれても肝腎の〇〇が何だか分らない。聞き返すことも失禮だと思つて頭を下げてわかつた顏をしてそのまゝにしておくと果せる哉お叱言である。これには隨分弱つたが、段々先生の早口の御言葉に慣れて來ると、たとへはつきりとわからなくても所謂カンで少しも困らなくなつた。私が先生より頂いた最初の仕事は日本で使はれてゐる解剖學上の語彙の變遷を調べることであつたが、命ぜられてから一週間も經たぬのに「まだ出來ませんか」の御催促の連發である。やつと出來上つて先生の所へ持つて行くと今度は原稿を御覽になつて「これは何だ『これはどうした』これじやー何のことだか分りはしない」といはれて原稿を眞赤に訂正して下さる。それを淸書して持つて行くと又眞赤になる。かくすること三四回で漸く御校閲を終つたが、その間の先生の熱のこもつた御指導に對しては私は心から感じ入つてしまつたのであつた。學校を出たての靑二才の私に對する先生のか程の御鞭撻に果して私が報ひたであらうかと思ふと何とも申譯のない次第である。

この頃お逢ひする方々が先生のお叱言の猛烈だつたことを聞かれて「ヘエー、

そんなに藤浪先生はこはかつたのですか」と不思議相にいはれてゐるのを耳にするが、さういつた方々の爲に私が知つてゐる限りでの先生のお叱言の最上級猛烈なるものを御紹介したい。確か、私が入局してから二三年後のことであつたらう。醫局員は毎朝、前日自分が受持つた患者のレントゲン寫眞の診斷を附して先生の檢閲を受けるのが例であつたが、或る朝私の居る室に先生が來られた折にこの檢閲を受けに來た或醫局員があつた。私とは少し離れた處で先生はその人の差し出す寫眞を見てゐられたが、何か二言三言いはれたかと思ふと突然レントゲンフイルムが私の傍に飛んで來た。何事かと思つて振りかへるともなく先生の方を見ると、先生はいつにない怒氣を示されて、少し顫へながら大聲で「それなら君はもう私の所を出て行き給へ！」と叱咤されて猶もフイルムを飛ばし續けられる。その人はただもうおろおろして、散らばつたフイルムをかき集める許り、傍にゐる私までが先生の凄まじい見幕に恐れ戰いた程であつた。後で聞けばその人の不注意な一言が先生の御氣に觸れたからであつたが、とに角あの時の光景は今でもはつきりと眼に浮んで來る。併し先生はよく

いはれた―「僕が叱らなくなつたらもうその人は駄目なのだ」―弟子を愛すればこそ先生は叱られるのだ。こいつは物になるぞと先生が目をつけられたからこそその人は叱られるのだ。かういつた先生の眞意を解し兼ねて先生に叛いて行つた人を私は惜しまずにはいられない。

教室の中に於けるのとは反對に外の人に向つては先生は殊の外親切であられた。學生等が病院の廊下で先生に禮をすると先生は一々叮寧に挨拶をされた。時には先生の方から先きに挨拶をされて學生の方から慌てゝ返禮するといふことさへあつた。他の醫局の人が先生に何か話すと先生は實に懇切に應待される。私は思はずその醫局員の身になつてみたい錯覺を起したこともあつた。

醫局内に於ける先生はかやうに嚴格であられたが、その他では極めて溫和であられた。私が入局してから一年程して先生を中心として「東京名墓顯彰會」が設立され、私も初めから同會に入れて頂いたが、同會の會合の時に於ける先生の細かいお心やりには少からず私は感じ入つてしまつた。今頃のはやり言葉と

なつてゐる陣頭指揮さながらに先生の應接ぶりは殷勤を極めたものであつた。座蒲團を出して下さる、お茶碗を廻はして下さるお茶を注いで下さる、知らない人はいゝ氣になつてお代りを先生に要求したりしてゐる。又其間に於ける先生の動作は極めて敏捷で、こまねづみのやうに座間を斡旋してゐられる。人一倍のろまの私はただ〳〵唖然としてゐるばかりであつた。とに角先生のなさり方は實にテキパキとしてゐた。自分が先頭に立つて皆を引張つて行くのだといふ先生の御氣持がはつきりと感ぜられた。

鈍重といふ觀念は凡そ先生とは懸け離れたものであつた。恐らく先生に關してのろいといふ樣な感じを抱いた人は一人だつてゐないであらう。先生が主宰されてゐた各種の會合はきまつて定刻通りに始められた。時にはどうかすると定刻前に開かれたこともないではなかつた。であるから先生は實に名進行係であられた。名進行係の先生を失つた各種の會合の足並みの亂れるのを危むものは私だけではあるまい。この御氣性が然らしめた故であらうか、先生はよく人の名前を言ひ違へたり、書き違へたりなさつた、それもあまり緣も

ない人なら格別、先生の身邊にゐる又當然御存知の筈の名前を言ひ間違はれる。そして多くの場合始めの一字は合つてゐるのに、次の字が違つてしまふ。例へば小田なるべきを小川とされる如きである。また講義の時に黒板に字を書かれる時に杉田であるべきを杉本とされたりなさつた。

私が先生の教室に入れて頂いて醫史學を專攻することになつたからではよもあるまいが、慾目からかも知れないが醫史學に對する先生の愛着は益々強く、どうかするとレントゲンの方を凌駕するものがあるのではないかと私には思はれた。古醫書の蒐集に於て當時先生は既に故富士川游先生と竝び稱せられておられたが、富士川先生が既に明治の頃より手がけられてゐたのに對し、藤浪先生は大正十二年の大震火災で一度集められてゐたものをすつかり失はれた後に再び始められたのであるから全く驚異の眼を瞠らずにはゐられない。内幸町のお宅の一階と二階の書庫に所せまきまでぎつしりと積まれてゐるものはどれ一つとして垂涎の種ならざるものはないが、これ等の多くが昭和の年代に入つてから集められたのであるとはどうしても考へられぬ程である。それ

丈けに先生がこれに拂はれた努力も並々ではなかつたに違ひなく、古醫書蒐集に關する先生の苦心談を伺つておかなかつたことを私は今少からず殘念に存じてゐる。先生は又これ等の本を實によく保存された。古本屋から本が來ると、大抵のものに一々上等な帙を作られ、又蟲喰ひがひどいとか、綴ぢの悪いものは或は裏打ちをさせ或は製本を直しに出される。又毎年一度は必ず曝書をされ、一々ナフタリンを入れて藏はれた。この曝書は勿論一日では到底すまず、中々大變であつたことは此頃奥様より伺つたことである。これ等の點で藤浪先生は富士川先生とはよき對照をなしてゐられた。富士川先生が書籍の保存、取扱ひに就て寧ろ無關心とも考へられる有様であつたのに對し、藤浪先生はあく迄細心周到で居られた。今日、先生御遺愛の御本を手にする時、きちんとした一つ一つの帙、それを開けばパラパラと落ちるナフタリンの粉、蟲喰ひを丹念に繕つた裏打ち等先生の御心盡しの程が偲ばれて感慨一入である。さればといつて先生はそれ等の本を御自分一人だけのものにするといふ様なことは決してされなかつた。請はれゝば貴重なものでも他人へ喜んで貸與された。私はよ

く先生が貸出帳をひろげながら「僕は人に本を貸すのを蟲干しが出來るから、丁度いゝと思つてゐますよ」といはれたことを思ひ起す。筆が思はぬ方へ外れてしまつたが、そういふ譯で先生の醫史學への執着は私の入局以來益々固められて行つた。慶應の醫學部が創立以來醫史學を正課として富士川先生を講師に迎へてゐることは慶應の誇りの一つであると先生は口癖の如くにいはれ、その爲にはもつと醫史學への關心を慶應の中に高めることが必要であることを說かれて醫史學研究會を慶應で始めることをおすゝめになつた。その創立の相談の爲に私達數名の者が先生のお宅へお招きを受けたこともあつたりして慶應醫史學研究會は昭和八年七月に設立されたのである。かくて先生のお肝煎りによつてこの會は誕生したのであるが、この會の責任者ともいふべき私が至らぬため、現在猶會は存續してゐるものの先生の御期待に沿ふ樣な仕事を是迄してゐないことはまことに慚愧に堪えない。

こゝで醫史學と先生といふことに就て述べることをお許し願ひたい。先きにも申した通り日本の古醫書の蒐集に於ては先生は故富士川游先生と匹敵し

てをられたが昭和三年に日本醫史學會が創立され、「中外醫事新報」をその機關雜誌に有することとなつてから先生は同會の理事として日本に於ける斯學の確立發展に力を盡されたのみならず、「中外醫事新報」に屢々論文を發表されて大いに後進を誘掖されたのであつた。先生が最初に發表された醫史學上の論文は溫泉治療學の歷史に就てであつた。昭和三年の中外醫事新報誌上に「フーフェランドと溫泉治療」と題する論文を發表されて先生の專門とせられる溫泉學の立場から鋭き史眼を紙背に徹せられてゐる。然し先生はこれより前卽ち大正十五年頃より沐浴に關する記述を屢々發表せられ、史的觀察を盛んに試みられた。而して此等の論文の大部分は先生がその豐富なる藏書を驅使されてなされたものであることはいふ迄もない。昭和四年頃よりは更に溫泉に關する古書籍の解題を手懸けられ、兼ねて日本に於ける溫泉學の先驅者の顯彰に努められた。日本醫事週報第一七六九號(昭和五年二月十五日)より七回に亘りて連載せられた「溫泉古書錄」は有馬、伊豆、東北、箱根上越等の各地の溫泉に就ての古書の解題であつて今日私共にとつてはまことに有難い便利な文獻である。昭和六

年には「東西沐浴史話」が發刊された。先生の溫泉の歷史に注がれた探究心の所産であるのはいふ迄もないが、文字通り東西の溫泉の史話を集大成せられたもので、その內容はいはずもがな、その表裝といひ、體裁といひ實に結構なる御本である。近々の中にこの御本の再版が元のまゝの體裁を以て公けにされると承つてゐるが、まことに宜なる哉の感を深くする次第である。かく溫泉學の方面から醫史學の領域に進まれた先生は更にその探墓の癖を押し擴げられて或は德川幕府の醫官多紀家一門或は奈須恒德寺の墓域を改修せられて嘗て我國の醫學に貢獻せし人々の德を高揚せられた。そうして先生は溫泉學のみならず、次第次第に醫史學の一般的の分野に步を運ばれた。昭和十年には服部甫庵・栗本丹州の傳を明かにせられ、翌昭和十一年には宇田川榕庵傳(未定稿)を發表されてゐる。これ等の論文は何れも先生ならではなし得られぬもので御所藏のあらゆる資料を使はれ、猶且つ百方考證を重ねられてなつたものであつた。昭和十二年より「中外醫事新報誌上に「乾々齋文庫架藏醫書目錄」を連載せられ、私共が依て以て研究の對象とするべき古文獻の所在を明かにされた。私共がこの目

錄によつて得た恩惠が少からぬものであつたことは勿論である。この目錄を拜見して私共は先生の數多くの御藏書の中でも舊今大路家所藏のものと舊服部家所藏のもの及び舊宇田川家所藏のものとが最も貴重なるものであることを知つた。後の二者は既に發表せられた先生の御研究の中にその一部が用ひられてゐるが、前者に就てはこれ迄少しも觸れられずにあつた。この今大路家舊藏書こそ先生の貴重なる御本の中でも最も纏つた又最も貴いものである丈けに、先生がその祕庫を私共の眼前に開いて下さることを信じ又願つたのであつた。然し先生がこのことに關して發表なさつたのは昭和十六年になつてからであつた。恐らくこれ等の文獻が最も根本をなす重要性から先生は愼重の上にも愼重を期せられたからであらう。而かも先生の醫史學への愛着は益々強く、東北帝大に於て醫史學を講ぜられる爲に土曜日午後に東京を出發され、月曜日の午後四時よりの講義をすまされるとすぐその日の夜行で東京へお歸りになるといふことを毎週繰り返へされた相當な強行を始められたのも此頃からであつた。私共としても先生の御身體のことを御案じしなかつたのではな

かつたのであるが、丁度その頃先生は尿に蛋白が出るとかいつておられた仙臺へ行かれることを先生は非常に樂しみにしておられ、又非常に御元氣だつたので、強ひてお止めすることも出來なかつた。昭和十四年五月一日には先生の母校の後身である岡山醫科大學に於ける岡山醫學會創立五十周年記念會の席上で「文化史より見たる我が醫學の發達」と題する特別講演をなされた。先生御自身も頗る快心のことであられたに違ひないと私は感じた。昭和十五年十月には日本赤十字社が紀元二千六百年奉祝記念として「衞生日本の回顧展覽會」を催した時先生は「衞生日本の回顧」なる講演を行はれ、日本に於ける衞生に就ての思想の消長、それの一般民衆生活との結合の變遷等を述べられてゐる。かくの如くして先生はこの頃よく口にされてゐた富士川先生の後繼者たるべく大いに張り切つて醫史學へ精進されたのであつた。

一方中外醫事新報には昭和十四年に「江戸時代の解剖」「江戸時代の解剖の仕方に就て」といふ論文を發表され、昭和十五には「繪卷物所載の病に關する醫史學的考察」の他尚二三の論文を公けにされてゐる。是等のものが夫々の領域に於て

高く評價されるべきものであることは論を俟たない。昭和十五年十一月富士川游先生がなくなられ、藤浪先生がその後を襲はれて日本醫史學會理事長に就任されたのであるが、それからの先生の醫史學に對する活動振りは全く物凄まじいものであつた。醫史學會の統率、醫史學雜誌の編輯等に就ての先生の御骨折りは並大抵のものではなかつた。醫史學會の基礎を一層固める爲に新會員の獲得に努められ「中外醫事新報」を「日本醫史學雜誌」と改め內容の充實を一段と計られた。殊に雜誌の發行は時局下遲れるのが寧ろ通例であるとされてゐるのに、獨り「日本醫史學雜誌」のみは定日にキチンキチンと發行されてゐた。これは全く先生がうるさい程印刷所に督促された結果であつて、藤浪先生なき今日この雜誌の發行が遲れに遲れてゐるのを見るにつけ、先生の熱意の程には今更めて頭を下げずにはゐられない。或はいふ人があるかも知れない。「この時局下雜誌の發行のおそい早いは問題ではない」と。然しやれば出來るのである。やれば出來ることをやらないで出來ないままにしておくのは、この時局下に於て果して如何であらうか。藤浪先生の御氣性の一端がこゝにもよく表はれゐ

ると私はつくづく考へてゐる。一事が萬事「日本醫史學雜誌」の編輯には殆んど先生一人で當られたといつても過言ではない程細かい點に迄注意された。猶その上、前に私が熱望してゐた先生の御所藏である今大路家記錄を使つての先生の研究が發表されたのは此年に入つて早々のことであつた。卽ち昭和十六年の「日本醫史學雜誌」に「德川幕府醫師御目見の儀式」「幕府江戸醫學の一補遺に就て」「德川幕府醫官家督と任官」「德川幕府醫官の知行高」「德川幕府醫官の誓詞」等の諸論文を發表されたが、これ等は何れも舊今大路家記錄をお調べになつて成つたものである。かくの如く先生は研究に、指導に、育成に日本の醫史學の爲には雜用と思はれることまでもなされて、富士川先生なき後の醫史學の陣營の興隆に獻身的努力を續けられたのであつた。先生のこの御努力は忽ち效を奏した。會のあらゆる基礎も安定となり、會員數も日に月に增加し、醫史學雜誌に對する世評も著るしく良好となつた。每月の醫史學會の役員會席上でこれ等のことを報告された先生のお顏には快よい微笑がいつも浮んでゐたことをはつきりと思ひ出す。越えて昭和十七年の「日本醫史學雜誌」には「江戸幕府醫官制度」「江戸幕

府醫官の序列」なる二論文を公けにされ、前年來の舊今大路家記錄に就ての研究の結果を示されてゐる他に「解剖學の發達」なる一文を著はされ解剖學史に關する先生の業績を統一綜合されてゐる。更にこの年度の五月號の醫史學雜誌より先生は久屋五郎の筆名の下に「杏林覺え帳」なる一欄を設けられて、醫史に關する抄錄挿話を連載された。かうして富士川先生の後繼者に自ら任じられた藤浪先生は鋭意日本醫史學の爲に御奮闘下さつたのであるが、天は忽如として先生の命を奪ひ、私共を啞然たらしめたのである。

先生の醫史學に關する論文の數は頗る數多いが、纏つた御編著としては昭和十一年發行の「醫家先哲肖像集」及び昭和十七年發行の「日本衞生史」との二つである。その他に「東西沐浴史話」「溫泉知識」の二書は溫泉關係の御著述であるが、これ等の兩書のうちには醫史學的論說が豐富に載せられてゐる。いはゞ溫泉學と醫史學との兩域に亘るものとなすことが出來る。併しこゝではそれはそれとして「醫家先哲肖像集」に就ての私の感想を記してみたい。この書は題名の示す如く、日本に於ける古くより明治初期に至る間の有名醫家の肖像を集め、各々の

略傳を附せられたるものである。であるから純粹の意味に於ては先生の著述といふことは出來ないであらう。然し先生が醫家先哲の肖像を集められる爲に拂はれた苦心と熱意は著述に要する創意、配慮に劣らぬものがあつたのである。先生はその序文の中で次の如くにいつておられる。

醫家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、畫像を展べて、自ら像前に酒瓶を供へ、少年の自分にも共に禮拜せしめられたことを覺えてゐる。そして、その時は何時も、祖父の師に當る人の像や、又我が家が華岡流の外科を汲んで居た關係から華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあつたのである。この家例の裡に育つた爲か、自分は何となく畫像に對して、こよなき尊重愛惜の念を持つことゝなり、次第に先哲の肖像を蒐集する機會を釀成したのである。大正の大火災に遭つた自分は、蒐集品を悉く失つたが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに一百六十餘種の畫像を藏するに至つた。之を纏めて刊行したものが、この醫家先哲肖像集の一編である。

右の文によつて先生が本書を公けにされた故以の一端は明かであるが、古へ

の醫家の人格に接することは今日の醫道の刷新に何よりも大切なるものであるとされ、それには其等の醫家の傳記と共にその風貌に親しむことが望ましいと說かれて、本書を刊行されたのである。更に又畫像に添へた讃言の持つ意義の少くないことを主張されて務めて讃の在る畫像を本書に載せられてゐる。今日私共は本書によつてこの中に收められてゐる百五十九人の醫界の先哲の風貌に居ながらにして接することが出來、傍に附されてある各々の傳記と相俟つて各人に接し、その聲咳を耳にする思ひがするのである。今日我醫道の作興が云云されてゐる時、本書の如きものが刊行されたことは時宜に適したるものとして、その意義頗る大なりといふべきである。

先生は生前史蹟の見學資料の探索、名墓の掃苔を殊の外好まれ、諸所へ御出掛になつた。私も屢々お伴させて頂いたが、今特に私の思ひ出に殘つてゐるのは一昨年の十一月二十三日に茨城縣取手方面にて行はれた掃苔會と昨年の夏埼玉縣浦和在の仲田氏宅を訪問した時のことである。先生の心臟の障碍は既にこれ等の時には起つてゐた。先生がいつもの如く御元氣に皆と行を共にされ

てゐるのを見るのは嬉しいことであり、又何か私の心を安んぜさせるのであるが、その反面に於て今の内に十分御靜養下さらぬとトングことになるといふ心配が多分にあつた。一昨年の十一月の掃苔會に出掛けた私はこんな氣持で先生を見守つてゐた。取手附近に於ける豫定の見學も盛り澤山ながら幾分早目にすんだので、取手から常總鐵道に乘つて守谷に赴き、同地の平將門の居城阯を見ることゝなつた。心なしか先生は餘り氣がお進みにならぬ樣に見受けられたが、とに角皆と共に超滿員の小さな車に乘られた。守谷に着いたのは午後三時も大分過ぎ、かれこれ四時に近い頃であつた。城阯は驛より十餘町離れた所にあつた。私は先生が御疲れになりはしないかと心配した。城阯の傍の國民學校で一休みした私共はそこから更に數町距つた丘の林の中をあちらこちらと廻つて實地に就て見學したのであるが、この間先生のお姿は見出されなかつた。果して先生はお疲れになつたからとてこゝまで來られなかつたのである。後に守谷驛に戻ると先生はいつもの溫顏をされてベンチに腰をかけて私共の來るのを待つてゐられた。私はホツトした氣持ちをしながら今日のお疲れが

お身體に障りはしないかと案じられてならなかつた。而かも取手からの上りの汽車は讐へようもない程混んでゐた。その爲先生と同じ車に乘れなかつたので途中先生がどんなでゐられたかを知ることが出來なかつた私は翌日病院で先生にお會ひするまでは氣懸りなことであつた。かういつた次第で取手に於ける掃苔會は私に嫌な思ひ出となつてゐる。

浦和在尾間木なる仲田氏邸を訪れて、同家所藏の文書類を先生のお伴をして見に行つたのは昨年の夏の暑い日のことであつた。先生のお身體について極度に心配症にかゝつてゐた私は、長い病院生活を續けられた後の先生にこの暑さが障りはしないかと又候心を痛めた。その日は午前九時に浦和驛で待合はすといふことだつたので、私は例の如く時間をキチキチに測つて浦和への車中の人となつた。途中驛で待つておられるに違ひない先生のお姿を思ひ浮べながら浦和の驛に降りて見ると同行の三上先生、北里君等は既に來て居られたが、先生のお姿は見えない。突嗟に私は異樣に感じ、又々先生のお身體に何か變つたことがあつたのではないかと氣を揉んだ。先生が定めの時刻におくれられ

たことは一度だつてなかつた。それどころかいつも定刻の二三十分前には必らず來ておられた。私が氣を揉むのも故なきわけでは決してなかつた。待つこと三十分程にして先生はお出でになつた。自働車に乘つて直ちに仲田氏宅へ向ふ。御主人仲田甲子次郎翁は既に八十有餘歳であられながら元氣に私共の質問に答へられ、明治初年の浦和醫學校の話などをされながら色々の文書を見せて下さつた。私の祖父の書いた額が掲げられてあり、又御所藏の祖父の筆になる軸を見せて下さつたこと、更に翁自身が祖父と話を交はされたことがある等は同家を訪れたこの行を私に特に印象づけた。晝食の接待を受けた後數町距つた同家の墓地に參拜し、更に畠の畦道の間を抜けて國民學校を訪れ、山口新田の見沼通船堀の模型を參觀する。更に熱心家の方々はその現場へも行くべく、先生を誘はれたところ、先生が肯ぜられなかつたので、それは取り止めとなつた。私と北里君は思はず互ひにホツトした。それより前、私と北里君は、案内の方が熱心の餘り先生を遠方に迄案内され、先生のお身體を疲らせることにならねばよいがと共々氣遣つたのであつた。先生がこの様な他人のすゝめを斷

はられたことは私の知る限りではこれで二度であつた。これを知つて私は先生もお弱くおなりになつたなあと心ひそかに淋しく思つた。國民學校から更に十町許り距れた高野長英が隱れてゐたことがあるといふ同姓高野氏宅を尋ねて、長英を偲び、浦和驛から歸途に着いたのは黄昏過ぎた頃であつた。

先生に關する思ひ出は限りなくある様に思はれる。然し筆を執つてそれ等を一々記すことは餘りにわづらはしい。また今の私にとつては到底出來さうにもない。この邊でくだくだしい漫筆を止めることにする。文中至る所で先生のお叱りを蒙る失禮の數々があるのをお詫びしなければならない。今や先生いまさず、その溫顔をほころばせ給ふて私共にお話しかけ下さることもかなはぬ望みとなつた。先生を失つたことは現實であるが、私には未だに本當の如くには思はれない。この上は私の心の中に先生のお姿をしつかりと守つて先生の遺命をやり遂げることこそ、私の先生への唯一の御恩返しであると固く信じてゐる。

師弟

北里文太郎

甲府の驛へ降りたら、夜中の十二時近かつた。驛前の俥を呼んで、先生の泊つてゐられる宿屋へ向ふ。眞暗な道である。俥がガタン〳〵とゆれる。町はもうみな眠つてゐる。

宿へ着いた。女中に「藤浪先生がおいでか」と訊く。もうおやすみだらうからわたくしの着いたことは、申し上げなくてもよい、明日の朝になつたら、わたくしを早く起して、先生に取次いでくれ、と命ずる。わたくしは、寄つぱりの朝寢坊である。だから、佐藤春夫氏が、朝起きられないので、慶應義塾の文學部を中途でやめたといふ傳說を信じて、同氏の、

ヴィッカスホールの玄關に

咲きまつはつた凌霄花
感傷的でよかつたが
今も枯れずに殘れりや

秋はさやかに晴れわたる
品川灣の海のはて
自分自身は木柵に
よりかかりつつ眺めたが

ひともと銀杏葉は枯れて
庭を埋めて散りしけば
冬の試驗も近づきぬ
一句も解けずフランス語

若き二十のころなれや
三年がほどはかよひしも
酒、歌、煙草、また女
外に學びしこともなし

孤蝶、秋骨、はた薫
荷風が顔を見ることが
やがて我等をはげまして
よき教へともなりしのみ

我等を指してなげきたる
人を後目に見おろして
新しき世の星なりと
おもひ驕れるわれなりき

若き二十は夢にして
四十路に近く身はなりぬ
人間ふままにこたへつつ
三田の時代を慕ふかな

といふ詩を誦してよろこんでゐる。然るに先生は朝が早い。わたくしが、教室へ出るのは、どうしても九時すぎになる。時には、おひる近くなつて、のこ〳〵出かけて行く。すると、先生は、教室の前の廊下を行つたり來たりして居られる。具合が悪いが仕方がない。かういふときには、既に何度もわたくしをお呼びになつたり、わたくしの部屋へおいでになつて、わたくしがまだ來てゐないことを、よく御存じなのである。逃げもかくれも出來ない。先手をうつに限る。「三田の圖書館へまゐりまして遲くなりました」などゝ方便を使ふ。先生は別にお叱りにならない。「君に本をあげようと思つてゐた。」などとおつしやつて、二階の

御自分の部屋へ上つて行かれる。

それから、わたくしは三階へ上り自分の部屋に入る。大島さんが机に向つてゐる。大島さんは朝早くから來てゐる。そして、わたくしの方へ振り向いて「やあ、また圖書館かい」と言ふ。大島さんは、わたくしが先生に嘘をつくことをよく知つてゐる。ひよつとすると、先生も、とうに御承知なのかもしれない。たゞ、しやうがない奴だとお思ひになつて、お叱りにならないだけであるのかもしれない。

しばらくすると、先生の部屋のドアがあいて、大きな聲で「文太郎君」とお呼びになる。先生は、わたくしをお呼びになるのに、主に「文太郎君」を以てされた。「文太郎君」でないときは「文太郎さん」か「北里さん」。「北里君」と呼ばれるのは、どこか、よその大學へおともしたときとか、何んとか、改まつたときだけであつた。

はなしが横道にそれた。甲府の宿屋である。滿員なので、梯子段の突きあたりの四疊半に通された。うす暗い電燈がついてゐる。女中がお茶をはこんで來る。それに、いまいふとほり、明日の朝起してくれとたのんだのである。元來、

わたくしは、先生のおともをして、もつと早くこゝへ來るはずであつた。「斷毒論」の著者橋本伯壽の墓を訪ねるためである。先生はその朝、學校で、「君、ひるまの汽車で一緒に行かうよ。いゝぢやないか」とおつしやつた。しかし、其日は丁度、土曜日で、友人と夕飯を食べる約束がしてあつたので、わたくし一人あとから夜汽車で先生のあとを追ふことにした。そして、夜遲く甲府へ着いたわけである。ふだん朝寢坊であるから、かういふときに、先生より早く起きなければ申しわけがない。

四疊半に蒲團を敷いて、手足をのばすと、如何にも旅に出たといふやうな氣がする。枕もとの電氣スタンドのあかりで、先生にいたゞいた「斷毒論」と、富士川先生の「日本醫學史」から書拔いた橋本伯壽の傳記とを眺めてゐるうちに、いつのまにか眠つてしまつた。

襖の外で「御免下さいまし」といふ聲がするので目がさめた。女中がはひつて來て、先生は、もうお目ざめでございますといふ。やつぱり、先生よりも寢すごした。顏を洗つて服を着かへ、女中に案內させて、先生のお泊りになつてゐる部屋

へ伺ふ。先生は椽側の椅子に腰かけていらしつた。

昨夜おそく着いたことを申上げると、先生は上機嫌でニコ〳〵していらつしやる。そしてお湯があるから、はひつて來たまへとおつしやる。甲府は溫泉場である。溫泉場らしからざる溫泉場である。

しかし、もうぢき、甲府の病院の吉岡さんが來て、市川の方へ案內してもらふのだと、おつしやるから呑氣に朝湯にはひつてもゐられない。吉岡さんは、先生のレントゲンのお弟子さんの一人である。

欄間の鐵齋を眺めてゐると、女中がお茶と梅干を持つて來る。先生は鞄の中から、干菓子を出して、「こつちの方がうまいよ」とおつしやる。このときに限らぬ。先生は旅行をなさるときには、大抵菓子御持參である。酒も煙草も召上らぬかはりに、甘いものは實によくお上りになつた。わたくしは、毎週一、二回は必ず、內幸町のお宅へ伺つたが、そのたびに、今どき珍しい本當の菓子を頂戴する。ひとり菓子の世界のみならず、世は擧げて、ニセ物の橫行してゐるうちにあつて、先生のところの菓子だけは本當のものであつた。つまり、それは、先生が本當に甘い

ものがお好きだつたからである。正しい菓子好きだつたから、よいものが集つたのである。と同様に先生は、正しい本好きである。本と菓子、これは先生のお好きなものゝ双璧であらう。まだ他にお好きなものは澤山ある。しかし、この二つぐらゐ、誰にでもすぐ分るほどお好きだつたものはない。序であるから、先生の好書のはなしを書いておかう。

古醫書の蒐集家、藏書家としての先生の名は高かつた。しかし、先生は單なる蒐集家ではない。それをまたひとに至極簡單にお貸しになる。先生のお宅へ伺ふと、玄關の右が本部屋で、こゝに銀行會社で年玉にくばる手帳と鉛筆がおいてある。本を拜借するものは、それに書名と年月日とを書いて署名すればよいのである。しかし、勿論、さうやつて、誰かれの見さかひなくお貸しになつたのではない。そこには自から限度があるが、さういふ無雜作な點は、富士川先生そつくりである。

先生は、淺倉屋なり文行堂なりへいらつしやると、主人が奥から出して來る本をパラ〳〵とめくつて、傍へおく。そして、次の本をまたパラ〳〵とやつて傍へ

おく。そして、お茶を飲んで、主人と古書のはなしなどをなすつて、やがて、帽子とステッキを持つと、「ぢやあ、これだけもらつておきませう」と、そのバラ〳〵やつた本の大部分を値段も何もお訊きにならずにお買ひになる。これには全く驚くのほかはない。先生のやうに古醫書に目が肥えていらつしやれば、たゞ頁を繰つただけで、お分りになるのは當然である。殊に先生は人一倍カンのよい方であるから、其の判斷の早いことはあたりまへである。しかし、そこにある本を値段の交渉もなさらずに、あつさり一山買ふといふ藝當は、ちよつと普通の者には出來ない。また、古本屋が、先生のところを目あてに持つて來た本は、大抵そのまゝお買ひになる。そのために先生の藏書には重複したものが何部もある。先生は書庫を整理されて、さういふ重複したものがあると、必ずその一部をわたくしに下さつた。それゆゑ、わたくしの書棚には「藤浪氏藏」の藏書印のある古醫書が、數多く藏してある。

古醫書を集める上に於て、先生は、わたくしに、いつも口癖のやうに、「端本を買はぬこと、」「つまらぬ片々たる書物を安いうちに買つておくこと、さういふ本はわれ

〳〵が集めておかなければ、いつのまにか無くなつてしまふ。一處方錄の類の寫本は買つてはいけない。これは富士川先生によく注意されたことであるが、集める價値がない。版本とか、ごく古い書體の古雅なものは別であるが、普通ある處方書は醫史學上の價値が殆どない。華岡流の外科書は見あたり次第買つておくべし。華岡流の外科書は寫本によつて皆その內容が少しづつ違つてゐる。これを澤山あつめれば、華岡流の歷史が分つて來る」などゝおつしやつた。

かうやつてお求めになつた本は、もし破損があれば、それをつくらふ。そして帙を作り、藏書印を押して、帙の外題貼に御自分で書名をお書きになる。先生がこのやうに本を大事にされるのは、全く書物を愛するからである。その書の著者に敬意を表されるからである。學問をするもの、古書を愛するものは、全くかうなければならない。ところが、このやうに、愛書家でありながら、先生は、決して其書物を獨占されない。それによつて勉强をしようといふものには、前に記したやうに、實に平氣で貸して下さる。今度は、かういふ本を拜借いたしたうございますとおねがひすると御自分で、書棚から、とつて來て下さる。まるで圖書館

の小僧のやうなことを氣輕になさる。これには、わたくしたちいつも恐縮してゐた。

富士川先生の舊藏書が、悉くあげて慶應義塾大學醫學部へ寄せられたときのことである。これは勿論、先生のお力添への結果であつたが、大患後のおからだもおいとひなく、大鳥さんとわたくしとを督勵し、御自身、シヤツ一枚で其整理にあたられた。富士川先生の藏書には端本が、かなりある。それを一々お分けになつて、わたくしたちにお渡しになる。その勞働は、傍で拜見してゐて、はら〳〵するほどであつた。綴絲の切れたものや、保存の悪いものは、池上氏に命じて製本させ、御自分で一々その題簽をお書きになる。本當の本好きでなければできぬことである。

先生の藏書には、藤浪氏藏の藏書印の他に、乾々齋書屋の藏書票が貼られてある。乾々齋はいふまでもなくケンケンサイと讀む。先生の一號である。此藏書票の模樣は何んとも得たいの知れぬ模樣である。嘗て先生に、これは一體、何をあらはしてゐるのですかと伺つたが、先生はたゞ笑つて何でもないよとおつ

しやつた。

富士川先生の藏書が慶應義塾に入つて、慶應義塾も古醫書を澤山藏することになり、その藏書票を作る必要が生じた。先生はそれをわたくしにお任せになつた。わたくしが版畫をやるからである。先生はなか〳〵ひとにものごとを一任するといふことは、されなかつたが、一度まかせると、その出來上りに就ては何もおつしやらない。であるから輕々しく事を行ふわけにはゆかぬ。そこで、わたくしは、これを清宮彬先生と川上澄生氏とにおねがひすることにした。わたくしが先生に言ひつかつた仕事の中で、自信をもつて先生の御期待を裏切らないと斷言し得るのは、この藏書票の製作だけである。

日曜日になると、先生は、よくわたくしに、十一時頃家へ來たまへとおつしやつた。伺ふと、先生は玄關のところに待ちかまへていらしつて「さあ行きませう」と、外へお出になる。行先は洋食屋だつたり、天ぷら屋だつたり、すし屋だつたり、汁粉屋だつたりする。さういふときは、奥樣も御一緒である。先生は御飯はあまり召上らぬが、料理は實によくお上りになる。食物屋を出ると、先生はわたくし

をつれて古本屋まはりをなさる。奥様は家へお歸りになる。或人先生と奥様を評して、大雅と玉瀾と言つた。此言には、わたくし、いさゝか賛意を表しかねる。奥様は決して玉瀾のやうな女ではない。

古本屋にはひると、先生は「何んでもお買ひなさい。わたしのところへつけておけばいゝから」とおつしやる。わたくしは、先生から「我邦に於て翻刻せられたる支那醫書の研究」といふ論文を書くやうに命ぜられてゐるので、さういふものを見あたり次第買ひ集めた。それから明治初期の醫書も集めた。

先生は殆んど大部分の古醫書をお持ちになつていらつしやるから、特にこれといつて限つてお買ひになるのではない。あるとき、中山三柳の「飛鳥川」を探しに、淺倉屋へいらしつた。ところが、淺倉屋には其上巻しかない。端本である。それから先生は文行堂へいらしつた。文行堂には、これが揃つて一冊になつたものがあつた。表紙は大分いたんでゐたが、兎も角も端本ではない。先生はこれをお求めになつた。ところが、其後まもなく、井上書店がこれのもつとよいのを先生のところへもつて來た。先生はそれもお買ひになり、文行堂の方のは、わ

たくしに下された。そして、岩波書店の「圖書解題」に此「飛鳥川」の解題をお書きなさいとおつしやる。そこで、一應讀んでみたが、哲學書であるから、さつぱり分らぬ。三枝博音氏に伺つたり何かして、やつと解題の原稿を書いたが、これは、わたくしの今まで書いた原稿の中で、てこずつたものゝ尤なるものである。

岩波書店の「圖書解題」出版の計畫が成ると、其醫書の部は先生が受持たれることに、なつた。其相談に岩波書店の梅さんが先生をたづねたとき、わたくしも其場に居合せた。先生はお好きな本のはなしなので、御機嫌がよかつた。そして、「わたしは忙しいから、大鳥君やこの北里君に書いてもらひませう」と梅さんにおつしやる。梅さんは變な顏をして學生服を着てゐたわたくしを、頼りなさそうに見た。わたくしも驚いた。まだほんの駈けだしのわたくしに、そんな大變な仕事が出來るのかしらと思つた。しかし先生は、さういふことには頓着なく、執筆者はわたしがきめるが、項目の選定はどうなつてゐるのかなどゝ細かいことを梅さんと相談なさつた。そして、最後に、大體の方針を北里君にはなしておいて下さいと、部屋を出ていらしつた。あとには、梅さんとわたくしと二人きりで

ある。梅さんは、仕方がないので、わたくしにいろ〳〵なことを説明した。

それから、幾日も、わたくしは考へた。どうしても、それだけのことをやる自信は出來なかつたが、勉強になることだし、さいはひ、其頃、幸田成友先生の書誌學の講義を聽講してゐたので、先生のおつしやるとほりにしようと決心した。

先生は解題すべき書物を次から次へと、書庫からお出しになつた。わたくしたちは、それを拜借しては解題を書き、原稿を先生にさし上げた。わたくしは勿論、謙遜でなく淺學なので、一冊の本の解題に一週間ぐらゐかゝつた。序跋と目次だけで解題をするといふ便法も知らぬではないが、わたくしには、こはくてさういふ眞似はできない。大體通讀して、わからぬところは大島さんに質問して意見をきゝ、幸田先生の教を仰ぎ、緒方富雄氏、安西安周氏、岩崎克巳氏等日本醫史學會の人々にたづね、參考書をあさるのである。そこで、どうしても一冊の解題に一週間もかゝつてしまふ仕末である。それでも、どうやら書上げて、先生の御手許へもつて上ると、先生は、いつも、やあ、ありがたう」とおつしやつて別にどこがいけない、こゝをなほせ、ともおつしやらずに、受取つて下さる。そして、しばらく

たつと「岩波から原稿料が來たよ」とおつしやつて、原稿料を下さる。その最初に貰つた原稿料十五圓なにがしで、わたくしは「たくみ」に陳列してあつた電氣スタンドを買つた。今まで雜文を書いて原稿料を貰つたことは何度かあつたが、この十五圓は自分の專門とする學問によつて得た初めての金であるので、何か記念のものを買つておきたかつたのである。解題が進むにつれて、原稿料も澤山はひつて來た。わたくしは、その原稿料がはひるたびに淺倉屋や文行堂へ行つて、欲しい本を求めた。そして、わたくしの藏書は次第に增えて行つた。

そのうちに、岩波書店の方から、人を介して、わたくしの解題はどうも長すぎるといふ抗議が出た。そのことは、わたくし自身もとうに承知してゐることなので、尤もだとは思つたが、これを簡單にしてしまふと、完全な解題ではなくなつてしまふ。しかし、出版する方の立場から見れば、少しぐらゐ不完全でも、短い解題が望ましいのも當然である。そこで、わたくしは、先生にそのことを申上げた。先生は、何も短かくする必要はない。今までどほりにお書きなさい、とおつしやる。わたくしは先生といふ味方のある以上わたくしの思ひどほりに解題しよ

うと決心した。それに、岩波書店の梅さんが、先生から「解題を簡單にする必要はない」と言はれたといふ噂をきいて、ます〳〵こゝろづよくなつて、思ふ存分に筆を振ふことにきめた。今から考へてみると、先生は、若いわたくしの書く原稿にいろ〳〵制約を加へていぢけさすまいといふお考へだつたのであらう。

わたくしのさしあげる原稿を先生は一々丁寧にお讀みになつて、筆を入れられ、削るべきところは削られたが、それについては、一言もわたくしにおつしやらなかつた。勿論、ほめられるわけはないが、この解題の原稿に限らず、學問上に關して、わたくしは先生から叱られたことがなかつた。といふのは、これも、わたくしに學問に對する自信をつけさせるためであつたのだらう。

わたくしの書くものには、先生はひとつも批評をなさらなかつたし、學問上、全く放任主義であつた。放任といつても、たゞほうつておくのではない。いろいろ方針や何かを御指示になつたが、其結果については何もおつしやらないのである。

先生は、いつも、醫史學をやるものは哲學を知らなければならぬとおしへられ

た。そして、三田の文學部へ行つて哲學の講義を聽講したまへとおつしやつた。わたくしは哲學には、あまり興味がなかつたし、文獻學的に醫史學を學ばうと思つてゐたから、哲學といふものはそれほど必要ではないのではないかと考へ、氣乘りがしなかつた。しかし、先生があまり何度もおすゝめになるので、文學部の哲學科に居られる松本正夫さんに紹介していたゞいて船田三郎教授の「哲學概論」と「歷史哲學」とを聽講することにした。船田先生は決してはなしのお上手な方ではないが、其講義は面白かつた。今まで少しも知らなかつた哲學の世界を覗き、わたくしは歷史といふものに對する考へが少し變化した。いくら書誌學文獻學的に研究するにしても、いやしくも歷史を書かうとするものは、哲學の素養がなければならぬと感じた。歷史家ばかりではない。醫學者も哲學を知らなければ本當ではないと思つた。そして、哲學を學ぶことをすゝめて下さつた先生を實にありがたいと思つた。先生のおつしやることにウソはなかつた。

あるとき、先生はわたくしにおつしやつた。「君は富士川先生のあとをついで、第二の「日本醫學史」を書かなければならぬ。それには、どうしても哲學の下地が

ないといけない。しかし、歴史は哲學だけで書けるものではない。基礎的なことから、だん〳〵にやつて行かなければならぬ。例へば先づ古い醫書を調べる。これを書誌學的に研究して、どこの本屋でどういふ書物を出版したかといふやうなことから、結局、日本の醫學へかういふ醫書の出版が如何なる影響を與へたか、醫學の發達が醫書の出版をどういふ風に促したか、更にそれを當時の文化と結付けて考へる、ここに哲學の素養のあるなしが影響するのである。」また「富士川先生はえらかつた。醫學と歴史には無論のこと、哲學、心理學、英語獨逸語、佛蘭西語にくはしく、漢文も自由にお讀みになつた。あんなえらい先生は、もう出ませんな」そして「まづ富士川先生の「日本醫學史」を一通り讀みたまへ。しかし「日本醫學史」にたよつてはいけない。はじめから自分でやるつもりでやりたまへ」ともおつしやつた。

先生のおいひつけによつて、哲學を少し學んだことは、實にわたくしのためになつた。先生は、手こそとつて教へては下さらなかつたけれども、かういふ風に大綱を指示され、あとは、ひとりで勉強させるといふやりかたであつた。

昭和十六年十二月、わたくしは慶應義塾大學醫學部を卒業し、醫史學を專攻すべく、正式に先生の門末に加はつたとき、先生は木版刷の白鹿洞書院の學規を「額にして君の勉强部屋にかけておきたまへ」とおつしやつて、わたくしに下さつた。白鹿洞書院の學規といふのは左の如きものである。

學規

卽白鹿洞書院揭示

父子有親
君臣有義
夫婦有別
長幼有序
朋友有信

右五教之目堯舜使契爲司徒敬敷五教卽此是也學者學此而已而其所以學之之序亦有五焉其別如左

博學之
審問之
愼思之
明辯之
篤行之

右爲學之序學問思辯四者所以窮理也若夫篤行之事則自修身以至于處事接物亦各有要其別如左

言忠信行篤敬
懲忿窒欲遷善改過

右修身之要

正其義不謀其利
明其道不計其功

右處事之要

己所不欲勿施於人

行有不得反求諸已

右接物之要

安政四年丁巳春三月上梓

そしてこの「爲學之序」は學者たるものの常に念頭におかなければならぬところであるとおしへさとされたのである。

先生のおともをして、甲府へ橋本伯壽、座光寺南屏の墓を掃苔に行つたときのことを書かうと思つたが、いつか筆が横へ走つてしまつた。先生を語らうとして、あまりに多く自分を語つてしまつた。われながら淺間しくイヤになつた。これでは、先生の靈をお慰め申上げることは勿論できぬ。これをつゞけたならば、ます〳〵不遜の文字の羅列となるのみである。龍頭蛇尾の觀はあるが、先生追憶の文は、こゝに筆を擱くべきであらう。

昭和十八年五月二十日　伊豆湊海軍病院士官室に於て

溫泉學者として

先生と日本溫泉科學々會

伊東祐一

麹町內幸町のお宅の應接間で、色々面倒な學會の問題に就いて御相談下さつた在りし日の先生の溫容を偲びつゝこの稿を進めることに致します。只殘念なことは假寓別府にあるため、學會關係の資料が手元に十分にないので正確を保しがたい點もあるかも知れないが、この點は故先生及び大方諸賢の御寬恕を請ふ次第である。

昭和十四年の晩春の一夜、兼ねてから「日本の溫泉」に就いて關心を持つてゐた筆者は、溫泉國日本に溫泉の科學に關する橫の連鎖が無いことはどうした譯か、又このために折角進步發達すべき溫泉科學が研究上色々な支障を來してゐるのではないか、こんなことに思ひを巡らして見た。然しこんなことを考へても、筆者のやうな弱輩、微力の者にはどうすることも出來ない。そうかといつてこ

の考へをこのまゝ葬つてしまふ氣にはどうしてもなれない。其處で、よし、この事は、溫泉に關する學識經驗ある大家諸先輩を歷訪して、筆者の微意を披瀝してその意見を徵したなら、何とかなるであらうと、早速具體的な實行に移らうとした矢先、先づ第一に頭に浮んだのが藤浪先生であつた。

當時、筆者は專門の溫泉の動物に關する調査研究を、現に資源科學研究所にをられる岡田博士の御援助の下に行つてゐたので、早速同博士に相談した所、欣然この事の必要なことを痛感され、學會創立の準備方を筆者に委ねられたのである。其處で筆者は先づ第一に藤浪先生を訪問した。多分、それは昭和十四年の五月の末であつたと思ふ。當時の日記帳が手許にないのではつきりしないが、その時、先生はこの事のあることを待つてゐたといはんばかりに、卽座に滿幅の贊意を表され、出來得る限りの助力を惜まないとの御返事であつた。

其處で溫泉化學の東大理學部木村教授、地理學の吉村博士、溫泉植物學の學習院江本教授等と矢繼早に御相談をして、何れもその場で御贊同を得たので、諸般の手續を了して、六月十二日午後六時から華族會館に於て、第一回創立世話人會

を開いた。この祝福すべき第一回の集りに先生は眞先に會場に參着されて、溫顏を以て木村、岡田、吉村、江本の諸氏と筆者を迎へられた。この時の相談は學會創立迄は、暫定的に溫泉研究談話會とし、各方面の關係識者に發起賛成人たることを依頼し、事務所を東京帝大理學部化學教室に置く、といふことなどであつた。

七月廿六日の第二回世話人會で世話人發起人中から十二名の幹事が指定され、九月廿日の第一回幹事會で、先生は座長に推され、創立記念講演會開催に關して、會場のこと、演者のこと、上映映畫のこと等、總て先生が主となつて御配慮された。且つ、中村清二先生を會長に推戴することが先生の提案で異議なく可決された。その後、次々と催された講演會の會場には、或は鐵道博物館、或は東京醫師會館、或は慶大醫學部講堂と、先生の御盡力によつて決つた所が少くなかつた。

愈々六月廿五日、九月十六日、同月廿五日の幹事會に於て、溫泉研究談話會を當初の取極めに從つて、昭和十六年一月を期して溫泉學會に改組する話が持上り、十一月九日の日比谷陶々亭に於ける第六回幹事會で正式に決定した。この時は先生のお心盡しによつて、幹事一同支那料理の御馳走にあづかつた。席上、誰

やらがこういふ幹事會なら再々あつて欲しいといはれたら、先生はにこにこと笑つてをられた。

十一月廿七日の幹事會で會の名稱が日本溫泉科學々會と決定し、學會々則の草案を若干修正の上決定し、十二月十四日の幹事會で學會々誌名を「溫泉科學」として、年四回發行と決し、新學會理事には舊溫泉研究談話會幹事が就任することになり、同時に先生は中村會長の發言によつて、理事全員の贊同の下に副會長に推された。

會誌の印刷所に就いては研究談話會時代から、先生の御盡力による所が大きく、用紙の問題が漸く喧しくなつて來た頃であるから、並々ならぬ苦勞をされ、前から御關係のあつた成文堂に御交渉の上、大いに便宜が得られた。又、創立早々のこととて、財政的にも甚だ不如意の學會に對して、基金を作るための寄附行爲の勸奬に力められ、これ又大いに學會を益する所があつた。

このやうに先生は、學會生誕の前から草創時代にかけて、各方面に亘つて絶へ間ない御配慮をされ、愈々學會の基礎も確立されやうとした時、急に先生の御長

逝に遭つた次第で、先生も學會の成長を見ることなく逝かれたことは、洵に殘念に感ぜられたことであらうし、學會としても先生を失つたことは大きな痛手であることは申す迄もない。然し今となつては先生の遺志をついで、學會を益々發展させて行くことが、先生の御冥福を祈る所以であると信じてやまないものである。先生が學會に關與された期間は、僅かに四年足らずであつたとはいへ、そのなされたお仕事は、十年にもそれ以上にも値するものがあり、學會の生命と共に、創立の功勞者としての榮譽は、日本溫泉學史に不朽の足跡を殘されたわけである。

思へば去る十一月初旬上京の折、十日の午後、先生のお宅を訪問したのが、最後のお別れとなつてしまつたわけで、うたゝ哀惜の感にたへない次第である。當日のお話に、秋以來少し健康を害されたと伺つたが、別にさしてお元氣がないお模樣もなく昭和十八年の新しい年への學會の飛躍のことなどに就いて、お話し合つたのであつたが、同じ月の廿九日、幽明境を異にしやうとは全く夢のやうながしてならない。

茲に請はるゝまゝに、先生と學會との關係について、とりとめもないことを書きつらね、この禿筆が追悼集の末席を汚すことが出來ることは、洵に筆者の光榮とする所である。

（昭和十八年三月十八日記）

祖國愛に燃ゆる畏友藤浪剛一博士の溫泉指導を憶ふ

西川義方

藤浪君、君は慶應義塾大學の教授として始終中一徹、立派な學者であつた。君の專門は、醫理學の方面だつたが、その領域で、君の殘された業蹟は、いふまでもなく甚だ偉きなものである。

君は、素より學究だつた。君の知性は、勿論その深さにおいて廣さにおいて、凡流を抽き、君の洞察は、宏達で、至上目的へのために常に地平の遙かかなたをまで打ち渡し眺めとほしてゐた。だから、君の專門には、史實も地理も共に遙く廣く織りこまれて、決して觀念がちな弊竇には陷らず、かくして、君は常によく現實に活き、現實に動いてゐた。

君の科學には、常に基礎面と技術面とが、鞍を駢べて相依り相援けて、要するに

頗る手堅いものがあつた。

曾て、一日、君を教授室に訪ねたことがあつた。はつと、その時に私の眼を射たものがあつた。それは、整頓された書架の文獻でもなければ、標本の類でも決してなかつたのだ。風格清爽な君が頭上の壁間、ところ〴〵に掲げられてゐる科學人の心の態度に關しての若干の名箴言だつたのである。

研究に、育英に、精魂を打ちこんで日も足らざる君だつた。その君に、いつも清風來の面影の漲つてゐたのは、蓋しよく君が科學の魂を捉へて餘裕綽々たるものがあつたからである。科學の扇の要を、君は夙うから射抜いてゐたからである。だから、君の研究並に言論は終始一貫して、穩健であり、徒らに功をてらふやうな淋しさなどは秋毫も見られない。只の輪切にとゞまつたり、只の燒直しだつたり、玩具箱をひつくりかへしたやうな見にくさだつたり、凡そそのやうなことは、君には勿論あらうはずはない。君の行くところ混沌は消えて、常に秩序が耀いた。而も、その秩序を裏づけるに、正されたる史學を以てし、儼かなる情藻を以てすることを、君は決してゆるがせにはしなかつた。それの故に君の言行は、

君の著作を通じて今も察し得るやうに、隨時隨所に氣分重疊人をして坐ろに科學の高い香氣にうつとりと親しませる底の魅力をさへ蒔き散らしてをり、蒔き整へてゐる。

藤浪君、君は科學に生れ、科學に死んで行つたのである。君のその越格のエネルギーと、君のその異色ある熱情を以て、君は夙に專門に君臨し、專門の脚光を浴びてゐた。君は剛直だつた。だから、君には獨立があつた。けれども、君には孤立がなかつた。君には氣節があつた。けれども、君には決して獨我がなかつた。かくして、君は眞理探求の前には遲疑なく常にひたむきに驀進した。

然し、藤浪君、君も亦、その道の先驅者だ。それの故に、君は、古今の例の如く、またその道の先驅者としての苦惱をも或はつぶさに嘗めたこともあつたのではないか。名の示すが如く、君の性は、一面慥かに剛だつた。けれども同時に君には毅もあり、溫もあり、雅もあり、兼ね持てるその裕かな器量によつて、時あつては坦々とも往き、また時あつては嶮峻をもよく克服したのではなかつたか。

君は、日本の學究として、日本の實際家として、よく時世を大觀し、至高の本分に

活き通した。その君を愛惜すると共に、君の殘した大きな業蹟に對して、更に深く敬謝の念を禁じ得ないのは決して私達のみではない。それは心ある一般の當然の心である。

頃日、才藻豊かな君の未亡人が、いつもの淑やかさを以て來訪された。そして、君の追悼錄を上板するにより、溫泉に關しての君が業蹟を綴れとの懇ろな依囑だつた。溫泉日本の煥焉として今日あるは、決して、君唯一人のみによるとは、敢て私は云はぬ。けれども、二十年來、溫泉日本の進むべき方途を說き來り說き去り說きつゞけて世を淨めた、君のその組織的な知性と熱情に對しては、何としても心虔しまざるを得ないのである。君の德、君の學、君の情の高くゆたけく美しきに對して、君を語るの人、學內學外、その人却つて多きに過ぐるやを思はぬではなかつたのである。けれども、人莫二一人一の感においては、菲才私と雖も人後には落ちぬ涙を以てゐる。敢て未亡人の囑を辭せず、兢々として筆を把り、今はかへつて禮を君に失するなきやを唯畏るゝのみである。

藤浪君、日本溫泉協會の創立されたのは、昭和三年だつた。當時君は、その主唱

者片岡壽郎氏等に戮力協同、或は理事として、或は學術部委員として、かくして十有五年、それのためには恐らくは一日の寧日もなく、よくその育成に努力された。君の炯眼は、協會創立前、既に、大正の末葉、昭和の初頭、の交より、早くも國民保健上の見地から、國家經濟上の見地から、溫泉國策樹立の必要を論じて、本邦當時の溫泉界に炬火を點じた。而も日本の歷史を達觀し、當來に及ぼせる君の愛國的にして科學的なる文獻は、曠古の大東亞聖戰下に於ける溫泉天惠利用の水先案內をなしたものと云つても、決して誣言ではないと、私は思うてゐる。

藤浪君、混沌に秩序を與へたとして、君を私は推した。歐米科學の採長補短は、先づ吾等の祖國を正確に領解してこそ、そこに儼然たる根抵を露はすのである。このために、君は究學初頭より終焉に至るまで、日本溫泉學文獻の蒐集に努め、後進をして長へにその澤に浴せしめてゐる。苟も日本溫泉學に志すものにして、先づ君のその文獻に倚らざるものは、學に未だ篤からざるか、徒らに勞するか、然らずんば徒らに倨傲にして修養の低劣なるに由ると、私は思ひ潛めてゐる。

君は、東西沐浴史話(昭和十年、人文書院)、溫泉知識(昭和十三年、丸善)、溫泉療法關係

の書(昭和三年、內務省依囑)を著作し、溫泉大鑑(昭和十年、日本溫泉協會共編)、溫泉研究第二輯(昭和十三年、日本溫泉協會)等に寄稿せる以外、大正十五年八月以降昭和十五年三月に亘る醫學衛生方面の誌上に發表せる溫泉關係の名篇實に一百十九篇以上に上り、その後終焉に至る三年間の業績を加うれば、その努力は正に溫泉學界の驚異である。

君が後進を善導して、溫泉日本の趨向を誤まらしめざるものに、何としても、先づ君が日本溫泉學文獻を上げねばならぬ。

一 明治以後の溫泉に關する著述(大正十二年三月、日本醫事週報一四五一—五四)

二 溫泉典籍現在目錄(昭和十二年五月二日、實踐醫理學、第七年三號)

三 溫泉古書解題(昭和十四年六月二十四日日本醫事週報二二〇七號)

四 溫泉古書錄(自昭和五年二月至九月、日本醫事週報、下部、一七四六。有馬一七六九。熱海一七七五、一七七八、一七七九。箱根一七八二。伊香保、磯部草津一七八四。東北一七九六號)

前二者に於て君は、溫泉汎論的文獻を拾集し、後者において君は有馬、熱海、箱根、伊香保、磯部、下部、草津東北等の諸泉個々の文獻を細かく掲げてゐる。更に「溫泉知識」の末尾には、附錄として綿密に溫泉典籍現在書目錄が、昭和十二年現在として列擧され、これによつて、今日では、私達が昭和の初頭に嘗めた文獻渉獵のあんな苦しい苦惱を解消せしめたわけである。私は上野の圖書館で閉館から閉館まで無宙に居つゞけ而かもその一日の勞苦の報ゐが唯僅かに一行の文だつたことなどをひしひしと玆に思ひかへすの故に、益々君に感謝せざるを得ない。だから、君のこの文獻蒐集による學界光被の偉大な貢獻は、君が不滅の偉業として百千年に亘つて後學を稗益し歡喜せしむることは、勇氣を持つて玆に、君に斷言する。他に、尙

養生書に現はれた沐浴觀(昭和六年十一月、醫業と社會、一九號)

沐浴の歷史的方面に就いて(昭和七年六月、兒科雜誌)

溫泉醫家の小傳(昭和十二年二月、日本醫事週報二〇九四―九七號)

古書古畫から見た日本の溫泉(昭和十四年三月溫泉第十卷三號)

日本溫泉の發見と傳說(風景第四卷十一號)

名篇扶氏經驗醫訓,長生術等の著者としての扶氏は,吾等の先覺によつて夙に本邦にも紹介されてゐる。けれども,彼の溫泉觀については,君は,昭和元年臘月脫稿のフーフェランドと溫泉治療(中外醫事新報一一一九—二一號)の題下に Nötige Erinnerung an die Bäder und ihre Wiedereinführung in Deutchland を紹介し,扶氏が弱體少年に對して,推すに冷水摩擦,沐浴,空氣浴を以てし,健康にして有望なる青年の將來は一に之によつて作らるべきであると力說した所以を,深切に紹介したのは,寡聞當時においてはたゞひ鮮ないことだつた。本篇において君は獨逸においての水浴や海水浴發達の大勢をも簡明に敎へてゐる。

藤浪君,さぞ君も會心だつたらう。君はそれと共に,昭和四年に發表された舍密開宗の著者である宇田川榕庵の「溫泉試說」は,自筆本の珍襲家としての君,醫史學に精進せるの君,溫泉學の窓內窓外を細檢大觀し得るの君にして初めて作し得た好文獻であり,本邦における近代溫泉科學史上,絕對に逸する能はざるものなのだから。

一、宇田川榕庵傳補遺(昭和十五年九月中外醫事新報一二八三號)
二、有馬の一日(大正十五年十月日本醫事週報一五一五―一六)
三、柘植龍州と有馬溫泉(昭和十年三月日本醫事週報二〇〇六)
四、後藤艮山(昭和十六年四月醫事公論一四九九)
五、小村英菴(昭和五年二月中外醫事新報一一五六)
六、假造泉(昭和八年四月十八日、日本醫事週報一九一四―五。昭和七年二月、中外醫事新報一二〇〇號)
七、溫泉治療史(昭和十七年九月科學朝日第二卷九號)

等を通じては、よく近代溫泉學の始祖、後藤艮山柘植龍洲、香川大冲、小村英庵等の學究的態度並に是等の先覺による溫泉地指導の概容を覗はしめ、幾多の後學をして發奮措く能はざらしめ、やがてこの幾多の後學をして日本の溫泉科學を大成せしむる日の遠からざるに至らしめた。

藤浪君君ほど近代溫泉研究所設置の急務を夙うから、かくも多く熱心に論じた人もあるまい。君は一般の趨向は、尚全くその認識を拒みさへしてゐた時代

から、屢次早くもその指導啓發に熱中された。幸にも、今日、漸く、各地に、その設立の必要を唱へらるゝに至つたことは、慥かに祖國の慶事だ。それに就いては、君のその心中を知るもの〻一人として、私は、斯道先覺者としての君のこの偉大なる貢獻に對しては、聲を大にして感謝せざるを得ない。

一、如何にして獨逸の溫泉は進歩せしや(大正十五年四月、日本醫事週報一五八九號)

二、溫泉治療の發達(昭和二年一月、日本醫事週報一六二八號)

三、フーフェランドと溫泉治療(昭和二年一月、中外醫事新報)

四、公衆浴場の發達(昭和六年五月、日本醫事週報一八二七號)

五、伊太利の溫泉治療の發達(昭和七年四月、日本醫事週報一八六九號、昭和十年十月同三〇三二號)

六、日本溫泉學の發達、昭和七年五—七月、中外醫事新報一一八三—一一八五)

七、ナウハイム溫泉の新研究所(昭和七年七月二日、日本醫事週報)

八、溫泉治療所設置と溫泉利用の急務を促す(昭和九年三月、溫泉第五卷三號)

九、歐米に於ける溫泉學の教育機關(昭和十三年七月、日本醫事週報二一六一號)

一〇、溫泉治療所設置と溫泉利用の急務を促す(昭和九年三月、溫泉第五卷三號)

一一、日本溫泉學の發達(昭和九年六—七月、日本醫事週報一九九〇號)

一二、溫泉國策の私見(昭和九年八月、溫泉第五年八號)

一三、日本溫泉學の發達昭和十四年、溫泉研究談話會誌一號

一四、溫泉と國民保健(昭和十二年十月、溫泉第八卷十號)

一五、溫泉所在の府縣に開發指導の主任者を置くべきである(昭和十三年十一月、日本醫事週報二一七八號)

一六、溫泉地更新の秋(昭和十四年一年七日、日本醫事週報二一八四號)

一七、東北大學の溫泉研究所と宮城縣の溫泉事業(昭和十四年八月、日本醫事週報二二一三)

以上の如くにして約二十年前から、その實現を要望された君の熱心は、九州大學北海道大學、岡山大學、大阪大學、東北大學、慶應大學等における近代科學的な溫泉研究所の設置またはその企畫に、直間接の刺戟を與へたことは、今はなき君が多

年の苦勞に對し、人倫當然の道として、私も亦慇ましく想起せざるを得ない。

藤浪君、君の熱は、日本溫泉協會、日本溫泉氣候學會の他に、更に溫泉研究談話會を設立して、一部からは、屋上屋を架するの觀を懷かしめた。けれども、歐米特に獨逸における溫泉學の嘗ての發達途上における幾多の研究機關が相援け相競ひ勵みて、漸く今日の大を致し、遂に今日の統制に至るまでのその經路を知悉し、而も一日不作一日不食、本邦溫泉學の發達を急促ならしめんとの熱意に燃えてゐる君にしてみれば、且つは世路の甘苦を經驗せる君、その人としてみれば、蓋し勢止むなきの擧措だつたのだらうと思ふ。借すに君に時勢を以つてせば、海外での發展史を知り盡してゐる君の炯眼は、必ずや亦挺身、その統制主唱の第一人だつたらう。棺を蓋ふて名定まる。君の心は漸く認められて來ることだらうと、私は思ふてゐる。

時代は、凡てを正しくし、凡てを淨化する。君が溫泉地淨化を說き、君が溫泉地旅館の肅正をあんなにまできびしく強要力說したのは、素より君が溫泉關心以來の烈しい愛國愛泉による信念の猛き發露だつた。君の熱意は、時あつては酷

しい叱責をも辭せなかつたとは、屢〻聞いた話である。時あつては學者世知らずの冷笑を浴びたことさへもあつた。顧みればそれは十數年前のことだ。當時世間一般は、當時の溫泉現狀に對して、君のやうに憤激戒飾の矢表に立つて、敢へて世の憎惡を顧みなかつたもの果して幾人あつたらうか。私の、君に、こゝに、この文を草するは、この點においても亦、深く君に同情し、君に感謝せんとの素懷の自づからなる勢からである。然し、時は來た。時は君の炯眼に報いた。時が來た。時は遂に溫泉正道鼓吹の君に報いんとしてゐる。今は、世は、擧つて、君を享けて嘗ての遊蕩泉は保健泉に、嘗ての富裕泉は厚生泉に嘗ての個我的溫泉は滔々として大東亞聖戰完勝途上への國策泉に轉じつゝある。憾むらくは、君世を早うして幽明境を異にするも、この現前の事實に、君は遂に滿足すべきである。この現前誘導のために、口に筆に二十年來、君が力闘し來つた證左には何よりも次のその夥しき君の學問的證文がものを言うてゐる。その列擧以外、蛇足を加ふるの要は、少くとも今の私には少しもないのである。

一、別府に直面して(昭和十五年八月、醫海時報一六七一號)

二、溫泉地及療養地の衞生設備(大正十二年二月公衆衞生四十一卷二號)

三、溫泉地と其衞生設備に就て(昭和五年四月、衞生時報一六七號)

三、公衆浴場の發達(昭和六年五月、日本醫事週報一八二七號)

四、我國溫泉の振興に就て(昭和六年三月、實踐醫理學第一卷二號)

五、溫泉地と其衞生設備(昭和六年十月朝鮮之衞生第八卷十號)

六、溫泉地の衞生的組織(昭和七年五月、七月、日本醫事週報一八七四—六號。昭和七年溫泉第三卷十號)

七、溫泉案內の標準(昭和七年十一月、日本醫事週報一八九八號)

八、溫泉衞生施設(昭和九年十一月溫泉第五卷十一號)

九、社會と溫泉療養(昭和十年十月、溫泉六卷十號)

一一、溫泉案內記(昭和十年五月、日本醫事週報二〇一四號)

一二、信夫高湯の鑛毒問題について(昭和十年九月、溫泉第六卷九號、日本醫事週報二〇二九—三〇號)

一三、城崎溫泉の訴訟に於ける陳述意見(昭和十五年九月、醫學ペン第五年九月)

一四、溫泉の取締(昭和十年十月、日本醫事週報二〇三五號)
一五、いで湯の日本(昭和十一年五、七月、日本醫事週報二〇六一―二〇六七號)
一六、溫泉と國民保健(昭和十二年十月、溫泉第八卷十號)
一七、日本にはこんな飲泉コップを(昭和十二年十二月、溫泉第八年十二號)
一八、泉都別府(昭和十三年五月、日本醫事週報二一五六號)
一九、溫泉地の開發と淨化(昭和十三年六月、醫事衞生Ⅸ―二三號)
二〇、時局と溫泉の開發淨化(昭和十三年六月、醫事衞生、九卷二十三號)
二一、溫泉の消印から(昭和十三年十一月、日本醫事週報二一七九號)
二二、溫泉所在の府縣に開發指導主任者を置くべきである(昭和十三年十一月、日本醫事週報二一七八號
二三、溫泉地刻下の急務(昭和十四年一月、溫泉第十卷一號)
二四、溫泉地と其衞生設備(昭和十五年八月、衞生公報七二號)
二五、時局下の溫泉經營(昭和十五年九月、溫泉第九卷九號)
二六、溫泉國策樹立の要(醫海時報一九七八―八〇號)

藤浪君、隨分長いことだつた。君のこれ等の文献だけからみても、君は大正十二年以降實に二十有餘年倦まず撓まず、諷諫に努め、我等の祖國、この日本の溫泉本然の使命發揚のために、よくもまあ敢闘してくれた。君の熱心は、溫泉地での飲用コップから、案内記、郵便消印の微にまで及んで、よくその親切を極めてゐる。更に國立公園と溫泉との交渉についても亦、君は

一、溫泉と風景(昭和九年十一月、日本醫事週報一九九〇號)

二、溫泉地開發は緊急の觀光事業である(昭和十一年二―三月、日本醫事週報二〇五〇―五一號、昭和十一年七月溫泉第七卷七號)

三、國立公園(昭和十三年三月、日本醫事週報二一四六號)

四、國立公園地域に於ける溫泉の意義(昭和十五年十一月、科學文化第五卷十一號)

等において、いつもの卓論を吐露してゐる。

君の科學尊尚、國粹尊尚の熱意は、實地踏査を受けての其筆陣を張つて、蕩々、蒸風呂に及び、湯瀧に及び、砂風呂に及んで、遂にはてしがない。蒸風呂については

一、八瀬の竈風呂(大正十四年二月、日本醫事週報一五三〇)

二、石風呂の記(大正十五年十月、日本醫事週報一六一五―一六)

三、蘭齋の蒸氣風呂(大正十五年、醫海時報一六三九號)

等、一々踏査尋繹、いつものやうに、君はよくその精を捉へてゐる。蘭齋については、百二十餘年前國音蘭法醫師と通ずるの故を以て、亂暴醫師とさへ罵詈讒謗されたその寃を雪いで、醫理學史上、翁の大事業なりと讃へて、玆にも君が先覺渇仰の靈光が輝いてゐる。かくして、君の行くや、至るところ埋を起し蒙を啓かざるはなかつたのである。

草津及那須における酸性泉の熱浴に關する時間湯の由來に就いても、踏査善くその不明を闡明し、危く君によつて、その起源史の湮滅が防止し得たのである。

一、那須溫泉の時間湯に就て(昭和十五年五月、日本醫事週報一五九五)

二、草津溫泉の時間湯(昭和六年七月二十五日、日本醫事週報一八三六)

君の熱心は、祖國の溫泉に止まらず、また歐米にも限らず、夙くより今日の大東亞廣域溫泉圈の一部にまで及んで、よくその淵源を尋ねてゐる。

一、印度の入浴(昭和二年一月、日本醫事週報一六一五號)

二、佛典に載せられたる沐浴(昭和六年四月日本醫事週報一八二四號)

三、養生書に現はれた沐浴觀(昭和六年七月、實踐醫理學第一年四號)

四、沐浴の忌日(昭和六年一月、日本醫事週報一八〇九號)

五、養生書に現はれた沐浴觀(昭和六年十一月、醫業と社會十九號)

六、沐浴の歷史的方面に就て(昭和七年三月、兒科雜誌)

七、佛典に載せられたる沐浴(昭和八年一月、溫泉第四年九號)

八、滿洲溫泉を巡りて(昭和十一年十二月—十二年二月、醫事公論一二七三、一二七四、一二八二、一二八三)

九、滿洲國溫泉について(昭和十二年二月、溫泉第八年二月號)

等の論攻は、卽ちそれである。

溫泉の分類並に效果に關しての報告としては、

一、溫泉の分類(昭和十二年四月、日本醫事週報一四五八號)

二、溫泉の分類(昭和十五年十月、溫泉第五卷十號)

三、溫泉療法の效果(昭和三年、岡山醫學會雜誌四六四號)
四、溫泉療法案內(昭和三年、朝鮮の衞生第五年七號)
五、溫泉療養の效果(昭和三年八—九月、體性九年二—三號)
六、水浴及溫浴と健康(昭和六年、診療第三卷八號)
七、日本溫泉の特異(昭和十二年三月、チバ時報八七號)
八、溫泉の講義(昭和十五年一〇—一一月、十三年三月、日本醫事週報二一〇九—二一四五號)
九、溫泉效果に關する一瞥見(昭和十五年一月、外科第四年一月)

等があり溫泉選擇の方面には、

一、溫泉の選び方(昭和五年八—九月、溫泉第一卷五—六號)
二、溫泉の撰擇について(昭和九年十二月、溫泉第五卷十二號)
三、療養指針(昭和九年十二月、溫泉第五卷十二號)
四、轉地は何處へ、山海溫泉の選び方(昭和十一年五月、東亞の衞生、第十三卷三號、公衆衞生五四卷六號)

五、白河を中心とする療養溫泉(昭和十二年十一月溫泉第八年十一月)
六、名湯と靈泉(昭和十三年十一月醫學ペン第三年十號)
七、東北溫泉を巡りて(昭和十五年三月、日本醫事週報二二四一號)
等があり溫泉治療に關しては
一、飲泉八戒(昭和九年二月、溫泉第五卷二)
二、飲泉療法(昭和十五年七月醫學ペン第五年七號)
三、入湯心得書(昭和十四年五月日本醫事週報二二〇三號)
四、入湯心得書(昭和十四年七月、溫泉第十年七月)
五、沐浴の物語(昭和五年一月、食養第二卷一號)
六、性病及神經疾患と溫泉療法(昭和四年八月、體性十三卷二號)
七、生殖器と溫泉療法(昭和七年十一月、體性十九卷五號)
八、心臟疾患と溫泉療法(昭和十五年四月、第五年四號)
九、肥胖症と溫泉療法(昭和十六年二月科學文化第六年二號)
等があり、尙溫泉行遊(昭和七年、日本醫事週報一八八五―六號)、下部溫泉紀行(昭和

九年五月、溫泉、第五年五月等を蒐めて、更に拾遺すべき君の卓論多數のあることを信じながらも身邊の支障許さず、憾むらくは玆にそれを登載し得なかつたことは、君に對しての大きな非禮である。けれども藤浪君、以上によつて、君の學德と、溫泉報國に對する君の熱情とは、恐らくは何人にも明白に諒解されることであらうしそれに、君は、一々それ等論著を涉獵する遑を持たない多くの實地醫家のために以上の要綱を纏めて「溫泉知識」を著はして、よく後進を導いてゐるのだから、私は、それによつて勝手ながら、小さいこの心をやつと安んじてゐる。

拙い稿を結ぶに際して、今一度どうか君の名を呼ばしてくれ給へ。

藤浪君、君は日本の學究として實際家として吾等の祖國日本の信仰に厚く、吾等の祖國日本の科學に篤く、動ぎなきその日本の魂を根柢として、日本溫泉學の軸心を整へ、かくして君は溫泉報國の分野においても亦、至高の本分に活きぬいた。君も覽ての通りに時今や全世界の動亂に際し、我等の祖國は、總ての方面において我等の人傑を要望してゐる。二十年來溫泉國策を熱叫し、二十年來溫泉の淨化を熱叫しつゞけたその君が、君の熱願を籠めた祖國の溫泉が今にして漸

く弘く國策的に考慮され、その祖國の溫泉が、いよ〳〵淨化を顯はし來つたこの秋この折に、年來勞苦のその君が、何で、早くも、この世に居ないのであるか。常に指導的であり、常に規範的であつたその君が何で君の念願の集大成を現前に見ずして、早くもこの世を去つたのであるか。私共この道を通して、多年、君に交を辱うした同志は、天を仰いで君を惜しみ君を憾まずにはどうして居られようぞ。茲に、私は、日本の溫泉よ、長へに正しくあれ、日本の溫泉よ、長へに美しくあれ、とのみ念じ祈る。天なる君の御靈よ。何卒長へに安らけく平らけくほゝえみていませ

人一人莫き世に生きていづる湯の正しき道をい繼ぎ行かなむ

（昭和十八年三月十四日謹稿）



昭和十四年信州山邊温泉藥師堂にて

藤浪剛一教授を偲びて

三澤敬義

藤浪教授は我國に於けるレントゲン學と物理療法、溫泉療法の蘊奥を極められた斯界の權威であられた。私も教授と專門を同じくした關係上多年に亘つて教授の學界に於ける御活躍を拜するの機會を得、亦種々の會合に於て親しく教授と交るの光榮をもつことが出來た。藤浪教授の學勳に就ては多數の方々が述べられることであるから、私は教授の學者としての側面觀を述べて教授を偲びたい。

藤浪教授は私の恩師である故眞鍋教授と共に我國に於てレントゲン療法と物理療法、溫泉療法等を初めて開拓された學界の功勞者であつて、兩教授共に學識に於て又學勳に於て、又臨牀家としても此の專門領域の最も權威の高い双璧であつた。而も此の兩教授は共に傑出した醫學者であられたが、その御性格と

研究態度等は相當異つて居られ、吾々後學が自らの教訓として御比較申上げると誠に面白い對照である。

藤浪教授は私學の王座慶應義塾大學醫學部の理學的診療科の主任教授であられ、眞鍋教授は官學なる東京帝國大學醫學部の內科物理療法學教室の主任教授であられ、共に斯界の巨星であり、又夫々一方の闘將として時には相對立して學會の分裂をさへ見るに至つたことも今となつては昔の思出である。

藤浪教授は御性格が圓滿で八面玲瓏であられ、人と接するや常に溫顏を以て迎へられたが、一度學問に關すると極めて峻嚴であられ苟くも假借する所がなかつたことは側近の方々から屢々承つた。卽ち外には確かに優しくあられたが、內には剛一なる御名前の如く學問には極めて嚴然たる所があられた。眞鍋教授は人も知る如く侃々諤々、正義剛直の士として自他共に許されたが、內には嘉一郎の御名前の如く好々爺で義理と人情に厚く非常に優しい半面があられた。殊に御家庭では全くよい御父樣であられ、患者には常に佛の如き慈悲を示された。藤浪教授は學界に於ては他人に追從することを決して好まれず、既存

の學會に滿足せられず、自ら學會を主宰するの風があられて學究として寔に積極的な御性格であられた。例へば日本放射線醫學會や日本溫泉科學會の如きは教授自らが創設せられて學界に多大の貢獻をなされたが、而も自らは決して陣頭に立たれず、帷幕の內にあつて學會をよく指導誘掖せられた。然し眞鍋教授は自ら學會を創設されるが如きことなく、常に既設の學會の陣頭に立つて該博な新知識を披瀝されて好んで討論追加等演壇上に獅子吼され人をしてその學才と博學とを常に驚嘆せしめられた。藤浪教授は博學でその御專門も極めて廣くあられ、古今東西の萬卷の書を集められ、藏書家としては醫界隨一であられた。又眞鍋教授の博覽强記は有名であつて一度讀書見聞されたことは天賦の記憶力によつて決して忘れられることなく、凡て之を頭腦內に藏された。又藤浪教授は殊に和漢の文獻に通ぜられ、萬卷の書を藏して門弟をよく指導され、自らの御研究を失々專門の著書として勘からず著作されたが、眞鍋教授は該博の新知識を或は學生に、或は實地醫家に熱辯を以て講演され、聽く者をして名講義として三嘆させられたが、遂に專門的の著作を遺されなかつた。

藤浪教授は名門に生れられ而も私學に終始されて悠々學を樂まれつつ、斯學の權威として名聲天下を風靡された。眞鍋教授は官學に早くより斷然頭角を表はされたが、而も東大に久しく孤軍奮闘せられ自らも苦節十年と稱せられて、學界に於ける特異の存在として獨特の眞鍋學派をつくられた。

藤浪教授はレントゲン學者の常として心身共に健全な令夫人を伴侶とされながら遂に愛兒に恵まれなかつたが、令閨と共に幸福な家庭生活を樂まれた。眞鍋教授はレントゲン學を專攻されつつも八人の子福者であられたが早く令夫人を失はれてその後は御自身が子女の愛育に心血を注がれた。

寔に兩教授は共に稀に見る一世の碩學であられ、而も專門を同じくされたが、兩先生共に學者としての御一生と御性格は前に申上げた通り全く違つて居られたのは好個の學ぶべき面白い對照である。

而も藤浪教授は昭和十七年十一月二十九日、六十三歲を以て急逝されたが、眞鍋教授はその前年昭和十六年十二月二十九日、六十四歲を以て薨去せられ、共に學界と社會から深く御逝去を惜まれた。

今や我國が古今未曾有の非常時に際して學界の耆宿たる兩教授の御活動に俟つことが益々切なる時、兩教授が相次いで逝かれたことは國家のためにも學界のためにも寔に痛惜に堪えない。私は藤浪教授の我が專門領域に遺された偉大な足蹟を想起しながら先生を偲ぶものである。

藤浪先生を偲ぶ

石田松太郎

一日、友人が町役場を訪れて其用談のうちにふと藤浪先生がお歿くなりになつて殘念な事ではないか、と痛嘆の情を漏しました。つい一二ケ月程前に溫泉の碑文を美事に書き上げてお送り下さつたばかりであるのに、何かの間違ひではないかと念を押しますと、五六日前の新聞に載つて居たと教へられて、初めて先生の御逝去を知り、延引ながら奥様に御悔みの手紙を差上げ、取敢へず御生前大層喜んで戴いた菓子を調製させ、粗香に添へて御佛前へ御供へ致しましたが、上京の節は改めて御墓へお詣りしたいと存じながら、今に其意を得ずに居ります。洵に先生の御逝去は、御國は勿論我々溫泉地の者にとつても、返す〳〵も痛惜に堪へない次第であります。

先生は前に一度當町に御來遊下さいました事がありますが、私が親しく面接

の榮に浴しましたのは昭和十四年三月大阪鐵道局主催、管内溫泉協會の總會が、當町で開催せられた折と、慶應大學を御訪問した節とでありまして、昭和十五年五月に大阪控訴院の法廷にお立ち下さいました翌日奈良市で開かれた日本溫泉協會第一回關西支部總會にお臨みになり、終了後本町の有志者と共に、京都驛までお見送りしたのが、最後となりましたが、實に先生の崇高な御風貌と御人格は今に偲ばれて敬慕止まないものがあります。

城崎町と奈良市に於ける大會では、共に講師として溫泉に關する深遠なる御所信を熱心に、而も懇切に御說き下さいまして來會者に非常な肝銘をお與へ下さいました。其一節に、今日の人達は溫泉地を遊蕩享樂地のやうに、溫泉を料理屋の風呂か錢湯かのやうに考へて、不謹愼不行跡を敢てし却つてそれを當然とし、又得々として居る有樣をよく見掛けるのであるが、業者も亦それ等俗惡な入湯客を目標として、客室調度に必要以上の善美を盡し、競つて色々の施設や機關を設けて、只管其意を迎へやうと努めてゐる傾向の見えるのは、共に苦々しき限りであるばかりでなく、實に溫泉を冒瀆するものである溫泉には一種の靈があ

る、業者は宜しく溫泉を尊敬し、業者本來の使命に立歸るべきであり、浴者は又之に對ふるに感謝の念を以てせねばならぬ、それこそ恩澤に浴する報恩の道であり、業者は其れによつて幸福を得、浴者はそれによつて一段の醫療效果を享受せらるゝのである、と親切に御訓へ下さいました。

由來、我城崎は傳統として、苟も溫泉を冒瀆するが如き行爲は、よしそれが時流に容れられないとしても又繁榮を沮害するやうなことがあるとしても極力これを避ける事を町の誇りとして享け繼いで來たのでありますが、第一次歐洲戰爭の好況時代から引續き我町が震災から立ち上つた昭和初年の頃からは、全國の有名又は新興の溫泉地が世の風潮に應へて、各々魅力ある施設經營をして一齊に異狀の發展隆昌を示しました。此間を旅館の飛躍期とも豪華版時代とも申すべきでありませう。我町に於きましても、各地の繁榮振りが羨望に堪へませず、且は各方面からの要求慫慂もあつて追從模倣しやうとする事を、どうする事も出來ない情勢に押詰められて參つたのであります。

然しながら、靜かに過去を振返つて見れば、德川の末期頃までは湯治の客が當

町に來ると先づ溫泉開祖をお祀りしてある溫泉寺に參詣して、湯杓を戴き、入湯中それを大切に使用し、病癒ゆれば湯杓を寺に納め、開祖に親しく御禮を申上げて歸途に就くのを例としたのであり、明治の末頃までは、病の癒へた湯治客が石燈籠を寄進したり、當町で製産する麥稈細工の額を、跛が杖を、聾が手にした下駄を額に仕立てゝお藥師樣に奉納し、心からなる報恩感謝の誠を捧ぐるもの、其數を知らない有樣でありました。まして土地の者の溫泉に對する感謝の念は、一層でありまして、私達の小學生の頃には湯杓に溫泉を汲みて最初の一杯を祖神湯山主大神に、次の一杯を開祖道智上人に捧げ、三杯目から漸く自分の身體に注ぐ老人をよく見かけましたが、今はその敬虔なる姿を浴場から次第に見失ふやうになつた事を心ある者達はひそかに痛嘆して居りましたが、偶々先生の御講演を拜聽して、指導者達は相戒めてともすれば輕佻浮薄に流れやうとする風潮を、引締めて參つたのであります。

茲に大東亞戰爭に這入つてからは、決戰體制下と雖も、溫泉場は國民の體位錬成の爲にも、病痾を治癒し、元氣回復の爲にもなくてはならない一翼であること

を事實に示すべく、町を擧げてそれに邁進しつゝありますが斯うした機運に趨きます事の出來得るのも、先生の御啓發に負ふ處大なるものがあると、今更ながら感謝の念を新にする次第であります。

又、先生は、

多くの溫泉地を見るに溫泉の利用方法と、其施設に遺憾の點が多々あつて、折角溫泉に惠まれてゐる我國も此儘では寶の持腐れ同樣である。例へば、多くの溫泉地は旅館各戸に錢湯樣の浴場を設けてゐるが、それは利用價値に於て經費に於て、非常に不經濟であり、醫療效果を充分發揮出來得てゐないのである。若しも一旅館や一別莊が溫泉を獨占し、又は壟斷する事を當然かのやうに心得る者がありとするならば、これ天與の溫泉を冒瀆するの甚しきものである。溫泉は國家の寶である。當然政府が經營乃至は之に保護を加へ指導なすべきであるが、少く共縣或は町村のやうな大きい力で完全な施設をして多數の人に其恩惠を享受せしむる事が最も效果的である。此點から見て城崎溫泉は理想に近い立派なものである。此の上、醫學者、理學者、都市計畫家

等の專門家の指導を受けて企劃改善するならば我々の望む所の溫泉場となり得るであらう。

と御賞揚の御言葉を戴き、尙座談會の席に於て、當町は一個人が泉源を獨占しやうとする事によつて、紛糾を來してゐるとの事であるが早く解決して協心戮力、以て改善に力を致されん事を望んで止まない、と懇々と御激勵下さいました。

我町は溫泉湧出以來千三百年の長きに亘り、共同浴場を以て發達して來ましたが、大正十四年突然起つた大震災の爲に、祖先以來の營々辛苦も一瞬にして灰燼に歸してしまひました。然しながら全町民は其復興建設を神前で誓ひ、力を戮せて涙ぐましい努力、雄々しい奮鬪を續けて居りました。昭和二年に古來の傳統慣習を破つて內湯を設置せんとする、自己の爲には他を顧みない、今日で謂ふ極端な米英思想を有する非常に頑迷な一個人が現はれた事に端を發して今に繫爭を續けて居りますが爲に、復興にも發展にも事毎に非常な障害を來し直接間接に蒙つた有形無形の損害は測り知ることの出來ないものがあります。

先生は之にいたく御同情をお寄せ下され昭和十五年五月大阪控訴院の請を容

れられ、其法廷で、大所高所から高邁なる御意見を御開陳下さいました。實にそれは權威者としての所信を忌憚なく御述べ下さいましたのに外なりませんが、我町としては從來正當と考へて來ました事を先生のやうな權威者の口で偶々その主張に裏書をして戴いた事になりましてどんなに力を得た事でせうか。況して其の言々句々の間に溢るゝ御同情の閃めきを感じました事に、我々は今以て熱い感謝を捧げずには居られないのであります。

昭和十五年は恰も紀元二千六百年に當るので、先生は其記念事業の一つとして、城崎溫泉に關する古文獻の展覽會を開催したならば、最も意義ある事と思ふ、多少珍らしい書籍も蒐集して居るから、出品するとのお勸めに預り、其道の方とも種々協議致しましたが、廣く集め得る方法が見出せず遺憾ながら決行を見合せました。それに代り江戸時代中期の初め我國溫泉醫學の最初の泰斗後藤艮山先生、次いで香川修庵先生が當溫泉に來浴され、天下第一の溫泉であると激賞されたことを記念する建碑の議が起り、その碑文は因緣淺からぬ藤浪先生に是非御願ひ申上げたいと、御意向を御伺ひ申上げました處、快く御承諾の上、昨秋美

事に揮毫して御送り下さいました。

その碑文の表面には

「海内第一泉」と雄渾に認め、

裏面には

我國に溫泉は數々あるが學醫から其醫治效果を稱せられたるものは城崎溫泉を以て嚆矢とする。先づ元祿の頃杏林の名家後藤艮山は、此の地の新湯に浴して之を第一位とし、次にその門人香川太沖は更に一歩を進め、一本堂藥選を著し、溫泉審擇の要を述べ、城崎を最第一湯とし、爾來泉名頓に江湖に傳はるに至る。なほ又倉谷安齋は文政二年但馬城崎湯治指南車を梓して、入湯法を說き、新宮凉庭も弘化年間その子女の疾痾を癒さんとして、此地に來り治して但馬紀行を作つた。江戸時代に於て城崎溫泉の靈驗が醫學上如何に注目せられたかは想ふに餘りあるものである。溫泉の眼目は浴場である。城崎溫泉が夙に共同浴場を完備して、その淸肅たるは未だ嘗て他に見ざる所、昭和の今日海內第一湯と稱するも、敢て過言ならずとする。庶

くは城崎町民諸君が時代の趨勢に鑑み、層一層設備の完整に、努力し、以て海内第一泉の榮冠を保たれんことこれ予の切望して止まざる次第である。

昭和十七年九月

醫學博士　藤浪剛一撰

とあります。

御賞揚に過ぎて聊か恐縮に思ふ所でありますが、早速石材を求め工事に着手致しましたが、石屋の主人が應召するなどのことがあつて、遂に御在世中落成の運びに至りませんでした事は返す〳〵も殘念でなりません。然し乍らやがては竣功を見るでありませう。此碑石が朽ちない限り我町民は子々孫々先生の御名と御徳を語り傳へて感謝を捧げる事は疑ひありません。

今回先生の追悼錄を御編纂になると承り御高徳を慕ふの餘り、不文をも顧みず筆を走らせたものゝ、深遠高邁なる御人格御識見の片鱗だも表現し得ず、また道義の觀念に徹し、眞理の前には一歩も假借しない信念をお持ちになる一面に優しい溫情を湛へてゐられる床しい御高徳を傷ける様の事はなきかを只管恐

るゝのであります。

茲に謹んで深甚なる追悼の誠を捧げ遙に御冥福をお祈りして止まない次第であります。

昭和十八年二月

城崎町長　石田松太郎

風景協會と藤浪博士

黒田鵬心

一

私が藤浪博士の名を聞いたのは久しい以前であつたが、博士の溫容に親しみ、聲咳に接したのは風景協會の世話人會を學士會館に開いた時が初めであつた。それは昭和九年五月十七日のことで、足かけ十年前である。越えて七月五日、日比谷の三信ビルで創立總會を開いた時も博士は出席され、その席上理事に選任せられた。それから理事會のたびに博士の姿を見受け、翌十年三月五日軍人會館で催した「鄉土風景」座談會にも出席されてゐる。さうして溫泉と鄉土風景について草津の例を引いて述べて居られる。

同年四月の總會で博士は石井柏亭、本田正次兩氏と共に常務理事に擧げられ、昭和十五年三月まで五年間常務として在任し、毎月の常務役員會にも大抵出席

せられた。

博士の原稿が始めて「風景」に掲げられたのは昭和十一年四月號で「溫泉地名考」と云ふ五頁程のものである。

――溫泉地名の起原は様々であるが、凡そ之を大別して見ることが出來る。それには湧き出でる泉水の性質から呼びかけたものもあり、又溫度の冷熱から拾つた名もあれば、その溫效を讃へて名附けたものもある。又溫泉發見の由來に因んだ名もあり、又溫泉の所在位置を表現してゐる所もあるが、名は實の體を現し、溫泉地名から溫泉の泉水の事情を明にし得、溫泉の外景を略ぼ推定し得る事がある。――

と多くの實例が擧げられてゐる。

次には同年七月號に「日本溫泉が持つ誇り」と題し、日本の各地の溫泉について述べ、その末尾に

――日本の溫泉は火山に湧出するものが多く、溫度は一般に高い。又その含有物も夥しい。殊にマンガンを含めることは他國に見られない所で、日

本溫泉の特徴の一つである。大體に於いて日本の溫泉は活氣に富んで居り、總べての種類の泉水を持ち、而して一溫泉帶に於てすら、僅かの距離を隔てゝ全く泉質を異にした聚樂群があり、湯瀧があり、海水浴を兼ねることが他國に見られない理想の溫泉鄕土たる所以である。――

と述べて居られる。

次に昭和十二年二月號には「十返舍一九の足跡」と題する一文がある。それは短文ではあるが、舊幕府時代の旅行者としての一九の足跡についての考證で、一九の二大著「道中膝栗毛」と「金草鞋」によつてその廣汎な足跡について述べられてゐる。

猶同年十一月號に「溫泉の發見と傳說」と題して動物によつて發見された溫泉や高僧によつて見出された溫泉についての一文が載つてゐる。

二

翌昭和十三年五月に「風景地の檢討」第十三として「別府地方」を特輯したとき、藤浪博士は「泉都別府」と題して溫泉都市としての別府を俎上にのせ、忌憚なき批評

を試み、別府が決して泉都といふ資格のなき事を論ぜられてゐる。その筆峰鋭く、溫厚なる博士としては珍らしい一文であるが、これは決して別府を惡んでの事ではなく、別府人の反省を促す爲めの親切からであると思ふ。

昭和十四年には奈良ホテル裏にある大乘院趾庭園保存問題が勃發し、風景協會は日本庭園協會と協同して懇談會を開き、これにも藤浪博士は出席されたが、「風景」三月號をその特輯號とし、これにも一文を載せられてゐる。懇談會に於いて博士は

――奈良の施設については奈良百年の爲めに充分考へて欲しい、今工事を中止することは奈良の爲になることです。東京、大阪のやうな土地と奈良のやうな古都とは、施設をするにしても自ら考へ方を全く變へて行かなければならないと思ひます、今此の大乘院庭園を完全に保存して置けば、將來の奈良市民がどんなに感謝するかしれないのです。――行きがかりに拘泥せず進まなければならないと思ひます。行きかゞりや人の問題等は、日本の古都たる奈良百年の爲を思へば全く取るに足らぬことです――

と述べられ、別に「奈良市の爲に惜しむ」といふ短文を掲げられてゐる。それには

――奈良の當事者が我が功名を徒らに急ぐ氣味があるから、時々問題が起る。問題が起ると當事者は自らの面目に對し、何んとか妥協の法を探して當面を繕ふとする。今回の大乘院庭園の問題の如きはそれである。大乘院庭園の由緒あることが、今回新たに文獻の發見によつて明知せられたからには、この庭園の保護に挺身當らねばならぬに、市當局者が自己の位置に戀々たる爲めに、飽まで吾が計劃を無理に推進せんとするが如きは奈良市百年の爲めに喜ぶべきことではない。吾人は妥協の如き卑劣なる行爲には、飽まで拒否すべきものであると信ずる。當事者は宜しく切腹して、奈良市民に謝して大乘院庭園保存の一途に驀進してこそ、その職責に忠なるものである。奈良市の如き舊都は飽までも舊都の面目を保つ處に奈良の價値はあるのである。奈良市民も奈良の問題には自ら深く考慮すべきではないか。當事者に任して、これが破壞的工作になることあるも、馬耳東風では決して奈良の躍進は望めない。――奈良の面目は舊都保存である。

由緒ある一草一石に富んだ都市は他にない。この歴史的事蹟を吾人は徒らに鋤犂に托して破壊することは出來ない。舊都保存、觀光事業の間には決して二途はない。歐洲の舊都保存の事蹟に市民は大に參考の資料を求めて、勇躍日本の意義を護らねばならない。

この時の博士の熱意は非常なもので、一月廿七日の夜開いた常務理事會でも、博士は田中啓爾氏や本田正次氏等と共に強硬論を吐かれ、日本庭園協會側で出來た妥協案に反對せられ、其の結果が二月三日の鐵道協會に於ける懇談會となつたのであつた。猶、博士は手辨當で奈良に行つて市の當局や市民を說得してもよいとまで云はれた。

その後、同問題は一旦好轉して殆んど我々の主張が容れられたが、又逆轉して奈良市會は舊主張を徹しさうになりその最後は遂に妥協案に落付いた。しかしもと〳〵同問題は一旦鐵道省で許可し、改正の大道路は既に苑の外廓まで出來て中止されてゐる情勢なので、妥協案でも實現すれば成功の方で、遂に我々も妥協案で承認し、博士も賛成せられたのであつた。さうして博士はその祝だと

云つて常務理事一同を日比谷陶々亭に招待して晩餐を饗應せられたのであつた。

三

翌昭和十五年には「東北溫泉を巡りて」の一文が四月號五月號に亘つて掲載されて居る。それは東北六縣に散在する總計百九十五ケ所の溫泉について述べられたものである。

その外には「三等車」と題する一文があつた。これは三等車の妙味を述べられたもので一つの感想文に過ぎないが興味あるものであつた。

博士が常務理事を辭せられたのは、昭和十五年のことで、その後は單に理事として止られて居つた。またときゞ〳〵健康を害されてゐた樣であつた。從つてその後は御目にかゝる機會も少かつたが、博士は御自身の體によく注意して養生を守られると共に他の役員の健康についてもよく注意を與へられ、石井柏亭氏も一度慶應で診て貰はれ、阪井政次郎君が怪我したあとなど電氣治療をすゝめられ、慶應病院でその治療を受けさせられた。又私も十五年の春、血壓が高か

つたのでよく注意を與へられたものであつた。

また風景協會の創立記念會とか談話會には、よく慶應の若い助手連數名を連れて出席せられ、皆と共に樂しんで居られた。もう一つ忘れられないのは、十四年の暮であつたか、協會の經濟もまだ苦しかつたので、女事務員の歳暮を出すのにも困つて居た事情を察して、何處からか御自分の歳暮として貰はれた債券百圓足らずを袋の儘ポンと投出されて阪井主計に渡されたことである。

風景協會の常務は屢々交替する制なので、今十八年度にはまた博士に常務になつて頂きたいと思つてゐたのに、突然逝去されたのは、協會にとつても大なる損失であつた。

猶書き洩したが昭和十一年の夏頃であつたか、當時時々開いてゐた編輯會を宅で開いてやらうと云はれて、內幸町の御宅に集まり支那料理の御馳走になつた事もあつた。

又溫泉のフキルムを鐵道省から供出して新年會の席上で映寫し、博士自ら說明せられた事もあつた。第二回の臨地講演會を修善寺で催した時には、講師と

して溫泉の話をされる御約束であつたが、微恙の爲め御出席を得なかつたのは今も殘念に思つてゐる。

その外、思ひ出せばいろ〳〵なこともあるがあまり長くなるから此位で擱筆して置く。風景協會があと一年で滿十年となり、會員も一千名に上り、基金も出來て社團法人組織となるのを見て頂けなかつた事も誠に遺憾である。

（一八・二・二八・目黒にて）

藤浪博士と大乘院の庭園

田村剛

日記といふものを書かない私のことであるから、いつどこで初めて藤浪先生に出會つたか、それははつかりとはしない。然し何でも國立公園協會を創立したのが昭和二年であつたし、その役員として溫泉の專門家たる先生をお願ひしてゐるのを見ると、大體その前後からのおつき合と思はれる。溫泉といへば、先生を想ひ、先生といへば溫泉を想ふ。全くその通りで、私の狹い先生との交涉を想ひ起しても、悉く溫泉關係であつたといつてよい位である。日本の溫泉の保護や利用や開發について努力せられた點では、先生の右に出る者はないといつてもよくはないだらうか。從つて先生の追憶について、溫泉のことを書いたのでは際限がなささうであり、又私としては風景を通じて先生との交涉があつたのでその方のことを少し記して見ようと思ふ。

昭和九年頃、風景協會を設立することとなつた時に、やはり溫泉を代表して先生は最初から發起人として御盡力になり、その創立當初の三ケ年間の最も困難な時代を、常務理事として並々ならぬ御盡瘁があつて苦しい時代を切りぬけて、今は先づ在野の協會としては、立派なものになつてゐるが、その風景協會をして今日あらしめたことには、藤浪博士の存在を忘れることは出來ない。そしてその間私の印象に最も強く殘された一事を記しても、いかに先生が風景なり史蹟なりの保存に熱心であつたかが判るのである。

數年前のことである。奈良ホテル構内にある大乘院庭園の遺跡の一部が、市の都市計畫事業たる道路の開鑿により切りとられ、老松なども伐採せられるといふことで、關西方面で一二識者の注意を惹き、それが風景協會へもち込まれたので、早速右に關する資料を整へ、大乘院庭園が室町時代の貴重なる遺跡であり、且つかなりよく舊態を保存してゐることが判つたので、これが保護のために乘り出すことになつたが、偶々この話があつた時は、既に內務省及縣當局の方針が決つてゐて、仲々その變更が困難であつた。それでも熱烈な陳情を行ひ、又鐵道

省當局の理解ある態度にも力を得て、猛運動を試みてゐた際、一方地元市會が道路促進にうち込み、本會の主張と相容れぬことが判明したので、こゝに亦暗礁に乗りあげた觀があつたが、先生はこの地方がその地元の貴重なる史蹟に對する無理解な態度に甚だしく憤慨せられて、そんな馬鹿な話はない。それは一つ自分が出かけて直接市會議員の連中と話をして判らしてやるといつたやうな申出でがあつた。それほどに先生は事に當つて熱心であつた。そして遂に本問題は頗る好ましい狀態に於て解決した譯であるが、萬事がかうした風であつて、平素の穩やかなニコ〳〵とした先生にも、反面に於てこの熱と力とがあつたればこそ先生の生涯に幾多の光彩ある事業が各方面に亘つて、成就したのであると、私はこの性格を通して先生を深く敬慕し、そして此度の不幸なる御逝去をば、國家の一大損失として惜んでも餘りあるものと考へてゐる。

我々は、醫史學によつて、日本文化に關與した醫學の眞髓を正視し、その眞髓を時代思想との交流の痕を考へ、以て將來への備へとせねばならぬ。而して、外國の醫學の進歩の狀況に關心し、日本醫學の水準を益々增進させねばならぬ。

——醫史學の必要から——

友人よりみたる人として



明治四十四年維納にて

藤浪剛一博士を憶ふ

宮島幹之助

慶應義塾大學教授藤浪剛一博士の急逝は洵に痛惜に堪へない。君は岡山醫學專門學校を卒業して間もなく、北里研究所の前身たる傳染病研究所に來り細菌學を修め、その後更に歐洲に留學された。私は明治四十四年官命を帶び渡歐したが當時君は墺國の首府ウキーン市に在りて、ホルツクネヒト先生の許で專らレントゲン學の研究に精進しつゝあつた。私は着獨後直ちにドレスデンに赴き、萬國衞生博覽會に働き、その年の秋公務を果して後、歐洲各地巡遊の途次ウキーン市に立寄つた際藤浪君は研究に多忙であるにも係らず、土地不案內の私を親切に世話してくれられた。その後間もなき明治四十五年に、君はその業を了へて歸朝され、私も同年歐洲から歸朝したのであつた。何分君と私と專門が違ふので、互に往來する機會も少なく、疏遠になり勝ちであつた。故人は順天堂

醫院から大正九年七月に我が慶應の醫學部に聘され、理學的診療科を新設してその主任教授に就任された。私も醫學部に關係してゐたので、爾來吾々の交友は年と共に厚く、君の逝かれる日までつゞいた。思へば吾々兩者の親交は三十餘年の長きに渉つたのである。

君は我が國にレントゲン學を導入し、その發達に多大の功績を遺された斯道の權威者であるが斯學に門外漢の私などに、君の學問上に於ける業績に就て述べる資格は全くない。併し、傍ら君が研究されてゐた醫史學や、溫泉學に就ては私も些か興味を有つてゐたので、屢々君の教を受けた。昭和年代に入り、私は毎年渡歐するので、故人の注意を受け、世界的に有名なカルスバード（チェッコスラヴキア國）やヴイシー（フランス國）などの溫泉を視察して、其の科學的利用法の頗る發達してゐることを學び、歸國後我が國は靈泉に惠まれてゐるに係らず、溫泉地の多くは遊蕩場化し、科學的利用法の講じてゐないのを君と談り合つて、慨嘆したことも屢々であつた。斯道に造詣深き君の指導により、我が國に溫泉善用の氣運が近時漸く勃興するに至つたのは洵に喜ばしい。殊に我が慶應醫學部は君の熱心な

主張と盡力とにより、伊豆半島の月ケ瀬に溫泉湧出地を獲得し、模範的溫泉研究所を設くる運びとなり、諸般の設備を整へつゝあつたのだが、大東亞戰の勃發のため資材難に陷り、君の在世中にその完成を見るに至らなかつたことは、洵に遺憾至極である。併し、君の遺志は當局者により必ず實現される日が遠からず來るものと信ずる。

藤浪君は夙に醫史學の研究に心を傾け、君の後半生は東洋醫學、殊に本邦醫學の歷史に關する資料の蒐集に費された。君が、財を惜まず銳意努力して集めた藏書の多きと、貴重の文獻の網羅されてゐることは、醫史學の泰斗富士川游博士亡き今日、君と比肩する人は恐らくないであらう。

恩師北里柴三郎先生の記念事業として、醫學圖書館の建設を主張した有力な一人は確かに君であつた。又古來の日本及び支那の醫學及び藥學に關する文獻を出來る限り此の圖書館に蒐めんとて、常に骨折られたのも君であつた。又我が醫學部に富士川博士を迎へ、醫史學の講義を開始したのも實に君の斡旋によれるものである。醫學生に醫學史を授くるのは、獨り先哲の偉業を知らしむ

るのみならず、醫道昂揚のためにも重要である。此講義は富士川博士逝去後缺講になつたのを私は頗る遺憾に感じ、君の本職たるレントゲン科に優秀な後進をすゑ、醫史學講座を特設して蘊蓄を傾くるも君の任務であらうと、頻りに勸めたので、君の意も大に動いたやうであつた。尙その際、折角君の蒐めた貴重な藏書を繁華街の自宅などに置いては、火災の怖れがある。一日も早く北里醫學圖書館に預けて、その安全を圖るべきではないかと話したところ、君も大に共鳴されてゐた。こんな話をした當時、かくも早く君の長逝に遭ふなどと夢にも考へなかつたのである。

藤浪君のレントゲン學を始め醫史及び溫泉等に關する研究は頗る廣範圍に渉るが、纏つた著述としては次の六卷が公にされてゐる。卽ち

東西沐浴史話	昭和六年	人文書院發行
溫泉場の衞生施設	昭和十年	「溫泉大鑑」ノ一篇
醫家先哲肖像集	昭和十一年	刀江書院發行
溫泉知識	昭和十三年	丸善書店發行

溫泉報國　　昭和十三年　「溫泉研究」第二輯

日本衞生史　　昭和十七年　日新書院發行

以上の著書の外、君は常に專門雜誌其他に百數十編の論文を發表し、斯學に寄與されたところは極めて多い。

君は酒も煙草も嗜まれなかつたが、趣味として暇さへあると、醫學に關係ある先哲の遺蹟や墓碑を探して自ら清掃に力め、これらの保存に人知れず盡力されたことは實に尊き行動と、同好の士間で、稱讃されてゐた。もう一つの趣味は君の美味求眞であつたと思ふ。晩年に及び君は到る處に名物を探し、又かくれた處に珍味を食はせる店などを探し出して、よく友人を伴ひ行き美味を賞して樂まれた。私も指導を蒙つた一人で、君なき後教へられた料亭に出かけて食事をする毎に君の溫容が眼前に彷彿するのである。

食物に就ていつも思出すのは君のウキーン留學中の出來事である。私が同市に立寄つた際ドレスデンの博覽會で知會ひになつたウキーンの建築技師から晩餐に招待され、藤浪君と共にその家に出かけた。その折技師夫妻は親しい

友人數名をも招いて、私達を大に歡待してくれた。食卓に就くと、私等の前だけに歐土には珍しい柿が供された。主人のいふのに、家内が今日、日本特產の珍果を見つけて來たのであるからどうか、味はつてくれと。私共は其好意を厚く感謝し、早速その一切れを口にすると、澁くてとても食べられない。主人の折角の好意を無にするのも非禮と考へた吾々は、互に顏を見合せながら、柿を細かく骰の目に切り、一つ一つ口內になげこんで丸呑みにして、やつと片付け、甘い珈琲で澁いあと口を直してホッとした。難有迷惑とはこのことだね。と、食堂から出てからそつと話し合つたのであつた。あの時の澁さは今想ひ出しても口が縮むよと、笑ひつゝ談り合つたことを想ひ出すのも今は涙の種である。何といふ寂しいことであらうぞ。

藤浪剛一博士を追悼す

竹内松次郎

昭和十八年三月三日、大學の私の室へ某氏來訪せられ、談故藤浪剛一博士に及び、同博士追悼錄を編輯せられんとする企劃あることを知りまして、私より志願致して、拙文一篇を捧げて是非共其の追悼文寄稿者の仲間入りを申し出でました。蓋し、藤浪剛一博士と私との間には淺からぬ因緣の存するものが有りまして、私は藤浪剛一博士に想到する折に、必ずゆかしき數項の事實を連鎖的に想起するを常とする故であります。卽ち、藤浪萬得先生(藤浪鑑先生及同剛一博士の嚴父君)と土肥淳朴先生(土肥慶藏先生の養父君)との關係、藤浪鑑先生並に同剛一博士御兄弟と土肥慶藏先生との關係、藤浪剛一博士と私(松次郎)との交誼、因緣從つて藤浪鑑先生並に藤浪剛一博士の高き學と德とに對する私の敬慕の念等の觀念が連鎖一瞬にして私の腦裡に浮び出づるのであります。私の思ひ浮ぶる

上記の如き連鎖は早速にでも之を筆に爲すこと可能でありますが、私は藤浪剛一博士の追悼小文を草せんとする前に、時と事との關係の正確さを期せんと欲しまして、數種の記錄を用意することを勗めました。

昭和十八年三月十四日早朝愈々藤浪剛一博士追悼の小文を草せんとして筆を執りましたが、此時私の机上には、慶應義塾大學醫學部保管の藤浪剛一博士の履歴書の寫一本(北島多一博士に依頼して取り寄せたるもの)京都帝國大學保管の藤浪鑑先生の履歴書の寫一本(京都帝國大學教授にして私の大學學生時代の同級生たる正路倫之助博士を煩して取り寄せたるもの)更に正路教授を通じて京都帝國大學醫學部森教授より惠贈せられたる藤浪鑑先生追悼錄一部、其他には、土肥鶏軒先生に關するものとして同先生の文集並に詩集及び其他の記錄數種等があります。

土肥慶藏先生の養家なる土肥家は越前丸岡藩醫たる家柄でありまして養父君淳朴先生は慶藏博士先妣橋本氏の令弟にして(武生鄉友會誌、土肥慶藏博士追悼號、昭和七年)陸軍々醫として、名古屋師團に奉職せらるる内、藤浪萬得先生との

交誼極めて親密となられました。「土肥(當時は石渡慶藏先生は明治十二年鄉里越前武生の小校校卒業後、十三年一月(十五歲)笈を負ひて名古屋に至り、土肥氏(叔父にして後の養父土肥淳朴先生)に留まること三ケ月、次で實兄秀實に從ひて東上し、五月下谷進學舍に入り、獨逸語を修め、九月東京外國語學校に入學し、十一月兄弟共に東京大學醫學科へ入學、十八年豫備門を卒へて醫學本科生となり、明治二十三年一月新大學令に據る帝國大學醫科大學を卒業醫學士となられたり」(土肥慶藏博士傳、皮膚科泌尿器科雜誌、第三十一卷、第一一號)。而して慶藏先生が土肥家の養子となられたるは、同先生の大學卒業近くの事でありました。

藤浪鑑先生の追悼錄の第二三七頁には「東京遊學時代の故人」(鑑先生)の條下に、「一五四四年(明治十七年)春頃、土肥氏「故慶藏氏の父君(養父君なり)、越前藩實は越前丸岡藩なり)の侍醫たりし人」から萬得氏に、慶藏氏と共に故人を東京に遊學させたら如何と勸められた。中學校の卒業免狀はとらずに、卒業前數箇月に退學して出京、同年六月二十日東京醫學豫備校に入學されたと記されて居ります」(理學博士小室英夫氏よりの追悼文)。土肥慶藏先生が大學豫備門を終へらるる年

の前年に、藤浪鑑先生は大學豫備門に入學せられたるなり。其後、鑑先生は第一高等學校を經て、明治二十八年十二月二十二日帝國大學醫科大學を卒業せられ、翌二十九年七月五日、滿四ケ年獨逸留學を命ぜられ、明治三十三年十二月歸朝と共に京都帝國大學醫科教授に任ぜられました(藤浪鑑先生追悼錄、第五頁)。

土肥慶藏先生、藤浪鑑先生の御二方の間柄は眞の兄弟の如くに親しくありまして、私(松次郎)も明治四十年以後、數度となく、土肥家に於て藤浪鑑先生の溫容を拜し、親しく御話を拜聽し得ました。昭和六年十一月十日、土肥先生葬式並に告別式後、午後四時半、青山齋場より幡ケ谷火葬場迄の葬送の自動車列の一車內に藤浪鑑先生と私(松次郎)との二人が同乘致したる道すがら場合が場合乍ら鑑先生は靜かに四方山の思出を私に談り聽かせられましたるあの機會が實は私(松次郎)にとりまして鑑先生に接する最後の機會となりましたのであります。

偖て私(松次郎)と藤浪剛一博士との因緣は次の如くにして結ばれたのであります。私(松次郎)は明治四十年七月第四高等學校を卒業し同年九月より、麴町區下二番町の土肥家より東京帝國大學醫科大學へ通學致しました。土肥家に於

ける當時の私の居室は、今も其儘存在して居ります。それは同家屋敷の門の向つて左側の二室よりなる建物の一室でありました。其の隣室に剛一博士が居られまして、食事には土肥家の日本屋食堂にて剛一博士と私とは共に食膳につきますし、私共の居室の唐紙四枚の内の一枚は常に開ききりになり居りまして、私等兩人は全く起居を共に致したる譯であります。

其頃剛一博士は岡山醫學專門學校を卒業後上京せられて直ちに傳染病研究所に入られて細菌學の講習を受けられたりと私は記憶致して居ります。背廣服を整然と着用せられ、萬事が几帳面にて毎日講習にて講義せられたる所を復習せらるるに方りて多くの參考の書を引用せられて良く勉強せられたる有樣は今も私の眼底に瞭然たるものがあります。

或日赤血球浮游液入りの一本の試驗管を持ち歸られ、私に示して色々說明せられたることもありました。私は醫科の一年生として解剖學の入口に居りたる者ですから、赤血球浮游液が何の役に用ひらるるかは一向に判りませず、剛一博士の說明も私には不得要領なりしは止むを得ませんでした。今にして考へ

て見れば、溶血反應、乃至補體結合反應等の實習をせられたる時の事なりしならんと思はれます。

剛一博士は溫厚にして上品、固より寡言な御方でありましたが、其の談話は一種の節又訛りを持ちて、極めて親しみのある態度にてせられまして、座談は頗る上手でありました。講習學科の參考書の外に、內外の關係雜誌をも多く讀まれ、夫々の個條項目を整理せらるる有樣には、私は常に窺に感服致し、敎へらるる處極めて多くありました。剛一博士が歷史に特別の趣味を持たれたることは、不束なる私にも、其の當時既に伺ひ得られました。私共は土肥家に於て同室同樣に起居すること數ケ月にて剛一博士は傳染病研究所の講習をも終了せられて他へ移られ、外國留學前に、既に將來の專攻科を「放射線學」と決定せられ、夫々豫備の諸學科(例へば理科大學にて物理學)を學修せられまして、明治四十二年二月に歐洲に向つて留學の途に上られ、墺國維納にて放射線學を專攻せられ、明治四十五年八月歸朝の上、東京の順天堂病院「レントゲン」科を擔任せられました。(藤浪剛一博士履歷書)當時我邦にて此學科を專攻せられたる學者は極めて少く、恐ら

く藤浪博士を以て其の最初とせらるものの如く、私共は考て居ります。勿論東京帝國大學醫科大學にも未だ放射線の專門科教室はありませず、大正五年二月一日新設の靑山內科附屬物理的療治研究所設立以來、迂餘を經て物療內科教室の創立せられましたのは遙か後大正十五年七月一日講座新設、八月廿七日擔任を命ぜらる)の事でありまして、眞鍋嘉一郎教授の留學は明治四十四年三月十三日發令、三月廿八日出發(向米國)より大正三年十二月十五日歸朝迄の間であります。兎に角、藤浪剛一博士が放射線學を自己の專攻學科として選ばれたる眼識は、私の最も敬服致したる所であります。(眞鍋嘉一郎教授履歷書、並に東京帝國大學學術大觀、醫學部、第一六七頁)

藤浪剛一博士の我邦放射線學に於ける功績に就きましては、博士が慶應義塾大學醫學部教授として新設の斯學講座を擔當せられたることは我邦の何れの醫科大學に於けるよりも眞先きなりしならんと私は考へて居ります。

藤浪剛一博士が歷史、特に我邦醫學史、乃至醫史學に造詣深かかりしことは、私が玆に申す迄も無きこと乍ら、其の歷史研究の態度の極めて熱心にして純學者

的なることは、萬人の敬服する所なりと聞き及んで居ります。歷史資料の蒐集には萬金をも惜まず千里をも遠しとせられなかつたのであります。震災後の麹町區內幸町の藤浪剛一博士邸へ私が向ひたる機會も數度ならずありましたが、同家に於ける歷史資料の書籍類の整然たるには唯々感服の外はありませず、東京の帝室博物館に於ける私の知人數氏よりも、藤浪博士が熱心に資料に蒐集し居らるること、特に博物館所藏の書畫等をも筆寫、寫眞撮影乃至模寫せしめられたること甚だ多かりし事の話しを數多く聞かされました。

溫泉に關することは勿論、我邦解剖學の發達史の資料調査等の爲には私の生國越前へも數度出張せられまして、福井市濟生館にて醫學史資料を取調べられ、關係先輩古老をも訪問せられたること等、私は在福井市波々伯部主隆翁より直接の談話を聽きましたし、又剛一博士よりも越前出張の話をききました。宜なる哉昭和十六年五月には帝國學士院日本科學史編纂委員に擧げられましたし、先是、富士川博士山崎佐博士等と共に日本醫史學會を揮ひられ、日本醫學史に關する多數の研究業績を發表せられたること等、茲に記す迄もありませぬ。實に

藤浪剛一博士は昭和十七年十一月廿九日の逝去迄我邦の放射線學と醫史學とを指揮せられたる高潔なる大學者でありました。

藤浪剛一博士追悼錄に志願致したる私と剛一博士との關係に就きまして私の日誌にも猶色々の機會の記事も在ることではありますが、玆には私が剛一博士を想ひ出す時に私の腦裡に浮ぶ觀念の連鎖の大略而已を述ぶるに止めて筆を擱こうとする時、今朝は格別東天に昇る旭日の紅色甚濃くありして異常の壯嚴さを帶びたるものでありましたから、急ぎ家人を呼び起しまして昇る朝日を拜ましめ、私は無言の儘心の中に故藤浪剛一博士並に令兄藤浪鑑先生及び故土肥先生の冥福を祈りつつ、家人と共に今日の朝日を拜みました。

（昭和十八年三月十四日早朝）

藤浪博士に關する思ひ出

懶青楓

一

明治四十四年頃私は西洋から歸ると東京に出た。

東京生活を始めて經驗する私は田舍武士のやうな無作法を平氣でやつてのけてゆくさき〳〵で笑ひの話題を提供した。

それ以來私の身邊はたえず大浪小浪がうちよせてある時は、濱邊の小石を沖遠くさらつて海草の底に沈め、ある時は磯邊の砂丘の上にもちあげられて、風雨に曝らされるやうなこともあつた。

然し神經の粗雜な私は、それを人生の常道と考へて、敢て浪と共に浮き沈みをくりかへしてきた。

本鄕のどの邊だつたか古ぼけた、かざり氣のない門をくゞつたことがある。

庭も只廣いばかりで、何の風情もなかつた様な氣がする座敷で、女性同士の話をきいてゐる私は、庭への視線を了ると座敷の中へ眼をやつた。床の間に赤い模様の袋に、三味線らしい感のするものが二つも立てかけてあつた。長唄かなにかの本らしいのがあつたやうな記憶もする。

お嬢さんは日本趣味の人だつたのだ。たゞ下を向いて、二つの袂を膝の上に左右からかさね合し、赤い模様の襦袢の袖を少しひき出し、紙雛のやうな形に折りたゝんで、どうにかかたちがまとまると、又もと通り袖にくづし、くづした袖を又お人形に折ると云ふやうなことを何度かくり返へすお嬢さんだつた。

當時新女性の集團に青鞜社といふのがあつた。此のお嬢さんもその仲間の一人だつた。

田舍武士は黒潮の方向がどこにあるのかさつぱりわからなくなつてしまつた。

二

目白の齒醫者さんへ子供のことをたのみにいつた。阿佐ヶ谷の古道具屋で

知り合ひになつた歯醫者さんで、變り者だ。醫者の道具や治療室にはちつとも金をかけないで、瀬戸引の藥罐に自分で臺所から水を入れてきて湯呑に水を注いでうがひをさせられる、萬事そんな風で子供等はよろこばぬ。然し、いつきて見てもシンカンとして四疊半の客待ち室で玩具のやうな茶碗に玉露の雫をたらして、なめてゐられる。だから時間の自由のない學校ゆきの小供には待たされることがないので都合がいゝ。

玉露を二碗なめたのち、

「私はこれから麹町の方へまゐりますので失禮します」

といふと

「どこへいらつしやいます」

と云はれるから、

「藤浪剛一と云ふレントゲンのお醫者さんが亡くなつて、娘が慶應でお世話になつてゐたものですから、これからおくやみに行つてきます」

すると驚いたやうに、又感慨ふかく、

「あゝ藤浪博士がなくなりましたか、私も知つてゐるんです。小石川にお住ひのころ西洋から歸られるとすぐ馳けつけていろ〳〵の新知識を教へていたゞいたことがあるのです。

さうですか、なくなりましたか、私もおくやみにゆくといゝんだが」

さう云つて自分の若かりし頃に思ひをはせて感慨ぶかさうであつた。

この人は私のやうに頭髪が眞白でふさ〳〵と毛が多い。

內氣な性分で大勢集つた所へ出ると、少し頰を紅潮させて一向に口をきかない人なのだ。然し又さし向ひで氣のおけぬ人となら中々雄辯に次から次へと話をされる。餘程藝術家氣質の人柄と思はれる。

三

昭和十七年十一月卅日、この日新聞で藤浪博士逝去の報を知つた。そして意外の感にうたれた。

その四五日前ぐらゐのことだつたと思ふ。ある日曜か祭日の日に、二人の娘をつれて數寄屋橋の日動グリルへ食事に行つた。

そこではからずも博士にお目にかゝつた。いつものやうな溫顏で氣取らず物を云はれた。

「家内もあちらにきておりますから」と云つてお弟子達のやうな人々と食卓につかれた。私は御世話になつた姉娘の方を食卓の傍へ挨拶にやつた。

其時心に思つたのだが、藤浪さんも昔のことを思へば、少し歳をとられたやうな感はするが、中々元氣だし、普通の人の老人くさい處はないし、一たい何歳なんだらう。自分よりも五つ六つ若いのかしらん。

それから見ると、奥さんの方はどこか——いつまでも若いが、どこか底の方に老人の感がにじみ出てきたわい。

そんなことを思つてゐた。

私達が待ち椅子に腰を下して席のあくのを待つてゐる間に、向ふは食事を濟ませて元氣よく歸つていかれた。

それから間もないことだから、意外の氣がした。實際人間の壽命は達者でもあしたゆふべをわかつことはできぬものだと思つた。

四

文學好きのお嬢さんは、結婚して小石川に家をもたれ間もなく、内幸町の方へ引越された。その家は元井上通泰と云ふ眼科のお醫者さんで又歌をよくされて後お歌所寄人となられた方の舊宅だときいてゐた。

舊式な宅ではあつたが、木口がよくがつしりした廣々としたお宅だつた。私はそこへよく伺つた。

二階の奥の座敷には虎の皮が敷いてあつて、ビルマか印度かの佛像や壺のやうなものが飾つてあつた。

藤浪さんは食道樂でよく食べ物の話をされた。どこがうまい、かしこがいゝ、と云ふ話の末にではこれから何處へ〳〵へ行つて飯を食ひましやうと云ふことになつた。

鉢卷岡田とか云ふ銀座の路次の腰掛けや、ある時は、星ヶ岡茶寮や瓢亭などを御馳走になつた。

藤浪さんは酒を呑まれなかつた。自分で呑まれなくても客だけにはすゝめ

る人もあるが藤浪さんは客にも決して出しもすゝめもしなかつた。

口の悪いAと云ふ畫家と一緒に家を出た時路々、

「藤浪さんは御馳走をしてくれても酒を呑まさない人だな、ありやクリスチヤンかな」

そんなことを云つたりした。

A畫伯は痛快な皮肉屋だ、その人の悪口雑言をきいてゐると、俗念はどこかへふき飛んでしまつて、時のたつのを忘れる。然し昨今の御時勢では一寸危険い。女中がうや〳〵しく紅茶を運んでくる、主人公や奥さんの前であたりかまわず、

「日本人の生活てやつは實に複雑怪奇で了解にくるしむ。紅茶を出すかと思ふとお次は煎茶を出すし、無闇矢鱈とがぶ〳〵呑ますんだ。不可思議な人種だ」

と云ふ調子で、中々面白い。

君の口にかゝるとなんでもかなわない。外人の奥さんの罵倒もきいたことがある。

私はその頃夫婦仲が悪かつたので、A君の喧嘩の話を聞いて安心したこともある。然し藤浪さん御夫婦の睦まじいのを見ると、なあんだこの世の中に夫婦で喧嘩をしないものは、將軍様と藤浪さん達ぐらゐのものだらう。少し輕くみくびつて自分自身をなぐさめてゐたこともあつた。

五

學者と云つても自然科學者はいつも學問のことばかり考へて、人に會つても苦蟲をかみしめたやうな顏をしてロクすつぽ相手にもなつてくれないやうな人もあるんだが、藤浪さんは何時會つても氣分の變つてゐるやうなことはなかつた。其點いつも安心して逢へることができた。

晩年しばらく遠ざかつてゐたが、澤山の資料を集めて醫史學を大學で講じてゐられたとの話である。

此間も態々奥さんを御たづねしていろ〳〵御話を伺つたのだが、非常に勉强家で時間を惜しまれたと云ふことだ。そして人との交友に於ても特に深入り

をされることなく、禮儀丈けはきちんとつくされたとの御話、逸話的の材料を特にもたない人は、表面丈けを見てどうのこうのと云ふことはできない。逸話的な生活をしてきた人は只文章のたねになると云ふだけで、必ずしも人物としての優劣をどうこうすることはできない。寧ろ、そつけない生活をしておられる人に專門の仕事の上に充實した生活をねられたと見るべきだらう。

藝術意慾が貧困におち入ると生活はみだれてくる、そこから逸話的のものは生れてくる。

世には逸話のない偉大人もあるべきだと思はれる。



大正十年第二回渡歐の途次埃及にて

本書の複製、転載、翻訳を禁じます。

藤浪剛一先生を懐ふ

古畑種基

多年知遇を辱ふして、私の最も尊敬して居た藤浪先生が御逝去せられたとの報に接して、私は何とも云へない悲哀の情にうたれて居る。思へば、私が先生を知つてから今日迄に先生から受けた御厚情は筆紙に盡し難いもので、私は先生を心の杖として、まさかの時思案に餘る様な事が起れば、先生に御相談し様と頼みにして居たのである。其先生が逝くなられたので、大切な心の珠をなくした様な心地で、今更の様に先生の恩情を思ひ出し唯、追憶の涙にくれて居るのである。

私が初めて先生に御眼にかかつたのは、明治天皇が御崩御遊ばされた年の秋であつた。この年の七月に、私は三高を卒業し、九月に東京帝大の醫科大學に入學したのであつたが、三高の先輩で、私の親友であつた、小酒井不木博士がある

日、私を連れて、其頃は小日向臺町の閑靜な丘の上に住んで居られた先生の御宅を訪問して、この男は私の後輩ですが、私同樣に指導をしてやつて下さいと賴んでくれたのであつた。それ以來、私は小酒井君と一所に、先生を訪ねたり又、後には一人で、先生を訪ねて色々と外國の話などを伺つたこともあつた。今から考へると、先生は其頃は、外國留學から歸られて間もない頃であつたらしく、其擧措、態度が如何にも貴公子の樣に悠然として、人なつこい調子で外國の學界の御話などをして下さつた。

其當時、先生は御茶の水の順天堂病院のレントゲン科の科長をして居られた。理學的療法の最新知識を得て歸つた青年學者として著聞して居たので、順天堂病院のレントゲン科には澤山の患者が押しかけて居た。帝大と順天堂病院とは極く近いので、私は時々病院に先生を訪ねて其治療の見學をさせて戴いた。度々御邪魔をしてゐる中に、私は先生の人格に感激すると共に、理學的療法其ものにも心をひかれる樣になつて來た。それで、私は大學を卒業した曉には、先生の門に入り、レントゲン學を專攻して見樣かと云ふ樣な心を起したこともあつ

たのであるが、先生にはまだ先生の門下にして下さいとは云ひ出さない内に、東大を卒業する日が來たので私は卒業後、何科をやろうかと小酒井君に相談した處當時大學助手として生理學教室に籍を置き、法醫學教室に於て、血清學を專攻してゐた同君は、是非三田先生について血清學をやりなさいとすゝめてくれたのであつた。それで大正五年十二月二十五日に醫科大學を卒業すると、即日、法醫學教室に三田定則先生を訪ねて、先生の門に入れて戴く樣に御願ひしたのであつた。

こんな關係で、私は三田先生について血清化學を學び、遂には法醫學を專攻する樣になつたので、藤浪先生に就てレントゲン學を學ぶ機會を失した譯だが、私と同期の卒業生である矢內廉學士を藤浪先生に推薦して、先生の御許しを得たので、矢內君は順天堂に入つて、レントゲン學を專攻せられることになつた。矢內君は私とは違つて誠に頭腦明晰なる青年學徒であつたから、藤浪先生も大變可愛がつて特に指導せられたので、同君の學力は大に進み將來の大成が豫期せられたので、藤浪先生は、矢內君に午後から法醫學教室に行つて血清學を學ぶ樣

にとすゝめられたので、矢内君は三田先生の門に入つて、レントゲン放射によつて起る血清學的變化に就て研究する様になつたのである。然るに惜しい事に、矢内君は間もなく病を得て、遂に志を得るに至らずして逝去せられたのは誠に殘念な事であつた。

若し、矢内君が今日迄存命して居られたならば、同君は藤浪先生の第一の高弟として、先生の學燈をつぎ理學的療法に於ける權威者として斯界に活躍して、居られた事は確かである。

爾來、私は先生の御家庭に親しみ、先生は元より、奥様からも非常に御世話になつた。先生の御家庭の圓滿で、訪客をして歸るを忘れしめるのは、先生と奥様とが、一體となつて心からの御もてなしをして下さるからであると思ふ。

上に記した事でも、明かな様に、先生は學生を非常に可愛がられた。又研究に對しては熱心であり、色々と便宜を與へて下さつた。先生が斯くの如く學問に對して熱心であり、且つ後進學徒を引き立て様とする心持があつた事は、先生が眞の學者であつた證據と云ふべきである。

私が大學を出てから、又先生の御世話になつたのは私の第一次留學當時である。大正十年十二月一日、神戸解纜の箱根丸は、日本郵船の一萬噸級の新造巨船として、歐洲に向つて處女航海をしたのであつたが、この船には北白川宮殿下を始め奉り、德川義親侯爵夫妻、島津公爵夫人、土岐子爵、戸田子爵等の外に、現東大教授柿沼敎授など十有數名の各大學からの留學生が乘つて居た。この船に私も、現侍醫の神戸(久誠博士と同室の光榮を有したのであつたが、丁度藤浪先生は德川義親侯爵の御案內役として、この船に居られたので、自然先生は一行醫學者のリーダーの樣な風になつて、四十有餘日の航海中先生の御厄介になることが多かつた。私はマルセイユで、先生一行と御別れして、巴里を經て伯林に向つたのであつたが、先生はロンドン、巴里などを歷遊されてから伯林に御出でになつたので、伯林御滯在中も時々先生に御眼にかゝる機會があつた。

この間、先生は何かと御親切に、色々の御面倒を見て下さつた事は、感激の外はない。私はこゝに先生御在世中に賜つた數々の御懇情に對し、衷心より感謝の意を表し、先生の御冥福を祈つて止まぬものである。

世話好きな人

梅澤彦太郎

レントゲンの藤浪さん溫泉學の藤浪さん、醫學史の藤浪さん、それよりも古書蒐集家としての藤浪さん——その藤浪博士と相識つたのは今から約卅年も以前のことである。

當時、氏は小石川の竹早町に假寓してゐた。新婚間も無い頃のことで、氏は源氏物語からでも拔け出て來たやうな眉目秀麗の好男子、新夫人は廣文庫で有名な物集高見氏の令孃ブリュー・ストツキングで鳴らした才媛。青踏社の社規として獨身者でなければメンバーたるの資格が無い。勿論物集和子孃も藤浪氏と結婚したことによつて青踏社を脫退したわけだが、才士佳人を一對にした藤浪夫婦はまるでお雛樣を並べたやうだつた。

その頃順天堂で始めてレントゲン科を置き洋行歸りの藤浪氏を初代の科長

に招聘した。當時はレントゲンが非常に珍しかつた。佐藤達次郎院長が壹萬圓を奮發してその設備をした時にはみんな眼を丸くした。そんな莫大な投資をしてどうなることかと職員達は心配した。無理もない。當時の壹萬圓は今の廿萬圓にも當つてゐた。ところが蓋を開けてみると、われもくとレントゲン科へ患者が殺到し、忽ちのうちに資金を回收したと云ふエピソードもあつた。

當時、藤浪氏が消化器病學會に演題を出して講演したことがある。それに對し、平山金藏、長與稱吉などの錚々たる學者が、皆起ち上つて卓を叩いて論難の鉾先を集中した。藤浪氏は演壇上から顏を眞赤にして一々應酬してゐたが、その颯爽たる英姿が今も眼に浮んで來る。晩年にもその俤が殘つてゐたが、その頃の氏は全く頭の上から爪の先まで磨き上げたやうな垢抜けのした紳士で、英語のニートエンドクリーアと云ふ形容詞がその儘當て嵌まるヤングヂエントルマンだつた。

その頃は學者ですらがレントゲンを異端視してゐたくらだから、一般人はまるで理解が無く、萬能と盲信するか、さもなくば山師の金儲け仕事のやうに見て

ゐた。而も後者に屬する者が非常に多く、學者の中にも一般の誤解を、北叟笑んでゐると云つた傾きの者もなきにしも非ずであつた。さうした環境の中を氏は自信を以て濶歩して來た。內科と云はず外科と云はず、あらゆる科がレントゲンでなければ日も暮れなければ夜も明けないやうな今日の狀態から見ると全く隔世の感だが兎に角さうした中を押し切つて來た氏は全くの先覺者である。

その頃以來私は逝去の直前まで氏と交際を續けて來た。日本醫事新報の創刊には色々の意味でお世話になつた。追悼文や思ひ出など云へば、誰でもが褒めることを故人に對する禮儀のやうに心得てお世辭を並べるが、さう云ふ儀禮的な褒辭を一切拔きにしても、氏は本當に親切な人であり世話好きであつた。また駈け出しの世間知らずの私を或ひは指導し或ひは鞭撻して、さうすることがあたりまへのことのやうに振舞つてゐた。美術懇話會に私を引張りこんだのも氏である。醫界から同會に顏を出してゐるのは、慶應の醫學部長の北島さんと私の二人だが、その北島さんも氏に誘はれた一人である。交詢社の社員に

私を引張つたのも氏である。

震災の時には既に内幸町にお宅があつたが、そこもあの猛火に見舞はれて、當時氏が夢中になつてゐた蒐集の人形が、跡方も無く燒けてしまつた。あれは家内の道樂だと云つてゐたが、實は夫婦合作のコレクションで、子供の無い御夫婦にとつてはこよなき記念であつたのであらうに烏有に歸したのは惜しいことだつた。あの震災には私も丸裸になつて一から出直したが、家を失つた氏も一般罹災者同樣芝の黒書院で野宿をしてゐた。

震災を一轉機として氏の蒐集は古書に向つて行つた。最初は醫書だつたが、それから一般の書物に行き、江戸時代のものに始まつて桃山時代、五山板、吉野鎌倉時代と遡つて頻りに古鈔本を漁り集め、遂にその蒐集品の中から國寶としては平安末期の寫本「香要抄」「藥種抄」「聖德太子傳略」の三點、重美としては室町初期の寫本「眼科龍木總論」、曲直瀬道三自筆の「啓迪集」和字全九集及び曲直瀬家文書數百通を出すと云ふ手柄を立て、尚宇田川榛齋並に榕庵の稿本及び諸記錄を入手して、醫書に於ては文字通り海内無双を誇つた。

凝り性の氏は古書の蒐集も、單に古本を獨りコソ〳〵蒐めると云ふだけでは滿足出來ず、眼心會なる古書の研究會を組織して、そこへも私を引張りこんだ。會員は氏を始めとして、濟生會理事長の鈴木信太郎、三井重役の大島雅太郎、代議士の竹田儀一、日本馬事會の牧田清之助、晩翠軒の井上恒一の五氏と私の七人、全く水入らずの會合で、東大文學部講師の田山信郎、文部省圖書監修官の松田武夫の兩氏を指導者に招いて數年間續けて折々研究會を催した。

氏は、さう云つたやうな會の世話を燒くことが好きだつたとみえ、人を集めたり、會場の心配をしたりすることには率先して奔走しどんなに忙しくても少しも面倒だと云ふ色を見せなかつた。交詢社で東大名譽教授宇野哲人博士の「莊子の講義を聽くの會」が催された時も慶應の中鉢不二郎博士や私は氏に引張り出されて聽きに行つた。その夫人を治療した關係から中村不折氏と懇意になつた氏は、また私を引張つて有名な蒐集品を見せて貰ひに行つた。金澤文庫に私を引張つて行つたのも氏であつた。銀座の千匹屋に果物ばかりを食ふ會と云ふのがあつて、和田三造、高島米峰、小野賢一郎などの變り種が顏を揃へてゐた

が之へも私は氏に引張られて顔を出し最初に食べた枇杷の味が病みつきになつて何回か出掛けて行つた。考へて見れば私は氏に引張られ通しであつた。たゞ東京名墓顯彰會でやつてゐるお墓の掃除の掃苔行にだけはとう〳〵顔を出さないで終つた。今になつてみれば何だか親切を無にしたやうで心殘りである。せめて一度ぐらゐは行を俱にすればよかつたと思はれてならない。

再び云ふ、氏は本當に親切で世話好きだつた。そして世話好きな人の特性として、好意を無にすると——無にするわけではないが忙しい肉體ではお付合ひの出來兼ねる場合もあるので、結果に於て無にしたやうなことになると必ず御機嫌が斜めになつた。御機嫌を損じたくないと思つてこちらが無理をして顔を出すと、さう云ふこととは一向御存じなく大滿悅である。その天眞爛漫に、何時も有難迷惑の感じを帳消しされた。

或る時私の社の係の者の不注意で、讀者カードから氏の宛名が拔け落ちてゐて、數ケ月に亘つて雜誌の行かないことがあつた。すると氏は突然端書で「經營不如意で雜誌廢刊の模樣、お氣毒至極である」と云つて來た。卅年からの長い交

際には、その間に自ら濃淡消長はあつたが、一貫して私は何時も氏から親切を受け、色々な世話をして貰つた。私のみか、私の妹までが氏の世話で結婚をしてゐる。

京大の藤浪鑑氏が氏の令兄であることは誰知らぬ者も無いが、慶應の建設時代に京大と慶應とを連絡したのは氏である。教授の招聘、學位の斡旋等總て氏が令兄に連絡して圓滑に運ばれたもので、氏の蔭の盡力は並大抵でなかつた。この點氏は慶應にとつて偉大な功勞者である。

氏は總ゆる點に於て惠まれた人であつたが、只一つの不幸は、琴瑟和した夫人との間に嗣子の無いことである。夫人にとつては勿論のこと、氏にとつてもこのことだけは心殘りであつたであらう。併し氏に後繼者の無いのは決して偶然ではなく、全く學問の犧牲となつた結果で、この點氏に深い同情と共に限りない尊敬を捧げる次第である。

在りし日の藤浪先生

逆井花

私が勤務してゐました頃、丁度大震災の直後ですが、當時の慶應病院の附近は可成の田舎で、病院からは權田原の原つぱが一目に見え、今別館の有ります所は小高い丘で秋は野菊野萩などが咲き、竹林も有り今からは想像もつかない寂しい所でした。

その頃藤浪先生に就きましては維納からお歸りになられた日本一のレントゲン學者にして、非常に嚴格でいらつしやると云ふ事位しか伺つてはをりませんでしたが、教室の前に講堂がありましたので端麗な御姿は時折御見受けして居りました。

その先生の御考案によつて私達の服裝が改良されるといふので、一時この話でもち切つた事がありました。それまでは裾の長い詰襟に白足袋白い緒の草

履といふ姿で御座いましたが、その後は衿は開襟で廣口の袖を上に折返し可成丈の短い服に白靴となりました。この慶應型は今は何處でも見受けられますけれど、あの頃としては隨分思ひ切つた新しい型と言はねばなりません。

私が直接お近づきを得ましたのは、卒業直後理學的診療科勤務になつてからで御座います。その頃、先生のお室は外來の中央で、北向の日當りのよくない所に御座いましたが、壁が眞珠色に塗られて居りましたせいか、非常に明るい感じで御座いました。お机の上といはず戸棚と言はず至るところ御本で一杯で、御診察のない限りいつもこゝで御勉強遊ばしていらつしやいました。朝は非常にお早く七時には必ずお見えになり、何にかの御都合でも八時過ぎるといふやうな事はめつたに御座いませんでした。その爲に中には私達がお掃除をしてゐるまだ薄暗い頃から見えられた先生もあつた位で御座います。

此科に居ります醫員看護婦は實に緊張して勤務して居りました。なれない内私は早口にをつしやる先生の御言葉がどうしてもわからず、時にはおよその判斷からとんでもない間違をして、さすがの先生も終ひにはお笑ひになる事も

ありましたが、あの一種獨得の口調を今はお伺ひ出來ないかとをもひます、と誠に感慨無量で御座います。

先生は又患者を御覽になりますのに御熱心で、特に深部治療は全部御自身でなさいましたが、この時の蠟の使ひ方がなかなかむづかしく、硬くても軟らかくても駄目で私などこれではよく御叱言を頂きました。又患者を待たせる事がおきらひでしたので、多い時には成可く先生のお氣につかれないやう苦心を致しましたものです。

日日御診療がすみ寫眞の現像が出來ますと、先生が一應必ず御目を御通しになるので御座いますが、誠に御記憶がおよろしいのに驚いた事が度度でした。

醫局の先生方にも勉強さへして居りますと御氣嫌がおよろしく、學生達も此教室では、不眞面目なものは一人もなくなる位ピリ〳〵して居り乍ら、先生の御人格は深く敬慕して居りました。又先生も學生は大層愛されて、質問などいたしますと非常にお喜びになり、丁寧に御說明下さいました後、全部の學生にこれをよく讀むやうにとおつしやつて、御本を御與へになる程で御座いました。先

生の様な人格學識共に兼ね備はつた方こそ、學者中の學者と申すべきでせう。又こゝには大勢の技師が居りますから注意に注意をしてをりましても、中には管球のやうな大事なものを誤つて破損する場合もありますが、自分で申出ればどんなに貴重で御座居ましても、氣持よく御許し下さいますが、人頼みで御詫びいたしますと決してお聞き入れにはなりませんでした。

先生方が病後出勤いたしますと、大丈夫ですか、今日は歸つてお休みなさい、熱が有るのではありませんか、今日はそれ丈けにして早くお歸りなさいと云ふ風で、嚴しい中にもこの溫いお心、それが多くの人々から常に慕はれて居られました一つの力ではないでせうか。

教室の奇麗な事は又病院一番で、お掃除は殊の外やかましく、隅から隅まで塵一つ止めず、殊に窓、器械などはいつでもピカピカにして置きませんと、お氣に召しませんでした。服裝の事にもよくお氣をつけられたのを記憶してをります。又先生はお言葉がおきれいで、お叱言を頂きます時でも「こんな事をなすつてはいけませんよとおつしやいますし、御自身は「私」とおつしやつて一度も僕がとい

ふ様なお言葉をお使ひになつた事は御座いません。看護婦なども決して呼び捨てになさらず、御用の後などでは必ず有難うとおつしやいますので、却つてこちらが恐縮してしまふ事が御座いました。

先生が病院にいらつしやいます時は、眞夏でも熱い番茶ばかりで冷たいものは一切お取りになりません。お晝食はまことにお少食で、紅茶にケーキ或はミルクにトースト一枚位で、あれで充分なのかしらといつも不思議に思ふ程で御座いました。

おめづらしい召上りものはしよつちう醫局にお持ちになりました。頂くものをもひ出しましたが、先生は甘味が特にお好きでしたが、時に釜揚うどんや、ざるそば等も召上つてゐらつしやる事もありました。又暮の大掃除が濟みますと、きまつて先生からおそばの御馳走が御座いまして、この時だけは部長先生から看護婦受付に至るまで御一緒に頂くので御座いますから、規則にしばられ勝ちな私達に取つては、本當に嬉しい事の一つで御座いました。年末にはその他毎年先生からお芝居の御招待が御座いまして、醫局の先生方を始め、私達まで

樂しい夕を過させて頂くので御座います。

いつでしたか柿が送られて來ましたので、少しばかりお屆けしましたことがありましたが後になつて箱を早く明けすぎた爲、一つもたべられないのに氣が付き翌日オソル〳〵昨日の柿はと申上げますと「澁カツタヨ」とお笑ひになられたので、ホツとしましたが、これ程當惑した事は御座いませんでした。秋になり柿を見る毎にあの時のことが思ひ出されます。

先生は學問に生きてゐられる外に隨分豐な御趣味を持つていらつしやいましたことは、餘りにも有名で今更申上げる必要は御座いません。たとへばお花につきましても、ある時棕櫚の葉を丸く刈込み、四方に手を廣げた樣に竹筒に生けてあつたのを御覽になり、今時こう云ふのをまだやつてる人が有りますか、とおつしやつたことがありましたが、御言葉のとほり古い床の間式のもので、たしかに調和を缺いて居りました。現在では建物や生活樣式の關係上、新花型が隆盛をきはめて居りますが、當時は極一部の階級にのみ限られたものです。其頃御宅で拜見いたしましたトルコ青壺に入られた鬼薊は忘れる事の出來ない美



昭和十二年冬北京にて

しさで御座いました。

こちらに参りました或年、某教授より米國へ行かないかといふ御話が出たことが御座います。一應先生に御相談に上りましたところ、だまつて聞いて居られましたが「あんな所に行くと、輕佻浮薄になつてよくない、おやめなさい」と云はれ種々の御注意もいたゞきましたのでお斷り申上げました。ところがこん度は大層御世話になりました教授を通じて是非にといふ話になり私も困つた揚句又々先生に御迷惑を御掛けいたしましたところ「アメリカと云ふ國民性が實に悪いから云ふので、他の國なら決して止めない。それでも行き度いと云ふのならいらつしやい」とをだやかにおつしやられたのですが、私には其の御言葉がはげしいお叱りをうけたよりずつと感じ入りました。そんな譯で他の方が行くことになりましたが、一年足らずでその方も歸國なさいましたので、先生の御教訓が思ひ當り只只感謝いたしました。この大東亞戰爭にあたり、先生の御慧眼に今更ながら驚嘆しております。

先生は御勉強の暇々に澤山の原稿をお書きになり、又その整理も御自身でな

さいましたが、一部の淨寫は私が理學的診療科に勤務する様になりました時以來ずつと御手傳ひさせて頂いて居りました。始て御清書しましたのは「湯屋建築」であつた様に記憶して居ります。醫學は勿論溫泉、お墓歷史其他數知れぬ程のもので、しかも、それが大抵百枚或は貳百枚といふ大部の原稿で、よくかうもお體がお續きになると驚く位でございます。殆ど絶えず原稿が送られて參つて居りましたので、私は少しも存じ上げず後になつてその時は御不快で御靜養中だつたとお伺ひする事さへ御座いました。近年は益々澤山お書き遊ばしました様で、御逝去の一週間前まで原稿を頂戴いたしてをりました。至らない私が最後までお役に立てて頂きましたのは本當に身に餘る光榮と存じます。

先生の御旅先より頂戴いたしましたお便りが二三御座います。これも今では得がたい記念になりました。

七日神戸乘船瀨戸內海、波靜かなるも氣溫寒し、本朝來平程海路上海に向ふ

（昭和十一年三月八日）

滿洲國の夏は凉し、昨日大連に止まる、本日出發滿洲國各線を巡り十八日朝鮮境の五龍脊に行き大會を開く豫定

（昭和十一年八月七日）

上海——抗洲——上海——鎭口——南京——南京を昨日午後四時に發ち、今日午前十時半此地に參り候
去來如風、急忙の旅行に候　三月廿日　濟南にて

博多に參り、學會に出席致候、遙に御壯康を祈る　五月二十四日　藤浪生

白馬からの御消息ありがとう、又御土產もありがとう、蛋白は全く消散した程度で時に動くと痕跡を現す位御安神ください

麹町區內幸町二ノ五　藤浪剛一

八月五日（昭和十四年）

又御旅行のせつは私どもにまで御心をおかけ下さいまして、支那滿洲みやげにとおつしやつて、見事な琥珀と翡翠の帶留を奥様から頂戴いたしました。それから十二年三月に支那から御歸りになられました時も、御多用の爲お土産がなかつたとをつしやつて、ウキ！ンからお持歸りになられたと云ふ寶石の帶留を戴きましたが、いづれも銀座平野屋製のもので、もつたいない御品ばかりで御座いました。又十一年八月には鑵詰旅行と奥地に御出になつた爲、土産物は一切無いとをつしやられ、安奉線にてお求めになられたと云ふ蘭模様の硯を頂戴いたしました。その外にも未だいろ〳〵な御品を頂いてをります。

御逝去遊ばされます前年の秋常陸取手町に掃苔の會が御座いました時、私の故郷近くといふのでお誘ひを頂きまして、御供申上げた事が御座いますが、その時は落葉を踏んでは森も山も田も畑もかなりの道のりをお歩きになり、とてもお元氣にお見受けいたしました。夕刻すつかり空氣が冷たくなつてから歸途につきましたが、驛に着く頃は風も加はつて酷い寒さになりました。それに列

車も滿員で、一同殆ど立ち通しといふ有樣で、こんな事もよほどお障りになつたのでは御座いませんでせうか。それから間もなく御發病なされまして、私がお目にかかりましたのは翌十七年の夏約一ケ年ぶりで御座いました。蒸暑い夜でお二階の御書齋にお通して頂きましたが、先生は痩せたろうと胸や手をおさすりながら、お笑ひになつていらつしやいました。その室には何百年經つたかと思はれますやうな、蒼然たる古書がぎつしりと並び、一々張り紙がしてございました。餘り澤山の御本に私が驚きますと、年を取つて慶應をやめたら古本屋をやるかなと笑ひ乍らおつしやつた先生のお聲も、そのまま今でも私の耳に響いてゐますし、その時の奥樣とお揃ひの浴衣の柄もはつきりと目に見える樣な氣がいたします。

晩年は益々強い慈悲がたゞよつてをりましたことがしみ〴〵と感じられました。先生がこんなに早くお亡くなり遊ばすなど、露だに思へず、いつも〳〵御無沙汰勝ちであつた事がくやまれてなりません。

最後にお目にかかりましたのは、御逝去一ケ月前の十月四日、秋晴れの日曜日

に先生のよくいらつしやる銀座の十八屋で、お晝飯の御招待を受けました時でございます。この日先生はネヅミの合服、奥様は細い線で小さな龜甲を出した紺地の結城をお召しになつてゐらつしやいました。（こゝで一寸先生の服裝のことを記します。私達の卒業アルバムには和服で、鄕土玩具を御覽になつて居られる御寫眞が御座いますが、溫顏端正にして一きは目立つて居ります。先生は和、洋服いづれも瀟洒にお召しになつて居りましたが、とりわけ和服は御にあひになり、以前角帶などなさつて居りましたことも覺へてをります。）さてこゝは主人が板前をし內儀と二人でやつてをり昔のまゝのお味だそうで御座います。主人も內儀も大の先生崇拜で、これはぜひ先生に召上つて頂かうと思つて、四五日前から注文してをいたとか、今日先生がお出になるといふので誰にも差上げないで置きましたといふやうな風で御座いました。先生も御元氣に種々御話しなすつて居られましたが、思心なしかお顏色がすぐれない樣に御見受けられました。歸途銀座裏の荒物屋で、龜の子束子を奥樣が御求めになりました時も先生は店先にお立ちになつてお待ちしてをられましたが、本當に和氣靄靄

の御様子でございました。

十一月三十日、全く思ひもよらず先生御逝去の報道を新聞で拝見いたしました刹那、身體中が痺れたやうになりどうしてもこれが眞實とは思はれませんでした。お宅にかけつけるまで、いく度夢であれと祈つた事でせう。この日にかぎつて表玄關からはどうしても入る事が出來ず、恐る恐る內玄關から入つた瞬間私はもはやあきらめねばなりませんでした。何んといふ悲しいあきらめで御座いませうか。先生に永遠にお別れの御拜顏が出來なかつた私は、悔いる心で一杯で御座います。先生の御寫眞が在りし日の俤もそのままに、矢車草や薔薇、フリージヤー、チユウリツプ、カーネーション、百合等の香高く美しき花に包まれおやさしく微笑まれて居られます。

立ちのぼる香の煙りを見てをりますと、先生生前の事どもの一つ一つが思ひ出されて止め度もなく涙があふれて參ります。先生には大變御迷惑もおかけし又筆紙につくせぬ御世話に預りながら、萬分の一の御報恩も出來ぬうちにこういふ悲しい事になりました。

先生の想出は書きつゞければ、何時の日に盡きることで御座いませう。今はたゞ〳〵先生の亡き御靈の永遠にやすらけくおはしまし、そして奥様の御身つつがなきを御祈り申上ぐるのみで御座います。

先生

村岡壽

十一月二十九日は丁度日曜日ではあり、小春日和の稀にみるいゝお天氣だつたから、私は先生のお部屋の窓をあけて、お机の四邊を整理してゐた。清潔ずきと申上るよりは寧ろ潔癖に近い位先生は掃除のよく行き屆いたのがお好きだつたから。三四日前にお見舞に伺つた時は思つたよりはずつとお元氣で、この御様子ではあと一週間もしたら御出ましになれるかも知れない。午後から伺はふと思つてゐた。さうしたら屹度何日頃から御出勤になられるか、凡そのところが分るかもしれない。そんなことを考へながらお机の抽出しを片付けてゐた。籠のカナリヤがいゝ聲で鳴いた。先生は植木でも小鳥でもなんでもお好きで、植木鉢も三つ四つお部屋の隅を占領してゐる。

何かひどく周章てた人の足音がして扉があいた。

「あつ、こゝなの、先生が大變――」

私は瞬間頭から足の先まで電氣に觸れたやうにビクツとした。後を聞く必要はなかつた。

文字通り私は夢中で先生のお宅へ馳けつけた。もうそこには原先生や板津さんのお顏があつた。發作の强いのであればいゝと願つてゐたのは愚かな願ひで先生は何のお苦しみの跡もなく、今にも目をお醒しになりさうな安らかなお顏だつた。

だからもツとお體を大事に御無理があつてはいけませんでせう。と何度となく御注意を申上たのに、その度に、分つてゐます。ありがたう、とだけ仰在つて少しもお仕事の手をお休めにはならない。こんなことならもつと申上るべきだつた。もう取り返しのつかない今になつて、何か責任が自分にもあるやうに思はれたり、どうしてこんなにお早く、と先生御自身の責任でもおありのやうに恨めしく思はれたり、目標を失つた空虚な氣持で、ぢつとお傍に坐つてゐるとやゝ落着いたか、泪が新らしく溢れて來るのを覺えた。

やがて皆様に御遠慮を願つて、相澤先生お立會の下に奥様と看護婦との三人でお體を淨め、お召物をかへた。今朝御自分で顎をお撫でになつて、昨日剃らなかつたから、お髭を剃ると仰在つたと伺ひ、丁寧にブラッシをぬらした。初めは奥様が一寸あたられたが、すぐ剃刀を私の手に渡してお終ひになつた。奥様の目からはみる〳〵泪がムク〳〵と溢れては止度なく流れて行つた。私は一生懸命に剃つた。私で出來ることなら何でもしてさし上げねばならない。そんな氣持が私を極度に緊張させた。

先生に私は十七年間お世話になつた。最初の頃から今に至るまで、少しも衰へられなかつたといふことが、何よりも嬉しく思はれる。御病氣も發作時以外の御日常は潑剌とも申上たい位で、朝もお早く、すべて規則正しく寸時といへども時間を空費するといふことを嫌はれた。昨年の夏など、御退院後間もないので内科の婦長から、先生はまたもとのやうに活動して入らつしやるのね、いゝのかしら、とよく注意をうけたのをそのまゝ申上ると、苦笑なさつて、大丈夫ですよ、

自分の體だもの、誰でも命は惜しいから注意してますよ、科學史の編纂がありますからね、あと二十年は死ねませんよ、と度度笑談のやうに仰在るので、つひ私も心強く、この御病氣は養生一つだからと自分の心にも云ひきかせて、強ひて安心をしてゐたとより外は云へない。

事實またお仕事が澤山で、面會人が多いのがお好きらしく、後であゝ今日は忙しかつた、と仰在つてゐられるが寧ろ怡しさうにみえた。お疲れで御座いませう、と申上ると、きまつて、いゝえ、といふ御返事を頂いた。少し位のお熱は平氣で押し通され、お歸りの時に念のためと檢溫してみて八度で驚いたりしたことも、あつた。自然助手の方々にも頑張る人がお氣に入るらしく、コツコツ研究してゐられると殊の外御機嫌で、疲れたでせうからこれを上げて下さい、などゝ御自分のお菓子を上げたりなさる。さういふお勞りの一面、いざ研究となると傍でみてゐてハラハラする程ピシピシやられた。あの人は出來るからものにして上る、と仰在る方には殊に嚴しかつたやうに思はれた。併しそれはやがて名譽ある花の冠となつてその人達を飾つて行つたのだが、中には仕事を中途でやめ

たり、先生の眞意が分らずに反感を持たれたりした方は、寂しいといふより言葉はなかつた。先生は譬へ一度は背いた人でもまた懐に飛び込んで來ると、快くその人に手を伸される大さには、却て此方が恥かしくなつたりした。先生はよく子供がないから弟子を子供と思つて可愛がればいゝと仰在つたと伺つた。研究室ではそのやうに嚴しく仰在りながらも、一歩外へお出ましになると溫容そのもので、洵に誰にも謙遜で優しく、親切であられた。そのためか、或る助手の方が笑ひ話に、先生に何か話がある時は背廣を着てゐられる時に限る、白衣に着替へられたらもう萬事休矣だ、と。

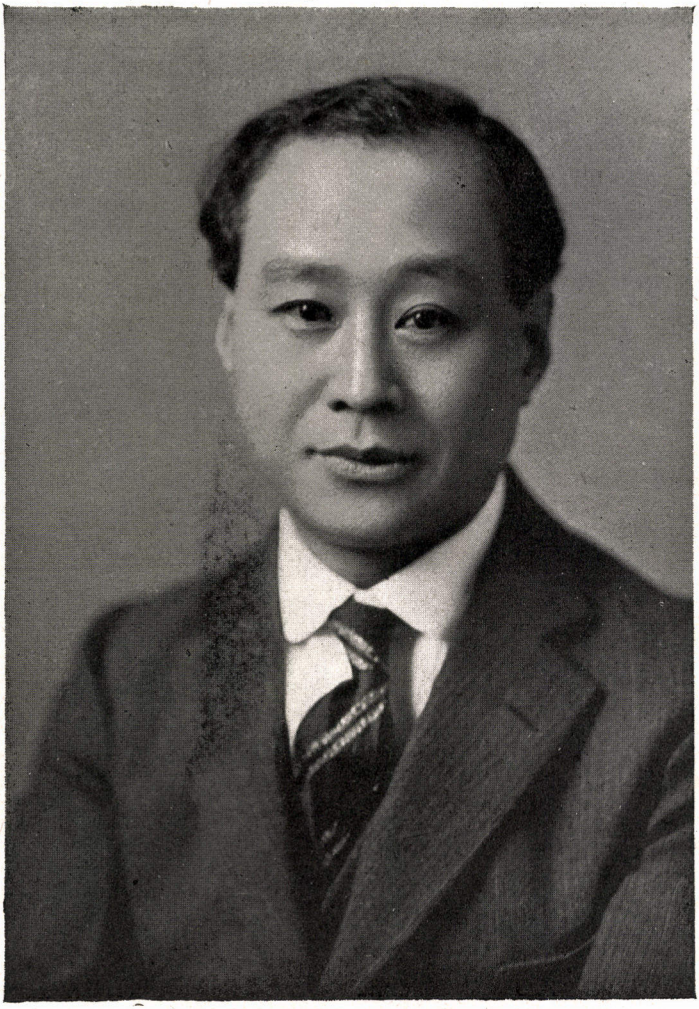
先生はお仕事をなさるのがお好きなのだ、と云ふしか言葉がない。殊に學生を對手にして入らつしやる時は樂しさうだ。夏の暑いお部屋で白衣が汗でビショ〳〵になつても平氣で說明してゐられる。御自分がそれ程熱心になさるから對手もその意氣でやつてほしい、それが先生の學問に對するお心なのだといつも拜見してゐた。

先生の一面としてもう一つ、それは子供好きであられたといふことで、病院へ

通ふ子供は病兒なのだから、自然活潑な子供許りではないのに、先生はよくその子供達を揶揄つてゐられ、子供達も馴染んでゐる和やかな風景をみた。

患者としての先生は、日頃から、病氣になつたら素人になつて、何もかも醫師の命令通りにするものだと仰在つて入らつしやつた通りに、醫師や看護婦の言葉をよく守られて、一日も早く御快方に向はれることに努められたのが、今では却て思ひ出されていけない。

併し御最後が安らかだつたのはせめてものことだつた。その朝も先生はある書店から校正が來る筈を待たれたり、うとうとしたら岩波書店の夢をみたと云はれたといふ。その四五日前に岩波の人がみえて、東洋醫學史のことを話されたことが頭にあられたらしく、そんなことをも仰在つたといふ。それで奥様が餘程あなたはいゝはね、一にも二にも本のことばかりで、と仰在りたかつたさうだ。全く先生の御一生は學者として終始されてゐたことを貴く考へられる。



大正十三年頃

思ひ出

鈴木正夫

私はこの身に於て藤浪先生を追憶なされます多くの方々と同じやうに、醫學の方面にたづさはつてゐるものではありますが、皆様とは甚だ變つた方面より先生の思ひ出を話させて頂きます。私は先達て慶應大學で催されました先生の追悼會に於て、東大の古畑教授の御追憶の談を承りました。大學も專門も異る同教授は先生とどんな御關係かと思つてゐましたが、御談を聞いて先生の弟御様なる故由之様、故小酒井光次博士を通じての御緣にて、同教授の大學生時代より先生に親炙しておいでなつたことを承つたのでありました。私と先生との關係は、この古畑教授の場合より更に內輪で、先生の學的乃至公的の御生活から更に離れたものでありまして、かゝる紙面を用ひて申げ上る價値を甚だ疑ふ次第でありますが、先生の全御人格を描出しますにはこのやうな方面からの思

ひ出も或は一と役を擔ひ得るかとも存じまして貴い頁を汚させて頂きます。

私は先生の御生家とは同じ名古屋の古い一劃である同じ町の約三町隔つた所に生れました。併し先生とは年齢にして二十に近い差があり、年代は全く別でありますから、私の名古屋で育ちました間は先生をば全然存じ上げませんでした。藤浪家は先々代より名醫を謳はれた醫家でありまして、殊に先生の父上に當られます萬得氏の許へは、近郷一帶より患者を載せて運んで來る車が街上に相連なり、その中庭では膏藥を煮る煙が四時間絶えなかつたなど、よく聞きました程有名であつたとのことであります。併し之等の語り草を私達は母などから傳へ聞いてゐるだけでした、私の子供の頃はこの先生の先考御他界の後に當り、又先生方御兄弟何れも他鄉で御活動の時でありました。從つて私達はただ名家、素封家の御本宅としてその御邸を見るのみで、何時通りましてもその大きな玄關がひつそりとして、靜かに閉ぢられてあつたことなどを覺えて居るのであります。

併し私の父(それは私の六歳のとき歿しましたが)も醫者でありましたし、私の

生家も古い家柄でありますので、先生も鑑先生も、私の父や祖父の事をよく覺えてゐて下さいまして、いつも話に上せて下さいました。又私が中學校に入つて暫くした頃、先に一寸申しました先生の弟御様の由之様が東大の文科を御出になつた直後、その中學(愛知一中でして先生御兄弟の皆様も御在學になつた學校です)で英語を御教へになり私も御習ひしたのでしたが、家の近いこともあり、又由之先生が御親切におつしやつて下さいますので、時々御宅に遊びに伺ひました。そしてそれまではたゞひつそり閉まつてゐるのばかりを見てゐた藤浪家の玄關を上り、ひんやりとした空氣の落付いてゐる御座敷で、英文學の話などを承つたのでした。

かくの如く名古屋に居ました間は、未だ先生を存知上げませんでしたが、一高に入つて東京に出て參つてから、よく先生の御宅へ參るやうになりました。先生は御子様がおありにならないためでありませうか、又は後進を導き育てることが御好きなのでせうか、若い人達の身の周りに集つて來ることを非常に喜ばれました。そして何事によらずよく面倒をお覽になり、相談に乘り、御力になつ

て下さいました。私共その時一緒に一中を出て東京の諸學校に入つた十人近い一團の者達が、特に先生の周りに參りましたのには別に理由があるのでして、その中の一人に藤浪家と親戚に當る角田君がゐて、先生はその角田君に命じて私達を御呼び集め下さつたのでした。私達は時々呼び集められては素敵な御馳走にありつくのでした。よく日本橋ぎはの當時たしか村井銀行の地下室へ行きました。何しろ大正の初め頃です、而も田舍から出て間もない書生達であります。未だ曾て西洋料理の一と續きを口にしたことのないのが多い連中にとつて、この饗宴はいかに素晴らしくいかに味覺を驚かしたものでありませう。食事の最中に於ても食後の散歩に際しても、先生の高い御教養より出る言々句句により私達は事々に啓發されるのでした。

その當時の私共の仲間の中に藝術の世界を目ざす者が二三ありました。夫等のものが初めは自分達だけで、後には先輩又は後輩と一緒になつて同人雜誌などを作り藝術的活動をしたものでした。かういふ仕事に關しても先生は深い理解と厚い同情とを御示し下され、精神的にも物質的にも非常な支援を賜は

つたものでした。この活動もその頃は未だ中學校を出て間もない連中の、見るかげもないさゝやかな動きに過ぎませんでしたが、後になつてみるとこの關係の中から文筆によりまた畫筆によつて、我が國の文運に寄與した或はしつゝある人々が生れました。我々より數年の先輩に當ります佐佐木味津三氏、我々と同級の伊藤廉君、又私共の次の年級に當る宮田重雄君などがその例であります。

私自身としましては、獨り醫學を目ざしてゐた關係もあり生家の近かつた御緣もあつて、上に述べた連中と別にもよく先生の許を訪れたものでした。未だ醫學そのものを手がけるに至らない頃でしたので、直接學問その事に就てゞはありませんでしたが、學問することに關する御教へを承けたり、豐富なる御藏書を前にして內容ゆたかなるいろいろの御話を伺つたりしました。また先生の御留守の際などはよく奥樣とも御話し申上げましたが、そのお若かりし頃、時代の新精神を充分攝り入れられたといふ高い御教養より出でる御言葉の端々は、當時中學のひたむきな勉學時代を終り、人生、社會、世界といふやうな問題を漸く眞劍に考へ始めて來た私には、種々みのり多いヒントを與へてくれたのでした。

大學生活の終りから卒業後の頃にかけては、住所の關係やら專門學に入つての忙しさやらで以前程は先生を御訪ねする機會を持たないやうになり更に千葉へ參りましてからは一層足が遠くなつて了ひましたが、時々の同鄕又は同窓關係の會合ではいつも御話し申げたり、洋行の前後といふやうな時には參上して種々適切な御教示や御注意を頂いたり致しました。最近は一年に一度位しかお目にかゝらず、先生にお會ひ申上げた最後の機會は、御逝去の一年前の秋千葉醫學會に於て、特別講演をお願ひ申して當地へおいでを願つたときであつたやうな次第であります。併しお伺ひすればいつでも御目にかゝれて、あの春風駘蕩といふやうな御話の機會を持ち得る、そして汲めども盡きせぬ滋味に溢れたお教へに接し得るといふ氣持が、私を常に安心させてくれてゐたのでありますが、思ひがけず早くもこの機會が永遠に來なくなつたといふことは、何よりも耐へられぬ悲しさ淋しさでありまして、今更ながら先生の御高德を偲ぶのであります。

かくの如く私は先生と學は同じ醫學に進みました後輩ではありながら、專門

學の差のため直接學問に於て御導きを受けます機緣に與かりませんでしたが、恰も人格發見、人間修道第一義探求の時期に際して先生に親炙して絶えざる御教導に預かり爾來常にその御薫染を身に體してゐたものでありまして、此度の御追憶集御編纂に當り、甚だ個人的な思ひ出でありまして申譯ありませんが、敢て御仰せに從ひ一筆ものさせて頂いた次第であります。終に臨み先生の御靈永へに安らひ給はんことを祈り上げます。（一八年二月廿日）

追憶

宇野哲人

藤浪博士と御近づきになり、親しく御話申上ぐる機會を得たのは、交詢社の漢學會で、指折り數ふれば、はやくも十餘年の昔とはなつた。其の節最初に申上げたことは藤浪鑑博士のことであつた。兄博士と私とは同時に外國留學の命を受け、前後して出發したことなどの思ひ出を語りて、何となく他人とは思へぬ親しみを感じたのであつたが、故博士も蓋し私と同樣の感想を懷かれたことゝ察せられる節があつた。毎月一二回づゝ御目にかゝる機會を得たが、月毎に交誼は深くなるばかりであつた。

故博士の學術上の業績は醫學界に在りては、周知のことであり、私の樣な專門外の者のいふべき筋合でもない。もし又必要ならば其道の適當な人が贊辭を呈することゝ思ふが、私の知る範圍で常に敬服して居ることは、故博士が我が國

の先哲、特に醫學の大家の業績の顯彰に留意せられ、著述の蒐集、墓地の探訪等に鮮からず盡力せられたことである。故博士が我が國に於ける溫泉に就いて特に造詣深かつたのは、故博士の專門と密接の關係があつた爲めであらう。私は度々雜誌「旅」などで有益なる論文を拜見したことを記憶して居る。

私の知る限り、故博士は溫潤玉の如き性格で、概して寡默ともいふべきであるが、何となく人を惹きつける所があつた。默々として對坐して居ても、所謂春風の裡に坐するの思ひがあつた。故博士の逝去が學界にとつて大きな損失であることは勿論であるが、私個人としても寂寞の感に勝えないのである。

（昭和十八年二月）

藤浪剛一博士の片影

吉川芳秋

私が博士を知つたのは今から十二三年前、名古屋廣小路通りの、今の中區役所内の舊市會議事堂で何かの講演會のあつた際、溫泉のことについて、慶應義塾大學教授、醫學博士として博士の名が書いて張られてあつたことを記憶してゐる。その頃私は其の市役所の市會議事堂のすぐ隣合ひの建物の内に勤務してゐたので、この講演會の張り紙をみたのであるが、それが妙に今日に迄頭に泛でくるのである。これも一の、奇緣とでも言ふべきであらう。

それからだん〳〵博士の醫名を知るとともに、名古屋市東區久屋町に父祖の代から醫術を開業せられてゐたことを知り、藤浪萬得、千得とて、玄關の隆昌を極めたこと、その玄關を入つた丈けでも病氣が治つたなどといふ話を傳へ聞いては、その盛名を早くから慕つてゐたのである。

それが愈々博士へ私をして接近せしめたのは、私の小著宇田川榕菴傳であつた。宇田川榕菴は言はずと知れた江戸時代後期における、日本理化學の恩人として近年喧傳せられる人であつて、剛一博士も早くから此の宇田川榕菴の事蹟に著目せられたらしく、私は何かの機會に此のことを知り得たので面識は無かつたのであるが、書信で初めて御尋ねした所數日を經てハガキで、榕菴の傳記參考と相成るべきものは格別なく、專門のものはあるから上京せらるれば、何時にても御覽に供へる」旨回答を頂いた。私もその節お訪ね致すべきかとも思つたがつい物憂くてその儘小著を出版したのであつた。

その後間もなく博士から一書希望の旨の注文があり、その後叮重なる御書翰も頂いて、尙榕菴の自筆稿本の一、二葉をも惠送されたのである。それは今日においては實に貴重なる記念品として祕藏してゐるのである。

博士は榕菴に就いて、その專門の醫學上、日本溫泉學の立場から、併せて史的考察をせられ、之を「中外醫事新報誌上に發表せられると同時に、昭和十年十二月、宇田川榕菴著「植學啓原」刻百年を記念して、榕菴の記念展覽會並講演會を早稻田大

學で開催せられ、未だ一般に知られざる斯の江戸時代における科學者を顯彰せられたのであつた。

この記念祭については再三再四上京を勸誘せられ私も亦無き好機に參會せばと上京し、博士に面接を得るとともに、この會に列席聽講して榕菴研究の上に得る所尠くなく見聞を擴めたのであつた。

それから博士が晩年最も力を注がれた一つに、東京名墓顯彰會の事業があつた。博士は餘程この事業には全力を盡して普及發展に努力せられ、博士から書信ある度毎に、又會ふ度毎に、いつも〳〵このことが記され、會員の增加、原稿の督促、掃苔道の振興等に就て話されておつた。私も博士からの勸誘を得て、その殆んど最初から加入の榮を得て、今日もなほ其の末班に名を列ねてゐるのであるが、博士の意氣込みに對しては全く頭が下るのを覺えると同時に御自身、年數回歸名されては、覺王山の自家一門の墓碑を訪れられるには、深く掃苔道の實踐者として敬意を表するものである。

博士なき後、幸ひ、日比幸子の筆名を以て高著東京掃苔錄」に鳴る令閨和子女史

がその遺業を繼承せられて、愈々斯道に邁進せられあるは、現下の世局に鑑み、夫唱婦從の範たるのみならず、廣く世に鴻益あるべきを信ずるのである。

博士が日本醫學史の攻究に多大の時日と費用を傾注して努力せられたことは、一度博士の所藏書だけを通覽することによつても知られるのであつて、國寶數點を初め斯書は數千點を算するとのことであり、藏書目錄は五百頁に及ぶと聞く。私は博士が幾多の珍籍奇書を襲藏せられることを知るとともに、現代醫史學會の大御所として、御功績の尠くないことを懐ふのである。

博士は一昨年、帝國學士院より日本科學史の一部を擔當することを囑せられ、非常な構想をもつておられたのである。自身語られた所によつても、尨大なものを書かねばならぬと話され、何處か閑靜な所へ資料を携行して、科學史を執筆したいものだと言はれてゐた。その科學史の原稿も何處まで完成されたのであらうか。その胸中、其の腦裡を窺ふ時、撫然として涙禁じ能はざるものがある。

私が數年前、尾張木曾川畔に、幕末開國の礎として不遇な一生を終つた、高野長英寓宿の石碑を建設した際も少からず博士の高庇と盡力を得たのであつた。

博士は大抵事を頼めば、何時も無理と思はれることでもよく聞き入れて盡力して下さつた。

今年の二月の雜誌「掃苔」博士の追悼號に誰かゞ書かれてゐたやうに、博士は何時も文字は叮嚀に、判讀に苦しむことのないやう、整然と書かれてあつたのが常である。これは私共の學び及ばざる所で、人格性行の現はれの一つである。

博士は、全く好紳士で、餘り雄辯とは申し難いが、淳々と說くと言つた型の人で、會へば何んだが溫雅な、親しい大人の風があつた。教室では隨分、教へ子を泣かされたとも聞くが、それは學術の爲めなり、その本人の親として、教育者からの立場に徹して、恐らく科學者として冷靜に批判指導を與へられたものではなからうかと想像するのである。

博士が文化の魁であつたにも拘らず、ラジオを聽取されなかつたことは、興味多い。嘗つて此のことを語られ「この邊では僕の家位のものだ」と言はれてゐた。

博士は深く思索し、學者的矜持と努力を吝まれなかつたことは特筆すべきで、醫史學發展のためにも、小川、吳、富士川等諸博士亡き今日、至寶であり唯一の存在

と稱しても過言ではなかつた。

博士の文化的各方面の事業においては、なほ一層向後にまつべきもの多きを信じてゐたのであるが、計らざるは人生の常とは言ひ、その急逝は實に惜しみても尚餘りあるのである。

——昭和一八・三・六夕——

餘技と餘裕

杉村楚人冠

醫を學んで醫を業とせず、政治に、宗教に、文藝に、社會事業に、それ〳〵醫業とは緣の遠い方面に身を立て名を顯はした人は昔から相當に多いが、醫を業とせずといはないまでも、本職の醫業の傍、いはゞ一種の餘技として、又藝や教育事業などに携はつて、一廉本業に劣らぬ名聲を馳せた人に至つては、更に一層多い。

一々その人を擧げてゐるは際限を知らぬが、私の知つてゐるだけでも、俳句の大家、歌道の先生、刀劍鑑定家、禪客などの間に、お醫者さんの多いことは、私のいつも驚嘆してゐる所である。それが何故さうなつたのか、それは私にわからない。

私が初めて藤浪先生の知を辱うしたのは、たしか昭和十年の秋診察していただいた時からと覺えてゐる。お宅へ伺つて應接室に待つてゐる間、そこに列べられてある調度や圖畫が全くお醫者さまに似はぬ種類のものばかりであるの

に驚いた。たゞのお醫者さんではないなといふ畏敬の念に打たれた。藤浪さんもやはりコチ〳〵の科學者でない。趣味の廣い「餘技」に富まれた方だと思つた。

お目にかゝつて見ると、藤浪剛一などいふいかめしい名にはふさはぬ、物やさしい柔和な方であつて、始終にこ〳〵と應對せられた。その日は私が胃癌でないかと心配した擧句に、診察を願つたのであるから、あの時若し先生がぶつきらぼうな態度で、やかましい顏をしてゐらるゝのであつたら、初から病氣でおびえ切つてゐた私は、どんなに不快な思ひをしたか知れない。

お醫者さんは態度と顏付が大事だ。私は先生のこの樣子にひどく力づけられて、まだ診察をうけぬ前から、これは大した病氣ぢやあるまいといふやうな氣がした。だから診察がすんで、先生から徐かに、これは胃癌でも胃潰瘍でもありませんと言はれた時、踊り上つて喜びでもしさうな所を、それほど取り亂すこともなしに、極めて冷靜の態度を保ち得た。藤浪博士の何ともいへぬ一種のアタリ工合に最初から安心させられてゐたからだと、今でも感じてゐる。

この一種のアタリ工合は醫學の教へ得る所でない。全く先生が醫學以外の餘技によつて養はれた悠々たる「餘裕」の賜ものであると思ひ到つた。その後交詢社の漢學會で宇野哲人博士の易經の講義を熱心に聽いてゐられる先生の姿を見る毎に、私はいよ〳〵この感を深うした。



昭和十二年冬青島公園にて

藤浪博士の人柄

岡麓

藤浪博士を追慕して、どういふ事を書くべきか。私は二十餘年間知音を辱うした懇情に對しても何か書きたいが躊躇した。私は科學の立場からは何も知らないのである。博士は醫學者であり、醫術家である。毎日教壇に立ちて學生を導き、治療室では、患者に接して、鄭重親切であつたのは誰でもよく知つてゐる。「掃苔」を編輯され、その會の主宰として墓所めぐりなどには先にたつて世話をなされた。風景協會、溫泉協會の役員でもあつて、そちらでの講義や旅行をもされた。學術振興會とか、鐵道省の旅行協會などに關係があつた。其外いくつもあらう。醫道の會の方はいふ迄もない。公務のかやうにいそがしく、それこそからだがいくつあつても足りなさゝうと思はれるのに、博士自身は、毎水週日の夕刻に漢文の講義の會に出かけてをられた。何年かつづいてゐた。また、四五人

よりあつて、古い手蹟などの研究をされた。時間をむだにするのは何よりも嫌はれた。約めていへば、大の勉強家であつた。研究心、智識慾が深かつたのだ。各方面に蒐集慾の強かつたのも、物をよせ集めて樂しむとか、悦ぶとかいふのではなく、研究資料の爲めなのであつた。大正震災前には鄕土玩具を集められたが、中止されてのこさず人にやつてしまはれた。新しい繪畫を好まれて買ひ求めたのを止めて、醫家先哲の畫像を模寫させては毎月何幅かづつ、よせあつめられた。何百幅かになつた。これは「醫家先哲肖像集」に編輯されて出版になつた。單なる物慾を滿足させる人たちの蒐集癖と同一に思ふべきではない。

博士は大正震災後熱心に醫書を集めたのが「乾々齋架藏和書目錄」と成つた。これは醫書を各部門に分けて、書名、著者、年代冊數、その下に自筆本、寫本、木版本、活字本と書入がある。これに記載のない稀書珍籍もあるが、まづこの醫書に就いてでも、よくもこんなにあつめられたかと驚かぬ者はなからう。博士が「醫史學」に役立てられた書物なのである。

「乾々齋架藏和書目錄」は最近に和子夫人の手で出版された。夫人の序に「書籍

を大切にしたのは、學問に對して著者への敬慕の念が深くてした事で、もの好きの書物いぢりではなかつた」と記されてある。一々帙に入れ、蟲くひなどをつくろつて叮重にされてあるのを見ると、博士の心づかひがよくわかる。和子夫人のいはれた通りである。これが無言に博士の人格を語つてゐる。

博士は尾州家の御醫師の家に生れられたので、舊主の德川侯爵とは親密であつた。祖先の志を繼いだ孝子である。私は御目にかからないが、御長兄の鑑博士が偉い人格の方だつたとは幾人からも尊敬のことばをきいてゐる。とりもなほさず御家柄なのである。博士が學問を重んずる故に先人をうやまひ、書物を大切にされたのである。有難い御心持である。先哲の畫像を集められたのと合せて思ふべきだ。

私は永い年月博士の溫顏に接した。いつも懇にあつかつて頂いた。忝いと思つてゐる。私は和子夫人のお手習を拜見するために御宅へあがつてゐたので、しげしげ御目にかかつた。蟬時雨の降る盛夏の日武州高尾に登つたり、初冬の寒い雨に山中湖畔から箱根越をしたりした。その頃は自動車で、ドライブが

流行た頃の思出である。「掃苔」の會にも何度か出て御世話になつた。やはり秋の雨降だつたと思ふが、鎌倉の寺々をあるいたのを忘れない。御馳走にはお宅でも、外でも、なつたが一々は書けない。特に私が御禮を申すべきは次男良弟が結婚の式に博士と和子夫人とに御媒妁を願つた事である。博士が私どもに給はつた御厚情は老妻が長らく胃を病んでゐたので、レントゲンにかけて下され、其後の注意また醫者は住居の近い人がいいからと紹介して下された。其時であつた。御快諾を得て博士が「それでは一つ名醫が診斷をしますかな」と微笑された。私が二十何年の間に唯一度の博士の御ことばなのである。博士は謹嚴かりそめにも自己を語らず又他のうへにも批判めいたことばをつつしまれた。それがいづれに向いてでもあつた。誰の畫がうまいとか、誰の書はきらひだとか、御馳走の話になつても、どこのがうまい、どこのがまづいとかをいはれない。食物にもさうより好みをされなかつた。酒は飲まれなかつたが、菓子は好かれたが、特に何をといはれるのでなく默々として食べられた。

博士は趣味家のやうでもあるが、どこ迄も科學者でおし通された御一生であ

つた。醫家として、寢ても覺めても精進研究をつづけられた。各方面のお仕事も皆醫者としての立場から役に立てられての仕事であつて、いささかも氣を散らした遊び事はまじらなかつた。かうおもふ時博士が私におつきあひ下された時間に何の御手つだひも出來なかつた。御わびをしなくてはならない。めづらしい書物を手に入れられると、すぐ見せられた。私が漢法醫者の末孫なのと某伯爵家の文庫に居たのとで、書物の事と、醫家の手蹟の掛物だの書簡などでのお話をしあつた。古い繪卷物の詞書を讀んだりなどもした。

私は折々博士が夕方歸つて來られると一寸挨拶をなされて書齋にはいられる。さうした場合はかきかけの原稿をかきつづけられたのだ。僅の時間でもむだになさらない博士が、科學者の態度を尊敬する時、まだまだ長壽でをられたかつた。一生はたらきつづけられたのであつた。

私の見た藤浪博士

荒井陸男

第一次世界大戦の最後の年、西暦一九一八年十二月の頃私は第二回目の外遊から歸つて來て、麻布狸穴の假ずまゐに納つてゐたことがあつた。或る日故人となつた親友の吉野作造氏が突然丸頭のつる〳〵した顔面の持ち主である、和服姿の男を同伴して來た。吉野君は私にこれが度々君におはなししたところの、藤浪剛一君である。X光線では日本で第一番人なんだぜ、と云ふので藤浪さんは聊か恐縮してゐたやうな格好をしたのであつた。この時が私の藤浪剛一博士に會つた初めてなのである。吉野君は私の滯歐中の作品を藤浪さんに見せたいのであるから、私は多數の作品を御覽に入れたのであつた。藤浪さんは其の中の二枚を懇望されて、直ちに持つて歸られたやうに記憶してゐる。

藤浪さんのことは吉野作造君から本人に會はぬ前から度々きかされたもの

で、吉野君は口ぐせのやうに

「君、こんど藤浪と云ふ變り種を紹介するよ、妻君は物集と云ふ古い文學博士の娘であつて、中々美人だと云ふ人もあるし、云はぬ人もある」

なんてなことをよく私にはなしてゐた。

藤浪さんに會つてから、わづか數日の後一寸かぜを引いて、藤浪さんの來診を仰いだことがあつた。藤浪さんは僕の家にしばらく來給へと云ふので、藤浪さんの家に泊り込みに出かけた。なんでも二十日間以上も滯在して大に御馳走になり、なにしろ醫者の家に優遇されてゐるのだから、かぜなどはすつかり全快と云ふわけになつた。考へて見ればづう〳〵しい患者である。さぞ令夫人も面倒な客が來たものだと思つてゐられたに違ひない。

數年前のこと私は胃潰瘍の出來そこなひのやうな事をやつて、やつと直つた後に濠洲に旅行することになつたので、藤浪さんにX光線で見てもらひたいと云つたら、心よく孑細に診察してもらつた。その結果何んの異狀もないと云ふので安心して濠洲シドニー目指して出發した。一九一八年當時より私の生活

も改善されてゐるので、夫人に謝禮のことを申出でたのであるが、そんな御禮などはいらないと云ふ次第だつた。藤浪さんは月給取りにあらざる畫家などからは禮金など貰ふと云ふ氣はないのである。

何れその中にかためて、御禮をしたいと思つてゐたのであるが、藤浪さんは世を去られてしまつた。これはうまいことを云ふわけではない。本當にその氣でゐた。まつたく生れた以上何時死ぬかわからぬものである。

藤浪さんに初めて會つた時は童顏の書生さんのやうな氣がしたが、晩年は人相がだん〳〵とちがつて來て、學者のやうな顏になつて來た。それで專門以外の智識が中々ある人であつた。各專門々々にやつとこさと、かじりついてゐて、專門以外の智識を得んとする餘裕なく生活してゐる人々の多い、この大東亞のリーダー格を以て任ずる國に藤浪さんのやうな人を失つたのはまつたく惜しいことだ。

玩具 緣談 逗子

道明義太郎

玩具、緣談、逗子、とかう書いて來ると、なんだか三題話めいて、嚴肅である可き筈の先生の追憶記として不謹愼に思はれるでもあらうが、自分としてはもとよりそんな料見は毛頭も無く、永年先生御夫妻から、一出入の者の立場で在るのにも拘はらず「義チヤン〳〵」と氣輕くお引立てを受けてゐた御懇別さに甘えて、想ひ出す儘の印象を記して、雜魚の魚混りながら、せめても追慕の情とさせていたゞきたいものと、謹んで筆を執る次第である。

まづ玩具の件であるが、これは先生の御交友に有阪與太郎氏があり、若輩なにをか謂はんと存ずる次第であるが、これは實に先生の恬淡振りの御話なのである。

確か昭和六年の頃であつた。一日先生の御宅に御邪魔をしてゐた時、話のは

ずみで當時先生が御蒐集に成つてゐた鄕土玩具數百點をそつくり頂戴する羽目になつてしまつたのであつた。これは實に各地各種の面白い物が揃つてゐて、その途の好事家には正に垂涎物であつた。このことは後で自分が銀座の松屋で讀賣新聞の何か地方的の展覽會に求められてその一部を出品した時相當反響のあつた事でも判るが、恐らくこの記事を讀まれる方々の中にも、先生の御蒐集に關聯があり記憶ある方が少くないと思ふ。兎もあれこれほどの大コレクションを、話のはずみでスツカリ頂戴してしまつた自分は、先生の氣前の良さに內心ちよつと唖然とした次第で、翌日わざ〳〵上野の拙宅まで奥樣がそれを自動車で送り屆けに見へられ、並べ直して見たら十疊一間を完全に玩具によつて占據されてしまつたのであつた。

この玩具は先生の御立場上、鄕土的色彩の濃いおマジナヒや信仰に緣のあるやうな物が多く、また日本の物だけで無く、遠くアメリカ、ヨーロッパの物までも蒐められてゐたのであつた。そして餘りにも簡單に繼承したこれ等の玩具類を並べ直してゐる中に、その御苦心、經路等にいつしか想ひを馳せて、これは好事

家にもあり得ぬ癖に、何にでも興味を持ちたがる野次馬心理を以て私すべき性質の物では無い、といふ事がしみじみ解つて來て、なんだか先生から無言の教訓を受けてゐるやうな氣持になり、心中まことに忸怩たるものがあつた。こんな氣持が手傳ひ、その後先生の御諒解を得て所望されるまゝに、某女學校に寄贈し、今では其女學校の參考品室に處を得てゐる次第である。唯一つ、中にあつた外國製の木製小人形で髪の毛が立つ仕懸けの可愛らしいものを、自分の長女が手離さないので未だに所持してゐるが、それが當時の想出を遺してゐて呉れる。

× × × ×

不圖した事から日支事變當初支那に仕事を持つた自分は、心ならずも數年先生の御宅へ御無沙汰してゐた。これはその際の出來事である。

或る機會から自分の一知人の娘と先生の御弟子格である一學徒との間に緣談の話が持上がり、この相談を受けた事があつた。丁度上京してゐたのを好機に、この話に考ふる處あつた自分は、御無沙汰の御詫びを兼ねて先生の所へ持込んだのであつた。そして十數年御交誼を辱うしておりながら初めて先生の日

頃に見ぬ嚴しい面を知つたのであつた。それは自分にもいさゝか疑念のあつたその學徒の人格についての事柄で、そんな話はぶちこわしてしまひなさいと率直激越、あの日頃の溫容そのものの先生の口調とは打つて變つた調子で、その人物の非違、破廉恥を剔抉して假借する所無く、しかも其處にはいさゝかの私心も感情もさし挾まぬ社會人としての公憤を窺へ、聞く自分には全くその一々が頷けた。

これは、後にも先にも唯一度だけ接した先生の極めて變つた一面目として印象に殘つてゐる。この時の會話を記せば先生の面目は一層躍如として來るのだが差しさはり多い事とて遠慮して置く。

× × × ×

御亡くなりになるほんの十數日前の事だつた。支那の仕事もやつと一段落着いて內地に再び落着ける事になつた自分は、先生の御病後の健康を祝ひ、ゆるゆる御元氣な御顏を拜したいと、豫て御都合をうかゞつてゐたが、幸にも十月十二日遙々遠路を逗子の茅屋へ御元氣な御容子で御出でになつたのであつた。

勿論御夫妻御揃ひで御出で頂きたかつたのだつたが、當日奥様は何か御所用とかで先生御單身當日の打合せに從ひ午前中に鎌倉のさる料亭へ御越しになり、自分等夫婦と食事を濟ませて後拙宅へ御出で下さつた。その日は典型的な、暖かな小春日和で、風の無いよい天氣だつた。日當りの良い自分の書齋が大變御氣に召したと見へ、日頃の性急な先生にも似ず安樂椅子へドツカと落着かれて家内を對手にボッツリボッツリ話をされてゐた御姿は今でも目に殘つてゐる。話題は健康の事から御灸の事、そして注射の話に成つた時、御自身で奥様にオリザニン注射を實驗された體驗を家内に傳へて下さるのだつた。「兎に角一度やつて御覽なさい。大丈夫ですよ。なさいませよ」と何遍も何遍も穏やかに家内に奬められてゐた。珍しく三時間近くも日向ボツコで落着かれて「來週あたり今度こそ家内を連れてこの家を見せよう」等と玄關を出られ、歸路折角來たのだからとて、海岸を端から端までステツキを振り振り大變元氣良く「本當に今日は良い氣分で遠足をした」と云はれながら歸京されたのであつた。この日の印象も十數年來初めて、極めて珍しく落着いたさうして澄み切つた心境に置か

れた好々爺たる先生の御姿として、目に殘されてゐる。事實、よほど御氣分が良かつたと見へて、日ならずして叮重な御手紙で同樣にその日の長閑さをば讃へられてあつた。

計らざりき、旬日を出ずして、御訃音に接しようとは。——

思ひ出のまま

吉田久繼

藤浪先生に始めて御目にかかりましてからもう二十年近くになりませう。その始めは古書の井上の兄に連れられて先生のお宅をお訪ねいたしました、その時先生のお宅の玄關から廊下、洋間の應接間、又は和室と至るところに日本畫、洋畫、彫刻、或は工藝品などが澤山飾られ、展覽會のやうで眼を見張るばかりでありました。隨分美術のお好きなお方だと思ひました。

應接間に入つてから先生は兄と何か古書のお話をされてゐられましたが、平易に絶へず溫顏に微笑を浮べて、むづかしい古書のお話をされてゐられるところを傍らから私は拜聽して居りました。その御樣子は決して尊大ぶつたところは少しもなく實に人格の崇高なお方だと印象を强く受けました。そして時時私には美術に關するお話をもして下さいました。その時結城素明先生の立

派な作品を拝見させて頂きました。その後、時々私は單獨で先生のお宅へお邪魔させて頂くやうになりました。

私の家の者が病氣、怪我の時はいづれも先生の御世話で慶應病院へ直ぐ入院させて頂き、皆お蔭様で現在では健やかで居ります。これも先生の御親切で一同感謝してゐる次第でございます。或る時長女が大怪我をいたしました時も先生の御親切で直ぐ入院出來大變御世話になりました。その頃時々醫學部の先生のお室に先生をお訪ねして娘の患部に就いていろいろお話を伺つて居りますと、陽當りのよい南向きのガラス窓に人間のやうな小形の變な黒い影が眼に付きました。私は訝つて「あれは何んでせうか」と申しますと「あゝあれかあれは猿だよ。あの猿は病院で飼づてゐたのだが此間逃げてネ、軒から軒へ庭の樹木から樹木へピョンピョン逃げ廻るのでどうしても捕まらないのだよ。ところが仕舞には腹が空いたと見え閉口してゐる、一度餌をやつてから僕の窓に來て食ひ物をおねだりしてゐるのさ、物が食ひたくなると今のやうにガラスに影を寫してゐるのさハツハツハツ」と先生はお笑ひになつてゐられました。それ

から先生は猿に就いてその習性、それから兎、モルモット、鳩、犬などの各々の習性をお話し下さいました。我等美術家にとつて随分参考になることで、先生の自然観察の深いことに驚嘆させられました。

ある晩、先生のお宅にお邪魔してゐる時、畫商が澤山の日本畫を持ち込んで來たことがありました。「君、畫が澤山來たから下へ行つて一諸に畫を見ようぢやないか」と誘はるゝまゝ私は階下の和室に參りますと、畫商が大きな風呂敷包の中から桐箱を取り出して壁間に掛け始めました。いづれも日本畫で尺五細物或は茶掛、色紙など種々十五六點以上も陳列されました。花鳥、山水、佛畫、墨畫もあれば濃彩のものもありました。畫商は商賣柄うまいことを喋り立ててゐましたけれど先生には言葉少なに適切なお言葉で御批評されてゐられました。實にそれが適評で穿つたお言葉でありました。常に先生は美術的にも自然研究されて居られることがよく解り、先生の常に深く究めらるゝ一端が此專門以外のことに依つてもその偉大さ、深奥さが窺ひ知ることが出來るのであります。私は今日まで幾多の美術愛好家に接しましたが、先生程理想的にして且つ理解

ある美術愛好家はなく、同時に澤山の美術家をもお世話なさいましたことは美術擁護者としても特記すべきことであります。

また、お墓詣りのドライブに幾回もお伴いたしました。その時も奥様が御一緒で運轉手もお出入りの人でありました。埼玉、千葉、栃木、茨城、神奈川などの名所舊蹟社寺古名家の墓などを巡りましたが記憶が混線して多い思ひ出を思ふやうに書くことが出來ません。たゞ、ある日のこと神奈川方面へ最も長距離で朝の八時から夜の九時頃まで速力を早めてドライブした時でした。途中名所舊蹟二三のお墓詣りをいたしまして何時頃か國府津に差しかゝりました時、見晴しのよい料亭に上がり一休みいたしました。二階の障子を開けますと相模灣で左手の巖の上に數本の老松が面白く枝を差し伸べてゐましたので私はスケッチブックを取り出して寫生をいたしましたが、その日は長い里程を自動車に揺られたせいか頭がぼんやりしてどうしてもスケッチが出來ませんでした。「クソ」と思つて頑張り鋭く見つめましたが、視神經が狂つてでもゐるのか遠近が少しも解らなく遂ひに畫は纏りが付かなくなりました。そして半途で中止し

て仕舞ひました。此時先生は如何かと見ますれば少しもお疲れの御様子もなく健康そのもののやうに見受けられましたが、此度先生の御逝去は本當のことと思はれず、たゞ夢のやうな氣がしてなりません。

藤浪博士を懐ふ

飯島茂

予が藤浪博士を知つたのは今から三十二三年前、予が名古屋衛戍病院に勤務して居た時である。予の知人で同市に開業して居た小倉學士と共に來訪され、同院の「レントゲン」器械を見たいと云ふことであつた。丁度その時予は「レントゲン」線を使つて腦盲管銃創の留丸に就き研究して居た時であつた。快く器械室へ案内した。博士は緩々見ることを得たと喜ばれ、ホルツクネヒトがどうの、「フンケン」がどうの「エクツエマドーゼン」がどうだとか三四時間話して行かれたのが最初である。其の後博士は順天堂病院へ就職され、予は名古屋から久留米へ轉任して青島戰役に出征し、其の後は甲地乙地と轉々放浪生活を續け、大正八、九年の間陸軍省勤務となり東京に居住したが、當時はシベリア事變最中で早出晩退日々の勤務に追はれ博士と相見るの機を得ず、烏兎匆々十數年を過ぎ、大正

十四年旅順から軍醫學校へ轉任し、午後若くは夜分開會の學會へは時々出席し得られたので醫史學會に於て博士と毎月相見るの幸を得、又其の翌年からは名墓顯彰會に於て令夫人同伴の博士に追隨して、時に或は新墓を郊西に訪ひ或は舊塚を江東に尋ね、或は近く市内雜遝の地に苔を掃ひ、或は遠く常總幽寂の境に廢寺を弔ひなどしたのみならず、又或る年には弊居所藏の駄硯を觀るとて同人と共に半日を消したり、又或る年には知人愛好の古陶を賞する爲め相携へて一夕を過したりして、淡きこと水の如き清交を續け來つた。併し博士と予とは同鄉の竹馬の間柄と云ふではなし、生死を俱にし來つた戰友でもなく、入ては窓を同ふし出ては袂を連らねた學友でもなく、又事業上の經濟關係があるのでもなく勿論姻戚と云ふ譯でもないので、僞らざるところ博士の篤學博識にして多趣味多方面であることの他餘り多くを知らなかつた。然るに去月八日小石川後樂園の涵德亭に於ける各界聯合の追悼會に臨み、博士の德望高大にして人々哀惜の情深きを見聞し、感慨に勝へざるものがあつた。假令交誼は親密と云ふ程でなかつたとは云へ、三十餘年の知合でありながら博士の有德如上なるに氣

付なかつたことは燈臺下暗しといふにも程度がある、廬山の眞面目を知らないといふにも、程度があると思ふと、人を見るの明なき慙汗背を濕すと共に滾々として返らぬ悔の湧くを奈んともしがたく、大德の人は必ず壽を得ると云へる古語の我を欺くの恨み日に添えて切なるを覺える。博士在天の英靈予が此の追懷を諒とするや否、予は今多くを書くに耐えぬ、君の眠偏に安からんことを祈つて筆を擱く嗟。

藤浪先生と私

村上秀

1

私が日本醫事新報社へ入つて一年ばかりたつた時であつたが、趣味欄なるものを開設した。その當時私はまだ醫界に就て西も東も知らない狀態であつたが、慶大の藤浪教授は、醫史學の大家でもあるし、鄉土玩具の蒐藏家でもあるといふことを聞いた。私は其時、醫史學も面白いが、鄉土玩具の話の方が尙ほ面白からうと思つた。そして、慶大に先生を訪ねた。

それまで私は社內で仕事をしてゐたので、慶大病院の樣子も知らず、其他の病院の事もちつとも知らなかつたので、職員を訪ねるのだから職員入口から行くべきだと考へて、橫手の入口へ行つたものだ。今は人手がないからゐなくなつ

たが、當時は人手が餘りすぎてゐたので、そこに下足番のやうな男がゐた。守衛などといふのであらう。私はその男に向つて「藤浪先生にお目にかゝりたいのだが、どこにゐらつしやるかね」と、相當威張つて云つたつもりであつたが今から思ふと、馳け出しと舐められたに相違ない。だが、べつだん不快な感じも與へられず「そこに待つてる自動車でお歸りになるんですから、待つてゐらつしやい。直ぐに出て來られますよ。」

さう云つてゐる所へ、出て來られた紳士が、此人だなといふ直感を私に與へたので、名刺を出した。先生はその名刺を一寸見て「まあ一緒に乘りたまへ、中で話をしよう」

その時、一緒に乘り込んだ人がゐた。今から思ふと、先生の高弟たる原邦郎博士ではなかつたかと思ふのであるが、どうもはつきりしない。

扨て乘り込んでから「何の用かね」と訊ねられたので、實は斯樣々々の次第であるから、鄕土玩具の話を書いて頂きたいのですが……と答へると、先生は宙を見てにこにこしながら「君の社はもうやめたのかと思つてゐたが、まだやつてゐる

のかね」と奇問を發せられた。これはどうも少々變だぞと私は思つたが、奇問のよつて來る所を私の頭腦の中に探索して見ても、勿論無駄なことが分りきつてゐるので、眞正面から然らざることを述べた。

すると先生は「玩具は震災で燒いてしまつたよ。だが、何か話してあげてもよい。しかしこゝ一二週間は忙がしいから、それがすんだら君に宛てゝ葉書を出すから、やつて來たまへ」

その間に、自動車は赤坂見附へ來た。そこで止めて貰はうとすると、家まで一緒に來たまへとおつしやつたが、その時、私は青山に約束があつたので、停めて貰つて下りた。これが先生との初對面である。

×

ところが一週間か十日たつた頃、先生から葉書が來た。何日の午後六時に自宅へ來てくれ、話をしてやるといふのである。

私は指定の日時に、初めてお宅を訪ねた。二階の應接室へ通された私は、裝飾その他無駄がなく整然として、掃除の行き屆いた清潔さに心を惹かれた。そし

てすひつけた煙草の粉が落ちはしないかと氣になつた。

間もなく先生が和服姿で出て來られて、直ぐに話が始まつた。私は一生懸命に筆記した。それは昔の醫學者の藏書印に就てゞあつたが、先生は、昔の醫學者の姓名を卓の上に指で書きながら親切に——と云つたやうな文字はこゝでは特に避けるが)話して下すつた。

ところが、富士川游博士に及んだ時、私が「藤川」と書いたのを見咎めて、「君、そんなフジ川なんてあるものか、富士山の富士だよ」

あゝさうか、その富士川博士なら何かで知つてゐたんだが……とは思つたが、「いや、これは僕の速記ですよ。原稿になつて間違つてゐたら直して下さい」とやつたものである。先生はにや〳〵私の顔を見て、そして話を續けられた……。

それから二三日の後、私が原稿を持つて行くと、先生は一通り讀んで、宜しいと云はれた。

その原稿が雜誌に載つた時、當時社の寫眞班をやつてゐた男が私に云つた。

「藤浪さんがよく原稿を書いてくれたね。僕は、先生の寫眞をとる爲めに二日も

慶大へ頑張つて、とう〳〵逃げられた事があるよ」

それからずつと後の事であるが、先生が寫眞嫌ひ——といふ程ではなかつたが、餘りお好きでないといふ事を、私は先生の口から聞いた。

2

それから間もなくであつた。慶大に先生を訪ねた時「君、二十日會へつれて行つてやらうか」と云はれた。「新橋の花月で牛肉を食べる會だがね、醫者以外のいろ〳〵な人が來るよ」

その二十日は何月であつたか忘れたが、實に寒い日で、おまけに大風であつた。私はその頃、神田の貸間で獨身生活をしてゐたのであるが、先生に指定された二十日の夕方になつて、ふと先生との約束を思ひ出したので、お宅へ電話した。その時の氣持はといふと「今日はひどい風だから來月にしよう」と云つて貰ひたいのであつた。然るに、電話すると「やつて來たまへ、行かう」といふ返事であつた。そこで、洋服に着更へて出掛けた。

先生はちやんと洋服に着更へて待つてゐられたと見えて、直ぐに玄關へ出て來られた。

×

花月の座敷は殆んど一杯であつた。先生は座を占めると向ふの隅つこに、和服姿で鍋に向つてゐる二人を指さして「あれが泉鏡花と水上瀧太郎だよ」と云はれた。泉さんは煙草入と煙管を持つてゐた。水上さんは背後から見たのであつたが、律義な商人のやうにきちんと座つてゐた。

先生は一滴も酒を飲まれなかつた。これは私に取つて驚きであつたが、私は酒好きであるから、先生のお酌で飲んだ。さうしてゐる所へ、長田秀雄氏がやつて來て、先生に挨拶して行つた。それやこれやで、先生には醫家以外の友人が多いことを知つたのであるが、後で聞くと、長田秀雄氏は獨逸協會に於ける先生の後輩で、本來ならば醫者になるべき人であつたのださうである。

そこで今、私が思ひ出すのは獨逸協會に於ける先生の同級生たる奇人稻坂秀松老である。老と懇意になつて酒を飲みながらの話であつたが、藤浪君は、獨協

時代から、洋服の胸のカクシに絹ハンケチを入れたりしてゐてね」と昔をなつかしむやうにから〳〵と笑つた。

それから間もない頃、先生に稲坂老の事を云ふと、先生は「稲坂は蠻カラ大將で、喧嘩が強かつたよ」と、これまた昔をなつかしむやうににこにこされた。

×

扨て、花月の牛鍋會で、御飯にしようとなつた時、先生は「もつと飲むかね」とおつしやるので「大いに結構ですね」と答へると、先生は酒を註文して「ぢや、僕は失敬して御飯にするよ」と茶碗をとられた。私は酒を飲んだ……。

その時の話で、醫史學會なるものがあることを知つた。先生は「時々やつて來たまへ、ためになるよ」と云はれた。

そこで、時々顏を出すやうになつたのであるが、最初出た時、食堂へ行くと、丁度食事が始まらうとした時であつたが、先生は「おゝ、よく來た、こゝへ來たまへ」と隣の椅子へ招かれて、そして私のグラスに酒をついで「此の男は、飯よりも御酒が好きなんですよ」と、誰に云ふともなく、にこ〳〵された。それで私は、初めて出た醫

史學會でとまどひする事もなく、結局親しみを感じた。

また醫史學會で、わが醫界の名士に紹介された事も忘れられない。殊に富士川博士の知遇を得たことが。その前に一度お目にかゝつた事がある入澤博士に「やあ出て來たな」と親しい言葉をかけられて、それからは博士の所へ圖々しく押掛けるやうになり、またやはり一二面識を得てゐた飯島龍孫老や佐藤物外老や長尾藻城翁や、若いところでは山崎佐博士や緒方富雄博士や、其他多くの人々とこゝで愈〻親しみを加へるやうになつた。

3

令夫人——などと云ふよりも奥さんと呼ばして頂くが——に初めてお目にかゝつたのは、先生のお宅で座談會をして頂いた時である。

先生が非常な藏書家であることは知らぬ者もあるまい。私達汲泉社の連中の間に、先生の藏書を見せて頂きたいものだといふ意嚮があつたので、或る時私は先生に向つて、藏書を見せて下さいませんかとお願ひした。

ところがその當時、私の社では、いろ〳〵な座談會を催して誌上に掲載してゐたので、「それでは、君の社の座談會といふことにしてはどうかね。どうせ陳列するのだから、いろんな人に見て貰つた方がいゝだらう」といふ先生の御意見で、「それは一層結構です」といふ事になつて、八澤達吉、長與又郎等々々の大家と一緒に、汲泉社の連中が眼福を得ると共に御馳走になつた。

その席で、私は初めて奥さんの知遇を得た。それから後、先生のお宅を訪ねると、いつも奥さんと御同席するやうになり、果ては、私の結婚の時には、先生御夫婦の媒酌をお願ひする事になつて、以後、家庭的な御懇親を蒙るやうになつた。

×

我國には、媒酌人に毎年二期、感謝の贈物をする風習がある。そこで私は毎年二期に、先生は甘い物がお好きであり、そして私は本郷の住人になつたのであるから、藤村の羊羹をお贈りする事にした。

恥かしい話だが私は菓子に就ての知識が皆無である。然し藤村の羊羹は、獨逸へ留學してゐる人にも送るといふほど有名だとどこかで聞いてゐたので、藤

村の羊羹なら、きつと先生も喜ばれるであらうと獨斷したのである。そして一番大きいのを妻に買つて來させて、持參したものである。

ところが、その貧しい贈物に對するおかへしが、實に立派すぎる。これには私も妻も閉口した。

しかも、奥さんがわざ〳〵持つて來て下さるのだから、恐縮せざるを得ない。だが、先生にも奥さんにも、そんな事をあからさまに云ひかねて二年ばかりたつた。そしてまた其の時期が來た。そこで私と妻と相談の結果、私から先生に向つて「以後、持つても參りませんが、頂きもしないといふ事に致しませう」と申入れた。

すると、先生は宙を見つめてにこ〳〵しながら「年に一度や二度、菓子ぐらいくれてもよからう」

「いや、それはいゝんですが……」

「そんなら持つて來てくれたまへ。だが藤村の羊羹はもう勘辨してくれ」

「へえ、まづいですか」

「いや、うまい。だが、いくらうまくても、あれはとても食べ切れない。食べ切れない内に固くなつて困るよ」

「でも先生、本郷では藤村の羊羹より外にはしようがないのでせう」

「藤村には外に菓子があるよ。同じ貰ふなら、少しでいゝから其の方がいゝよ」

と、にこ〳〵顔である。

家へ歸つて妻に訊ねて見ると、成る程藤村には羊羹の外に立派な菓子があるといふ。

「ぢや今度は、その菓子の、一番上等なのを買つて來い」といふ譯であつたが、いや全く、この方が、持つて行く私にしても輕くて樂であつた。そして先生も笑ひながら「今度の菓子の方が、よつぽどいゝよ」

4

こんな事を書いてゐたら切りがないから、以下省略するが——。

先生が鐵道省から依頼されて東北の溫泉視察に行かれた時、十和田湖で其の

乘船が遭難した事があつた。

或る朝、寢床の中でうつら〳〵してゐると、「大變ですよ」と云つて、妻が新聞を持つて來た。見ると、先生は御無事だとあるので、先づ安心したが、その朝、社へ出勤してから直ぐにお宅を訪ねた。

奥さんは、着物を持つて十和田湖まで行かうと思つて、先づ鐵道省へ樣子を訊きに行き、丁度いま歸つて來られたといふ時であつたが、幸ひにして其の心配はないといふことであつた。しかし鐵道省で、心配をかけないやうにとの心使ひから、殊に輕く云つてゐるのではないかと思つてゐられるやうな感じが窺はれた。

×

先生は其の直前、腎臟炎に罹られて、暫く靜養してゐられた。しかし長く休んでゐられない氣質の人であつたから、全くよくならない中に學校へ出られ、一日に何回か尿の檢査をしてゐられた。そして顏色もよくなかつた。

それで私は、「先生、尿の檢査なんかおよしなさい。檢査なんかしてゐると、神經

衰弱になりますよ」と云つたものであるが、先生は「だつて、檢査をして見なくちや、しようがないではないか」とむづかしい顏で云はれた。

×

十和田湖の遭難は、丁度その頃であつたので、奥さんは「病氣でもあるし、とめたのですが、もうよくなつたと云つて出掛けたんです」とおつしやつた。

その言葉が變に私の耳に殘つてゐたので、先生が歸つて來られて、學校でお目にかゝつた時、「先生、御病氣の時なんか、奥さんのおつしやる事をきくもんですよ」といふと、「もう腎臟炎なんか、すつかりよくなつたよ」と、實に、その直前とは打つて變つた元氣さで云はれた。顏色も亦その通りであつた。そして、室の隅の手洗に置いてあつた試驗管も、その後は見られなくなつた。

6

先生は大學へ出るのが樂しみであつたらしい。だから殆んど休まれた事はない。朝も早かつたさうである。

ところが或る時、先生が休んでゐられるといふ事を教室で聞いた。しかもそれが、狭心症ではないかと云ふことだつた。僕は早速先生のお宅へ訪ねた。

先生は寝床に横たはつてゐられたが、思つたより元氣で、寝てゐるのが所在なささうに見えた。そこで私は、奥さんが心配して用心してゐられるのだなといふ印象を受けた。

それからどれ位たつたか、慶大に先生を訪ねた時、先生の姿が教室内のどこにも見られないので、看護婦長の村岡さんに訊くと、「先生は歯科へ治療に行つてゐらつしやいますから、見て來てあげませう」と云つて出て行つたが、間もなく歸つて來て、「先生は御治療中に、氣分が悪いと云つてお歸りになつたといふんですが、どこへゐらしつたんでせうね」

で私は「若し内科へ診て貰ひに行つてらつしやるんぢやありませんか」といふと、村岡さんは「先生が、診てお貰ひになるもんですか」と云つた。

×

それからまた何日かたつた時、先生が慶大病院へ入院されたといふことを聞

いた。しかも面會謝絶だといふことを……。そこで、私はお見舞しようか、しては悪いのではないかと、躊躇してゐた。ところが或る時、教室へ行くと、何となく皆が元氣のない顔をしてゐる。どうしたのかと訊いて見ても、誰も「いゝえ何でもない」といふ。だが、どうも腑に落ちないので、こつそり或る人に――それが誰であつたか思ひ出せないが――訊ねて見ると、先生に、教室員のお見舞品を持つて行つたところが、私はまだ死にはしない。こんなものはいらん」と、ひどく叱られたと云ふのであつた。

その後、私は、教室の人々が時々先生の病室へお伺ひしてゐるといふ事を知つたので、或る日、私も出掛けた。

そこで見た先生は、ベッドの上に起きてゐられて、聲には力がなかつたが、矢張り所在なささうな姿であつた。そこで私は、主治醫の用心と、奥さんの心配の方が、むしろ強いのではないかと思つた程であつた。

間もなく先生は退院され、そしてまた學校へ出られるやうになつた。すると今度は、川村麟也教授が入院されたといふ事を訊いたので、病室にお見舞した。

川村教授はベッドの上に起き上つて、研究員に研究上の指示を與へてゐられたが、私は川村教授の此時の姿から藤浪先生の入院の時の姿を思ひ出した。

扨て、辭して出ようとすると、突然藤浪先生が入つて來られた。「やあ、歸るのか。も少し話して行け」といふ藤浪先生の元氣な言葉につられて、また腰を据えたのであつたが、その時の藤浪先生は、川村教授のベッドの上の姿と比べて、非常に潑剌たるものがあつた。

×

或る朝私は或る用事で先生のお宅を訪ねた。その用事は、玄關で女中さんに云つて置けばよい事だつたので直ぐに歸らうとすると「一寸お待ち下さい」と云つて二階へ上つて行つた女中さんが、下りて來て「よかつたらお上り下さい」と云ふ。だが私は、午前中お忙がしい奥さんのお邪魔をしては惡いと思つて引き下つたのであつたが、その足で慶大へ行くと、先生が今日からまた休んでゐられるといふので、私は、今お宅で、上らないで歸つたのを殘念に思つた。

それから三四度か四五度か——先生のお宅を訪ねたが、どうも人に遭ふと工

合が悪いので失禮する」といふ譯で、奥さんにはお目にかゝつたけれども、先生にはお目にかゝる機會がなかつた。それで私は、餘程お悪いのではないかといふ印象を受けた。だが奥さんは、いつも「いや、大した事はないのです。たゞ話をすると、後で疲れるので、……」と云つてゐられた。それは後から思ふと、どうも奥さんのお心使ひに相違なかつたのだが……。

ところが或る朝妻が大變ですよと云つて、私の枕許へ新聞を持つて來た。その聲が尋常でなかつたので、私は飛び起きた。

新聞には先生の御逝去が傳へられてゐた。

その日、私は工場へ出張する日であつたが、先づ取り敢へず先生のお宅を訪ねた。そして私は、靜かに寢床に横たはつた先生——と云つても、顏は白布に覆はれて先生自體を感じる事は出來なかつたが、その傍に置かれた經机の上の香煙や供花が人間一生一度の事を物語つてゐた。

私はそこで燒香し、そして先生の枕許に進み、奥さんが取り除いて下すつた白布の下に、先生のお顏を凝視した。それは實に、安らかな眠りそのもので、衰弱や

悩みの片影だに見出せなかつた。

だが、私は、奥さんの瞳を見た時、始めて、これが先生との最後であると思つたのである。



昭和十五年秋頃

藤浪先生を憶ふ

中村孝也

◇

藤浪先生を憶ふ毎に、いつも神經痛を聯想する。神經痛が私を先生に結びつけて呉れたからである。

私の神經痛は昭和十年の秋頃から同十四年頃までつゞいて、何時とはなしに消えていつてしまつた。いろ〳〵の加療を試みたが、どれが有效であつたか判然しない。結局すべての方法の結合結果と、年時の經過とに歸せらるべきであらう。その加療の中、慶應病院のレントゲン科でラヂオ＝テルミーの電氣療法を受けたのが、最も永續したものの一つであつた。それは療法自身を效果的であると信じたことにも由るが、それよりも、それを左樣信じさせたのは、先生の深切に基因すると思つてゐる。

凡そ病人が輕快に赴くのは、お醫者樣に對する信賴感に基因することが多い。神經痛のやうに藥物療法に賴ることの出來にくい病患では尙更である。何の機緣で慶應病院に通ふやうになつたかは明確に記憶してゐないけれど、最初から特別待遇で便宜を圖つて下すつた上に、治療室の若い醫員の方々を督勵して、懇切周到なる加療をつゞけて下された。それは一年たち、二年たち、三年目になつても、終始一貫して毫しも變ることが無かつた。前後三年間も通ひつゞけたのは、偏へに先生の人格に惹きつけられた爲めであると信ずる。

先生は非常に勤勉であつた。春夏秋冬を通して常に早起であつたらしい。毎朝七時頃自邸を出て病院に出勤せられる。午前中、病室の仕事に執掌せられる。目の廻る程忙しいことを俗に高麗鼠のやうに忙しいといふ。この譬喩は、餘り立派な言ひ表し方ではないが、先生の忙しさは文字通り寸分の隙間も無くそれからそれへと、流暢に處理してゆかれる。それは淀みのない水の流の樣に、仕事の屑の停滯や堆積が見られない。「お疲れでせう」と言へば、にこ〳〵して「慣れてゐますからね」といふ。習慣と練熟とで平然として事務を處理する才能は

健羨に値ひするものであつた。

お醫者としての本業は、私共の窺知し得ぬ世界であるが、病院の廊下に日本近世蘭方醫家の畫像の小額が、展覽會の出品のやうに懸け竝べてあるのが、凡そ病院らしくない風情を以て、心を捉へるのであつた。

◇

「何時の間に蒐集せられました」と尋ねる。「大震災後ですよ」と答へられる。「それにしては丹念に集められたものですね」と感歎する。「その中に展覽會を開きませうかね」と笑つて居られたが、間もなく早稻田の大隈會館で宇田川玄隨を始め、多くの蘭學者の遺墨等展覽の會が催され、朝野の名士が多數參會の席上、先生は起つて一場の挨拶を述べられた。その蘊蓄の豐富にして造詣の深遠なること、人の耳目を聳動せしめるものがあつた。

或時、病院に曲直瀨道三自筆の書狀等數卷を持つて來られて、「讀んで見てもらひたい」とのことであつた。一讀して驚いたのは、どれもこれも良いものばかりである。「どうなされたのです」とお尋ねすると、最近手に入れたのです。まだ澤

山あります」と言はれる。「一度宅に見に來ませんか」と誘はれて、内幸町の御宅を訪問したが、あとから〳〵と出して來られる古人の筆蹟や、珍籍や、畫像などの豐富さに恍然として時間の經過するのを忘れる程であつた。その中の「啓迪集」は、多分國寶か重要美術かに指定せられた筈である。世間で山縣大貳像と傳へてゐる總髪半身畫像に疑問を投ぜられて蘭醫某の像であらうと推定せられたのには傾聽せしめられた。

◇

或年のこと、暫く病院に姿を見せられなかつたことがあつた。それは支那旅行に行かれた時のことであつた。元氣に歸朝されて後、支那の墳墓について頻りに話して居られた。何でも中支の各地を歷訪して北上し北京に出て、それから何處を經過されたかは忘れたけれど、とにかく智嚢を肥やして歸られたのであつた。そのやうな思ひ出は際限なく湧いて出るが、神經病が癒つて後は、病院通ひの必要も消滅した爲め、いつとはなしに御無沙汰勝になつた。それでもたまさかお會ひするときは、「醫者には御無沙汰の方が仕合せだ」と笑つて居られ、同

席の人に「私が癒して上げたのだ」と自慢されたことを懐しく思ひ出す。そして一昨年廣東方面に旅行して歸つた後、風景協會の理事會でお會ひして、支那のことを話しあつたのが最後になつた。昨年秋は南京に行き、十二月初めに歸京したのであつたが、疲勞と多忙と雜用の中で、不圖、先生が亡くなられたといふやうな噂を小耳に挟んだ。「そんな筈は無い」と自分で打消して見たが、何やら氣にかかる。半信半疑の思ひで、内幸町の御宅を訪ねて見た。若し間違つたら笑ひ話にして赦して戴かうと思つて、取次の人に、用心深くお尋ねしたところが、それは悲しい事實であつた。打ちのめされたやうな氣分で、お話を伺ひ、御靈前に端座して燒香する。香煙のゆら〳〵と立ちのぼる間に、ありし世の姿をそのまゝの御寫眞が仰がれる。餘りに果敢ない思ひに堪へられない。私は默然として、生死の境について考へさせられるのであつた。

「かうしてはゐられない。」私は思つた。肉身の神經痛は癒つたけれど、魂の安心は容易に企及し難い。私は先生の高風を仰ぎながら、一層修養を重ねなければならない。

藤浪博士と掃苔

矢吹活禪

何れの學問もその窮局に達すると其の歴史を極めたいと云ふ欲求が自然と湧いて來る。醫史學が一般の醫學からは非常に遲れてしかも部門外からは畑違ひとさへ考へられるやうな特種の學者によつて鍬入せられたとは云へ、爾來醫學界の特種な人々により建設せられ今やその大成に向つて進みつゝあるのも、この普遍的な欲求の一つの現れと見て好いと思ふ。

レントゲンの藤浪博士と云へば東大の眞鍋教授と共に官私大學の兩大關としてあまりにも著名であり、又兩先生は溫泉學の權威としても併稱された。が、わが藤浪博士は更に醫學史の未開拓分野にまで地下深く鍬を打込んでゆかれ、所謂往くとして可ならざるなき天才を示され、また不斷の努力を積まれ、或はその犧牲にさへなられたと云ふに至つては亡くなられた博士は學者の本懷、男子

の本望として滿足して大往生を遂げられたことであらうが、とりのこされた私共としては極めて悲痛の感が深い。醫史學の方面に於ても御臨終の數日前に岩波書店から依囑あつた東亞醫學史の完成を見ずして易簀せられたことは、遺憾此上もないことであつた。卽ち折角大成にちかからんとせし醫史學方面に於ける御研究なり御發表なり御事業も亦中折の止むなきに至つたことは、邦家の爲めに學界の爲めにとりかへしのつかぬ大なる損失ともなつた。

私が故博士の御知遇を忝ふするに至つたのは醫史學會に於ける講演の御話しがあつた時で、日記の整理をしておらぬ私には確實な年代は今不明であるが、小石川久堅町の先の寓居の時であつて、故博士は大正大震災後數年にして引越して來た草廬を態々お訪ねになつて、大震災後に於ける東京の史蹟の處理に就て話せとのことであつた。お受けして例の中山研究所へお邪魔した。故富士川博士や故入澤博士や女性では吉岡女史などもお席にあつたので、若い私は冷汗で斷片的なお話をした。東京の史蹟は主として名家の墓地であつたので、自然お話しは墓に集中されたことを記憶してゐる。それが契緣となつて爾來何

時とはなしに先生の御知遇を受けるやうになり、何時の頃からか内幸町の御邸に伺ふやうになり、終に階下の食堂でお夕食まで頂くやうになつた。

博士はその頃から私の關係してゐた文部省の會の見學旅行にも奥様と御同列で否門下の若い博士や學士連中、それも御夫婦の方も相當に多かつた看護婦さんなどもお連れになつて一行十數人で參加して下さつた。あの思出の深い見學會も博士が熱心に御參加下さつた頃が最盛期で、博士から寄贈された見學會旗が先頭に飜つて月々各地の史蹟や名勝地に長蛇の列をなして進んだ。見學會に參列された博士は一面には運動氣晴しと拜する點もあつたが、一面には鋭い批判や細かい研究もされてゐた。

此期間に於て有名な奈良公園内自動車道路の開鑿問題と云ふ突發事件が起つた。最初に絶對反對の宣言を發したのは奈良縣史蹟調査委員をも依囑されてゐた故工學博士足立康氏であつた。同博士は筆端極めて鋭く猛攻撃を開始した。當時私も言論機關を主宰してゐたので之に應じて絶對反對と云ふ態度を採つた。而して風景協會に於ては役員會を開催してまた反對を中外に聲明

せられた。故博士は同會の重要幹部として頗る強硬な態度を堅持せられた。私に對しても屢次御用査的態度を蟬脫して堂々と保存事業の爲めに一戰を試みよと痛烈なる言葉を寄せられた。併し私の方は役所の關係上遂に此の問題の爲めに積極的の言論を發表することが不可能となつたが、博士の烈々たる正義の主張も時の當局の押しの一手で遂に全面的に承認實行されなかつた。が、此の問題から博士が如何に保存事業の爲めに高い熱意を有せられるかを知つたのである。

歷史の研究にはまた史料史蹟の調査が伴はなければならぬ。博士がその醫學の研究上蒐集された史料の豐富であつたことは著しいのであるが進んで史蹟の研究調査にまで手を染められ、掃苔事業に熱意を寄せられるに至つたのも、この當然の歸結からであつたと私は信ずるものである。

私は以下東京名墓顯彰會の創立と博士との關係に就て概略してその功勞者として博士の一斑を偲びたいと思ふ。

曩にも一寸觸れたやうに東京の史蹟の大半は實に墓である。德川家兩所の

靈廟を首めとして最も多く遺存するものは墓である。東京の史蹟の保存は畢竟名所墓地保存と云ふことになる。大正大震火災後の臨時處理に際し假指定を行つた史蹟の十中八九分までは名家の墓地であつた。それゆえに私共東京の史蹟保存にも深い關係を有つものは、この假指定の名墓だけで滿足することが出來ないので、何とかして更に更にその範圍を擴大して之が保存顯彰の途を樹立したい。又從來知られてゐない名家の墳墓も相當に多い筈である。例へば德川家の靈廟のやうな立派な建造物を建てた工匠の墓地の如き、從來の東京に關する墓地の書物には載つてゐない。各部門に亘ると斯うした問題は隨處に起つて來なければならぬ、これはどうしても出來れば官民合同の强力な會を作つてでもその目的を達成したいと念願するに至つた。而して之を多年の同志である府の稻村主任にも話し又市のその方の事務と主管して居られし現井下公園部長とも相談して非常なる贊同を得たので、更に之を故三上博士に謀つた處が大贊成である、故白井博士も大に贊成された。井上清純男爵も國民思想の涵養の上から結構な事業であると贊同された。而して其時は既に博士にも

內々御相談を申上げ、又大に賛成されて、強力な會が創立される事には自分としても相當の助力を與へると力強い激勵の辭まで賜はるに至つた。もつと之を具體的に述べると事務所も自邸を貸す、事務の面倒も見てやらう。編輯の方も共力しやう、大にやれとのことであつた。如何なる事業を創めるに當つてもその事業の趣旨目的さへよければ多くの先輩や友人は必ず賛成はしてくれるが、一肌ぬいで責任を持つて面倒を見てやるとまで云つて下さる方は仲々尠ないものである。面倒を見てやると云はれても事實面倒を見て頂けない方もないとは云へない。が、博士のやうに學界に於ても社會に於ても高い地位を占めてゐられる方が、此處までの御聲援、否御助力をして下さるならば、必ず此の事業の成立は申すまでもなく成功は必定であるとの大きな希望と見透しがついたので、遂に多數の先輩諸先生や友人知己にも訴へて遂に本會の創立を見るに至つたのである。此間屢次の相談會等を開催したのであるが、之に要する經費は博士が默つて支辨して下すつた。又表紙の裝禎を結城畫伯が快よく御引受け下さつたのも亦博士の力であり、又薄つぺらではあるが機關誌を月刊するに至る

までの諸般の御盡力を頂いたのも主として博士の御盡力に依るものであつた。

我が東京の地には舊幕時代から探墓家は非常に多かつた。既刊の案内記もあり、未刊のものも亦決して尠くない。維新後に於ても之は志ある篤志家により て繼續せられ東都掃苔會の如き立派な會が創立せられ、多數の名士や碩學も參加されて大に活動せられて居る。又磯ケ谷氏の墓碑史蹟研究會の如きは多くの勞力と資力とを費して、その結果を發表されて居る。森潤三郎氏の旗本の研究を首として鶴田勢湖氏の如きも有名な研究家であり、佐々木皎堂翁には「探墓隨筆」の好著があり、麻布だけのものでは故中山孤村君の調査顯彰のことがあつた。又島田筑波氏も今昔の會を創立して活動されてゐたので、或る意味に於て之以上墓に關する會の創立は屋上屋を架するの譏りも免れ難いと云ふ感じもないではなかつたが、併し私共の主たる目的は綜合的に之を調査研究して其の事蹟を究明すると同時に其の保存、顯彰の途を樹立し、又無緣の名墓に對して報恩の供養をも營みたいと云ふ、折角大きな希望を有つて居た。如斯の事業は實は府とか市とかに於て當然行はれなければならぬ性質のものであるが、役所

には役所の立場もあつて早速に之を實行することも困難な事情が明かにされたので、之を民間有志の事業として實行すると云ふことにしたのである。從つて從來の或る特種な研究家並會をも之に吸收して完全なものとし大成させたいと云ふ希望もあつたのであり、また稍もすれば墓地の研究の如きは一部有閑人の閑事業の如く見られてゐるのを、思想的にも學問的にも國家としても地方としても、將に三百年以來實質上國の首都であり現に帝都として重要な位置にある東京市としては緊要缺く可からざる事業の一であると掃苔事業に對して一般市民の再認識を要求すると云ふやうなことも考慮に入れつゝ創立を急いでいつた。斯うした目的に副ふためにも博士の如き科學畑の碩學がその責任者の位置に就いて頂くことが出來ると云ふことは誠に會の爲めに望んでも得られないことなのである。之を三上博士を中心として井下部長や稻村氏や其他佐々木翁等の顏振れだけで旗上げするのとどの位社會的の影響が異つてくるかは記するまでもないことである。

かくて多數の名士や碩學並同士の御贊成を得て會は成立し機關雜誌も刊行

され講演會や調査見學や掃苔供養も行はれるに至つたのであるが、さてその入會された顏振れを調べて見ると從來の所謂掃苔家の外に全く意外なる新らしい人々が發見されたのである。之は偏に博士のお力と云ふ外はないのである。卽ち博士によりて本事業に新らしい分野が開拓されることになつたのである。

その內に會の幹部の一人である結城畫伯に依り東京美術家墓地に關する研究を一書に纏めて公にせられまた和子夫人はせつせと市內の名家墓地を研究調査して日比幸子のペンネームで機關雜誌に連載發表せられた。之は大成して一卷の書として公にせらるに至つた。古くは池大雅や梁川星巖の如きもあり、近くは與謝野寬や比田井天來と云つたやうな先輩もあるが和子夫人のこの大きな業績を示されるに至つたことは、夫人の御努力は申すまでもないが、博士のよりよき理解があつて初めて可能なことで、人は必ずしも己の好む所をその妻子に與へるとは保し難い。如何に和子夫人が望まれても罷り成らぬと威丈高かに出られては全く手も足も出ぬ。然るに博士は令夫人のこの掃苔事業を心から贊成せられ美事に之を大成せしめられ、有髭男子を撞著たらしむる好著

を、その内助者をして完成せしめられた博士の雅懐を敬慕せざるを得ないのである。かくて東京名墓顯彰會の名は全國的となり、各地の掃苔會も進んで參加され、名は東京と限定されながら内容は全國的中央的のものとして斯界に重きを置くに至り、時局は一轉して大政翼賛會等公の機關に依り先賢前哲の事蹟を調査しその遺徳を顯彰するに當り、墓前會等の盛んに行はるゝ現代に至つたのであるが、思へば東京名墓顯彰會の如きは十數年前より之を唱導し實行し來つた時代の先驅者の集團とも考へらるに至つたが、これ偏に博士不斷の御指導御努力の賜と申す外ない。

併しその半面には私共創立に關係したものとして全く正視し難い困難も伴つた。仲々好い原稿も集らない、博士は自ら契約者の門を叩いて懇請されねばならなかつた。また斯うした會の常として會員が尠ないので月々の雜誌の印刷費の如きも其の半額若しくはそれ以上を博士が負擔して下さる。講演會や、掃苔會を開催する毎にその不足額を補充せられる。契約者に對しても心ばかりではあつたと自ら語られるが月々敬意を表された。また私共お手傳をして

居るものに對しても屢次珍味佳肴を饗せられ、遠來の珍品なども惠贈された。また見學と云ふ名義で自動車で遠出を勸め、大に慰勞されたことも一再でない。加之編輯發行人となり編輯發送の事は勿論帳簿の整理會費の面倒まで一手に見て下さつた。その多年に亙る御勞力と物的御援助は積れば相當の高さに達して居る。それが軈て今日の東京名墓顯彰會の強大を爲す所以ではあるが、傍らに居ながら博士にのみ多年に亙りかくも御面倒をお掛けしたことを私は今日となつて衷心感謝して居る一人である。

博士は其他にも——之を故三宅秀博士と故吉田弘道師の御依囑で創立した財團法人杉山檢校遺德顯彰會の三代目の會長をも快よく御承諾下さいまして、この會の爲めにも種々御骨折を頂いた。また私個人としては嘗て井上男爵を盟主と仰いで今日の內原道場式の昭和義塾を創立するに當り事志と相反し私自身身に餘る義務を負擔せねばならぬ破目に陷つた際、博士は年餘に亙り挺身私の爲めに御盡しを願つた。その結果として私はその災害から身を轉ずることが出來たのであるが、其際最後の問題に就ても高木謙氏其他と御協力下さい

ましてその危急を免れしむるやう博士御自身が或る責任をお持ち下すつたやうな深い恩顧關係もあり、また愛娘嘉子の病氣に際しては何時も親身も及ばぬ御面倒を見て頂いた恩義も深く感じてゐる。從つて私は博士が御健康を害されつつ無理をされるので面と對つて其の御自重を勸告して却つて博士の御氣持を損したこともあり、また私が故關に歸り祖燈を繼ぐ時には眞劍になつて之に反對されたこともある。が、事情が判明すると釋然として反對に激勵され、また私の爲めに盛大なる送別會の企てなども心中深く祕められてゐたことも拜察して、今となつては全く恐縮してゐる。

春雨霏々として降りしきる山院の一室に於て少閑を作りこの記をものしてゐるとありし日の博士の種々相が心眼に髣髴として來る。いくら書いても書いても盡くるところがないほど多年に亙る記憶の糸がほぐれて來る。果てしもないことゆゑその概略を叙べて一應この筆を擱くこととする。

（舊曆佛涅槃會の日・圓通精舍高方丈に於て）

強く正しく生きた人

大倉燁子

世間には正しく見えてゐる人が、存外平氣で嘘を吐いてゐたり、正しからぬ行ひをしてゐるのに驚くことが度々ある。たとへば大嫌ひな人ではあるが、機嫌を損つては不利であるといふやうな場合、大抵の者は自分の感情をかくして愛想よく振舞ひたがる、しかし、藤浪さんは私の知つてゐる限りさういふことのなかつた人だ。

自分の感情をそのまゝ行ひ得るのは幸福である。と、同時に非常に勇氣のある人だといへる。

私が最初會つたのはあの人達の結婚後二年目位の時だつたかと記憶してゐる。

「ね、藤浪、どう？品が良いでせう？」

これが和子さんの先づ第一に發した言葉でまた批評をきかうとした言葉でもあつた。

ほんとに上品な物越しの、色白で眼の大きい、そしてしじうにこ〳〵してゐる人だつた。笑ふと奥の方の金歯がちらりと見えた。

それから二年ばかりたつて、藤浪さんは小日向水道町から、小石川指ケ谷町に移つた。水道町の時も坂の上だつたし、指ケ谷町もかなり急な坂をのぼるので坂の好きな人かと思つてゐたが、高臺は氣分が好いので特にさういふところを撰ばれたのだとあとで氣がついた。どちらも一寸似通つた間どりの平家で、お客間を眞中にして、兩袖のやうに廊下つゞきの離れた部屋があつて、左手の方を藤浪さんは書齋にしてゐた。そのころ私は曙町にゐたから、藤浪さんの家までは電車に乘つても二停留所、歩いても二十分近いせいもあつたのだらうが殆ど毎日のやうに往つたり來たりしたまだ年も若かつたし、重要な地位にもゐられなかつたのだらう、勉強家ではあつたが多少時間に餘裕があつたものと見え、夏の夕方など散歩に行かうとよく曙町へふたりで誘ひに來られた。蓮の花の香

のする池の端をぐるりと一巡して額に汗のほんのりとにじみ出る程の疲勞を、上野廣小路に出て常盤といふおしるこやに入つていやしたものだつた。今はないが、氷じるこはあんがたつぷり入つてゐてとてもおいしかつたし、藤浪さんはあすこの萩の餅が好きであつた。

藤浪さんが繪のお稽古をしてゐる、結城素明さんのお弟子であると聞いた時私は意外に思つた、繪を描かれる、何といふうるほひのある人だらう、それからまたしばらくしておもちやの蒐集家であることを知つた時も、ほのかな香をかいだやうな床しさを感じたものだつた。

床しいと云へばこんな話を聞いたことがある。大變ふるいことであるが、藤浪さんがウキンに留學してゐた時、たま〳〵故吉野作造博士も同じ宿に滯在してゐた。そこの家は居心地がよいばかりでなく、宿泊料がめつぽう安い、もう一つよいことは食事がうまくつて御馳走が澤山出る。それが最初はよろこび次ぎに不審になり、最後に月末の勘定にうんと何かぼられるのではないかと不安になつたさうだ。そこで宿の主人に訊いてみると、不足の分は藤浪さんがいつ

も默つて拂つて下さる、日本の學生さんにはせい〳〵御馳走して上げてくれとお賴まれしてゐるので――」と答へたさうだ。宿泊人はまさか藤浪さんが密かに仕拂つてゐてくれるとは知らないから、みんな涼しい顏をして御馳走になりつぱなしだつた、それなら藤浪さんはお金がありあまつてゐて大いに贅澤をしてゐられたかといふに決してさうではなく、自分の身のまはりなどは極く質素だつたといふ、何といふ床しいことをされる人だらうと、吉野博士はひどくそれを感心してゐられた。

今の內幸町へ引越される前の年のことだつたと思ふが、藤浪さんが順天堂病院で患者を診察してゐる最中、技手の一寸した不注意から管球が落ちて床上で破裂し、危ぶなく兩眼を失ふところだつた。大怪我をしたとの報に接して馳けつけた私は恐は〳〵寢室を覗いた。部屋の中央に兩眼から顏の半ばを純白の繃帶で覆はれて仰臥してゐる藤浪さんのきゆつと結んだ血の氣のない唇と、不安に戰いてゐるやうな和子さんの蒼白な顏とは何十年後の今なほ目のあたりに見るやうに、私の頭にはつきりとやきついてゐる。

硝子の破片がいくつも眼球に突き刺さつてゐたのを一つ〳〵ぬきとつたのだと聞いて私は寒氣がした。小さいほこりが眼に入つても痛くつて堪まらないものだのに、どんなに苦しまれたことだらう。幸ひに失明は逃れたが眼帶をはづすまでには相當の日數がかゝつた。その事あつて後和子さんは折りにふれてはレントゲンの犧牲者などの話を持ち出して涙ぐみ藤浪さんの身をどんなに心配してゐたか分らない。

あの時分の私達はほんとに親しかつた、そして樂しかつた思ひ出は澤山ある。その一つにこんな事があつた。恰度淺草のオペラ全盛時代だつたので、一つオペラ見學に出掛けようぢやないかと誰が云ひ出したか忽ち相談が纏つて西洋で立派なオペラを澤山見て歸つた藤浪さんを始め、故吉野作造博士とお孃さんの明子さん、荒井陸男畫伯、和子さんと私の六人は二臺の自動車で淺草に乘り込み、金龍館に入つて清水金太郎、清水靜子、田谷力三なんかを見た。當時の人氣者揃ひで、無論結構なものだつたのだらうが、何分にもあたりのきたなさには清潔好きな藤浪さんが第一番に閉口した。座席は食べ散らしの蜜柑の皮と紙屑が

散亂し、見物人は目白押しにぎつしり詰つてゐるし、場内にはむつと異様な臭氣が充滿してゐた。隣席の大男は腕まくりでラムネのラッパ飲み、眼のふちを青く塗つて西洋人のやうに顏をつくつた役者が舞臺へ現はれると、

「公園の羽左衛門――」だの、

「イヨウ田力（でんりき）――」などゝ聲聲を投げて得意がつてゐる。

燒芋を頬ばりながら、

「あゝ、あたい、矢張り田谷がいゝわ」と溜息を吐いて見入つてゐる姐さん。

舞臺は造花の櫻の花盛り、水色の水兵服を着た田谷力三は細つこい痩せた體を左右に打ち振つて、

「それが私のほんとの心ですよウー」とか何んとか、わけの分らないことを唄つてゐた。

そこへ見物人を掻きわけて子守の一群がどつと入つて來た、押しつぶされさうになつて泣き出す背中の赤ン坊、その騒々しさ、のぼせ上りさうなのに思はず苦笑しながら、一同早々に引き揚げた。ほうツとして中の常盤で牛肉か何か食

べてゐると俄か雨、一本の傘の用意もなく、づぶ濡れになり、放々の體で歸つた。

勉強する話か何かしてゐた時、和子さんはこんなことを云つた。

「私なんかが何か一つ書かうと思ふとさあこれから勉強するんだ。と、その邊を片附けたり、急に机の掃除を始めたり、とにかく、いざやると云ふので一騒ぎでせう？ところがね藤浪のは全くそれと反對でいつの間にか勉強してゐるんです。お客様がいらつして夜分おそくなつても、宴會などで歸りがおくれても、きつと寢る前に一度は机に向ひ何か書いてゐるんですのよ。それが毎夜の事で、急に騒ぎ立てるんでもないし、ただ毎晩同じやうなことを繰り返し繰り返し續けてゐるだけなんですが、それが半年なり、一年なりたつと立派な本が一冊出來る程の原稿を書き上げてゐるんですの。だから絶えず勉強する人には敵はないと思ひますわ。」

ほんとの勉強家といふものはさうでなくてはならない。絶えざる努力、それが大きな實を結ぶことになるのだが、しかし、わかつてゐてもなか〳〵出來ることではない。學問は水垢のやうなもの、自然にたまるので一朝一夕に慌てゝや

らうとしたつて何が出來るもんか、と誰だかが云つたが、全くそんなものであらうと思ふ。

藤浪さんは優しいおとなしい人だが、一面また非常に強い人だつた。心臟喘息、狹心症、いづれも恐ろしい病氣だ、お醫者樣の慰めて下さる言葉を信じて安心してゐられるやうな素人とは違ふ、病氣の性質については何もかも知りぬいてゐた筈だ、まるで病魔と取つ組んでゐるやうな日夜を送りながら、氣持ちの上では少しも負けてゐなかつた。亡くなられる十數日前玄關で一寸お會ひした時、

「いかがですの？御病氣――」と云ふと、いつものやうににこ〳〵して、

「え、もういゝんです。どうもありがたう。」と輕く頭を下げた。

和子さんが、

「痩せましたでせう」

と、藤浪さんを見上げながら私へ訊いた。

「さうね、すつきりなすつたやうね。」ほんとに頸筋がすつきりとして見え、鼠色の羽二重の襟をからむやうにぎゆつと合はせてゐるのが大層よく似合つて綺麗

に見えた。少し痩せられたか知ら？と思ふ位で、落ちついた態度など平常と少しも變らなかつた。相變らず仕事にいそしんでゐられたのだといふ。亡くなられる前日だかに、いま校正してゐる夢をみたと云はれたとか、著述の事か何か考へてゐたからだらうが、實に悠々として迫らず、眉宇に不安のかげだに見えず、平然としてゐられたあの底強さには全く頭が下がる。

解剖の報告を聞いて驚いたことには澤山な致命的な病氣を持つてゐて、どんな名醫も手のほどこしようがなかつた、生きたくても生きることが出來なかつたのだとかいふ。まるで爆彈を抱いてゐるやうな危險狀態にありながら、少しも騒がず落ちついて勉強しつゞけてゐられたといふことは、何としても素晴らしい、それこそほんとに強い人と云へるのではあるまいか、私はこゝに改めて敬意を表すものである。

主人病歿の前後

藤浪和子

此頃の私にとつては、多磨墓地に此度求めた墓所をみに行くこと、追悼集をいかに仕上るかと云ふことより外に樂しみはなかつた。幸にして追悼集の方は、皆樣の御好意により美事に出來上らふとしてゐる。初に紙のことで一寸困つたが、植田氏のお骨折でこれは解決した。感謝の外はない。主人が昨年の春大患で入院してからといふもの、私は人樣のまごころといふか、御親切にして頂くので染々有難いと思ふことが多かつた。皆樣がいかに主人を思つて下さるかを考へる時、只感謝の泪が溢れるのみであつた。

この一年間は私にとつて恐らく、今迄過して來た生涯の縮圖をみる程多忙だつた。多忙といつても體ではなく、心が多忙だつたのだ。一昨十六年十一月三十日の夜、突然烈しい心臟喘息の發作に襲はれてから、昨年十一月二十九日まで

丸一年間完全に生き延びたといへる。それは先生方のお力だと考へてゐる。看護の知識を持たない私には、全くなすところを知らなかつた。それでも發作が納まり、これで安心となつてからも、私は夜分寢衣に更へて眠ることを忘れた。主人は時にそれに氣がつくと、何故着更へないかと咎めた。その都度私は何とか云ひ拔けたつもりだつたが、後では却てそれも主人の神經にさはりはしなかつたかと悔まれた。夜中に咳などして、もしそれから發作が起るやうなことでもあらうかと思ふと、不思議な程目覺くなつて行つた。

そんなに迄して氣をもみながらも、一體どの程度に悪いのか、それを知ることが怖ろしくつて、どうしても主治醫に打ち出して聞く勇氣が出なかつた。醫師である主人が、自分の病氣位分らない筈はない、とつひ賴る心も手傳つて、とうとう終りまで眞實のことが分らなかつたと云つていゝ。それに發作も回を重ねる毎に輕くなつて行つたし、納まれば案外元氣になるもので、最氣目に引きずられて、いつも主人が二言目には、この位のことで死にはしないよ、といふ言葉を力に無理にも安心しやうと勉めてゐた。

それでも心の奥に何か割り切れないものがあつた。始終それが胸につかへた氣持だつた。一體どの位重いのか、どうとう私は堪りかねて主治醫に尋ねた。主治醫は恐らく今時分出たこの愚問に當惑されたことだつたらう。心臟病といふものは、癌などゝちがつて絶望的な病氣ではない。病氣の性質がちがひます、養生一つで隨分長生きも出來るし、妙な云ひ方かもしれないが明るい病氣です、といはれて私はホツとした。それなら無理さへせずに大切にしてゐたらいいんですね、と念を押して、これからは屆一層注意しやうと堅く誓つた。

いつも十時近く迄樣子をみてゐて下さる主治醫も、手持無沙汰な位その夜は主人も氣嫌がよく、床の上で看護婦に足など擦つて貰ひながら、此秋に出版した日本衞生史を進呈して、なほつたら署名します、などと笑つてゐたもので、主治醫もその書物に目を通しながら、することもなく、時のくるのを待つてゐた。私の心は彈んでゐた。希望が胸一杯に擴がつてゐて、灯火さへ何日もよりは明るいやうに思はれたりした。

十時近く、主治醫はこれで落着かれるでせう、といつて歸つて行かれた。さう

してその翌日の午前に主人は再び歸らない人となつてしまつたのだつた。私はその時のことをまだこゝに書く勇氣がない。

日頃から私の意氣地なさを知つてゐる主人は、もし自分が死んだらすぐにもだめになるだらうと笑つてゐたし、私自身もどんな醜態を演じることかと思つてゐたが、事實は想像したよりもズツと冷靜だつた。ただ主人を敬慕して下さる門下の方々に對してすまない、私が行き屆かなかつたのではないか、といふ氣がしきりにした。殊に遠くにゐられる人に對して一層その感じが强かつた。

悲しみなどといふことは通り越して、只理性許りが働いてゐるやうだつた。主人はいつもレントゲン障害のあることをよく云つて死んだら屹度解剖だと云つてゐた。私はすぐそれを大森さんに申出たのだつた。さうしてその翌日遺志通りになつた。

用事は後から後からと波のやうによせて、心は少しも休まらなかつた。併し用のあつた方がどんなに助かつたか分らない。最後のお通夜をすませた朝、まだ誰も起きるには早い窓を繰つて、白みかかつた曉の空を仰いでゐたら、突然、ど

うにも押へ切れない感情が、潮のやうに押しよせて來て、私はいつか聲を上げて泣いてゐた。人が來ますから、さう云つて羽織をかけてくれながら、背中を擦つた人があつた。義姉だつた。優しく云はれるとすぐ泪に咽んだ。それ程私の心は脆く、神經は纖細になつて行つた。

しつかりして、しつかりして、しつかりして、たゞそれだけであるが力強く私を力づけられたお言葉を生涯忘れまいと念じた。

澁谷さんがお使として來られて、愛國百人首の展覽會に、私にもぜひ一枚を書くやうに云はれた時、その御好意に心からありがたく思つた。擴げて下さつた手に縋りつく思ひで、毎晩毎晩更く迄字を習つてみた。併し出來上つたものは子供のやうな出來榮えだつたが、それでも私は滿足した。全くさうでもしなければ、やりきれない氣持だつた。夜更く、朝遲かつた。私は床の中で轉々するのが辛らかつたから、どうにも眠くならなければ眠まいと極めて、二時、三時は普通になつて行つた。さうして夢も見ない程疲れて、床に入るとそのまゝ眠つた。

誰も賴るべきではない。一人だ。結局一人なんだ。さういふことに始めて

氣がついた。譬へ私には致命的な悲しみにせよ、傍のある人々にはいかに退屈なものだかといふことも分つた。

三月の或日、福島地方の溫泉の人がみえた。その人はもう八十を越して猶矍鑠たるものだつた。その人はお手製の凍豆腐を藁でからげたのを靈前に供へて、暫く拜んでゐたが、咳をしてゐると思つたら、聲をたてゝすゝり上げてゐた。私も思はず聲を上げた。併しその人は歸りに云つた。奥さん、人は諦めが肝心です。といはれて私は恥ぢ入つた。決して人の前では泣くべきものではないのだつた。

これからは、主人の殘した名墓顯彰會の仕事だけが奈何にか私の手で續けられさうに思はれる。何日迄つゞくか、出來る間はやつて行きたいと思ふ。それがせめてもの心やりなのだ。今の私は一日も早くこの苦しみから脫けたいと願つてゐる。姉は自身の藝そのもので救はれたといつたが、私のこの淋しさ、やるせなさを救つてくれるものは何であらう。時はためらはずに過ぎて行く。合掌して靈前に香を炷く。

七月七日の夜

昭和十八年九月廿一日印刷
昭和十八年九月廿九日發行
（非賣品）
東京都麹町區内幸町二ノ五
編輯兼發行者 藤浪和子
（印刷者 東東1049 成文堂）

